
すた だす

銀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

すた だす

【Nコード】

N8947X

【作者名】

銀

【あらすじ】

星屑のようにちっぽけな俺達の出会いは、奇跡なのかもしれない

.....

陵桜学園の生徒である白風はやとは、ある日リボンが印象的な少女と出会った。

そして2年のクラス替え。彼等は再会する。

らき すたの二次長編小説です！

キャラ紹介

名前：白風はやと（しらかぜはやと）

性別：男

誕生日：7月29日

血液型：B型

容姿：空色の髪、翠眼

身長：173cm

体重：61kg

部活：帰宅部

口癖：「もし翼があったら〜。」（よく応用が利く）

イメージCV：森久保祥太郎

2-E所属。一応主人公。不思議な雰囲気を持つ少年。ノリがいい性格。

普段はよく屋上にいる。父親と奇跡という言葉を嫌っている。現在一人暮らし。

喧嘩はそんなに強くないがやる時はやる。視力がいい為、ダーツなど物を投げた時の命中率が高い。

武器は麻酔薬や睡眠薬を針先に塗ったダーツを使用。

「俺は奇跡なんてもの信じない」

名前：冬神やなぎ（ふゆがみやなぎ）

性別：男

誕生日：12月15日

血液型：A型

容姿：長い茶髪、アクアブルーの瞳

身長：174cm

体重：58kg

部活：帰宅部

口癖：なし

イメージCV：神谷浩二

2-D所属。風紀委員。常識人で苦勞人。腐れ縁のあきに手を焼いている。主にツッコミ担当。仇名は「やなぎん」、「もやし」。運動は苦手だが頭はよく、チエス等の頭を使うゲームが得意。但し、チエスをやるとDS化する。扇子を常備していて、それを武器にする事もある。

「はあ……お前はバカだから分かりやすいんだよ」

名前：天城あき（あまぎあき）

性別：男

誕生日：4月22日

血液型：O型

容姿：赤髪、黄昏色の眼

身長：168cm

体重：57kg

部活：帰宅部

口癖：なし（アニメ等から引用する）

イメージCV：下野紘

2-E所属。お調子者でオタク。愛称は「アッキー」。
愛すべき馬鹿。ふざけるのが趣味のようなもので、良く言えばムードメーカー。
洞察力が優れていて、空気は読めるが普段は敢えて読まない。また、友達を傷つけられる事を決して許さない。
戦闘手段は素手。戦う前に変身ポーズ（毎回違う）をとる。喧嘩はそこそこ強い。

「俺の友達に手を出そうとしておいて、これで終わる訳ねえよな？」

名前：檜山みちる（ひやまみちる）

性別：男

誕生日：8月3日

血液型：O型

容姿：クリーム色の髪、藍眼

身長：164cm

体重：51kg

部活：吹奏楽部

口癖：なし

イメージCV：白石涼子

2-E所属。容姿端麗、成績優秀のお坊ちゃん。性格は純粹で優しい。

但し、恋愛に関しては鈍感。特技はフルート。仇名は「みっちー」。
女性の扱い方は父に習った。因みに父親は女たらしのようだ。

女性に話し掛けてもそっけなかったり、視線を合わせてくれない事

から、女性に嫌われていると思っている。実は恥ずかしくて目を合わせられないだけで、かなりモテている。怒りが頂点に達したり気絶すると、もう1人の人格「檜山うつろ」が現れる。

性格は正反対で傍若無人で強欲。みちるはうつろになっている間の記憶はなく、存在すら知らない。

「勿論、みゆきのためだけに演奏会を開いてもいいよ」

プロローグ「羽撃き」

俺は奇跡なんてもの信じない。

ドラマなんかでよくやる「奇跡」。俺はそれが嫌いだ。

奇跡なんてあんなに頻繁にあつてたまるか。

だから奇跡なんて安っぽいもの、俺は信じない。

「雲はいいよなあ……」

大空を見上げて、俺は呟いた。

「もし翼があつたら、俺も空を自由に飛びたいなあ……」

ここは学校の屋上の入り口の上。今は丁度昼休みになった所だな。

ん、授業？サボりだ。

よってここには俺以外誰もいない。いるとすれば、鳥の群れだ。

「ふっふ」

起き上がり、下に飛び降りる。

周りにいた鳥達も一斉に飛び立った。

その時下に人がいる事を初めて知った。

黄色いリボンをカチューシャみたいに着けている、紫色の髪の子。
俺に驚いたみたいで、キョトンとしている。

その娘の頭の上にさっきの鳥の羽が乗っかっているのに気付いた。
手を伸ばし、羽を取ってやる。

「付いてたぞ」

それだけ言って、俺は教室に戻っていった。

もし俺に翼があったら、この時既に羽撃いていたのかもしれない。

プロローグ「羽撃き」(後書き)

どうも、銀です。

長編小説、遂に始めました！

はやと「なんだ？この短いプロローグは？」

おまつ「とりあえず自己紹介！」

はやと「えー……。えっと、多分主役の白風はやとです」

これからこんな感じでやっていきますので、よろしくお願いします！

第1話「色々、始まり」

（つかさ視点）

お昼休みになって、私達は屋上でお弁当を食べる事になった。
でも、こなちゃんは

「ごめん、コロネ買ってくるから先行ってて！」

と言っていないなくなっちゃうし、お姉ちゃんは

「私も飲み物買ってくるから、悪いけど先に行ってて」

ってこなちゃんの後を追って行っちゃった。

ゆきちゃんは委員会の仕事で遅くなるって言ってた。

だから、今は私一人で屋上にいる。

早く来たから誰もいない、と思ってた。

「雲はいいよなあ……」

不意に、上から人の声が出た。

「もし翼があったら、俺も空を自由に飛びたいなあ……」

上には鳥の群れに囲まれて、寝転んでいる人がいた。

あの人の言ってる事、何だかロマンチックだなあ。

「よつと」

その人が急に起き上がり、私の目の前に飛び降りた。すると周りの鳥達も飛んで行く。

その時一瞬だけど、まるでその人に翼が生えているように見えて、綺麗だった。

驚いて、何も言えなくなった私にその人が気付いた。そしてこれまた急に私に手を伸ばす。

思わず目を瞑ってしまう私。

「付いてたぞ」

彼の言葉を聞き、目を開けると彼の手には鳥の羽が。さつき頭に落ちてきたのかな。

綺麗な空色の髪に、翠色の眼をしている彼は、私に羽を渡して行ってしまった。

第一印象は、不思議な雰囲気を持った男の人だった。

「おい、つかささ？」

「どうしたの？ボケッとして」

「何かあったんでしょっか？」

あれから3日後。一度も彼の姿を見ていない。

「はあ〜……」

「ねえねえ、つかさ最近どうしたの？」

「分からないのよ。空を見ては溜め息を吐くし」

「もしかして、恋でしょうか？」

「恋!?!」

うわっ!?!びっくりした〜。

だってお姉ちゃんとかなちゃんが急に大きな声出すんだもん。

「つかさ!」

「な、何？」

「今気になる人がいるの!?!」

「う、うん」

私が頷くと、お姉ちゃんはショックを受けたように落ち込んで、こなちゃんとゆきちゃんは目を輝かせていた。

「そっか〜、つかさにも春が来たか〜」

え?今春じゃないの?

「そんな……つかさが恋……」

「……えっ!?!」

確かに私は彼が気になっていた。でも多分、恋とかとは違うと思う。

「違うよ〜。ちょっと気になってただけ」

「本当に？」

「うん」

「な〜んだあ」

そう言うと、お姉ちゃんは元気になった。

「でも、気になる人というのは？」

「不思議な雰囲気を持った人で……」

（はやと視点）

今は、えーと6時間目だな。

俺はいつもどおり屋上で寝ていた。

今日は1人じゃないがな。

「風樹ー」

「んー？」

隣にいた奴、原田風樹に話し掛ける。

「空が飛びてえ」

「飛行機乗れよ」

「もし翼があつたらなあ」

「寝てろ」

こんな会話が日常茶飯事だ。

「もうすぐ春休みだな」

「だな」

「お前の予定は？」

「羽音達と出かける」

「突き落とすぞ」

幼馴染いるからって調子に乗んな。

「ふー君！」

下から声がした。風樹をそんな名前で呼ぶ奴といえは……。

「羽音か。授業はどうした？」

風樹は起き上がり、下にいる女子に尋ねた。

風樹の幼馴染の北条羽音である。

「もう終わったよ〜！7時間目は出ないと駄目だよ！」

「ああ、分かったよ！」

「はやと君も！」

「はいはい」

お呼び出しが掛かり、俺と風樹は下に降りた。これもまた日常だ。もし翼があつたら、逃げれたのになあ。

で、あつという間に春休みになり、始業式だ。

今日から2年生！……って感じはまったくない。

「よっ！はやとー！」

後ろからの声に振り向くと、3人の顔見知りがあった。

「屋上で寝てるかと思っただぜ」

この赤い髪に黄褐色の眼のうるさい奴は天城あき。

「流石にそれはないだろ」

真ん中にいる茶髪でアクアブルーの眼をした真面目そうな奴が冬神やなぎ。

「クラス替えの紙、もう見た？」

最後にクリーム色の髪、藍色の眼の人畜無害そうな奴が檜山みちるだ。

因みに俺等4人は1年の時に同じクラスだった。

「いや、まだだ」

「んじゃ、早速見に行こーぜ」

掲示されたクラス表の前には人で混み合っていた。さて、白風白風……あった。E組か。

「おっ、はやとと同じクラスか！」

隣であきがうるさく言った。

「あ、僕もE組だ」

みちるも同じクラスか。

……ん？誰か足りないような。

「……俺だけDか」

「あはははは！やなぎ、お前だけ1人か！」

「うるさい！」

「ギャー！？」

やなぎが思い切り笑っていたあきをシバいていた。

えーと他に知ってる奴は……。

原田風樹

北条羽音

風樹と羽音か。あいつらとも同じクラスになるなんて思わなかったな。

三原才雅

確かあいつは、今噂の何でも屋か。

ま、退屈しないクラスになるだろ。やなぎいないけど。

（つかさ視点）

始業式。掲示板にはもうクラス発表の紙が貼ってあった。

えっと、私は……あった。E組だ。

「おっ、つかさ一緒じゃん」

えっ？それじゃこなちゃんもE組？

「みゆきさんも一緒だよ」

ゆきちゃんも？よかった。

「またかがみだけ違うクラスだね」

はうっ！お姉ちゃん……。

「ただでさえ顔合わせる機会が多いんだし、クラスくらい別になってくれないと私が疲れるわ。」

そうお姉ちゃんは言ってるけど、きっと寂しいと思うな。

だって私達と別れてからまた紙を見に行ってたもん。

途中でゆきちゃんと会って、3人で教室に入ろうとした。

「臭いが堪なくてさー」

「確かに臭いですよね」

教室のドアを開けると、誰かと向かい合わせになっていた。多分教室から出ようとしたんだと思う。

ドンッ！

話に夢中になっていたから、その人に気付かないでぶつかってしまった。

「わわっ、ごめんなさいー」

慌てて謝って、その人を見る。

何処かで見たことのある空色の髪に翠色の眼。

「あっ……！」

「あ、あの時の」

屋上にいた、不思議な雰囲気の人。

何だか、色々と始まったような気がした。

第1話「色々、始まり」（後書き）

どうも、銀です。

第1話、読んで頂きありがとうございます！

はやと「一応メインは総出だったな」

つかさ「緊張したよ」

今回ははやと、つかさをメインにしましたが、次回はこなた、かがみ、みゆきはもちろん！あき、やなぎ、みちるも活躍（予定）！

はやと「じゃ、また次回」

第2話「自己紹介」

（はやと視点）

教室内はあまり人がいなかった。早く来過ぎたか。

「なあ、ここで運命の出会い！とかねえかな？」

「ねえよ」

「例えば？」

またあきが騒ぎだした。みちるも便乗するなよ。

「学校のマドンナに一目惚れをされ、そのまま付き合つとかな！」

「へえ」

「夢は寝て見る。俺みたいにな」

俺は席を立ち、教室を出ようとした。

「おい、何処行くんだよ？」

「やなぎん所」

まだ時間はあるそうだしな。

俺はドアを開けようと手を伸ばした。

しかし、ドアは勝手に開いた。向かいにいた奴が開けたんだろう。何故なら、ソイツはそのまま俺にぶつかって来たからだ。

ドンッ！

「わわっ、ごめんなさい！」

相手は俺に気付き、頭を下げて謝った。

黄色いリボンと紫色の髪が揺れる。どこかで見たような……？

ソイツが頭を上げると、顔を見て俺は思い出した。

「あっ……！」

「あ、あの時の」

屋上にいたリボンの娘。

可愛いからか、頭に乗つけた羽が印象的だったからか、とにかく覚えていた。

「なになに？知り合い？」

後ろにいた青い長髪の小さい奴がリボンの娘に聞いた。

「前に話した不思議な人だよ」

不思議な人って……変人扱いか？

「おいはやと！何運命の再会イベントやってんだよ！」

いつの間にか、あきが俺の隣にいた。

「ーかイベントって……」。

「で、アンタがここにいるって事は同じクラスか」
「あ、そうですね」

ぼんやりした様子で答える。とりあえず敬語止める。

「なら、自己紹介を」
「あっ！」

うわっ！何だよ？

ピンクの髪の子が大声で叫んでいた。視線の先には……

「みちるさん！」
「あ、みゆき！」

……みちる？え、知り合いか？

「みつちーも知り合い？」
「うん、幼馴染。小学校の時まで近所に住んでたんだけど……」
「みちるさんが引越されてしまって」

なるほどな。

「おっとー！ここでまたフラグが立った！」
「人畜無害な坊っちゃんが幼馴染のお嬢様と再会イベント！」
「やるね、君！」
「お前もな！」

……そこ、何意気投合している。

キーンコーン

「あ、チャイムだ。詳しい挨拶はまたあとでね！」
「おう！」

そして俺達はそれぞれ席についた。

……おかしい。すぐ来るはずの先生が現れ

ガラッ！

「皆席につけーっ！」

と考えると、勢い良くドアが開かれ金髪の女性が入って来た。

「あつぶな、ギリギリセーフやっ！」

汗をかき、息を荒くして教卓に立つ。かなり急いで来たんだろうな。

「あー、ウチが担任の黒井やっ！皆学年も上がった事やしいつまで
も休み気分でおらんで心機一転頑張るよーにっ！」

この時、皆こっと思っただであるっ。

『せ、説得力……ねえ!!』

それから休み時間になり、さっきの面子+2人で自己紹介を始めた。
1人はやなぎで、もう1人は向こうの知り合いだそうだ。

「まず1番！俺は天城あき！容姿端麗、頭脳明晰の人気者！」

「……っていう夢を見たんだそうだ」

あきの自己紹介に相槌を入れてやる。

「で、もう終わりか？」

「……サーセン！とりあえずよろしく！」

コイツの長所は明るい所だけだな。短所でもあるけど。

「俺は白風はやと。好きなものは空、嫌いなものは奇跡。以上」

「……お前、もっと言う事があるんじゃないのか？」

あんまねーよ。

「彼女募集中とか？」

「そーそー！」

「違うだろ！」

やなぎにツッコまれた。

「冬神やなぎです。このクラスじゃないけど、よろしく願いします。柘さんと」

「かがみでいいわよ」

「じゃあ、俺もやなぎでいいよ。……かがみとは同じクラスだよな」

やなぎが紫のツインテールに言った。こいつら同じクラスだったのか。

「おっと、やなぎ君はかがみルート突入か？」

「もやし君は見た目ツンデレっ娘を攻略出来るか!？」

「「そこ、何話してるっ!?!」」

あ、この2人似てるかも。

「榎山みちるです。新学期から可愛い女性達と仲良く出来て光栄です」

屈託のない笑顔を見せるみちる。

「お前、坊っちゃんまどホストどっちだよ」

「?」

「くそっ、俺もそっちにしときゃよかった!」

悔しがってるバカは放つといて、みちる……恐ろしい奴!

「ども、泉こなたです。これでも高校2年生だよ」
そうは見えないんですけど。

「最後に、貧乳はステータスだ！希少価値だ！」
「いよつ、こなた！輝いてる！」

あき……ある意味すごいなお前。

「柊つかさです。よろしくお願いします」

リボンの娘、つかさはお辞儀した。

「ところで、はやと君。屋上で何してたんで」
「敬語止める」

「あ、うん。……何してたの？」

「昼寝。つかさもやってみたらどうだ？」

「わゝ、気持ち良さそうだね」

昼寝同盟に1人追加だな。

「やめれ。アンタそれサボりでしょーがっ！」
「えっ!?!」

……チツ、バレたか。

「あたしは柊かがみ。つかさの双子の姉よ」

ああ、双子ね。あんま似てねーけど。

「クラスは違うけど、よろしく。ところではやと」

……ん？さっきからかがみからの視線がキツイ気が。

「何だ？」

「つかさに近付いたら スワヨ？」

「!?!」

目が紅く光ったような……？怖っ！

「姉バカだから気にする事ないよ」

キッ！

「あー、やっぱり気にした方がいいかも」

こなたが加勢するも、一睨みで退いてしまった。

ここは逆らわない方がいいな……。

「高良みゆきです。どうぞよろしくお願いします」
「よろしくします」

ドカッ！

煩いあきを殴り伏せるやなぎ。よくやった。

「先程言ったように、みちるさんとは幼馴染です」

「うん。みゆきとも再会出来て嬉しいよ」

「私もです……」

ん？みゆきの頬が若干赤いな。もしかして……。

「気付いたか、はやと」

「あき、こなた。あれは」

「うん、みゆきさんはみちる君に惚れてるね」

な、なんだってー！

「だが当のみちる君はまったく気付いていない！」

ほ、本当だ……。

みちるは、いつも通りの人畜無害な笑顔でいる。

「まさかみゆきさんが攻略する側だったなんてね」

「しかも相手は鉄壁の籠城みたいな奴だ」

……応援してるぞ、みゆき。

一通り自己紹介が済んだな。

「じゃ、私達はそろそろ戻るわ」

「また後でな」

やなぎとかがみがD組に帰って行く。

キーンコーン

丁度よくチャイムが鳴ったな。
俺達も自分の席に戻って行く。

「はやと君」

と思っただら、つかさが話し掛けてきた。

「いつか、飛べるといいね」

……あの時俺が言った事か。

「ああ」

……お人好しだな、つかさは。
そう返したのはつかさが初めてだった。

今日はいろいろあったな。
あき達と同じクラスになって、つかさに再会して、そのまま友達になっ
た。

これからの生活、本当に退屈しなさそうだ。

「白風はやと、だな」

帰り道、曲がり角から誰かが出て来た。

俺の名前を知っている？しかも来ている制服は……ウチの学校のだ。

「誰だアンタ」

ライトグレーの髪が夕日に照らされ、紫色の眼が怪しく光る。
ソイツは俺を指差した。

「敢えて言うておく。力を試させてもらおう」

どうやら、まだ今日は平和に終わりそうにない。

第2話「自己紹介」（後書き）

どうも、銀です。

すた だす第2話、メイン達の顔合わせです！

はやと「みちるとみゆきが元幼馴染だとは予想外だったな」

最後に現れました奴。当初は出すつもりなかったんですよ。

はやと「あれは思いつきり敵役だけだな」

次回、こうご期待！

第3話「大事な人」

（はやと視点）

「敢えて言っておく。力を試させてもらおう」

目の前に現れた男は、カバンを降ろすと俺に向かって来た。

「チツ、いきなりかよ！」

俺は奴の拳をカバンで防ぎ、カウンターを入れようとする。だが奴は開いている手で受け止めると、俺を突き飛ばし蹴りを放った。

「ぐっ！」

腕でガードするが態勢を崩し、地面に倒れてしまう。

「格闘スキルはこんなものか」

「くそっ！」

今バカにされた！もう容赦しねえ！

俺は起き上がり、カバンの中からホルダーを取り出してベルトの右に取り付けた。

これが俺の武器、ダーツだ。

ところで、奴の顔を何処かで見たような……。

……あっ！アイツまさか！

「お前……三原才雅か？」

尋ねると、奴は呆れたような顔をした。

「今更かよ。同じクラスなのにな」

だってあんま話さなかつたし。

「俺に何の用だ？」

「言ったはずだ、力を試させてもらおうと！」

才雅はカバンから棒状の武器を2本取り出した。

トンファー、つつたか？

近付かれたらアウトだ。俺はホルダーからダーツを3本取り、奴に投げた。

カキーン！

しかし、才雅はトンファーを回し軽々と弾いた。

「それがお前の武器か」

「これならどうだ！」

俺はダーツを8本取出し、両手で投げた。
それすらも、才雅は弾いてしまうが。

「命中制度はあるようだな」

「くそっ！」

今度は連続で投げるが、才雅は交わし、弾いて俺に近付く。マズい！

「ふう、こんなもんか」

気付くと俺は俺の真正面において、喉元にトンファーを当てていた。

「も、目的は何だ!？」

「……3回言わないと分かんないのか」

「俺の力を試すだと?」

俺は喧嘩は大して強くない。

そんな奴の力を試して何になる?

俺の疑問に答えず、才雅は俺から離れトンファーをカバンにしまった。
た。

「敢えて言っておく。お前は狙われている」

酷く驚いた。そんな事言われれば誰だってそうだろう。

「狙われている!? 誰に?」

「その程度の力じゃ、不安だな」

「答えるよ!」

「ただ1つ言える事は、いずれ大事な人も巻き込むかもしれない。自分で守れよ。じゃあな」

言いたい事だけ言って、才雅は帰っていった。
何なんだ、アイツは!?

翌日、俺は才雅を見つけだして聞き出した。

「昨日のアレは何だ!? 説明しろよ!？」

才雅の傍にいた女子は戸惑っているが、本人は至って冷静だ。

「早くて今日の午後だ。対策を考えておく事だな」

「説明になつてねえよ!」

あくまではぐらかす才雅にいい加減苛立つ。

「やめとけ、はやと」

ふと、後ろから声を掛けられる。そこにいたのは風樹だった。

「風樹!」

「よっ、風樹」

「何企んでんだ、才雅」

何だ? 才雅と風樹は知り合いだったのか。

「コイツに少し興味があるだけさ」

「……ったく」

俺に興味がある？コイツの目的がいまいち分からない。

「才雅君、あまり迷惑かけちゃダメだよ」

才雅の隣にいた女子、えーと……上城江里香が、才雅に呼び掛ける。

「敢えて言っておく。別に大丈夫だろ」

その自信は何処から来る。

「つか迷惑掛けまくりだろ。」

結局、この時は何一つ教えてもらえなかった。

「何だ？どうかしたのか？」

自分の席に戻ると、あきが話し掛けてきた。

「さあな。こっちが聞きたい」

「あれは、三原才雅君だね」

みちるも会話に加わった。

「学校内で依頼を引き受け、報酬として食べ物を買っ。その手際の良さや信頼性から他学年でも噂になっている」

「更に美少女の彼女もいる。隣にいる上城江里香がそうだな。チッ、羨ましい！」

「そんな人と何があつたの？」

「昨日勝負吹っかけられて意味の分からない警告を受けた。以上」
「何だそりゃ」

俺が知るか。本人にでも聞け。
俺は立ち上がり、教室を出ようとする。

「何処行くんだよ？っていつもの所か」

「えっ？授業は？」

「サボる」

一言残し、俺は去っていった。
こつという時は寝るに限るな。

屋上で寝ていても、才雅の言っていた事が突っ掛かる。

「……は……く……」

大事な人を巻き込む……か。

「はや……君……」

大体狙いは俺のはずだ。大事な人なんて……。
あき達？それはない。

「はやと君！」

「うおっ！？」

何だ！？いきなり大声で呼ばれたらビックリすんじゃないか！

隣には、いつの間にか人がいた。

「あ、やっと気付いた」

って、つかさ？

「何してんだ？」

「はやと君、授業いなかったでしょ」

「よく気付いたな」

「それに、何か悩んでるみたいだったから」

「……顔に出ていたか」

天然の癖に鋭いな。

いや、俺が分かり易かっただけか。

「何でもないさ。今日はつかさに免じて戻るか」

「うん、ありがと」

この癒しオーラのおかげで、何で悩んでいるかなんてどうでもよくなる。

それは多分つかさの長所なんだろう。

「……やべっ、あと1分で授業だ！」

「えっ！？待ってよ〜！」

〈才雅視点〉

「おい、才雅」

昼休み、風樹が話し掛けてきた。

「はやとの事だけどさ」

「お前から聞いていた通り、面白そうな奴だな」

「やっぱりか……」

軽く溜め息を吐く風樹。

「あまり遊びすぎるなよ?」

「分かっているさ。俺も自分の仕事をしないとイケないしな」

江里香お手製の弁当を食いながら答える。

敢えて言うておく。やはり江里香の弁当は格別だ。

「という訳で江里香、今日は少し遅くなりそうだ」

「うん、頑張ってるね!」

江里香の笑顔と手作り料理だけで俺は頑張れるぜ!

おっと、周りの男子諸君の羨望の眼差しが痛い。

さて、奴はこれからどう動くか……。

くはやくと視点

そして、放課後。

何も起こらず、帰ろうとしたら電話が掛かってきた。

「もしも」

「はやく!?! 助けて!」

「かがみか? どうした?」

「つかさが…… つかさが!」

つかさが一体どうしたんだよ!

パニくるかがみからなんとか場所を聞き出して急いで向かう。

そこには、数人の男と、それぞれ捕まったつかさとかがみがいた。

「はやく（君）！」「

つかさ！かがみ！」

捕まっではいるが、乱暴された訳じゃなさそうので安心した。

「何だ、アンタ等」

「白風はやくだな。おとなしくボコされてくれねえか？」

どうやら、つかさを捕まえている男がリーダー格のようだ。

「は？お前等の狙いは俺って訳か」

「そうだ」

なるほどな。才雅の言っていた事も分かった。

いずれ大事な人も巻き込むかもしれない。それはつかさとかがみの事だった。

「ならつかさとかがみは関係ねえ。放せ」

「そうはいかねえな。コイツ等は人質だ。お前が変な動きをしたらどうなっても知らねえぞ」

チツ、外道が。

「やれ！」

周りにいた奴等が俺を囲む。

薄気味悪い笑みを浮かべて殴り掛かって来た。

手が出せねえ以上避け続けるしか

「避けてんじゃねえぞ！」

「きゃっ！」

リーダー格の男がつかさにナイフを突き立てる。

「つかさっ！……ぐっ！？」

つかさに気を取られている内に殴られる。

ドガッ！バキッ！

ああ……ヤバい、死ぬっばい……。

「はやと君！はやと君！」

「はやと！しっかりしなさい！」

悪い……2人共、助けられなくな……。

もし翼があつたら、お前等を助けられたのか……。

「うぎゃっ！？」

「な、何だお前は！？」

その時、誰かが割り込んで来た。

俺をリンチしていた連中を次々と殴り倒す。

「敢えて言っておく。しっかりしろ、はやと」

つい最近聞き慣れた声。

三原才雅がそこに立っていた。

「な、何だ貴様!？」

「才雅……何しに来やがった？」

差し伸べられた手を握り、立ち上がる。

「俺はコイツ等を潰しに来ただけだ」

「そーかよ」

背中合わせに立つ俺達。向こうはまだ余裕そうだがな。

「ははは!こつちには人質がいるんだぜ!」

「それはどうかな?」

かがみを捕まえていた奴が前に吹き飛んだ。いや、後ろから殴り飛ばされた。

「詰めが甘いぜ、覚えておけ!」

風樹まで来たのか。

かがみを救い出すと、周りの奴等に殴り掛かった。

「俺達も行くぞ、はやと!」

「……ああ、才雅！」

才雅は向かって来る雑魚を蹴り飛ばした。
トンファーを使う気すらないらしい。

「チツ！これじゃあ計画が……」

リーダー格の男は狼狽えていた。

「もし俺に翼があつたなら、お前等を簡単に倒せたかもな」

奴はビクリと身を固める。

気付かぬ内に俺が近付いていたからだ。
口の中の血を吐き捨て、ホルダーからダーツを1本出した。

「う、動くな！コイツがどうなってもいいのか！」

奴はナイフをつかさに向けた。

このまま盾にする気だな。

「そのダーツ、コイツに当たるかもしれないぜ！？」

「そんな気はない」

「バカが！奇跡でも起こす気か！？」

つかさを真正面に構える。左腕で支えていて、右手にはナイフ。まるで強盗みたいだな。

かがみはもちろん、手下を粗方片付けた才雅と風樹も焦り始めた。

だが、俺は違うな。

「悪いが、俺は奇跡なんてもの信じない」

素早く、一直線にダーツを投げた。

ブスッ！

「ぐああああ！」

ダーツはつかさ……を抱えていた奴の腕に刺さった。

フッ、狙いどおりだ。

痛みに悶え、奴はつかさを放した。

「来い、つかさ！」

今にも泣きそうな顔でこっちに走って来るつかさ。

「この野郎!!」

しかし自棄になった奴が、つかさの後ろからナイフを振り上げた。

「ち、力が……!!?」

ナイフが振り下ろされる事はなかった。
それどころか、奴はナイフを落とした。

力が入らず動けないようだ。

「無駄だ」

俺は奴に近付き、腕に刺さっているダーツを抜いた。

「俺のダーツの針先には麻酔薬が塗ってある。暫く動けないぜ」
「な……に……」

とうとう、奴は座り込んでしまった。

この時点で俺の勝ちだが、残念ながら俺は優しくない。

「今もしお前に翼があっても……無意味だな」

俺は奴の顔を思いつきりぶん殴った。

あー、スッキリした。

「つかさ、平気だった……」

「はやと君!」

最早泣いているつかさが俺に抱き付いて来た。

「いつてええええ!」

殴られた傷がいてえ!

もしかしてダーツ投げた事怒ってんのか!?

……それとも、そんなに怖かったのか?

「はやと君、無事でよかった!」

俺かよ！つてか俺の心配してるなら抱き付くな！いてえ！
……ま、無事でよかったのはお互い様だ。

ビュン！ゴスツ！

「っ！？」

「はやと君！？」

何故か知らないが、上から辞書が俺の頭にクリーンヒットした。

「は〜や〜と〜！よくもつかさにダーツなんか投げたわね〜！！！」

……他に怒っている人がいたよ。

「当たんなかったんだからいいだろ。大体助けてやったんだ！感謝
ぐらいしろよ！」

「あ、ありが」

「あたしは三原と原田に助けられたの！アンタ殴られてただけじゃ
ない！」

「あの、あり」

「誰の所為でそうなったんだよ！俺に助けを呼んだのもお前じゃん
か！」

「はや」

「アレはアイツ等にアンタを呼べて脅されたの！つてかアンタが
狙いだったんじゃない！」

ぐっ、何も言えない。

……ちよつと待てよ。何で俺が狙われたんだ？俺はアイツ等と面識
はなかった。

そして才雅は何故知っていた？んで、何処に行った？

〈才雅視点〉

敵のボスに止めを刺したのははやとだったが、俺の仕事「奴等を潰す事」は完了したな。

俺と風樹ははやと達に気付かれない内にその場を去り、裏手に回る。

「ご苦労様。ほら、報酬」

裏手には、俺の依頼主が待っていた。

下には気絶している男が2人。

「毎度あり、やなぎ」

「俺にもあるし。いいのか？」

「ああ。はやとを助けてくれた礼だ」

……回想開始……

〈やなぎ視点〉

昨日、俺は聞いた

「チツ、何だあの白風はやととかいう奴は！俺の柊さんに手を出すなんて！」

アイツはウチのクラスの人間で、はやととつかさが仲良く話している所を見たらしい。

「でもどうするんだ？」

「そつだ！俺の兄貴がすげえ喧嘩が強くてさ、学校にグループを持っているんだ！」

そのグループの名前は町内でも知られていた。

「柊さんを入質にすれば奴は手も出せない。そこに俺が助けに出て来ればきつと好きになる！」

「んでボコボコにされた奴を写真に収めて学校にはバラ撒けば奴の名誉もなくなる！」

最低の自作自演だな。反吐が出そうだ。

挙げ句かがみまで巻き込むなんて。

……回想終了……

〈才雅視点〉

で、それが今情けなくのびている2人で、やなぎが制裁を下し写真に収めた。

事実が知れば多分退学だろうな。

「しかし……風樹が言った通り、本当に面白い奴だ」

「ネタバレはいつするんだ？」

「明日。コイツ等の退学が決定したらな」

俺等もタダじゃ済まなさそうだけどな。

〈はやと視点〉

「……まあ一応感謝してもいいわよ」

うわー、素直じゃねーな。

「つかさ、帰るわよ！」

「うん。はやと君、ありがとう」

「気を付けて帰れよ」

2人を見送って、俺も帰った。

細かい事は明日聞き出すか。その前に傷の手当てだな。

大事な人……か。

確かにつかさは大事な友達だな。

第3話「大事な人」（後書き）

どうも、銀です。

まずは第3話読んで頂きありがとうございます。

はやと「前回より長くないか？」

長くしてみました。今回からこれくらいにします。

はやと「あゝ、傷がいてえ」

つかさ「でもはやと君格好良かったよ」

はやと「そうか？」

さて、次回はとある数字と戦います！

第4話「悪魔の数値」

（はやと視点）

ついにこの日が来た。己のステータスを知る日が。

ある者は知る事を恐れ、必要以上に気を張ってしまう。

そう、身体計測が。

まあ俺は何の関心もないが。

教室内を見ていると、色々気にしている奴等がいるみたいだな。

「今年こそ、羽音の身長を抜いてみせる！」

「頑張つてね、ふー君」

「もー、才雅君は何で太らないの？」

「敢えて言っておく。こつちが聞きたい」

男女で悩みが違つようだ。

が、さつき言つた通り俺は何の関心もない。

「ふむ……84、いや85か……」

「で、お前はさつきから何やってんだ？」

俺の隣には手でスコープを作って何処かを除いては数字を呟く不審者が1人。

「みゆきさんのバストを予想してるのさ」

誰かー、ここに変態がいるぞー。

「あき君や」

いつの間にかあきの後ろにはこなたがいた。
この際だ、ビシッとやってやれ。

「私としてはこれくらいだと思っただがね」

こなたは持参した手帳に数字を書いてあきに見せた。
「つてお前も同類か！」

「あー、俺もその線行っただがこっちの方が現実的じゃ……」

「みゆきさんの胸には夢が詰まってるんだよ、現実的に考えちゃあダメダメ」

ダメなのはお前等だ。

「つかさは気にしないのか？」

いつもと変わらない感じのつかさに尋ねてみた。

「ちょっとだけね。あと、お姉ちゃんが結構気にしてて」

かがみの方はそんなに気にするのか。

俺はこの時完全に油断していた。

自分には決して関係ない。

そう思っていた……。

身体計測後、教室内はやはり賑わっていた。

「また負けた……ってかまったく伸びてない……」

「ま、まだ伸びるよふー君！」

「よかつた、増えてなくて」

「俺は相変わらず、だ」

歡喜する者に落胆する者。それぞれだ。

「全然伸びてない……」

「はう、横に伸びちゃった……」

こつちにも落ち込んでる者がいた。

一方、みゆきは余裕そうである。

「みゆきさーん、3サイズ教え」

ドグシャッ！

「何聞いとるんだお前はっ！」

お、やなぎいつの間に。

「で？みゆきさん、いくつ？」

地面に顔を埋めたあきを余所に、今度はこなたが聞き出していた。

「実は……」

「……なんですとー！」

ヒソヒソ話で聞こえなかったが、どうやら予想は外れたみたいだ。

「んで、アレは何だ？」

俺は一人でかなり落ち込んでいる奴を指差した。

「え………かがみだよ？」

みちる、そういう事を聞きたいんじゃないよ。

「間食が、間食がっつ！」

体重増えたんですね、分かります。

「こつなったらダイエットよ！」

はいはい、頑張ってください。

「わ、私もやる！」

つかさ、お前もか。

「私もお手伝いします」

「僕も」

みゆきにみちるまで。

俺はめんどいからパスな。

ガシッ！

気付いたら、かがみが俺とあきの肩を掴んでいた。

「いつてえな！」

「H A N A S E！」

「アンタ達も手伝いなさい！」

「……イエッサー！」

かくして、ダイエット作戦が強引に始まった。

んで、放課後。ジャージを着た男女8人が何故か神社に集められた。

「いや、何で神社？」

「お参りするのかな？」

「石段を兔飛びか？」

「何処の修業だよ」

男子組が好き勝って言っていると、すぐに答えが帰って来た。

「ここはかがみとつかさん家なんだよ」

「マジか!？」

家が神社やったたのか……。この辺来た事はあるが気付かなかつたな。

「って事は巫女服！」

「何でそーなる」

「でも、たまに手伝うよ」

「つかさも余計な事言わないっ！」

1人ツッコミ乙。

「それで、何をするんですか？」

「この辺を走るつもりよ」

至って普通だな。

「けど、この人数で走るのか？」

やなぎの言う通り、この大人数で走るのは気が引ける。

「それなら平気よ。くじがあるから」

「用意周到だな」

その熱意にはある意味感心するよ。

「皆選んだ？せーので引くわよ！」

「せーのっ！！」

ペアはこのようになった。

かがみ&やなぎペア

みゆき&みちるペア

こなた&つかさペア

んで、俺とあきのペアだ。

「チッ、野郎とか」

うるせえよ。

「みゆき、よろしくね」

「はいっ！」

あのペアは安定してるな。相変わらずみちるは鈍感だけど。

「頑張ろうね、こなちゃん」

「私より気になるペアが……」

やはりか。少しは真面目にやれ。

「んじゃ、先に行くけど10分たったら次のペアが走って」

「分かった」

最初にかがみとやなぎがスタートした。

「……はやと」

「何だ？」

珍しくあきが真面目な顔をしていた。何か不味い事でもあったか？

「やなぎってさ……「もやし」じゃなかったか？」

「あっ！」

しまった、アイツ運動音痴だった！

大丈夫だろうか。

（やなぎ視点）

自慢ではないが、俺は体力はない。運動も苦手だ。将棋やチェスをやっていた方が楽しいしな。

けど、俺は今何で走っているんだ？しかも女子と。

「やなぎ、大丈夫?」

かがみが俺を心配してペースを落としてくれた。

「いや……大丈夫……だ……」

息も絶え絶えだが、強がった。

「息、あがつてるわよ?」

まったく意味をなさなかった。すみません、強がりです。

「まったく、辛いんら言いなさいよね」

「ごめん……」

「……こっちが無理矢理付き合わせてる訳だし」

そう、あくまで目的はかがみのダイエットだ。

俺は今、それを邪魔してるんじゃないか……?

「かがみ。先に行け」

「えっ?」

「俺なんか気にしないで、先に……」

「……………」

無言。そうだ、そのまま俺を置いて

「嫌よ」

「!?!?」

何で？別に俺に合わせなくても……

「ここで置いて行ったら、無理に付き合わせた意味がないじゃない」
「かがみ……」

俺は、無言でペースを上げた。

「ちよつ、やなぎ!?!」

「なら、俺が……」

かがみに合わせればいい。
無理矢理にでも付き合わせる。

「やなぎ……」

最高に不様な男の、最後の強がりって奴だ。

（みちる視点）

やなぎ達が走り出して10分後、僕達もスタートした。
軽いジヨギングペースで、みゆきと並んで走る。

「そういえば、みゆきと2人で話すのって久しぶりだよね」

いつもは周りにあきやこなた達がいるから。

「そうですね」

「みなみは元気?」

岩崎みなみ、もう1人の幼なじみで2つ下の女の子。

「はい。この学校に進学希望してるみたいです」
「みゆきにベツタリだったからね」

思い出話に花を咲かせる。本当に懐かしいなあ。

「今度、遊びに行ってもいい？」
「ええ、勿論です」

みなみには内緒にして貰おう。ちよつとしたサプライズとして、ね。

「みちるさんは中学はどうしていたんですか？」

「僕？普通に友達に囲まれて、楽しかったよ」

でも、何故か時々記憶がなくなるんだ。皆には秘密にしてるけど。

「その、恋人とかは……？」

「えっ？いないよ」

「そ、そうですか」

あ、ちよつと嬉しそうだ。酷いなあ。

「そう言うみゆきは？」

「私は……好きな人ならいます」

へえ、意外だなあ。おつと、失礼か。

「でもみゆきは可愛いから大丈夫だよ」

「そうですしょうか？」

「うん、頑張つてね」

「……はい」

みゆきが好きな人……少し羨ましいな。一体誰なんだろう？

（はやと視点）

みちる達が行ってからつかさとこなた、最後に俺とあきがスタートする。

「正直めんどい」

「俺もだ」

かがみは一応友達だから付き合ってやってるが、やはりめんどい。

「つてか俺体重減ってたし」

「俺は増えた」

「どれくらい？」

「0.2kg」

お前、それ増えたとは言わないだろ。

「ところでさ」

「あんだよ」

「つかさとは何処まで行った？」

「何処も行っただよ」

「……まあ、まだ早いかな」

何一人で納得してんだよ。

言いたい事は分かるが、そんなんじゃないし。

「みつちーの方はどうなったかねー」

知るか。こつちが知りたい。

「進展はしてねえと思う」

「やっぱりな」

あの難攻不落のみちるがこれで落ちるとは思えないしな。

ゴールまであと僅か。

神社の前には4人の人影……ん？足りねえな。

「お疲れ様」

「おう、サンキュ」

つかさからタオルを受け取り、汗を拭く。

「で、足りねえ奴は？」

「かがみとやなぎ君みたい」

やっぱりもやしか。走ってる途中見かけなかったから、何処かの路地で動けなくなってる可能性がある。

「チツ、探しに行く」

「待て」

今来た道に戻ろうとした所であきに止められた。

「やなぎは強がりだから必ず帰って来るさ。俺達が行っても野暮つてもんだ」

珍しく真面目に物を言うあきに何も言えなくなる。

「……だな、ここはやなぎを信じて待つか」

「それにもしかしたら2人で別の運動を」

バキィッ！

バカの頭を壁に叩きつけ、俺達がかがみとやなぎの帰りを待った。

くやなぎ視点く

マズい事になった。

今、俺達は路地裏にいた。別に俺がマズいのではない。

「つたたあ……」

かがみが足を捻ったのだ。

助けを呼ぶにも、携帯はカバンの中。カバンは神社の前。
かがみの携帯も家に置いて来たようだ。

「平気か？」

「なんとか……」

かがみを置いて行く訳にもいかない。

「……仕方ないか」

俺は、1つの決断を下した。

「俺がかがみを運ぶ」
「えっ!?!」

突然の申し出に、かがみは一瞬呆然とした。

「よつと」

「ちよつ、やなぎ!?!」

「動くな……よっ!」

今の態勢は俗に言う「お姫さま抱っこ」である。

「足、痛むか?」

「ううん、大丈夫……って違う!」

「何が」

「だって、恥ずかしいし……」

俺だって恥ずかしいよ。けど、我慢だ。

「……重いでしょ?」

「全っ然」

人を持った事はないけど、かがみはそこまで重くないと思う。

「……ありがとう」

お互いの頬が赤いのは、夕日の所為って事で。

「おっ、帰って来た!」

神社の前では、皆が待つてくれていた。

「うおっ、お姫さま抱っこ！」

「携帯何処だ！写メ撮らせろ！」

お前等なあ……。

俺はかがみをそっと下ろしてつかさに預ける。

「お姉ちゃんどうしたの!？」

「ちよつと捻っちゃって」

かがみが怪我をしたので、この日はこれで解散となった。

「やなぎ、今日は……あ、ありがとう」

照れながらもちゃんとお礼を言うかがみがちよつと可愛いと思えた。

「今度から気を……」

あ……れ……?かが……み……

ドサッ

「やなぎ?やなぎっ!？」

俺はそこで意識を失った。

後から聞いた話だと、俺は無茶をして力を使い果たしたらしい。気絶した後は、はやとあきに家まで運ばれたんだそうだ。

余談だが、目が覚めた時に額に「肉」と書いてあったので、次の日

に犯人を叩きのめした。

「イテテ、筋肉痛が……」

本気で少しは運動をしようか考えるべきだな。

「おーす、やなぎ」

軽い挨拶と一緒にかがみが歩いて来た。

「よっ。足はもういいのか？」

「ええ。一晩冷やしたら少しはよくなったわ」

それでも、運動は控えるようだな。

今日ちゃんと病院に行くとか。

「で？やなぎの方は？」

「全身筋肉痛だ……」

白状すると、かがみはクスクスと笑った。

「怪我が完治したら、またダイエットするの？」

「うっん、暫くはいいわ」

「？」

何で急にやめたか、俺には分からなかった。

『やなぎに重くないって言われたからなんだけどね』

第4話「悪魔の数値」(後書き)

どうも、銀です。

第4話御覧頂きありがとうございます。

今回は前半はやと、後半やなぎが主役になりました。

はやと「頑張ったもやし」

やなぎ「もやし言つな」

今回は、変な空間に行くようです。

第5話「ストレンジゾーン」

（はやと視点）

今日の天気は快晴だ。なんか良い事がありそうだな。

俺は今屋上にいる。が、別に授業をサボっている訳じゃない。今は昼休み。何故か屋上で昼飯を食おうということあなたの提案に乗っただけだ。

……ま、その後サボらない保障はないが。

全員飯を食い終わった後、突然あなたが提案をして来た。

「皆さ、今日私のバイト先に来ない？」

こなたのバイト先……？

ってか、コイツを雇ってくれた場所があるのか。

「行く行くー！」

まずあきが話に乗った。

「面白そうー」

「私達はいいわよ」

「はい、是非」

女子組はOK。

「……今日は暇だしな」

「うん、行かせて貰うよ」

やなぎとみちるも行くか。

「俺もいいぜ」

「はいはい、7名様ごあんなーいつ！」

「ご案内？喫茶店とかなのか？」

この後、良い事がありそうなんて言った事を後悔する事になる。
こなたの指示に従い電車に乗って、やって来たのは

「アキバよ、私は帰って来たー！！」

「あき、うるせえ！」

そう、秋葉原だ。

まあこなたの事だから予想はしてたが……。

「この前行ったばつかなんだけどな」

「じゃあ今叫んだのはなんだ」

今度はかがみからツッコミが入る。慣れたなー、アイツも。

「んで、何処な訳？」

「えーっと、少し待ってろ」

「早くしろよ」

あきの持つてる地図を覗き込む。

「うおっ！？何だこれ……本当に地図なのか？」

「こなたが描いた地図だ」

「アイツ、絵は下手だから」

下手って、これは壊滅的だな。

立往生していると、突然どっかのオタクがつかさに絡んでいた。

「すみません、写真撮ってもいいですか？」

「えっ、えっと……」

つかさの返答を待たず、男は写真を撮り始めた。

「こっちも一枚」

って、いつの間にか増えてるし。

「じゃあ、浩之ちゃんって」

プスッ、ドサッ

「嫌がってんだろっが」

最初いた奴に刺したダーツは睡眠薬が塗ってある。暫く寝てる。

俺はダーツをもう3本構えてまだいる奴等を睨んだ。

「散れ」

「は、はいいいいい！」

俺にびびって奴等は一目散に逃げていった。

「大丈夫か？」

「うん、ありがとっはやと君」

つかさは何ともないようだ。よかった。

「男の嫉妬は、みつともないぜ？」

「は？」

「と、冗談抜きにああいうのはいるからな。つかさなんて某ゲームキャラそっくりだから、コスプレと間違えられたんだろ」

俺はあきにそのゲームキャラの画像を見せてもらった。

た、確かに似てる……。

「早いとこ行こうぜ」

地図を解読したあきに付いて、俺達はこなたのバイト先へ向かった。

「お帰りなさいませっ、ご主人さまっ！」

啞然。その一言に尽きる。

こなたのバイト先、そこは所謂「コスプレ喫茶」だったのだ。

「ただいまっ！」

素で返すあき。お前すごいな、ある意味で。

「えと、た、ただい」

「やらなくていいぞ、みちる」

「奴が特別すぎるんだ」

あんな特別、いらんがな。

「ささっ、座って座って」

出て来たこなたの服装は、ウチのとはまた違う制服。これもコスプレなのか？

「ハ ヒか」

「流星はあき君」

……もういいや。

しかしアレだ。空気が濃いというか……。あまり慣れそうもないな。慣れたくもないが。

「アンタ達、飲み物何にする？」

突然こなたの態度が豹変した。

「早くしなさいよ。遅いと罰金よ罰金！」

なんかすごい腹立つんだが。

「それが客に対する態度なの！？」

「ここではそれが仕様なの」

ああ………そうですか。

「もう決まったわよね？」

「私、メロンソーダ」

「ただのメニューには興味ありません」

「へ？」

オイ、それでいいのか店員。

「俺コーラな！」

「では、私はミルクティーを」

「僕はアイステイーを」

俺はアイスコーヒーでいいや。

「アンタ達はどれがいいの？」

「ちょっと待ってよ！」

「団員にあるまじき遅さね」

「いつから団員だっ！」

勝手に団員にされた、かがみとやなぎが突っ込む。

「ここではそういう設定なの」

なんか面倒だな。

「団長に逆らうなんて1000年早いわよ」

「じゃあアイスコーヒーでいいわよっ！」

「はあ……俺も同じ奴で」

「団長命令よ、待ってなさい」

疲れる店だな。

けど、こついつのが好きな奴もいるんだろう。

「ふざけてんじゃねえぞ！」

ん？あつちで何やら騒ぎみたいだ。

「俺の服にジューズ掛けやがって！弁償だな！」

「す、すいません……」

体躯のいい男が店員の娘に怒鳴っている。服にジューズを掛けられたらしい。

「あー、またあの人か」

「知ってるの？」

「ジューズを運ぶ店員をわざと転ばせて、服に掛けさせて高いクリーニング代を出させてるんだよ」

最悪だな。って事は今被害者はあつちの娘か。

「ちよつとやめさせてくる」

「ちよつ、こなた！」

かがみの制止も聞かず、男の方に向かうこなた。

「今、わざと転ばせましたよね？」

「ああ？何だテメー？」

「迷惑ですから止めてください」

体格さがあるにも関わらず啖呵を切る。

「うるせえんだよ！」

ヤバい！男が逆ギレしてこなたに殴り掛かった！

急いでダーツを構えるが、それより先に動いた奴がいた。

「やめろよ」

「あき、君……」

あきはこなたの目の前で、男の拳を完全に止めていた。

普段のふざけた様子からは想像も出来ない程の鋭い眼光で男を射抜く。

「表出る。ここじゃ迷惑だからな」

「っ！上等だ！」

あきが手を離すと男は外に出た。

「こなた、大丈夫か？」

「あ、うん」

「そっか。ちょっと待ってるよ」

いつもの調子で外に出るあき。

けどアイツが大丈夫か？男の方は強そうだったし、俺が助太刀した方が

「あきは平気だろ」

そう言うのはやなぎ。コイツ等腐れ縁だっけ。

「アイツは友達に手を出す奴には容赦ないからな。心配なら外を見る」

やなぎ以外は全員外を見た。

俺もみちるもあきがキレた所見た事ないからな。

「おら、来いよ」

男は指を鳴らしてあきを挑発している。一方のあきは……

「まあ待て」

変なポーズを取り出した。

左前に伸ばした右腕を右横方向に、右腰に伸ばした左腕を左横方向に、それぞれ移動させる。そして

「変身！」

という声と共に左腰に右腕を移し、両腕を下に広げた。

その時、何故かキュインキュインと何かが回る音まで聞こえて来た。

「おおつ、あれはクガの変身ポーズ！」

「マイティかー。妥当だよな」

「タイタンは俺の嫁！」

こなたや周りの奴等が騒ぎ出した。

いや、知らんよ。ってか、やってる場合か。

「うし、行くぜ！」

あきは何故か持っていた携帯をしまい、ボクシングみたいなファイティングポーズを取った。

どうでもいいが、どうやらさっきの音は携帯から出していたようだ。

「ふざけてんじゃねえ！」

ごもつともだ。けど、あきの挑発は成功したみたいだな。頭に血が上った男はあきに襲い掛かった。

あきは相手の体格差を活かし、懐に入り込むと腹に一発叩き込む。

「がはっ！」

男が悶えている所を、その辺に落ちていた木の棒で鳩尾をぶっ叩いた。

その時の構え方はまるで剣道みたいだった。

「ぎゃああっ！」

苦痛で悲鳴を上げる男を今度は足払いで転ばせる。

「お次はっ！」

「イデデデッ！」

続いて足を4の字に固めた。あれは確か柔道の技だよな。

「やなぎ、あれは」

「あきは殆どの格闘技を経験した事がある」

驚きの事実だった。いつもアホな事をやっては突っ込まれるあきが……。

「ぐうつ、クソツ」

「まだまだ」

逃れようと必死な男に、あきは馬乗りになり殴り始めた。

「ま、待つ……ぶっ！」

「俺の友達に手を出そうとしておいて、これで終わる訳ねえよな？」

本当にあそこにいるのは普段のあきなんだろうか？

「言っただろ、容赦ないって」

後ろから、落ち着いた様子のやなぎの声が聞こえた。

〈あき視点〉

「皆、お待たせーっ！」

数分後、俺は爽やかな笑顔で、酷く殴られたさっきの男と店に入った。

「この人、話してみたら案外いい人でさー、服にジューズ掛けたの許してくれるって。なっ！」

「は、はいっ！」

「それと、今までの事は認めて反省してるそうだからさっちも許してやってくれな」

「スイマセンデシタ……」

謝る男。ちよつとやり過ぎたかな？まあ一件落着つて事で。

「ふうー、何か喉乾いちゃった。こなた、お水ちよーだい！」
「……………」

あれ？さっきからこなたがやけ静かだな。今度はどんなキャラなんだ？

「あき君のバカっ！」

「うおっ!？」

急に怒鳴られた。そ、そんなキャラいたっけなあ…………？

「心配、したんだよ？」

「……………」

「コスプレじゃない。本当に心配してくれたんだな。」

「わ、わりい」

「許すっ!」

ドサッ！

全員思わずつこけた。あっさり許すんかいっ！

「お水ね！今持ってくるから待っててね〜！」

いつもの調子に戻ったこなたが店の奥に向かった。

「……ちよつと、フラグ立ったよ」

「ん？何か言ったか？」

「何でもないよ〜！」

「あ、あの……」

さつき男に絡まれていた娘が話し掛けてきた。

ほほう、定石のメイド服、しかもミニか。

「さつきはありがとございました！格好良かったです！」

「いやいや、気にする事はないよ。可愛い女の子を守るのは男、いや漢の勤めだからな！」

ああ、こういうのいいなあ。

黄色い声に包まれる英雄……そしてそこから恋が

「わつととおー！」

バシヤアツ！

「……………」

妄想していると、こなたに水をぶっ掛けられた。

「あつ、ごめーん。つい滑っちゃって（棒読み）」

あれっ？棒読みですよこなたさん？

「今拭くから動かないでねー」

ベシッ！ベシッ！

あ、あれ？拭くと言うより殴ってませんかこなたさん？

「痛っ！？痛いって！ねえ！？」

くはやと視点

数日後。学校であきに問い詰めた。

「お前、あんな強かったのな」

「んーや、弱いよ」

は？また何言っただコイツは。

「だって殆どの格闘技の経験があるってやなぎが言ってたよ」

「いや、まあ確かに合ってるんだけどな」

「では、何故弱いと？」

「総合的にはそんなに強くないって事だよ」

総合的に？どういう事だ？

みちるやみゆき達も首を傾げる。

「俺は小学生の時に、違う格闘技をそれぞれ1年ずつやらされたんだ」

な、何い！？

「だからどれに特化した訳でもなく、個人の強さはそこそこ強い程度。才雅や風樹なんかには絶対に勝てない」

なるほど、だから「総合的に弱い」ね。

「因みにカポエイラは中学の時な」

「聞いてねえよ」

「でも、今やらされたって言ったよね」

みちるの言った通りだ。あきが自分から……やる訳ないよな。

「親父にやれって。その代わり達成したらPC買ってくれるって約束したしな」

あきの使い方うめえな。

「んな事よりもさ！これを見る！」

あきが天にかざしたカード。それは……？

「あ、ウチの常連カード」

こなたのバイト先の常連の証……らしい。

「あの店気に入った！可愛い知り合いもいるしな！」

そう言ってこなたに親指を立てるあき。

「グツジョブ！流石はあき君！」

こなたもあきに親指を立てた。

「でも割り引きはしないよ」

「ええ」

「！」

「どうしたの？はやと君」

「いや、何でもない」

今、気の所為か、こなたの頬が一瞬赤くなったように見えた。

第5話「ストレンジゾーン」(後書き)

どうも、銀です。

第5話御覧頂きありがとうございます！
今回はあきが主役でしたー。何故っ!？

あき「いいじゃん…」

はやと「よくねえよ」

今回は内なる彼が目覚めるようです。

第6話「空虚」

「はやと視点」

梅雨。俺が一番嫌いな時期だ。

ここの雨が續くと、屋上で昼寝が出来ない。

今日もまた雨。気分までどんよりしてしまう。

「だりい〜」

「だらしないわねっ！」

机でだらけてると、かがみに叱られた。

「いつも寝てるんだから、こんな日位シャキっとしたら？」

「それは違うな、かがみ」

「何が？」

「こんな雨が續くからこそだらけるんだ！」

「力説すなっ！」

ちっ、通じないか。隣のつかさはコクコクツと首を縦に降っているのに。

「それ分かる〜」

「だろ？」

「ああ、もうコイツ等は……」

だらしない2人に頭を抱えるかがみだった。

第6話、完。

「ちょっと、やなぎからも言っちゃってよ」

むっ、最終兵器を持って来たか。
けど、屈する気はないな。

「だらける程元気が余ってるなら、俺とチェスでもしないか？」

「さー、元気だ。シャキつとするかー」

「ええっ！？はやと君！？」

「おおっ、効果抜群ねっ！」

やなぎとチェスだ？

冗談じゃねえ。一瞬で見せ物にされるだけだ。

「つかさ、ここは従っとけ」

「う、うん」

「じゃあかがみ、やるか？」

「わ、私も別にいいわよ…」

かがみもやなぎの恐ろしさを知ってたか。

「かがみじゃ、到底やなぎには勝てないな」

背後から、あきがかがみを煽った。

「じゃあアンタはどーなのよ」

「残念だったな！」

なっ、まさか！？

「チエスのルールすら知らない」

ズガツシャアン！

余計にダメな方がよっ！

「体力勝負じゃもやし君に勝てるのに」

「悪かったなっ！もやしでっ！」

体力勝負でやなぎに負ける奴っていんのか？

「かがみに勝てるのは……」

「な、何よ？」

「体しほ」

「一度鉄拳制裁を下した方がいいようだな……！」

どす黒いオーラを纏ってあきになじり寄るかがみ。

あき、墓参りには行ってやるぞ。2回くらい。

「ヤバッ、逃げる！」

「待てええ！！！」

教室内での追い掛けっこが始まった。

元気有り余ってるよなー、アイツ等。

（みちる視点）

今日、僕は宝物を持って来た。

ある1枚の写真何だけど、とても大切な物。

「みゆき！」

それを見せたい人を見つけて、声を掛ける。

「何ですか？みちるさん」

「ほら、覚えてる？この写真」

写真立ての中を見て、みゆきも思い出したみたいだ。

「わあ、懐かしいですね」

写真の中は小さい頃の僕、みゆき、みなみ、子犬のチェリーがいた。この後引っ越してしまい、僕が持っている3人で写っている写真はこの1枚だけ。それだけにとっても大切な物なんだ。

普段は部屋に飾ってあるんだけど、今日は特別に持って来た。

「みゆきはこの写真持ってたっけ？」

「はい、大切に飾ってありますよ」

みゆきの言葉を聞いて、また嬉しくなる。

「あの、1つお願いがあります」

「何だい？」

「みちるさんのフルートを聞かせて頂きたいのです」

僕のフルート、みなみのピアノのセッションがみゆきは好きだったっけ。

「もちろん、みゆきのためだけの演奏会を開いてもいいよ」
「っ！」

突然みゆきの顔が赤くなった。どうしたのかな？

「あ、久々にみなみとセッションもしたいなあ」

「え……そ、そうですね」

みゆきのおばさんや、みなみのおばさんも喜んでくれるかな？

「どいたどいたあーっ！」

「待てえーっ！」

突然、あきとかがみがちらに走って来た。

「みゆき、危ない！」

「きゃっ！」

ドンッ！

あきがぶつかりそうになったので、みゆきを庇った。

パリーーンッ！

「みちるさん、ありがとうっ！……みちるさん？」

「ヤバッ！」

あきがぶつかった拍子に、写真を落としてしまい……。

「ちょっと！謝りなさいよ！」

「わ、悪いみちる！」

写真立てのひび割れたガラス。僕の思い出が……。

あれ？なん、で……？

いし、き……が……。

（はやと視点）

教室内で起こった事件に、周りはシーンと静かになる。

あきはひたすら謝ってるし、みちるは反応せずに動かない。

床には、割れたガラスと写真立て。中の写真はそんなに大事な物だったのか？

みちるは普段怒らないタイプだったので、不安に駆られる。

「なっ、写真立てなら弁償するから！」

あきはみちるの肩を持って謝り続ける。こんな光景も珍しい。

「……気安く触ってんじゃねえ！」

バキィッ！

「！？」

恐らく教室内の誰もが、一瞬何が起こったか理解出来なかっただろう。

あのみちるがあきをぶん殴っていたのだから。

「あーあ、怒らせやがって。お陰で俺様が出られたんだけどな」

口調まで変わっている。ってか、明らかにみちるじゃないような喋り方だ。

「み、みちる?」

「みちる、さん?」

殴られたあきも、隣にいたみゆきも呆然としている。

「はっ、俺様は「みちる」じゃねえ!」「うつろ」だ!」

うつろ?みちるじゃない……?」

何言ってやがんだ?

「二重人格、か」

やなぎが落ち着いて物を言った。

「二重人格って、アニメやゲームのキャラによくあるあの?」

こなたが食い付く。今、アニメやゲームの話してないから。

「ご名答。俺様はみちるが主に激しく怒った時に出て来れる」

みちる……いや、うつろが自ら語り出した。

「今日はそのバカが写真立てを割ったから怒った訳だ」
「うっ……」

うつろに指差され、バツの悪そうな顔をするあき。

「主に、というと？」

「知るか。それしか知らねえよ」

やなぎの質問をうつろは適当に流した。

「コイツ、本当にみちると違うな。」

「さてと、とりあえずこの女は全て俺様の物になれ」

「はあああ！？」

奴はいきなりトンデモ発言を放ちやがった。

「お前等の物は俺様の物、俺様の物は俺様の物だ」

何処のガキ大将だ。

「おいお前、何かジュースを買って来い」

あきに命令するうつろ。

次から次に自分勝手な事を言いやがって。

「みちるを返せよ」

あきはとうとう、うつろにケンカを売った。

「あ？」

バキィッ!

「なっ!?!」

対するうつろは、何も言わずにあきを殴った。

「貴様あ、誰に口聞いてんだよっ!」

ガスッ!

倒れこむあきを踏み付けるうつろ。
まるで、いや暴君そのものだ。

「みちるさん、やめてください!」

みゆきが止めようとするが、うつろは聞かない。

「みゆきい、お前はもっと賢い女だと思ってたけどなあ?」

「……………」

「俺様は、うつろだ!」

ドンッ!

「きゃっ!」

あの野郎、みゆきを突き飛ばしやがった!

「アイツは全てを持ち、欲しがらなかった「満ち足りた存在」だった!けど俺様は全てが欲しい!金も、女も、力も!「虚ろなる存在」

、それが俺様だ！」

うつろが何か演説しているみたいだが、俺はもうそんなもの聞く気にはなれなかった。

「へっ、使えねえ。んじゃあお前、ジュース買って来い」

うつろは、今度は俺に指を差し命令する。

「もし翼があつたら、みちるを簡単に取り戻せるんだろうか？」

「はあ？」

俺は右のホルダーからダーツを3本出し、うつろに投げた。
針先は麻酔薬だ、暫く動くな！

「うおっ!?!」

うつろはしゃがんでダーツを避けた。チッ！

「てめえええ!!」

激昂するうつろ。ヤバいな。

「そこまでだ」

「!?!」

復活したあきがうつろの体を捕まえた。

「離しやがれ！」

「やれ、はやと！」

「よし、動くなよ！」

俺は動きの止まったうつろにダーツを投げた。

「っざけんなああ！」

うつろはあきの足を思いつきり踏み付けた。

「ッ！」

痛みに顔を歪ませ、うつろを捕える力が弱まってしまった。
その隙にダーツから避けるうつろ。

「死んどけええええ！」

バキィッ！ドシヤアッ！

俺に向かって走り、殴り掛かった。

俺は殴り飛ばされ、教室の壁に叩きつけられる。
いつてえな……クソッ！

「はやと君！」

「平気だ」

つかさが心配して駆け寄ってくれた。
大丈夫だが、相手するにはかもな。

「次イ！」

うつろは次に、あきを標的に捉えた。

「来い、目え覚まさせてやる！」

あきも本気でやるようだな。

先に動いたのはうつろ。走り出し、あきとの距離を縮める。

一方あきはボクシングの姿勢を取った。

うつろは気にせずあきに拳を突き出す。

しかし、見切られて逆にカウンターを放たれる。

「はっ！」

鼻で笑い飛ばし、うつろは空いている手でカウンターを止めてしまった。

「で？」

「っ!？」

一瞬動きが止まったかに思えたが、すぐさま頭突きで攻撃した。不意打ちに近かったからか、あきのダメージがデカい。

「くたばれ」

ドゴオッ!

そのまま、うつろはあきを蹴り飛ばした。聞こえる女子からの悲鳴、倒れるあき。

「立て、立つんだジョー！」

空気読め、こなた。

「くそつ、燃え尽きたぜ……真っ白にな……」

あきも乗らんでいい。

「もう終わりかぁ？」

唇を舐め回し、あきに近付くうつろ。

「お前はただじゃ済まさねえ。骨2、3本折って病院送りに」

ピタリ、とうつろの動きが止まる。

目線の先には、座り込んだままのみゆきと割れた写真立て。

写真立て。

写真。

「ぐおっ!？」

突然、うつろが頭を抱え出した。

「チツ、もう終わりか……!」

終わり?もしかして、みちるが返って来るのか?

「だがな……俺様はまた……」

それだけ言って、うつろは完全に動かなくなった。

「……あきつ！」

「は、はい!？」

「写真立て割れちゃったじゃないか！僕も流石に怒るよ!！」

うつろが現れた時と同じように辺りが静かになる。

「みちる、さん？」

「ん？どうしたのみゆき？座り込んで」

どうやら、みちるに戻ったらしい。

「って、あき！その怪我は!？それに……」

教室内はあきとうつろが戦った所為で荒れていた。

それより、みちるは何も覚えていないのか？

「一体何が起きたの？」

うつろが出ていた時の記憶は、みちるにはないらしい。

それでも、教室内の奴等の視線がみちるに集中する。

「えっ……僕がやったの？」

マズい！みちるは優しい奴だから自分がやったと分かっただら激しい自己嫌悪に陥るぞ！

「変な男が入り込んだんだ」

そう言ったのは、やなぎ。

「教えてうつろの事を教えないのか。いや、その方がいいかもしれない。」

「あきとはやとが追い払ったんだ。みちるは気絶してたから覚えてないんだろっ」

「そーそー！案外強くてさー」

「大した奴だったな」

俺達もやなぎの話に合わせる。すると、みちるは納得した。

「そうだったのか……。あき、大丈夫？」

あきに手を差し伸べるみちる。

「平気だ。んな事より、写真立て悪かったな」

「うっん。写真は無事みたいだし、それに」

みちるはあきを立たせると、みゆきの方を向いた。

「大切な思い出が消える訳じゃないよ」

この日、2・Eに暗黙のルールが出来た。

それは、「みちるを怒らせない事」。

〈みちる視点〉

あきとはやとを保健室に送った後、教室に戻ると綺麗に片付いていた。

「みちる君、はやと君達どうだった？」

「大丈夫みたい。はやとは「授業がサボれる」って喜んでたけど」

はやと君らしいね、と笑うつかさ。

「みちるさん」

「みゆき、大丈夫？突き飛ばされたって」

「私は大丈夫です。それより、これを」

みゆきが持っていた物、それはガラスの割れた写真立て。
中の写真は無事みたい。よかった。

「ありがとう。新しい写真立てを買わなきゃ」

「あの、その時は私も一緒にしても……？」

みゆきからの嬉しい誘い。もちろん断る訳もない。

「みゆきが選んでくれるの？」

「えっ？ええ、よろしければ」

「嬉しいなあ〜！今度、一緒に行こうね！」

「はい！」

思い出が消える訳じゃない。

もし消えても、君との新しい思い出を作ればいい。

第6話「空虚」（後書き）

どうも、銀です。

第6話御覧頂きありがとうございます！

今回はみちる、というよりうつろが主役でした！

はやと「何でこんな厄介な奴作っただんだ？」

みちるに聞いてくれ。

今回は、体育の様子です。

第7話「我が魂の一撃」

（はやと視点）

暑い。もうすぐ夏休みなのはいいが暑い。
屋上で寝ていたら干上がってしまう。

ので、冷房の効いた教室で寝るのが1番だ。お休み！。

「寝るなっ！」

パシーンッ！

後頭部をハリセンで殴られた。いてえな。

「何だよかがみ」

「だーかーらーっ！授業サボんなっ！」

「今授業じゃないからいいだろ」

「アンタそのままずっと寝てるだろ」

チツ、バレたか。

大体他クラスの奴が注意するのがおかしいと思うんだ。

「つかさと羽音からも言っっちゃってよっ！」

同じクラスの奴を駆り出すとは……。

「はやと君、授業出なきゃダメだよ」

「羽音、お前の幼馴染はいいのか？」

俺が指差す先には、教室から出ようとしている風樹が。テメー、俺を人柱にしようとしたな。

「やばっ！」

「ふー君！」

逃げた風樹を追って行く羽音。これで1人減った。

「はやと君」

んで、もう1人はつかさか。

「つかさも冷房の効いた教室で寝る事はあるよな」

「うん、でも授業にはちゃんと出ようね」

懐柔失敗か。つかさは根は真面目だからな！。

「……………分かったよ。出ます、授業受けます」

最近つかさに逆らえなくなってるのは気の所為……………だよな？

おっと、次は体育か。しかも体育館。熱がこもるから好きじゃねえんだよな。

さ、屋上に

「……………」

隣でニコニコしているつかさに、何故か威圧感が分かったよ！やればいいんだろ！

「ほら、着替えるから外出てる」
「あ、うん」

気付けば他の女子いないし。やっぱつかさは天然だな。
今日の体育はドッジボールである。

隣で女子が同じくドッジボールをやっているから男子の士気も上がる。が、どーでもいい。

さて、チーム分けだが。

「我が勝利の礎となれい！」

「あき、才雅君、頑張ろう」

「敢えて言っておく。俺がいれば百人力だ」

敵チームにあき、みちる、才雅、その他。

「俺等が勝つ！覚えておけ！」

「もし翼があつたら……あっちのチームに行きたい」

味方チームには俺、風樹……

「無理、勝てないな」

……やなぎ、その他だ。

因みに、体育はD組と合同な。

「江里香！俺の活躍を見ておけ！」

「羽音！俺が絶対勝つ！」

「頑張れーっ！」

江里香と羽音は仲良く同じチームにいるな。
ついでにつかさもか。……あ、こっち気付いた。呑気に手振ってるよ。

「……やるか」

笑顔の威圧をくらいたくねえし。
何か、今のでやる気が出た。

「風樹、もやし、行くぞ」

「おうっ!!」

「もやし言うなっ!!」

ボールが高く舞い上げられる。
ジャンプして、先に手が触れたのは……相手か。

「It's show time!!」

バコーンッ!

な、何が起こったか一瞬分からなかった。
ボールを拾った才雅が投げて、こちらの1人を当てていた。

「速え……」

「どうだ?江里香!」

「才雅君格好良い!」

こゝ、コイツ……。

「はやと！ボールよこせ！」

風樹が叫ぶが、無視した。
とりあえず才雅に当てるか。

「彼女いるからって……」

「おっ、はや」

「調子乗るなっ！！」

ズバーンッ！

「ぐはっ！？」

見事、才雅に命中した。
ダーツだけだと思ったか？

「はやと……この借りは返すぜ」

「いらん」

さっさと外野に出やがれ。

「はやと君すげーい！」

つかさからの黄色い声。……いいものだな。

バシーンッ！

そんな事を考えていた直後、女子の方でかがみが当てていた。

「……………」

調子に乗るな、という意味だろう。こっちすごい睨んでるから。

「っしやあ！俺のターンだ！」

ボールを持って出て来るのは、あきか。

「必殺、俺の必殺技！」

「うわっ！？」

ビシィッ！

あきの投げたボールは男子生徒Gに命中した。
つてか、名前だせえ。

「さあ、俺に黄色い声援が！」

シーン……………。

「……………あれ？」

虚しい奴だ。

「うりゃあっ！」

バシィッ！

「ぎゃん！？」

ポカーンとしている内に風樹に当てられてしまった。
本当に虚しい奴。

「ふー君格好良い！」

羽音の声援に風樹は手を振って答える。
周囲の男子生徒の視線がきついぞー。

「あきくーん」

女子からの呼び掛けに、当てられて地に伏していたあきが復活する。

「ふっ、遅いぜ」

「だっさーい！」

「ぐはぁっ！？」

その女子はこなただった。

こなたのキツイ一言にあきは再び沈んだ。
いいから外野行けよ。

「次は、僕だね」

「頑張ってください、みちるさん！」

「ありがとう、みゆき」

みゆきからの声援を受けるみちる。だから周囲の眼が怖いって。

だが、今の相手の戦力も気付けばみちるのみ。
みちるを潰せば俺はともかく、風樹を倒せる奴はいなくなる。

「行くよっ!」

いつものニツコリ笑顔でボールを投げるみちる。

バアンツ!

「んぎゃっ!?!」

は、速い!?!?ってか顔と動作が合っていないぞ!

「つと、そんな事よりボールは……」

みちるに気を取られてボールを見失ってしまった。
周りを見回し、探すとすぐに見つかった。

「捜し物は、これか?」

既に才雅が持っていたが。

ズバーンツ!

「うおっ!?!」

ギリギリで避けれたが、その所為で後ろにいた奴に当たってしまった。

「チツ」

そんなに俺に当てたいか、才雅。
さて、ボールは現在……

「ん？」

やなぎが持っていた。

「もやし、こっち寄越せ」

「もやし言っとなっ！そこまで言っなら俺だっつてやっつてやるよー！」

あーあ、変な抵抗心持ちやがって。

「やなぎっ！」

その時、女子の方からかがみの声が聞こえた。

「頑張んなさいっ！」

「かがみ……よしっ！」

やなぎは今のでやる気が出たらしく、前に出た。

「そこだっ！」

狙いを定め、投げる。

だが俺や才雅達の球と比べると、やや弱い。

バシィッ！

「なっ!?!」

ほ、本当に当てたよ。

「ふっ、作戦通り」

作戦?.....なるほど。

やなぎの投げた球は相手の取りにくい脚に当たっていた。つまりは戦略勝ちだな。

「御見逸れした」

「ふっ、当ぜ」

「我が魂の一撃、受けてみよっ!」

ズバーンッ!

やなぎの台詞を遮って、変な台詞と共に投げられた球がやなぎに当たった。

「っしゃあ!やなぎゲット!」

あき、空気読めよ。

もや.....やなぎが頑張って当てたんだからさあ。

「.....後で潰す」

あーあ、俺はもう知らん。

しかし厄介なのが2人戻って来たのはまずいな。

1人は俺を狙ってるし。

「風樹、ここはアレで行くぞ！」

「アレって何だ？」

この状況を打破する秘策！（20秒位前に考えた）

「はやと、討ち取ったっ！」

才雅からのボールが来る。

残念だが、アイツのボールは俺も風樹も取れないだろう。だが、この秘策ならっ！

「協力技、風樹ガード!!！」

バシンッ！

「ぶへっ!?!」

ボールは後ろで押さえ付けた風樹に当たり、宙を舞う。俺は風樹を退かすと、ボールが地に着く前に拾った。

「もし翼があつたらシュート!!！」

ズバァンッ！

いつもながらの鋭いスイングで再び才雅に命中させた。

これなら風樹はいくら当たろうとアウトにならない、俺に危険も伴わない。

「は、はやと……テメー……!!！」

「立て、次が来るぞ」

「シバくぞ！」

「分かった、悪かったって」

チツ、使えると思ったんだけど

ズバーンッ！

「よし、はやともゲットだ！」

あ、あの野郎……後で俺も潰す！

「んじゃ、後は任せた」

当てられた事ですっかりやる気を無くした俺は、外野で女子の方を見ていた。

こっちの試合は風樹が盛り上げてくれるだろう。

「おまつ、さつさと戻って来い！」

アーアー、何も聞こえないって。

女子の方もそれなりに盛り上がっているようだ。

「くらえ！私のスーパーウルトラミラクルシュート！」

このやたら長くて痛い名前は……こなただな。

しかもそれで当てれるのがすごい。

身体能力ことごとく無駄にしてるよなー、アイツ。

「でりゃあっ！」

これはかがみか。掛け声が可愛げのないというか、勇ましいというか。

「はやと、何か言った？」

「イエ、ナニモ」

……地獄耳め。

「えいつ！」

みゆきだな。みゆきも何気に運動神経いいんだよな！。

「そしてあのボールを投げる時に揺れる胸がたまらん」

いつの間にかあきが背後にいた。危ないおっさんか、お前は。

「いや、男として絶対目に留ま」

バコーン！

横から飛んで来たボールが危ないおっさんに命中した。ざまあ。

そして、これは想像通りだが、つかさは投げない。ボールを取れないからだ。

つかさには無理だろうな。

「はわわっ！」

必死に逃げるつかさ。ああいうのを見ると、応援したくなる。

そんなバカな事を考えていた所為で、油断していた。

「つかさ！前っ！」

「へ？」

ズバシッ！！

「！！！」

ボールが、しかも速い球がつかさの顔に直撃したのだ。
この事態に、男子達の動きも止まる。

「つかさ？つかさっ！」

どうやら気絶しているらしい。

気付いた時には、俺は動き出していた。

「はやと……」

「保健室に連れて行く」

何故こんなに反応したかは分からないが、つかさを抱えて保健室に向かっていた。

「今の、お姫さま抱っこだったよね？」

「白風君、速かったね」

「そういえば保健委員って誰だっけ？」

保健室に天原先生はいなかったが、つかさをベッドに寝かせてやる。

「まったく、前方不注意にも程があるだろ」

隣の椅子に座り込み、脱力。

「ま、これで授業サボれるか」

「はやと君、ダメだよ」

「んな堅い事言つなよ。つかさの付き添いなんだから……」

……ん？今の誰だ？

「わ、私の付き添い？」

いつの間にかつかさが起きていた。

「ああ。平気か？」

「うん」

ボールの後ろが赤くなっているが、笑顔を見せる。

あ、鼻血出てる。

「ぶっ、くく……」

「えっ、えっ？何？」

急に吹き出したからつかさが戸惑ってしまった。

「待ってる、今ティッシュ持って来てやるから」

「あ、うん……」

つかさも気付いたようで、恥ずかしさで顔を真っ赤にした。

「ほら、あとこれで頭冷やせ」

ティッシュ箱と冷却パックを渡す。勝手に持って来たけど、いいよな。

「は、はやと君」

「ん？」

「皆に今の……い、言わないでねっ？」

っ!？

な、何だ!？今、一瞬つかさがめっちゃくちゃ可愛かったんですけど!

「わ、分かった……」

こっちまで顔を赤くしてしまう。いや、何でか分からないが。

その後、授業が終わってかがみ達が来た。

聞いた話だと、どうやら委員決めの時に寝ていた俺は、勝手に保健委員にされていたらしい。閑話休題。

次の授業は休むと伝えてあるので、再び保健室は俺とつかさの2人だけになった。

和やかな時間が流れる。

「はやと君、ごめんね」

「気にすんな。むしろ授業がサボれるんだから感謝してるぜ」

「もっつ」

少しムツとするつかさ。あんま怖くないぞ。

「ねえ、はやと君」

「ん？」

「もうすぐ夏休みだね」

「ああ」

「でね、一緒にお祭りに行ってくれる？」

夏祭りか。あまり楽しんだ記憶はないが。

「いいぜ」

今年は楽しめそうな気がする。

こうして、波乱に満ちた夏休みが幕を開けたのだった。

第7話「我が魂の一撃」(後書き)

どうも、銀です。

第7話、御覧頂きありがとうございます。
今回はドッジボールでした。

はやと「見れば分かる」

次回からの夏休み編への1クッションな訳です。
夏、何かが起こるんでしょうかっ!?

はやと「聞くなっ! 作者だろうが!」

さて今回は夏祭りです。ドンドコドーン!

第8話「夏祭り」

（はやと視点）

夏休みが始まった。

去年だったら暑いと言ってアイス食べながらだらけて終わってたな。だが、今年は違う。今日は夏祭りだ。しかも女子からの誘いを受けている。

「いや、まあ確かに女子に誘われたよ？でもどうせいつものメンバーだろ？」

家の中でブツブツと呟く俺。

ついでに言うと、家は小さなアパートの2階の一室であり、一人暮らしだ。

「ま、楽しけりゃいいか」

深く考えるのをやめた。……小遣い足りるだろうか？

そんな事を考えていると、下からギターの音と歌い声が聞こえて来た。

「……海崎さんか」

今度こそ、あの人の演奏ちゃんと聞きたいな。

まだ待ち合わせまで時間はたっぷりある。

窓から入る心地好い風と共に小さな演奏を楽しんでいた。

現在時刻、午後4時半。
待ち合わせは5時だからそろそろ家を出るか。

「おつ、どっか行くのか？」

階段を下りると頭にバンダナを巻いた男性と会う。

この人がさっきのギターと歌声の正体であり、アパートの大家である海崎隆也だ。

「友達と祭行くんです」

「へえ。つちゅーかお前家賃払ったっけ？」

「払いましたよ」

「あー……そういやそうだな」

何処か適当なんだよな、この人。

「海崎さんは？これからデートですか？」

「そーそー……って違うわっ！バイトだバイト」

「ですよねー。相手もいませんし」

「……なんかムカつくな」

つーか大家がバイトって。

確かにアパートあんま人いないけど。

「んじゃ、これで」

「おつ。あ、待て」

「？」

「やる。小遣いだ」

海崎さんが俺に投げた物、500円玉だった。
……もうちょい欲しかったな。

「じゃあな」

「バイト頑張ってください」

海崎さんは指を鳴らすとバイクに乗って走り去って行った。
……ギターで稼がないのか？折角上手いのに。

集合場所には、男子陣が揃っていた。

「ん？つかさ達は？」

「バツカだな」

心外だな、よりによってあきにバカにされるとは。

「祭だぜ？つまりは浴衣！」

浴衣ねえ……俺には縁のなかった話だから忘れていた。
つまりはそれを着て来る、と。

「お待たせ！」

「おっ、グッドタイミングだな」

丁度よくこなた達がやって来た。
なるほど、確かに皆浴衣を着ている。

「よしっ！」

「何が「よしっ」だ」

早速かがみからツッコミが入った。

「特にみゆきさんはこう膨らみがたままない……」

ゲシッ！

「あいたっ！？」

あきがセクハラ発言をしていたら、何故かこなたに足を踏まれた。

「あっ、ごめ〜ん。全っ然気付かなかったよ〜」

「っ?」

ゴゴゴゴゴゴ

心なしか、こなたの後ろに禍々しいオーラが見えた。

「はやと君、変じゃないかな？」

横からつかさが俺に話し掛けて来た。……ああ、浴衣の事か。

改めてつかさを見る。何処か恥ずかしそうにしているのが可愛いな。浴衣も大して変じゃない。

「似合っているぞ」

「よかつた〜」

率直な感想を言うと、喜んでくれた。
開始早々いい物が見れた。

「それじゃ、行くうぜ」

「そだね」

さて、祭の始まりだぜ！

「おう、はやと」

と思つてたら聞き慣れた俺を呼ぶ声が。
声のした方を向くと……焼そば屋？

「やっと来たな。ちゅーか連れ多いな」

そこで、さっき別れたはずの海崎さんが焼そばを焼いていた。
バイトってこれかよ。

「誰？」

「ウチのアパートの大家」

「海崎隆也だ。よろしくな」

ずっと焼いていたのか、トレードマークのバンダナが汗でびしょび
しょになってた。

「ちゅー訳ではやと、買ってけ。お友達も買ってって」

「いくら？」

「500円」

予想通り高いな。

「悪いけど、来たばかりでそんな金使いたくないんだ」

「はやと、お前には小遣いくれてやっただろ？」

「……アンタ、まさか最初からっ！」

「ほれ、受け取ったなら焼そば買え」

客を脅迫するなっ！

〈こなた視点〉

結局、全員焼そばを買う羽目になった。

まあ美味しいからいいんだけど。

「はやと君の大家さんの焼そば、結構美味しいね」

「……だな」

文句言ってたはやと君もすっかり完食していた。

「おーい、こなたじゃんっ」

おや、今度は私が呼ばれた。

振り向くと、腕をぶんぶん振ってる婦警さんが。

「婦警さん……？こなたの知り合い？」

「親戚のゆい姉さんだよ」

「よろしくーっ」

軽いノリで挨拶するゆい姉さん。

因みに6月に結婚したばかりの新婚さんである。

「ハメを外しすぎないよう、お姉さん達の言う事を聞いて早めに帰りなヨー？」

……お姉さん？ひよっとしてかがみ達の事？

「皆同級生だよ」

「なんとっ」

やっぱり。

「いやーごめんごめん。体格差があったからつい、ね。おねーさんびっくりだ」

むう、それはちょっと失礼じゃないの？

「いやーそれにしても最近の子は発育いい子が多いんだネ」

『いや、だからー！こなたを基準にするなっ！私達が普通ですからっ』

そんなかがみのツッコミが聞こえた気がした。

くやなき視点

「おっ、射的じゃん」

こなたの親戚のゆいさんと話していると、あきが射的屋を見つけた。

「姉さん射的とか得意じゃない？」

「はっはっは。何を隠そう署ではガンナーゆいちゃんと言われる程の腕前よ？」

「おーっ」

へえー、それは楽しみだ。

「はい」

「あれ！？あれ？射的ってライフル？？私使うの拳銃だし」

それもそうか。でもあれだけ自信満々に言ったんじゃ、もう引けないな。

結果、ゆいさんはライフルを散々構え直した拳げ匂、同僚と思われる人に引き摺られて去って行ったのだった。

「……………気を取り直して」

気付くと、かがみが何かを見ていた。…………ぬいぐるみ？

「……………」

パン！パコーンッ！

俺が撃ったコルク弾は見事にぬいぐるみに命中した。

「ほっ」

「えっ、いいの？」
「欲しかったんだろ」

何のぬいぐるみかは知らないが、かがみは嬉しそうに受け取った。

「ありがとう、やなぎ」

少しくらい、いい格好したいし

パソコンッ！

「つかさ、獲ったぞ」

「わぁ〜、はやと君ありがとう〜」

忘れてた。はやともこういった物が得意だった。

「……………」

両者の間で火花が散る。

「いざ勝負！〜！」

大人気なく、俺とはやとは片っ端から景品を撃ちまくった。

〜あき視点〜

向こうで何かバトルが始まっているが、無視するか。

「あき君はやらないの？」

隣で的を狙っているこなたが尋ねて来た。

「無理無理」

射的はやった事ないから無理だな。

「そうだな……やるならあれがいいかな」

視線の先にある櫓。大太鼓だ。

「叩きながら何か叫びたいな。ウゾダドンドコドーン……とか」

「音撃打・火炎連打の型とか？」

「それもいいかもな」

太鼓といったらそっちか。

「こなたー、愛してるぞー！とか」

「えっ！？」

こなたが心底驚いたという顔でこっちを見た。

俺、何か変な事……！？

「今の……」

「あ、あくまで例えだ！」

「だ、だよねー」

上手く誤魔化せたが、何であんな事言っただ……？
きつと口が滑っただなんだ！いつも通り！うん！

因みに、はやととやなぎの勝負は1つ差でやなぎが勝つたらしい。

（みゆき視点）

皆さんで射的を楽しんだ後、続いてりんご飴を食べました。ですが、泉さんと天城さんの様子がおかしい気がします。何かあったんでしょうか？

「ちっ、ハズれたか」

白風さんがりんご飴のサイコロに挑戦しましたが、ハズれてしまったそうです。

「みゆきもどう？」

「ええ、では」

かがみさんに誘われて、私もやってみました。

「えいつ！」

ですが、やはりダメでした。

こついつのを当てるのは難しいですね。

「あ、当たった」

……えっ？

私の後ろで、みちるさんが見事にゾロ目を当ててました。

「みつちーすごいな」

「あはは……でも、もう一本は食べられないかなあ」

そういえば、みちるさんはあまり食べませんでしたっけ。

「みゆき、食べる？」

「いいのですか？」

「うん」

「あ、ありがとうございますっ」

みちるさんから受け取ったりんご飴。

自分で買った物よりちょっぴり甘く感じました

くつかさ視点

「」

お姉ちゃん達がりんご飴を食べている時、私とこなちゃん達はわた飴を食べていた。

わた飴ってふわふわで甘いから大好き。

「つかさ、わた飴付いてるぞ」

「え？」

はやと君に言われて、手探りで探すけど分からない。

「ここだよ」

焦れったくなつたのか、はやと君はわた飴を取ってくれて……
ぱくっ

「っ!」

……食べちゃった。

「ん?何だ?俺にもわた飴が付いてるか?」

「っ、っっん!」

はやと君は気付いてないけど、これって間接……ごによごによだよ
ね?

「……はやと」

「何だよやなぎ」

「お前も鈍感だな」

「?」

「だってそれ」

「わーわーっ!」

やなぎ君、恥ずかしいから言わないでっ!

くみちる視点

次に僕達が寄つたのは、ヨーヨー釣り屋さん。

「むむ……あっ!」

プチッ、ポチャンッ

僕のは糸がすぐ切れちゃった。

「はっっ……」

「うっっ！」

皆も、1個取れるか取れないかで終わっちゃうみたい。

「チッ、終わりが」

でもやなぎは3個も取っていた。

「すごいなあ、やなぎは」

「すごい……ねえ。アレを見てから言ってくれ」

えっ？やなぎの指差す方を向くと……

ひよい、ひよい

みゆきがすごい沢山取っていた。

「ゆきちゃん、すごい……」

「何かオーラのよんな物が……」

顔つきも、いつもと違って真剣そのもの。

この時みゆきが取ったヨーヨーの数は、なんと16個だった。

「ちょっと張り切りすぎちゃいました」

「すごいよ、みゆき！」

僕なんか1個も取れなかったのに、やっぱりみゆきはすごいなあ。

「じゃあ、1個どうぞ」

「いいの？」

「はい、さっきのりんご飴のお礼です」

今までお祭りのヨーヨーで遊んだ事がなかったから嬉しかった。

くかがみ視点

みちるはさつきからずっとみゆきからもらったヨーヨーで遊んでいた。

そんなに嬉しかったのかしら？

さて、私達は次に金魚すくいをしているのだけど……

サーッ

「お？」

サーッ

「うっ」

手を出してないのに何故逃げるっ!?!?

「かがみが凶暴だって本能で悟って逃げてるんじゃない？」

そ、そんな……。

こなたの言葉に私は酷くショックを受ける。

「あつ、ほらそこに1匹いるよ!？」

つかさの言う通り、1匹だけこっちに近付いて来た。
すかさずその金魚をそつとすくった。

「やったー!1匹捕まえたーっ!」

すぐにすくった金魚を袋の中に入れてもらった。

「……………」

感動のあまり何も言えなかった。

可愛がろう……。

この子はうんと可愛がろう……。

くはちと視点

各々祭を楽しんでいるな。

っと、もうすぐ花火の上がる時間だな。

ドンッ!

「うおっ!?!」

周囲の人々が花火の見易い場所へ移動し始めた。
これだけ多いとはぐれそうだ……。

「ひゃああっ!?!」

……へっ?つかさ?

「ヤバッ!つかさが流された!」

「えっ!?!」

チツ、あの天然が!

「お前等そこで待ってる!」

「はやとっ!」

人混みを縫って、俺はつかさを探した。

「つかさっ!」

「はやと君っ!」

何とも間抜けな呼び声が微かに聞こえた。

「……いたっ!」

つかさを見つけ出し、手を握って何とか人混みを抜けた。

「ひっく、はやとくん!」

急に流されたのが怖かったのか、ベソをかいていた。

「分かった分かった、大丈夫だからな」

頭を撫でて落ち着かせる。

よく見ると、鼻緒が切れている。これで歩き回るのは危険だな。

「待ってる、今やなぎ達を……」

……。

「……はやと君？」

「スマン、携帯忘れた」

気付けばまた2人きりだ。保健室の時といい……。

「はやと君……」

「何だ？足が痛むのか？」

「ううん、その、手……」

「手？」

あ、手え繋ぎっぱなしだった。

「悪いっ！」

「だ、ダメっ！」

慌てて離そうとするが、逆につかさが握り締めた。

「えっと……怖い、から……繋いでて」

「お、おう……」

沈黙が気まずい。何か話さなければ死んでしまいそうだ。

ヒュ〜、パアアン！

その時だった。花火が上がり沈黙を裂いてくれた。

「綺麗……」

花火がよく見える。隠れスポットだな、ここは。

「……嬉しかったよ」

花火の音がうるさくても、つかさの言ってる事ははっきりと聞こえた。

「はやと君が来てくれて、はやと君が傍にいてくれて」「つかさ……」

普段は「可愛い」イメージのあるつかさ。

だが、今は着物と花火の光の所為か「美しい」と思えた。

「青いなあ」

「「っ！！？」」「

ビツクウツ！

いい雰囲気になりかけた所を邪魔したのは、またしても海崎さんだった。

「い、い、いつの間につ！」

「ん？さつきから。今は休憩中だな」

「……………」

完全に見られた。

恥ずかしさで顔を真っ赤にする俺達。つかさなんて煙を吹きそつだ。

「ちゅーか、恋人？」

「違いますっ！」

「ふーん、へえ、そう」

ぐっ、ムカつく。

その後、海崎さんのおかげで皆と合流出来たのだが……。

「言わないでくださいよっ！絶対につ！」

「え。あ、焼そば売れ残っちゃうな」

……………財布に多大な損害をもたらした。

暫く、焼そばは食いたくない。

第8話「夏祭り」(後書き)

どうも、銀です。

第8話御覧頂きありがとうございます。

前回、はやと視点のみだったのに対し今回は全員分ありました。目まぐるしく視点が変わってすみませんでした！。

中身の方は……青いですね！。

はやと「ぶち殺すぞ」

何気に海崎さんも初登場です。

さて、次回は音信不通になります。

第9話「連絡つかない」

（あき視点）

さーて、夏休みも始まった事だし！冷房の利いた部屋でゴロゴロ過
ごすぜい！

「まずはっ！溜まっていたゲームを全てクリアするのだ！」

お菓子、飲み物の貯蓄は万全。

アッキー、これより任務に入ります！

「ギャルゲー祭・夏の陣じゃーっ！！」

いーじゃん！いーじゃん！スゲーじゃん？！

勢い良くPCの電源を入れると同時に、携帯の着信音が空気を打ち
壊すかのように鳴り響いた。

「……ったく！よくねえよ！誰だ？」

画面を見ると、そこには親友の名前が出ていた。

「みっちーじゃん？珍しいなー」

みっちー、檜山みちるからだった。

怒りも治まり、俺は電話に出た。

「もしもし、あき？」

「みつちーどうしたん？」

「実は今度家の別荘に行く事になったんだ」

これがやなぎだったら今から殴りに行く所だけど、みちるが自慢するような奴じゃない事は知っている。

「それで、皆も一緒にどうかなくて。あきは行く？」

ほら。

「行きます！行かせて貰います！」

「本当！？じゃあ皆にも連絡してくれるかな？僕はみゆきを誘って来るから」

「りょーかい！」

「あ、それと海が近いから水着も持って来てね」

「オツケー！じゃな！」

ギヤルゲー祭・夏の陣は別荘から帰って来てからにしよう。
むっふっふー！皆に連絡だー！

「えーと、まずははやくと」と

みつちーは坊っちゃんだから別荘はでかいんだろっなー！

P r r r r ……

「……………」

……………あれ？

P r r r r …… ガチャッ

「お掛けになつた電話は、電波の……」

何だよ！出ないじゃん！

はやとの奴、充電忘れてるのか？

その後、何度掛けても結果は同じだった。

（つかさ視点）

はうー、今年の夏も暑いなー。

クーラーの利いた部屋から一步も出たくなかったけど、お買い物に行かなくちゃ。

「あちっ!?!」

日向に出ていたから、サドルが熱くなっちゃってる。
帰ったら日陰に置こつ。

自転車を扱っていると風が気持ち良かったりするんだけど、やっぱり暑い。

やっとスーパーに着いて、自転車を自転車置場に止めに行く。

「あれ？はやと君？」

すると、意外にもはやと君に会った。

「はやと君もお買い物?」

はやと君は……歩き?

すごいなあ。私ならすぐにバテちゃうよ。

「よお。俺はもう終わった所だ」

「私はこれから」

あれ?何だか、いつものはやと君と違うみたい。

「はやと君、大丈夫?顔色悪いよ?」

「そうか?」

少し気分悪そうだけど、はやと君は何ともない素振りを見せた。

「水分補給ちゃんとしてる?」

「まあな。平気だろ」

「んー、それならいいけど……」

本当に大丈夫かな?

「じゃーな」

「うん、またね」

はやと君と別れた後、スーパーの中で必要な物を買った物籠に入れていく。

それにしてもはやと君、やっぱり具合悪そうだったなあ。

P r r r r ……

あつ、電話だ。

えっと……買ってもらったばかりだからまだ慣れないや。

「もしもし？」

「やほ〜」

相手はこなちゃんだった。

「こなちゃん、どうしたの？」

「今度皆でみちる君の別荘行く事になったんだけど、つかさも行く？」

別荘かあ。いいなあ〜。

「うんっ！行く行く〜！」

「お。因みに海近いらしいから水着持参ね」

「分かった〜」

へえ〜、海近いんだ。ますます羨ましいよ〜。

「ところでつかさ、はやと君の家知らない？」

「えっ？知らないけど何で？」

「いやさー、携帯繋がなくて連絡つかないんだよー」

ええっ！？でも、さっき会ったから……電池切れかな？

「はやと君見かけたら伝えといてねー」

「う、うん……」

はうー、もっと早く言ってよー。

くはやと視点

「暑い……」

まあ、夏だからな。

前回の夏祭りからやることのない俺は、毎日をだらだらと過ごしている。

何か忘れている気もするが、正直どうでもいい。

今はこの暑さを何とかしよう。

もし翼があつたら、涼めたかもなあ。

「冷凍庫の中にアイスが」

ガチャ

……ない。ってか中身がない。

「仕方ない、冷えたジュースが」

ガチャ

……やはり何もなし。

ここまで何一つないと却って清々する。

「……ははは」

って笑っていらんねえ。このクソ暑い中買い物に行かねばならんとは。

はあ……もし翼があつたら、簡単に買い物に行けたらうに。

「…自業自得、か」

確かスーパーのチラシが来てたはず。

金は何とがあるから1週間分は買い溜めしておこう。

俺は立ち上がり、着替え出した。

「おっと……」

足がふらつく。何か体もだるい……。この暑さの所為だな。

部屋の中での暑さだ。外に出ればもっと暑いことぐらい分かっていた。

「だが、暑すぎだろ……」

家から出て10分ちよいでもうバテていた。

いかん、このままでは第2のもやしになってしまう。

気力を振り絞り、何とかスーパーまで辿り着いた。

「涼しい……」

冷房の涼しさが、暑さに耐えぬいた戦士の体を癒してくれるようだ。さて、元気になった所で買い物開始だ。

レジ打ちを済ませ、荷物を袋に入れる。

思わずいっぱい買ってしまったが、これで食料に困る事はない。

「ふう……」

荷物を詰め終わり、ビニール袋を持ち上げた。

グラッ

ん？ふらつく程、荷物重かったか？やつぱり買いすぎだな。
自動ドアが開き、外の熱気が体を打つ。
うわぁ……またこの中を歩かなければならんのか。

「あれ？はやと君？」

ふと、自転車置場から俺を呼ぶ声がした。

「はやと君もお買い物？」

声の主はつかさだった。自転車か……いいよなあ。

「よお。俺はもう終わった所だ」

「私はこれから」

見りゃ分かるよ。

「はやと君、大丈夫？顔色悪いよ？」

「そうか？」

確かに少しダルいが、暑さの所為じゃなくてか？

「水分補給ちゃんとしてる？」

「まあな。平気だろ」

「んー、それならいいけど……」

心配してくれるのは素直に嬉しいけどな。

「じゃーな」

「うん、またね」

つかさと別れ、再び熱気の中を歩き出した。

何故か行きよりも帰りの方が長く感じた。

たったこれだけで疲れたのか、俺？

「買い物帰りか？」

早く帰ろうとすると、海崎さんとバッタリ会った。

「そうです」

「ちゅーか歩きか。自転車は？」

「ありませんよ。金無いから」

いつか欲しいとは思っけど。

「ふーん、じゃあな」

「はい」

「アイスご馳走さん」

……えっ!?

気付くと、アイスバー一本無くなっていた。

「いつの間に!?!」

あのクソ大家……!

「ただいま」

とりあえず家に入り、中身を冷蔵庫や冷凍庫にぶち込んだ。

「さて、麦茶でも飲むか」

買って来た麦茶に手を伸ばした。
だが、突然何故か視界が歪んだ。

「へ……?」

次に頭がぼつってなり、何も考えられない。

「……?」

ドサッ

グラリと体が倒れる。そして気を失った。

薄暗い……。

何処だここは……?

「……う夫よ、はやと」

誰だ……？

「……つてたんだよ！アンタは！」

「言いわ……て聞きた……ない！」

何なんだ、ここは！？

やめろ！頭に響く声をやめろ！

「俺は……く。ア……んかもつ……もない」

ザーッ……ザッザ……ザ……

テレビの砂嵐のような音が聞こえて来た。

そして、突然誰かの映像が頭の中に流れた。

「奇跡が起これば」

……っ！！

「奇跡が」

やめろ！そんなまやかしの言葉繰り返すな！

「奇跡」

「きせき」

「キセキ」

やめてくれ……やめろおおお！！

視界が再び、ブラックアウトした。

「ん……？」

目が覚めた。ここは……布団の上？

確か俺はふらついて……気を失ったはずだよな？
誰が布団なんか敷いたんだ？

グツグツ

それにこの音……何かを煮てるのか？

俺は体を起こし、周りを見た。

俺の部屋である事は間違いなさそうだ。

だが布団を敷いた覚えはないし、デコの上に濡れタオルを乗せた記

憶もなかった。

何より頭が上手く働かない。まだボーっとする。

「あ、起きた？」

台所から声がした。適当に返事しておくか。

「おう……」

「待ってて。今お粥持って行くからね」

お粥……？ああ、あの音は粥作ってたのか。

トタトタと足音がした。やっと声の主が見れる。

「はやと君、調子はどう？」

「つかさ……つかさっ!？」

「ひゃう!？」

漸く頭が働き出した。

俺がいきなり大声出したからつかさはビックリしたようだ。

……じゃなくて!

「何でつかさがここに!？」

「えっと……話が長くなるけどいい？」

「ああ」

頭が痛いとか、今はどうでもよかった。

「あの後こなちゃんから電話があって、はやと君にも連絡しよう」と

思ったんだけど電話が繋がなくて……」

あー、電源切ってたの忘れてた。

「そこで丁度海崎さんに会ったから、はやと君のアパートの場所教えてもらったの」

またあのひとか。

今度のバイトはあのスーパーかよ……。

「それではやと君の部屋に来て、はやと君出ないし鍵開いてたから」

「勝手に入ったのか」

「悪いと思ったけど……。でも、はやと君倒れてたから」

なるほどね。つまり夏風邪引いて倒れてた俺の看病をずっとしてくれてたと。

「ご、ごめんね？勝手に入って」

「んな事にすんなよ。むしろこっちは感謝してる。ありがとな」

まだ体は怠いけどな。

そっだ、つかさの作ってくれた粥でも食べるか。

「つかさ、粥くれ」

「あつ、はい」

笑顔で粥を差し出すつかさ。

「……食べさせてくれないのか？」
「ええっ!？」

つかさは顔を真っ赤にした。

さて、からかうのはこれくらいにしてと。

俺はつかさから粥を受け取り食べた。

「うん、美味しいな」

「ほ、本当？良かった」

冗談抜きに美味しい。ただの粥がこんなに美味しいとは……。寝て食欲があつたおかげか、すぐに完食してしまった。

「ご馳走様」

「お粗末様でした」

「んで、俺に伝える事があつたんじゃないか？」

「あつ、そうだった!みちる君の別荘に皆で行くんだけど、はやと君もどうかなくて」

みちるの別荘か。行かない理由もないだろ。

「もちろん行く。それまでに風邪を治さなきゃな」

「うん!」

そういえば、つかさはいつからここにいたんだ?随分いてもらった気がするが。

「つかさ、もう帰っていいぞ。風邪を移すかもしれないし」

大分調子も戻ったし。

「平気だよ。私あまり風邪引かないもん」

へー、俺と違って丈夫だな。

「……じゃあ、もうちょっとだけ頼めるか？」

「うん！」

頼もしい限りだ。こうしてみると、たまに引く夏風邪も悪い物じゃない。

次の日には、つかさの看病のおかげですっかり治っていた。

第9話「連絡つかない」（後書き）

どうも、銀です。

第9話御覧頂きありがとうございます。

今回ははやとが夏風邪を引いた訳ですが、僕もつかさに看病してもらいたいです。

はやと「途中の夢みたいなのは何だったんだ？」

それははやとの根幹を成す部分ですね。

まだ語るには早いです。

次回は別荘へゴー！

つかさ「感想待ってます」

第10話「いざ、別荘へ」

（はやと視点）

現在の時刻、午前7時。

埼玉駅前にて6人の男女が……。

「わりい！お待たせ！」

「遅い」

「つてやなぎ！まだ待ち合わせ時間過ぎてねえじゃん！」

……訂正。7人の男女が集まった。

「あと1分で越えるだろうが」

「ギリギリセーフ！」

早速あきとやなぎが漫才を始めた。朝からよくはしゃげるよな。見る、つかさなんて今にも寝そうだ。

「朝から元気だねー。私なんて徹夜で眠くて……ふあああ」

「アンタの場合はネトゲでしょうが」

こなたに対してはかがみが突っ込む。

この光景にも慣れたもんだ。

と、そこに現れる1台の大型車。

「皆、お待たせ」

「おはようございます、皆さん」

中からみちるとみゆきが出て来た。

この車はみちるン家の物で、先にみゆきを迎えに行ってたんだ。

「さ、乗って」

運転手の人が声を掛ける。若い男性だな。

「あ、こちらは僕の従兄のたけひこさん」

「檜山たけひこ。よろしくなっ」

「お世話になります」

「いやー、俺も付いて来ちゃって悪いね」

そう言って前に出て来たのは海崎さん。

いや、アンタも運転手として呼んだだけだから。

挨拶も済ませ、全員車に乗る。

行き先は、みちるの別荘だ。

たけひこさんの車に乗ったのはみちる、みゆき、やなぎ、こなた。
海崎さんの方にはつかさ、かがみ、あき、俺が乗った。

「ってか、海崎さん車持ってたんですね」

「まーな」

普段は外をブラブラしてるか家にいるかだったからな。

「くー……」

後ろでは、つかさはもう限界だったらしい。

「さて、ここに水性ペンがあります」
「コラッ！」

あきの悪戯はかがみによって防がれた。

「けど、本当によく寝るよな」
「誰かさんもな」

……何だよ？何で俺の方を見るんだよ？
そりゃ、今も眠いけどな。

「さて、寝るか」
「おい」「

ダブルで突っ込まれた。
もし翼があつたら、寝たまま勝手に行けるのにな。

「仕方ねえ、なんかするか」
「ここはカラオケでもするか」

車内でカラオケかよ。ってか海崎さん、俺達よりはしゃがないでください。

「えー、それはちょっと……」
「ダメか。じゃあイントロクイズは」

歳考える、運転手。

「運転に集中してください」

「チッ」

そうこうしている内に余計に眠気が……。

ん……何だ？車が止まってるな。

「着いたのか？」

「いや、パーキングエリアだ」

前から海崎さんの声がした。ああ、だから皆いないのか。

「コーヒーでも買つてく」

「お前のはここにある。ちゅーか今外に出るな」

は？どういう事だ？

とりあえず海崎さんから缶コーヒーを受け取った。

何故か海崎さんは顔を合わせようとせず、肩が震えていた。

何なんだ、気色悪い。

ガチャ

「おう、はやと。起きてたのか」

あき達が戻って来た。あと今気付いた。つかさ、起きてたのか。

「は、はやと君……」

「つかさ、言うな……ぷつくく」

「ダメ……笑っちゃう……」

何なんだよ、人の顔を見て……！

俺は車のサイドミラーを覗き込んだ。

「……………ほう」

そこに映っていたのは、額に大きく「肉」と書かれた俺の情けない顔だった。

「はやと君、ごめんね。起きたらもう……………」

つかさは何も悪くない。なのに謝るなんて、いい娘だな…………。それに比べて！

ヒュヒュッ！トスッ！トスッ！

俺は睡眠薬を塗ったダーツをあきとかがみに放った。
ふっふっふ。よく寝ている。

「はやと君？」

「止めるなつかさ。あとタオル取ってくれ」

キュポン、と水性ペンのキャップを抜く音が車内に響いた。

ふう、やっと着いたか。

みちるの別荘は、予想以上にデカく、海が間近で見れた。

「絶景かな絶景かな」

車から額に「米」と書いてある呑気な奴が出て来た。

「ちょっとはやと！これアンタでしょ！」

もう1人、額に「中」と書いてある女が激怒して降りて来た。

「お前の場合髭も追加してやろうと思ったんだがな」

「ふざけるなっ！」

仕返して何でここまで怒られなきゃいけないんだ？

「あっ！俺にもやられてる！」

今気付いたか、バカめ。

「まず顔を拭け」

俺からタオルをぶん取り、額を擦るあきとかがみ。

「つかさっ、落ちてる！？」

「うん、大丈夫だよ」

「まったく……」

だが、これで終わる訳が無い。

「そんな口を聞いていいのか？」

俺は2人に見えるように携帯を開いた。

「「げっ！」」

そう、落書きされた2人を撮ったのだ。

「これをこなたに送られたくなければ、今日1日俺の下僕になって
もらおうか!」

「き、汚いわよ!」

「何か言ったか?」

「くっ……何も言っていないわよっ!」

「まさかはやとに弱みを握られるとは……」

はっはっは!身から出た錆だ、諦める!

みちる達と合流して、改めて別荘の案内をもらった。

「まず、あつちに露天風呂があります」

「露天風呂!?!」

おいおい、旅館じゃねえのか?

「夕飯は庭でバーベキューを予定してます」

「マジかっ!」

……はっ!?!かがみの目が一瞬光ったような……。

「部屋は奥が女子、手前が男子です。説明は以上ですが、聞きたい
事があればどうぞ」

「いや、十分だろ」

それより早く荷を下ろしたい。

2泊3日の予定だから軽くないんでな。

「じゃ、また後で」

「うん、後でね〜」

昼飯は途中で食ったから、このまま着替えて海に行く事になった。

「海崎さんとたけひこさんは？」

「俺はいいや。ちょっと寝かせてもらおうよ」

ずっと運転してたからな。お疲れさまです。

「ちゅーか、女の子の水着見放題だろ？行くしかないだろっ！」

海崎さん、アンタ疲れを知らないのか？

同じ運転手でもたけひこさんとは雲泥の差だな。

さっさと水着に着替えて海に行く。

みちるん家のプライベートビーチだから人が全くいなかった。

「すげえな」

「ああ……」

俺は人混み嫌いだから良いけどな。

「ちゅーか、ナンパも出来ねーじゃん」

「すいません」

海崎さん、帰れ。みちるも謝るなよ。

しかし、ビーチに男5人がたたずむってのもシュールな光景だな。

「やほー、お待たせー」

こなたの声が聞こえた。やっと来たか。

「待ってましたー！……っと？」

恐らく、この場にいた全員がこなたの姿を見て絶句しただろう。

「スク水、だと……！？」

スクール水着。しかも6・3と書いてある。

いつから成長してないんだとか、もうツツコミ所盛り沢山だった。

「こなた……」

見る。流石のあきも引いてるじゃないか。

「グッジョブ！」

「アッキー、ナイスニーズ！」

……もうやだ、コイツ等。

他は……まともだな。良かった。

「何じろじろ見てんのよ」

赤い水着に、いつものツインテールを団子にしたかがみが突っ掛かって来た。

「誰も見てねえよ、ラーメ マン」
「なっ！」

まだあの写真は消していない。逆らわない方が身の為だぜ？

「なになに？何の話かな？」

「さあな？」

「くっ、覚えてなさいよ……！」

特にこなたには教えられないだろ。

「ちゅーか、はやとが見ていたのはモチみゆきちゃんだよな」

「アンタと一緒にするな」

みゆきは白いビキニパンツに上着を羽織っていた。

確かに他とはスタイルが違うというか……。

「みゆきさんの水着姿、是非とも写メに収めたい！」

あき、携帯を海に投げ込まれるぞ。

それに、みゆきは水着を見せたい相手がいるからな。

「みちるさん、変じゃないでしょうか？」

「うっん、可愛いよ。みゆき」

平然としていられるのはお前だけだ、鈍感。

「はやと君」

「ん？何だつかさ」

つかさはフリルの着いた水色の水着だ。らしいというか。

「泳ぎ方、教えてくれるかな？」

「ああ、いいぞ」

そついや学校じゃ水泳の授業無かったな。

「裏切り者」

「羨ましいぞ」

な、何だ？あきと海崎さんがいつの間にか結託してるし。

「やなぎには、私が教えてあげるわ」

「えー」

「えーじゃない！」

もやしはラーメ……かがみに連れて行かれた。

「アッキー、砂風呂やってー」

「いいぜ」

あきとこなたは砂風呂をするみたいだ。

……海崎さん1人になったな。

まずはバタ足。これ位は出来るだろ。

バシャバシャ

「何だ、思ったより泳げるじゃないか」

バシャバシャ……ブクブク

沈んだ!?

ちよっと待て!アイツ息継ぎしてたか!?

「おいつかさ!つかさ!!」
「げほっ、げほっ!」

つかさが口から水を吐いた。良かった、息を取り戻したか。

「大丈夫か、つかさ」
「……はやと君?」

気を失ったつかさを浜辺に連れて、寝かせたのだ。

「私……!?!」
「……ん?」
「ひ、ひゃあああ!」
「何……あっ!」

心臓マッサージを続けていたから……その、手が……胸に。
俺が慌てて手を退けると、つかさは起き上がり俺に背を向ける。
腕は胸を隠すように交差させている。

「わ、悪い!」
「う、ううん!気にして……気にして……」

流石のつかさも気にしてるよな。

俺は綺麗に土下座し、メロン味のかき氷を奢る事を約束してやっと許して貰えた。

日も暮れて、そろそろ別荘に戻る。夕食は確かバーベキューだったな。

「その前にお風呂に入りたいわ」

確かにな。という訳で風呂に入る事にした。

「へー、豪華だな」

男湯。旅館のそれと比べるとやや小さい気もするが、十分広い。

「ひゃっほー！俺が一番だー！」

「あ、走ると……」

ツルツ、ズターン！

「危ないよって、言おうとしたのに」

バカが石鹸で転んだが無視。つーか先に体を洗え。

「あゝ、極楽だ」

「そうですね」

おっさんみたいな入り方してる人もいるし。たけひこさんも合わせなくていいですよ。

洗い終わり、俺も湯に浸かる。うん、いい湯だ。

「みゆきさんってやっぱり大きいよね」

ぶっ！……こなたか。

人が風呂を楽しんでるのになんつー会話してんだ。

「……ここで、俺達ができる事は1つ！」

「まさか……」

「覗くぜ！」

あきならやると思った。

「俺はパスだ。湯を楽しめ、湯を」

「はやくに同じく」

「覗きはちよつと……」

俺、やなぎ、みちるは当然却下。

「ここで行かなきゃ男じゃねえな」

「面白そうだね」

海崎さん、たけひこさんが参加。

たけひこさんってそんなキャラだったか？

「レッツゴー！」

そっと近付き、桶を足場にして塀を越えようとする覗き組。

「すげーい！広いねー！」

向こうにはつかさもいるんだよな。

「……………」

気が付くと、近くにあった桶を足場に投げていた。

パコーン！

「くくうおっ！？」

ズデーン！

海崎さんとたけひこさんは落ちたが、あきはしぶとく塀にしがみ付いている。

「諦めて……………なるものか！」

ついにあきの頭が塀を越えた。

スパコーンッ！

「ぶへっ！？」

その瞬間、向こうから桶が飛んで来て、あきの顔に直撃した。

待ちに待った夕食！俺達は庭でバーベキューを楽しんでいた。

「……あの、俺も食いたいんですが」

隅の方で「申し訳」と書かれた札を掛けて、正座をしているあきが言った。

顔には散々こなたとかがみに殴られた跡が残っている。海崎さんとたけひこさんは平然と肉食ってるし。

「何か言った？」

「聞こえなかったよー」

こなたさん、かがみさん、笑顔が邪悪です。

「あの……もう許してあげてもいいと思います」

「あき君も反省しているみたいだし」

つかさとみゆきの慈悲の言葉が掛かる。

「……そうね。ま、今回は許してあげる」

「かたじけない！」

あきは「申し訳」プレートを外し、飛んでバーベキューの輪に入っ
た。元気な奴だ。

「枕投げをしよう」

部屋に戻ったあきが何を言うかと思ったら、枕投げ？
因みに全員浴衣に着替えている。

「はーやと、やらないか？」

「別に良いが、俺に勝てるとでも？」

「……やめようか」

大人しくなった。ざまあ。

「じゃあ……怖い話でもする？」

「ひっ！」

約1人怯えているが、俺は面白そうだと思う。

「いいね、やろうか！」

「夏の風物詩だしな」

次々と参加する中、つかさはかなり嫌そうにしている。

パチン

「ひゃっ!？」

突然電気が消え、つかさが小さな悲鳴をあげた。

「すみません、消した方が良かった……」

みゆきか。意外だったな。

いや、それより……。

「や、やめようよ」

「つかさ、諦める」

「ではまず私から」

こなたが懐中電灯で顔を下から照らし、話し出した。

この日の夜は、色んな意味で盛り上がった。

第10話「いざ、別荘へ」（後書き）

どうも、銀です。

第10話御覧頂きありがとうございます。

別荘1日目、という事で前半は車の中での出来事になりました。

はやと「」よりによってキン肉ネタかよ「

今回は別荘2日目、それぞれにフラグが……立つかもしれません。

みちる「感想、待ってます「

第11話「ひと夏の冒険」(前書き)

すた だす！前回までの3つの出来事！

1つ！はやと達がみちるの別荘に2泊3日で向かった！

2つ！海でつかさに泳ぎを教えていたはやとがラッキースケベなイベントを発生させる！

そして3つ！あきが女子風呂の覗きに失敗した！

はやと「何処のライダーだ」

第11話「ひと夏の冒険」

くつかさ視点)

夜、私は目を覚ました。

「トイレ……」

そつと扉を開け、寝呆け眼でトイレに向かった。

ジャー

ガチャ、パタン

「ふわぁぁ……」

早く部屋に戻って寝よう……。

「う……ん」

あれ？珍しく、1人で起きた。

部屋はまだ静かで、皆寝てるみたい。

寝たまま目を開けると

「ぐー……」

はやと君がいました。

「……っ!？」

悲鳴を必死に抑える私。

すごい至近距離で寝ていて、お互い少し浴衣がはだけている。

『な、何ではやと君が!？』

周りを見ると、やなぎ君達もいる。

『そっか、私が部屋を間違えたんだ!』

はやと君を起こさないように、そっと起き上がって女子の部屋に戻った。

はう………まだ心臓がドキドキしてるよ〜!

………はやと君の寝顔、少し可愛かったな………。

結局、私は部屋に戻っても眠れなかった。

くはやと視点く

みちるの別荘、2日目は朝から豪勢だった。

高そうなカップに入った紅茶やコーヒー。皿の上には種類豊富なパンの山。ジャム瓶も数多く置いてある。

「……みちる、これ朝飯だよな？」

「じゅめんね、今卵切らしてるみたいで……」

目玉焼きなんぞ今はどうでもいいんだよ！

「あつ、それともご飯の方が良かった？」

「……もういい」

みちるの噛み合わない会話に疲れ、俺は椅子に座った。
隣には、うつらうつらと眠そうにしているつかさがいた。

「おはよ、つかさ」

「おはようはや……！？」

ポッ！

「……っ！」

ぷいっ！

……そつぽを向かれてしまった。俺、何かやったか？

今朝は結局、つかさは一言も口を利いてくれなかった。

「海だー！……」

知ってる。ってか昨日来ただろ。

「こなた！今日は俺が砂風呂をやるぜ！」

「分かったー」

そのテンションの高さは何処から来るんだ。

「やなぎ、お前今日は泳がないのか？」

「……………ああ」

何処か疲れた様子のやなぎ。昨日一体何が……………？

「やなぎー！今日で泳げるようにするわよー！」

「っ！！」

手を振るかがみに対し、すっかり怯えているやなぎ。
どんだけ運動嫌いなんだ、お前は。

チツ、仕方ねえな……………。

「女の子の誘いを断るのか？へタレ君」

「……………今何て言った？」

「アルティメット・へタレ」

「んだとコラア！！！」

やなぎは何故かへタレと言われるとキレルんだよな。

「違うなら行けよ」

「上等だ！今日で50m泳げるようになってやる！」

俺の挑発にまんまと乗り、かがみの元へずんずん歩いて行くやなぎであった。

「つかさ」

つかさを見つけて、声を掛ける。

「は、はやと君……」

「どうするんだ？今日も泳ぎの練習するのか？」

「う、うん！そうだね……」

下を向いてばかりで目を合わせないつかさ。
いい加減苛立って来たな。

「俺、何かしたか？」

「ううん！そうじゃないの！」

「なら、訳を話してくれ」

「……うん」

少し怒っているのを感じたか、恐る恐るつかさは話した。

今日の朝の出来事を。

「……それで、恥ずかしくて顔を合わせられなかったの」

……何じゃそりゃ。

話が終わると俺は呆然とし、つかさは顔を真っ赤にした。いや、俺の顔も多分赤い。

「だから、はやと君は全然悪くないの！私が勝手に間違えて、その……」

軽く深呼吸する俺。

「「ごめん」、だろ？」

「あ、うん……ごめんね」

ピシッ！

「痛っ！？」

上目遣いで謝るつかさに不意打ちでデコピンする。

「これでチャラだ。さ、泳ぐぞ」

「……うん！」

何事も無かったかのように振る舞う俺に、つかさは漸くいつもの笑みを見せた。

「洞窟？」

昼飯時にみちるが出した提案に声を揃える俺達。

昼飯は女子が作った弁当。ただしメインはサンドイッチ。うん、美味い。

「うん、あつちに大きな洞窟があるんだ。あそこに入った事無いから皆で探険しよう！」

洞窟探険か……ま、一種の娯楽としてありだな。

「賛成！」

ほぼ全員が賛成した。
飯を食い終え、ジャンケンで懐中電灯を取りに行く人間を決める事にした。

「ジャン、ケン」

「ポン！」

「ちつくしょー！」

「仕方ない、行くぞ」

あきとやなぎが取りに行ってる間に、再びつかさに話し掛ける。

「心配すんなよ」

「ふえ？」

端から見ても、つかさが怯えてる事くらい分かった。

「俺がいる」

「はやと君……」

「それにかがみやその他もいるだろ」

「……うん」

あれ？何で意気消沈した？俺はそんな頼りないのか？

あきとやなぎが戻って来て、みちるの言う洞窟に向かった。

因みに、海崎さんとたけひこさんは浜辺でゆっくりしてる。

「ここです」

ビーチからかなり離れた所に、本当に洞窟があった。

中はかなり暗いな……。

1人1本ずつ懐中電灯を持ち、俺達は出発した。

さて、ここで個々の反応を見て見ようか。

「暗いな……」

やなぎ、至って普通。

「案外何か出たりなー」

あき、呑気。

「……………」

みちる、少しびびってる。

「や、やめなさいよ！そういうこと言っの……」

かがみ、警戒心強め。

「ですが、何かあるという可能性は必ずしも無いとは……………」

みゆき、オロオロ。

「財宝があったりねー」

こなた、余裕

「……………」

つかさ、赤信号。つか、手繋いでるんだが……。

「そう怖がるなよ。ただの洞窟だ」

「で、でも……」

「……そんなに俺が頼りないか？」

「うっん！そういう訳じゃ……」

必死に否定しようと首を振るつかさ。

その様子が可笑しくて、つい笑ってしまう。

「……ふふふっ」

釣られたようでつかさも笑った。

これで暫くは安し……

「……どうしたの？はやと君」

「悪い、俺やっぱ頼りないわ」

〈あき視点〉

今の状況を説明しよう。

まず、最後尾にいたはやととつかさがいなくなる。

次に、焦ったかがみと追ってやなぎがいなくなる。

仕舞いにゃ、みちるとみゆきさんまでいなくなった。

「そして、誰もいなくなった……」

「説明乙」

ま、実際は俺とこなたがいるんだけどな。

しかし、洞窟探険にはハプニングが付き物だぜ！

「だから俺は松明にしようと言ったんだ！」

「ナイフに布巻き付けて燃やすも有りだね」

「ラ ボーか」

「松明は消耗品だし」

「ドラ エ、しかも1か。でも8だと勝手に付いてるぞ」

「……やっぱあき君最高だよ」

「お前もな、こなた」

お互いにサムズアップする。こういうやり取りは他の一般人達とは出来ないからな。

だが、そんな呑気な空気もついに壊れた。

「痛っ！」

こなたがそんな声をあげて、姿を消した。

……と思っただらしゃがんでただけだ。

「大丈夫か？」

どうやら、岩で足を切っただけらしい。

「何とかね」

立とうとしても、痛みでまたしゃがんでしまっ。

「やれやれ」

俺は着ていた上着の裾を破くと、こなたの足に巻き付けた。

「止血はこれでよし」

この辺の水は海水だから洗えないしな。

「ほい」

次に、こなたに俺の懐中電灯を渡すと、背を向けてしゃがんだ。

「え……？」

「おぶつてやるよ」

「い、いいよ……」

状況が掴めてないようだったが、遠慮がちに答えた。

「怪我した女放つてのんびり歩くほど、俺は無神経じゃねえよ」

「……うん」

観念したこなたは俺の背中に身を委ねる。

「しつかり前照らしてくれよな」

「うん」

急に潮らしくなったな。

俺とこなたは先に進んだ。

「……重くない？」

「んーや。背中感触が足りないくらいで」

ボカッ！

懐中電灯で殴られた。いてえ。

「……………ありがとね」

「お、おう」

（やなぎ視点）

参ったな……。皆とはぐれてしまった。
洞窟の中だから携帯も繋がらない。

「つかさー！？何処ー！？」

すぐ傍には妹を探す姉。

「かがみ、つかさにははやとが付いてる。心配な」
「あるっ！」

……………はやと、同情するぞ。お前はかがみにまったく信用されてないらしい。

「つか……………っ！？」

突然かがみが止まり、涙目でこっちに近付いて来た。

「今っ、今……………」

「何があった！？」

「せ、背中に……」

背中？かがみの後ろには何もいない。

ピチヨーン

その時、俺の頬に水滴が落ちて来た。

「……かがみ」

「何よ……」

「ただの水滴だ」

「……へ？」

正体が分かるとかがみは呆気に取られ、途端に顔を赤くした。

……今の状況、かがみが俺に抱き付いてる。

「1」……「1」めん！」

いや待て、何故俺が謝ってた？何もしてないだろ！

「い、行きましょ！外で待ってればつかさ達もきつと来るわ！」

「だ、だな！」

それから、俺達は何も喋らず出口を目指した。

〈はやと視点〉

まさか俺の所為で皆とはぐれる事になるなんてな……。つかさなんて、俺の手を握って離さないし。

「絶対に離さないでねはやと君！」

はいはい……。

暫く歩いていると、別れ道に遭遇した。

「つかさ。こりゃどっちに進むべきだ？」

「えっと……どっちだろう？」

「だよなー」

すると、右の方から誰かが歩いて来る音がした。
身を縮こませるつかさ。

……しまった！懐中電灯とつかさの手を握ってるからダーツ投げれ
ねえ！

音はだんだん大きくなり……

「あ、はやと！」

「つかささんも無事でしたか」

足音の主はみちるとみゆきだった。

何でも、別れ道であき達とはぐれて真っ直ぐ歩いたら行き止まりだ
ったんだそうだ。

「ってことは、こっちは」

「だね」

改めて、4人で左の道を進んだ。
みちる達と合流しても、つかさは手を離さなかった。
……怖がりすぎだろ。

やがて、明かりが見えて来た。

「出口か……」

早くこんなジメジメした所からおさらばしたいぜ。

外に出ると、太陽の光が眩しかった。

小さな足場を除き、一面海だった。どうやら行き止まりらしい。

「つかさ！大丈夫！？」

かがみが駆け寄って来た。他の面子もいる。

「何であきはこなたをおぶってるんだ？」

「「ほつとけ（いてよ）」」
「……？」

何だ？一体何が……？

「いい加減つかさから離れなさいよっ！」

キーン！

「……っ！耳元で怒鳴るな！」

鼓膜が破けるかと思ったぞ！

「いつまでつかさの手を握って」

「ラーメン」

「ぐっ………！」

この一言でかがみは大人しくなる。
まだあの画像消してないんだよな！

「ほら、さっさと帰るぞ」

「あっ、待ちなさいよっ！」

くつかさ視点

その夜、女子の部屋では話をしました。
因みに男子はもう寝ちゃったみたい。

「ふっふっふ、こじはやっぱり恋話でしょ」

「こじ、恋話………」

……ちょっと、気になるかも。

「まずかがみから！最近何かあった？」

「なっ！？べっ、別にやなぎとなんて何も無いわよ！」

「ほう、やなぎ君と何かあったんだ」

「っ……！」

お姉ちゃん顔は真っ赤にしていた。

やなぎ君のことが好きなのかな？

「み、みゆき！今日どうだったの！？みちると2人きりだったんでしょー!？」

「ええ……ですが、あまり進展しませんでした……」

話を振ったお姉ちゃんと対照的に、暗くなるゆきちゃん。
ゆきちゃんは、昔からみちる君が好きなんだよね。

「つかささんは何かありましたか？」

「わっ、私！？」

その時、ふと思い浮かんだはやと君の顔。

彼の笑顔、照れた顔、怒った顔、悲しそうな顔、間近で見た寝顔。
これが、「好き」って感情なのかな……？

そして私は見逃さなかった。

こなちゃんがいつもと違う顔をして、少し頬を染めていたのを。
小さく「あき君」と呟いたのを。

第11話「ひと夏の冒険」(後書き)

どうも、銀です。

第11話御覧頂きありがとうございます。

今回で好意関係を明らかにしてみました。

徐々に進んでいく恋愛模様……まだくつつける気はありませんけど。

今回は夏休み編が終わります。

はやと「感想、待ってるぞ」

第12話「思い出に変わる」(前書き)

すた だす！前回までの3つの出来事！

1つ！寝惚けたつかさによって、またもやはやとがラッキースケベなイベントを発生させる！

2つ！洞窟探検でそれぞれがフラグを立てたりへし折ったりしていた！

そして3つ！かがみの落書き画像は未だにはやとの手元にあった！

はやと「最後までどうでもよすぎだろ」

第12話「思い出に変わる」

（はやと視点）

今日で旅行も終わりだ。

そう思うと、あっという間でもう少しいたくなる。

だからかは知らないが、珍しく朝早くに起きた。

他はまだ寝ている。俺は起こさないように外に出た。

静かな空間で、波の音だけが聞こえる。不思議な気分だ。

「あ、はやと君」

呼ばれて振り向くと、俺よりもっと珍しい奴が出て来た。

「こなた。珍しいな」

「はやと君に言われたくないよ」

それもそうか。

「この景色も見納めだ」

「そだね。でも、また来年連れて来てもらおうよ」

「……だな」

夏とは思えないくらいの涼しさ。浜も昼とは違い冷たい。

「俺さ、実はこういった旅行初めてなんだ」

「え？」

「海にはガキの頃に行ったことがあるけど、皆で何処かに泊まりに行くなんて、学校行事以外なくてさ」

海岸を見つめる俺を、こなたは不思議そうに見た。

「まあ、私もなんだけどね」

「初めてじゃないだろ？」

「まーね」

こなたは母親を亡くしている。父親と2人暮しじゃ難しいだろうな。

「でも親戚の家とかなら行くよ」

「俺は親戚の家に泊まったことはない」

これは嘘だ。ガキの頃泊まりに行ったはず。

ただ、記憶にないだけだった。

「親戚とも何年も会ってない」

「……寂しいんだね」

「慣れたさ」

その辺に落ちていた石を投げる。

石は水面を5回程跳ねて落ちた。

「それで、つかさと進展はあった？」

「そんなんじゃないよ」

何もなかった、と言えばそれも嘘だろう。
泳ぎ方を教えてやった、一緒に洞窟探険もした、変なハプニングも
あった。

けど、確信がある訳じゃないが、つかさに対する感情は恋愛じゃない
と思う。

「アイツは……妹みたいなもんだ」

「いるの？」

「いやないけど、大体そんな感じだ」

放って置けないのかな。

「……可哀想」

「何か言ったか？」

「んや、何も」

こなたの視線が若干冷たくなったような……。

「お前こそ、あきと何かあったのか？」

「……」

突然、こなたは黙った。

「攻略、する側かされる側か……」

何だ？何ブツブツ言ってんだ？

「あきのこと、好きなのか？」

「……」

顔を少し赤くし、コクリと頷くこなた。

「……やっぱりリアルとゲームは違うね」

「当たり前だ。ま、上手く行くといいな」

そう言つて、俺はこなたの頭を撫でた。

暫くして、俺とこなたは戻った。

しかし、まだ皆寝ていたので二度寝した。

「……………きる……………」

……………んあ？

「起きろ、はやと」

ああ、やなぎか。やっと起きたのか。

「よつと」

周りを見ると、俺とやなぎ以外誰もいない。
布団までたたんである。

「他の奴等は？」

「下で飯食つてる。お前、二度寝したのか？」

服装がパジャマじゃなく、普段着なことに気付いたやなぎ。

「まあな。それより飯だ」

布団をたたみ、俺とやなぎは飯を食いに行った。

「おはよう、はやと」

下に降りると、まずみちるが挨拶した。
この豪華な朝食もこれで最後か……。
よく見ると、こなたがいない。

「こなたは？」

「まだ寝てるわ」

アイツも二度寝か。

「ふあゝ、おはよゝ」

丁度良いタイミングで話の種が現れた。
うわ、髪ボサボサだな。

「まず顔洗って来いよ」

「うん、あきく……!？」

あきが声を掛けると、こなたは顔を真っ赤にして洗面所にダッシュした。

「……何だ？俺の顔に何か付いてるか？」

「まあ……アレだ、気にすんな」

よくは分からんが、女は気にすることなんだろう。

最後に、つかさの泳ぎを見ることにした。

俺が教えたんだ、それなりに泳げるようになってもらわないと。

バシャバシャ

つかさは約25mをバタ足で泳いだ。

しっかり息継ぎも出来てるな。

「はやとくくん、泳げたよー！」

こっちに手を振るつかさに、俺は小さく手を振り返してやった。

「ありがとう」

海から上がったつかさは俺にそう言った。

「……来年はクロールと平泳ぎ教えてやるよ」

「うん」

「みっちりしごいてやるからな」

「う……うん」

あ、顔引きつったな。

堪らず俺は吹き出してしまふ。

「……ふふっ」

釣られて、つかさも笑い出した。

「この海ともお別れだな」
「うん」

波の音が大きく聞こえる。やなぎ達はまだ遊んでるんだろうな。

「これで、暫くはつかさの水着も見れなくなるのか」
「はえっ!?!」

「なーんて、あきなら言いそうだが」
「う、うん……そうだね……」

つかさは今度は顔を真っ赤にする。
そろそろからかうのもやめてやるか。

俺は浜に横たわった。日の光が眩しいが、空は雲1つない。

「もし翼があつたら、この海の間こうまで飛べるんだろうな」
「あっちには何があるのかな?」

「……オーストラリアか? いや、アメリカかもな」

イメージを膨らませる。

海の上を飛んで行くと、アメリカの広大な土地……。

「ダメだ。俺、アメリカ行ったことなかった」

イメージを断念した。

隣でつかさはまた笑っている。

「あはは、私もないよ〜」

「じゃ、いつか連れて行ってやるよ」

「うん、楽しみにしてる」

また静寂が場を包みこむ。

「俺さ……こういうの、初めてだったんだ」

「え？」

「こうやって皆で旅行して、遊んで、女の子に泳ぎを教える」

こなたにも話したことだな。

「修学旅行を除けば、初めてだ」

「私も、男の子に泳ぎを教えてもらうの、初めてだったよ」

つかさが頬を染めて言った。

「それで……楽しかった？」

「とても、な」

毎年、夏休みは家でダラけて、バイトして、時々海崎さんの相手をする。

楽しい、なんて随分昔に置いて来たような感じだった。

「私も、はやと君や皆と一緒に楽しかったよ！」

柔らかい笑顔を見せるつかさ。

目を合わせるのがちょっと恥ずかしくて、視線を空に移す。

「今年の夏は、色々あったな」

夏祭りに行ったり、風邪を引いて看病してもらったり、こうして旅

行にも行った。

ん？思えば、つかさと一緒だった時が多いな。

「……今年は、つかさが一緒だったから楽しかったのかもな」

「はえっ!？」

「なーんてな」

でも、ひよっとしたら間違いないかもしれない。

「もうっ!」

「ははっ、悪かったよ」

こんな些細なやり取りも、やがて思い出に変わるんだな。

「そろそろ戻るか」

「うんっ」

数日後、自宅にて。

「写真……か」

俺が持つてる写真なんて、精々生徒手帳の顔写真程度しかなかった。

先程来たやなぎから受け取った写真。

そこに写っていたのは、今までとは違う自分。

「……アルバム、買うか」

俺は財布を持ち、雑貨店に向かった。

「白風はやと、か」

和風の家の一室。男がメモを見て呟いた。

「……興味、湧いたの……？」

「ああ、アイツの話の聞く限りな」

男の手には、木刀が握られていた。

もうすぐ、新学期が始まる。

第12話「思い出に変わる」(後書き)

どうも、銀です。

第12話、御覧頂きありがとうございます。

今回でやっと夏休みが終わりました！

はやと「おい、いつもと比べて短いぞ」

……すみません、色々と尽きましたorz

次回はあるサブキャラ達が大暴れします。ついでに、前後編に別れます。

はやと「感想、待ってるぞ」

第13話「剣士、登場 前編」

（はやと視点）

今日から新学期だ。

……正直言つてダルい。

あともう1ヶ月ぐらい休みをくれないものかね。

「ふあ〜〜……」

校門を通り、欠伸を一発。やる気？んなもん家出中だ。……俺みたいにな。

「オーツス、はやと」

隣に、俺以上に不健康そうな奴が現れた。

「あき……どした？」

「夏休み中ずっと徹夜でギャルゲやってたぜ……」

目の下に隈作りながらサムズアップするアホを、俺はただ見ていた。

「はやと、あき、おはよう！」

「まったく……お前等表情に締まりが無いぞ」

教室でやなぎ、みちると合流。

つてオイ、こいつと一緒にするな。

「夏休み明けにシャキっとしてる奴なんざいねえよ」

「確かに、ちよつと眠たいよね」

「みちる、話を合わせるな。はやとはしょっちゅうだろ」

バレたか。仕方ねえ、見張りがいない内に屋上行くか。

「おはよ〜。あれ、はやと君は？」

「とつくに逃げた」

（風樹視点）

ダルい……あーダルい……。

今年の夏休みは休んだ気がしなかった。

羽音はともかく、流音、無卵磨、久遠お姉ちゃんに追い掛け回される日々……命足りねえぞ。

「ふー君、眠そうだね」

「ああ……だから」

「「屋上行く」は無しだよ」

キビシーなあ……。

俺はそんな子に育てた覚えは無いぞ！

「あ、王牙君、明日美ちゃん、おはよ〜」

前を見ると、黒髪に赤い眼の無害そうな男子と、茶髪に茶眼の眼鏡が似合う女子がいた。

「おはよう、羽音さん、風樹」

「おはよ、羽音。風樹君も」

男子は内山王牙。女子は小田井明日美。俺達の知り合いだ。

「うーす」

「疲れてるみたいだね」

「そりゃな」

毎日追い掛け回され、抱き付かれ、襲われて……ピンピンしてる奴はおかしいぜ。

多分筋肉ムキムキで背が高く……。

「誰がハイパードチビだ!!」

「うわっ!?!」

「そんな事言つてないよ!?!」

そ、そうか。ハア……。

「王牙、羽音の気を逸らしてくれねえか?その際に屋上に逃げる」

「え?いいけど……」

王牙はどっかのトンファー野郎達と違って話が分かるぜ!

「羽音さん、妹さんは元気?」

「るーちゃん?元気だよ。でも今年受験だから……」

今だ！

俺は全速力で走った！

足には自身がある。フルスピードなら絶対追い付かれない！
俺はここいらでシエスタタイムだ！

（江里香視点）

「何だ、今の？」

「さあ……？」

今凄いスピードで風樹君が走って行ったけど……何かあるのかな？

「あ、王牙」

「羽音ちゃん、明日美ちゃん、おはよう」

すると、今度は王牙君、明日美ちゃん、羽音ちゃんが歩いてきた。

「江里香ちゃん、才雅君おはよう。……あれ？ふー君は？」

「今全速力で階段上っていったぞ」

「え〜！？屋上行ったの！？」

あ、そっか。風樹君屋上でお昼寝しに行ったんだ。

「まんまと逃げられたな」

ケラケラと笑う才雅君。笑っちゃ悪いよー。

「ふー君！授業出なきゃダメだよー！」

トテトテ、と羽音ちゃんは走って風樹君を追い掛けて行った。可愛いなあ。

「それじゃ、俺達はおつちだから」

「じゃあね」

「おう」

「またね」

王牙君と明日美ちゃんも自分のクラスに戻って行った。私達も行かないや。

「はやと視点」

「いい天気だな」

若干雲が多いが、日差しは照り鳥が飛ぶ。

「そつだな」

隣で、さつき来た風樹が適当に返事をする。

「「じゃ、お休み」」

声を揃え、俺達は夢の中にダイブした。
始業式？知らんよ。

「「ダメ〜!!!」」

下の方から間の抜けた声が2人分聞こえ、目を覚ます。

んだよ……人が折角舟を漕いでいたつてのに。

「はやと君！始業式出なきゃダメだよ！」

「ふー君も！」

下を見ると、珍しく怒っているつかさと羽音の姿が。

「俺等パスで」

「つかさ達も寝るか？」

「はやと君、私から逃げたよね？」

ギクツ！

な、何故それを……。

「ふー君、私が嫌いになっちゃったの？」

隣の奴も冷や汗が滝のように流れていた。

「……わあーつたよ！！」「」

どうしてコイツ等にだけ頭が上がんねえのやら。

俺達が降りて来ると、ニコニコ出した。

まったく……勝てない訳だ。

俺と風樹は肩を竦め、教室に連れ戻された。

体育館。始業式の校長の挨拶は長い。

あの人絶対夏休み掛けて話作ってたる！他にやる事無いのか！？

「ふああああ」

あきがデカイ欠伸をしている。こなたも眠そうだな。校長の話は始まったばかり。まだ終わる気配無し。

「……………」

俺は目を瞑り、立ったまま寝る事にした。慣れればどうという事も無いだろう。

「えー、以上で話を終わります」

丁度良い所で目が覚めた。

眠りは非常に浅かったが、1時間目くらいなら過ごせそうだな。さ、さつさと教室に戻るとしますか。

「……………」

さつきから、誰かに睨まれている感じがしていた。嫌な予感がする……………。

昼休み、いつものメンバー8人で飯を食う。

「まったく、立ったまま寝るなんてアンタ何者よ？」

「感心するな、別の意味で」

今朝の事を話したら、かがみとやなぎに突っ込まれた。何でだ。

「はやと君！是非その秘儀の伝授を！」

「頼む！」

いや、こなたにあき。頼まれてもこんなもん秘儀でも何でも無いから。

「でも、はやとはすごいよね」

「私には真似出来ません」

だからみちるとみゆき、真似しなくてもいいから。つてかみゆきが立ったまま寝ている姿が想像出来ねえ。

「はやと君？」

「ん？」

「何だか浮かない顔をしてるから、大丈夫かなって」

……確かに。

さっき感じた視線についてずっと考えていた。

あれは敵意を含んでいた。

もしかしたら、つかさ達と出会ったばかりの時みたいな事件でも起きるんじゃないかってな。

けど、心配は掛けたくない。

「いつもの事だ」

「そうよ。どうせ「眠いから午後の授業は屋上にいる」とか言うんでしょ」

「チツ、バレたか」

「な〜んだ、良かった〜」

ふう、上手く誤魔化せたな。

後は……俺には自力で解決する力は無い。

仕方無い、アイツに頼むか。

（才雅視点）

ふああ……。始業式なんてやってらんねえよ。

敢えて言うておく。校長の長話なんかより江里香との会話の方が何千倍、いや何万倍、いや何億倍……。

数えるのも面倒臭くなってきた。とにかくそれくらいマシって事だ。

なんか立って寝てる奴が2人もいやがるし。

そついやアイツ等何処か似てるよな！

「っ！」

何だ、この殺気は……？

俺に向けられた物ではないが、異様な殺気を感じた。

この学校にこれ程の殺気を放てる奴は……俺の知り合いくらいだな。

「えー、以上で話を終わります」

お、話が終わったか。

……まあ何かあれば被害者が俺の所に来るだろ。

「才雅、ほいこれ」

教室に帰るなり、赤い鉢巻きを巻いた翡翠の髪の子がドーナツを

渡して来た。

「お、サンキュー……って依頼か？」

「んーや、バイト先で貰ったから才雅にあげるよ」

この女子、霞章奈は俺にいつも菓子をくれる良い奴だ。

底抜けに明るく、このクラス内じゃ章奈を女子扱いしている男子は少ないんじゃないか？

「へえ、頂くぜ」

もぐもぐ……うん、美味しい。

「あ、それ賞味期限とっくに切れてたんだ」

ぶっ！？な、何い！？

「なんてね」

舌をペロツと出して笑う章奈。

口じゃコイツに勝った記憶が無いな……。

「ねえ……ドーナツより、ボクを食べない？」

急に艶やかな声を出し、後ろから抱き付いてくる。

コイツ、格好はボーイッシュな癖に胸は江里香並にデカいんだよな。

「ボクの賞味期限はまだまだ先だよ？」

「おまつ、学校でそっいう発言すなっ！」

話を聞いていた男子数人が鼻血を噴いてるじゃないか！

「なんてね」

すぐに前に回り込み、章奈はまた下を出して笑っていた。
こ、コイツ……！

「あんまり本気にしてると、お叱り受けちゃうよ？」

「へ？」

ゾクッ！

後ろから冷たい殺気を感じた。

俺はギツギツギツと錆びた機械のように首を回す。

「才雅君？随分ト楽シソウダネ？」

そこにいたのは、予想通り殺気を纏った江里香だった。

その後、昼飯までの間食が全て没収されたとだけ追記しておこう。

昼休み。

屋上で漸く飯に有り付き、教室に帰ってくると

「才雅、依頼だ」

いきなりはやとが話し掛けて来た。

「……つまり、その熱烈な視線を送っていた奴を見つけ出して欲しい、と」
「ああ」

珍しくはやとが依頼して来たと思っただら……。なるほど、謎は全て解けた！

「ヤダね。テメエで何とかしろ」
「なっ!?!」

「1つ、お前はそれに見合った報酬をどう考えても持っていないから」

何故だ、と言う前に答えておいた。

自分の食料に困ってる奴が他の奴に支払えるような余裕がある訳が無い。

「2つ、心配しなくてもお前以外の他人に影響は出ない」
「……は?」

俺は既に殺気の主が分かっていた。
アイツならはたと以外をどうこうする気は無いだらう。

「何故そう言い切れる。相手が誰か知ってるんだな!?!」
「報酬の払えん奴に教えてやるのはここまでだ」
「チッ……」

はやとは観念したようで自分の席に戻っていった。

「才雅君?」
「いいじゃねえか、面白そうだな」

（王牙視点）

下校時間になった。

今日も何事も無かった。2学期初日から何かあっても困るんだけどね。

「王牙、帰る」

「うん」

明日美も図書委員の集まりは昼休み中に終わらせていた。

さて、このまま「アヴァンティ」でゆっくりしようかな。

「あれ、灯伊奈？」

明日美が前にいる小さな女の子を見つけた。

「……明日美、王牙……」

赤い髪に同じく赤いツリ目の少女、北岡灯伊奈。こう見えても俺達と同一年でクラスメートだ。

「灯伊奈さん、どうかしたの？」

「珍しいね、灯伊奈が1人なんて」

灯伊奈さんには保護者とも呼べる人物がいる。

いつも灯伊奈さんがくつついて行動しているみたいだけど。

今日も2人一緒に教室を出たはずだった。

「……………用事があるって……………」

用事か。何か争いごとでも……………？

何だ、この嫌な予感は。

「灯伊奈さん、その用事を教えてくれないかい？」

くはやと視点く

つたく、才雅め……………。

けどつかさや他の奴に影響が無い事が分かって安心した。

「それなら、何で俺を狙うんだ？別に人に恨まれるような事なんか……………」

等と考えてながら下駄箱へ向かう。

「ん？」

下駄箱に着くと、ウチのクラスの所に寄り掛かっている男がいた。

夕日が照る黒い髪に鋭い紫の眼。腰に差した木刀。

そして、今朝感じた殺気。

「白風、はやとだな」

こちらを見て、ゆっくりと尋ねて来た。

「ああ、だったらなんだよ」

「お前に興味がある。俺と……勝負しろ」

な、何いきなり訳分かんねえ事言ってるんだ!?

「まず、お前は誰だ!？」

「失敬。俺の名は……」

ソイツは木刀を手に取り、逆手に構えた。

「影山界坐だ。理解出来たか？」

第13話「剣士、登場 前編」(後書き)

どうも、銀です。

第13話、御覧頂きありがとうございます。

今回は新キャラが続々と登場しました！

僕等のロリコ……剣士も漸く登場。

次回はバトルメインになります！

はやと「感想、待ってるぞ」

第14話「剣士、登場 後編」(前書き)

すた だす！前回までの3つの出来事！

1つ！新学期早々はやとと風樹がサボろうとする！

2つ！はやとは立ちながら眠るという特技を持っていた！

そして3つ！影山界坐と名乗る男がはやとを狙っていた！

界坐「理解出来たか？」

第14話「剣士、登場 後編」

（はやと視点）

いきなり俺の前に現れた男は、木刀を逆手に構え、いきなり襲ってきた。

あれ？これなんてデジャヴ？

「どうした？反撃しないのか？」

避けてばかりいる俺に苛立っているらしい。つてか、避けるだけで精一杯だったの！

「チツ、誰だか知らねえが！」

このままやられっぱなしも癪だ。俺は麻酔薬のダーツを投げた。

「ハアツ！」

カアン！

「何い！？」

コイツ、一太刀で全部弾きやがった！？

「終わりか？」

クソッ！ここは一旦逃げるしかねえ！

俺は、今度は奴の足元と頭目がけてダーツを投げた。

「無駄だ！」

奴は目の前のダーツを斬り落とし、足元のは後ろへ飛び避けた。

だが、これが俺の狙いだ。

「……チッ」

奴の集中力を一瞬俺から外し、その隙に全力で逃げた。

後でダーツ回収しとかなきゃな。

〈あき視点〉

は、始業式も終わったし、アニメイトにでも寄ってくか。

「こーなた メイト行こうぜ」

俺はオタク仲間のこなたに話し掛ける。

「ごめ、今日バイトなんだ」

「ちえ」

しかし断られてしまった！

バイトなら仕方ないか……。

「じゃ、こなたのバイト先に顔でも出すか」
「うんうん、それならいいよ」

後ろでリボンが苦笑、更にモヤシとツインテがやれやれという顔を
しているが知らんがな！

因みにみっちーとみゆきさんは既に帰った。

「あれ、はやと？」

ふと言ったかがみの視線を辿ると、言葉通りはやとが走っていた。
いや、ありゃ何かから逃げてるな。借金取りか？

「……………アイツはっ!?!?」

「あき、知ってるの?」

その後ろからは、借金取りとは比べ物にならない程厄介な奴が追っ
ていた。

〈王牙視点〉

「才雅!」

俺は江里香さんと帰ろうとしていた才雅を捕まえた。

「ん?どした?」

「今、界坐が誰かを追い掛けているらしいけど」

「へ、へえ。でもアイツなら平気だ」

「相手は完全に平気じゃないと思うよ」

才雅の視線が泳いでいた。
やっぱり才雅が何か吹き込んだんだ。

「さつき灯伊奈さんに会ったんだ」

「アイツか！……あ」

「何か知ってるね？詳しく説明、してくれるかな？」

俺、明日美、江里香は才雅の説明を聞いた。
何故界坐が一般生徒を追い掛けているのか。

「はあ……界坐らしいというか」

「才雅君の説明の仕方が悪いよ〜！」

「白風君も可哀想に……」

3人の視線が才雅に突き刺さる。

「わ、わあつたよ！止めりゃいいんだろ！」

「当たり前だよ。じゃ、俺達はこっちを探す」

俺は明日美を連れて元の道に戻っていった。

くはやと視点

あーもう！しつこいな！

後ろからはまだ界坐が追い掛けてきている。

時々ダーツで応戦しているが、やはり全て弾かれてしまう。

「逃げてばかりでは俺に勝てないぞ！」

別に勝ちたいわけじゃねえっての！

何とか撒こうとしてもアイツも速い上にだだっ広い校庭じゃ意味が無い。

「貴様、本当に……？」

ズドオオオオン！！

奴が何か言おうとした瞬間、地響きと砂煙が俺と奴の間で起こった。

「こ、今度は何だ！？」

砂煙の中では界坐の木刀を西洋の剣で押さえている男がいた。

「君、大丈夫！？」

別の方から眼鏡をかけた茶髪の子が俺に駆け寄ってくる。

「あ、ああ……でもアレは？」

「彼は内山王牙。私は小田井明日美。君の味方だよ」

「何の真似だ！王牙！」

「まずは落ち着くんだ界坐！」

王牙に明日美……？

そっぴやコイツは見た事あったな。図書委員だっけ。しかもやたら人気の。

「あ、俺は白風はやと」

「うん、よろしくね」

……なるほど、人気な訳だ。

「チツ」

界坐は一旦王牙から離れる。

「なあ、王牙が持つてるのって……」

「コレ？レプリカで本物の刃物じゃないから安心してよ」

あ、なんだ。ビックリさせんなよ。

「はやと君！」

「はやと！」

今度は聞いた事のある声が聞こえた。

あき、やなぎ、つかさ、こなた、かがみだ。

「何だ、いつものメンバー（-2）か」

「何よその言い方！」

いつも通りかがみが突っ掛かってきた。

しかし、いつも通りじゃない奴もいた。

「影山界坐……」

「天城あきか。久しいな」

コイツ等知り合いだったのか？

つてか、あきはシリアス似合わねえな

「俺は昔、コイツの家の剣道場にいたんだ」

そっぴゃあきは小学生の時に色んな格闘技をやらされた、と言っただな。

つてか界坐の家、剣道場だったのか!?

「腕は……同年代じゃ確かな方だったが、俺に勝てずに1年で辞めた」

「そりゃ1年毎でコロコロ変えられたからな」

「あれ以来腕は変わって無さそうだな。貴様に興味は無い」

「こつちだつてねえよ!」

いつの間にかあきと界坐の口論に。

もしかして、界坐ってバトルマニアか?

「今は、白風はやと。お前に興味がある……いや、あった」

界坐はやつと木刀をしまい、構えを解いた。

「聞いた話と大きく違うらしい。期待外れの弱さだ」

悪かったな。期待外れで。

それで、俺をそんな風に言う奴といえは……。

「何だ?もう終わったのか?」

コイツだ。

「才雅！話が違つぞ！」

「そうか？」

「一体何を吹き込みやがったんだ？」

「実は……」

口論している2人を尻目に王牙が説明してくれた。

……回想開始……

夏休み前、喫茶店「アヴァンティ」にて。

「そついやな、知り合いに面白い奴がいてな」

「面白い？」

「風樹と似た感じの奴なんだけどさ」

「風樹と……ソイツ、強いのか？」

「中々根性が……え？あ、ああ、まあ強いな」

「お前が認める程の奴がまだ学園にいたとはな。是非とも力を見た
い」

「あ……そうそう！不良のリーダーをつまり手先で倒す程だ！」

「そこまでの実力者か！？何故今まで気付かなかつたんだ！で、名
前は？」

「ソイツは……」

……回想終了……

「白風はやと。だが実際はダーツを使うだけの平凡な男じゃないか！」

「間違つてないだろ」

色々間違つてるわ！っーかわざとそんな言い方したろ！？

「俺より強いなんて言つてないだろ」

「ならば今ここで貴様と決着を付けてやる！」

「ああ！？やれるもんならやってみろ！」

何で喧嘩してんだよお前等！

被害者の俺の立場は！？

「2人共、うるさいよ？」

1つの低い声で俺達は止まった。

「これ以上話をかき乱すようなら、俺が相手してもいいけど？ねえ、才雅、界坐？」

黒と金が入り交じったようなオーラを纏った王牙の威圧感で、俺達は何も言えなくなっていた。

「はやと君、悪かったね」

「い、いや……別にいいぞ！」

王牙はすぐにオーラを引っ込めたが、俺はただ立ってるしか無かった。

何で俺がこんな目に……。

その後、「アヴァンティ」で改めて俺達は自己紹介をした。

「影山界坐だ」

「……北岡灯伊奈……」

「俺は内山王牙」

「小田井明日美です」

1人増えてるし。

騒動の後に界坐に駆け寄ってきたが、まさかこれで同い年とは……ありえるな。すぐ近くに同類がいるし。

「……友達になれそう……」

「そだね！貧乳はステータスだよ！」

また言ってるよ。

ってか、界坐の彼女って事はもしかしてロリコ

「界坐、お前にそんな趣味がばっ!？」

その瞬間、一筋の風と共にバカが床に伏していた。

「次に口を開いたら殺す。理解出来たか？」

まあいつもの事だから無視するか。

その帰り道。

こなたはバイト、あきはそのバイト先に客として行く為別れた。

界坐や王牙達も帰った。才雅はまだ依頼があるらしいが。

「酷い目にあっただぜ」

「でも怪我がなくてよかつたよ」

「アンタも災難ね。ま、日頃の行いの所為でしょ」

つかさは良い奴だな。

凶悪な姉とは本当大違いだ。

「そういえば、学園祭の出し物は決まったのか？」

「へ？」

やなぎの問い掛けに疑問符を浮かべる。

そんな話し合いしたっけ？

「朝礼の後にしたよ」。まだ何も決まっていけど

「そうなのか？」

「そうなのか？って、アンタまさか……」

はいそうです。朝礼後、机に突っ伏してましたよ？

「明日どうせ決めるんだからいいだろ？」

「はあ……」

こうして新しい知り合いが増えて、騒がしく新学期が始まった。

俺の日常は既に大きく変化しつつ、俺自身も慣れてきていた。

けど、忘れてはいけない現実もあった。

第14話「剣士、登場 後編」(後書き)

どうも、銀です。

第14話、御覧頂きありがとうございます。

今回はロリコ……界坐が大暴れ！これで暫くバトルから離れられます(笑)

次回からは桜籐祭編です！ここから物語が動き出します！

界坐「感想、待ってます」

サブキャラ紹介

名前：三原才雅（みはらさいが）

性別：男

誕生日：6月18日

血液型：B型

容姿：ライトグレーの髪に紫色の眼

身長：164cm

体重：53kg

部活：帰宅部

口癖：「敢えて言っておく」

イメージCV：鳥海浩輔

2-E所属。はやと達のクラスメイト。上城江里香という彼女がいる。

性格は軽く、はやと達をからかいつつも協力している。

小学校3〜6年頃、アメリカに居たため英語ペラペラ。（だから、自分に都合が悪い時は英語で誤魔化す）

いつも何か食ってる。よく誰かの家に遊び（食べ物漁り）に来る。誰かに餌付けされる事が多い。

授業中も何か食っていて、先生の話をまるで聞いていないが何故か成績はいい。

それだけ食っておきながら、まったく太らない。むしろ身軽。

彼女がいるのにギャルゲー好き。私生活は江里香に任せっきり。それでも文句を言わない江里香はいい彼女だと思う。

両親は船旅中、船が沈没して死亡。内心頼れるのは江里香だけなので彼女を本当は大事に思っている。

実はトンファー使い。普段持っているカバンの中に入っている。

名前：上城江里香（かみじょうえりか）

性別：女

誕生日：8月10日

血液型：B型

容姿：水色の長髪と眼

身長：160cm

体重：??kg

部活：帰宅部

口癖：無し（才雅のを真似して使う時もある）

胸ランク：大

イメージCV：名塚佳織

2-E所属。三原才雅の彼女。性格は大人しく、かなり包容力豊か。私生活がだらしない才雅の面倒を見ている。才雅の家に半ば同棲状態で訪れ、朝帰りしたり泊まったりする事もある。

因みに両親公認。結構美人なのでたまに町で声を掛けられる。（その度才雅が睨んで追い返す）

基本才雅に文句は言わないが、度が過ぎたり他の女性にちよっかい出したりすると静かに怒る。（メチャクチャ怖いとは才雅談）

才雅の財布の紐も握っているので強く出る事も。でも何だかんだで才雅の事は好き。

才雅の影響か、可愛い子を見るとコスプレさせたくなくなる。そして暴走する。衣裳は手作りらしい。

武器はフライパン。お仕置き方法として、よく逆さ吊りにする。

爬虫類が好きで、ペットにトカゲの「ギゴちゃん」を飼っている。

名前：影山界坐（かげやまかいざ）

性別：男

誕生日：12月4日

血液型：A型

容姿：黒髪に紫色の眼

身長：170cm

体重：59kg

部活：帰宅部

口癖：「理解出来たか？」

イメージCV：福山潤

2 - A所属。才雅達の知り合い。北岡灯伊奈という彼女がいる。

性格は常に冷静。才雅に少々対抗心があり、色々な面では互角。

運動神経抜群で、いろいろな部活で「助っ人部員」として活動している。だが、基本部活に入っていない。理由は灯伊奈の面倒を見る為、因みに灯伊奈は居候している。

バイクに興味があり、サイドカーを持っている。暇さえあれば洗車している。また、最近西部劇にも興味が湧いたらしい。

ロリコン疑惑があるが、本人は強く否定している。

木刀の使い手。逆手持ち。

家が道場をやっている、そこそこ広く裏には滝もある。門下生からはかなり人気がある。

名前：北岡灯伊奈（きたおかひいな）

性別：女

誕生日：10月23日

血液型：AB型

容姿：朱色のクセの強いセミロングと瞳

身長：151cm
体重：??kg
部活：帰宅部
口癖：なし
胸ランク：極小

イメージCV：高橋美佳子

2-A所属。影山界坐の彼女。界坐の家に居候している。

性格は物静かだが気が強い。界坐にのみ懐いている。油揚げと牛乳が好物。雷が苦手。

同じクラスの江里香に可愛がられているが、突っぱねた態度を取る。（主に照れ隠しで）よく物騒な事を言う。

良く言えばスレンダーな体型。本人にはコンプレックスでみゆきを敵視。でもこなたには勝っている。

運動が出来る分頭は悪い。テストシーズンは界坐に教えてもらっている。

名前：原田風樹（はらだふうじゅ）

性別：男

誕生日：3月8日

血液型：B型

容姿：カーキ色の髪と眼、シヨタ

身長：157cm

体重：49kg

部活：帰宅部

口癖：「覚えておけ！」

イメージCV：皆川純子

2-E所属。才雅とはやとの悪友。羽音とは幼なじみ。背が（特に羽音より）小さいのを気にしている。羽音の家とは隣同士。

性格は子供っぽい面があるが成績はいい方。シヨタキャラ。屋上で昼寝するのが趣味。つまりサボリ。バイクを持っている。

昔は喧嘩に明け暮れ、「暴風小僧」の名前で呼ばれていた。荒れた理由は家族間のトラブル。今は仲は回復している。

羽音、流音、無卵磨、久遠から好意を寄せられ、当人がヘタレな所為もあつて五角関係になっている。実は、ある意味一番主人公的な存在。

戦闘手段は素手か鉄パイプを使用。腕時計で10秒計り、カウント内で敵を倒すやり方を好む。

名前：北条羽音（ほうじょうついでん）

性別：女

誕生日：4月14日

血液型：A型

容姿：薄緑色の瞳と髪をポニーテールにしている

身長：158cm

体重：??kg

部活：帰宅部

口癖：なし

胸ランク：中

イメージCV：戸松遥

2-E所属。風樹とは幼なじみ。「ふー君」という仇名で呼んでいる。やや天然。

可愛いものが大好き。部屋には大量のぬいぐるみがある。お気に入りは仔竜のぬいぐるみ。
妹がいる。風樹の家とは隣同士。江里香達の他に、つかさと仲がよい。
風樹をめぐって五角関係にあるが、羽音はまったく気にしてない（気付いてない）。

名前：内山王牙（うちやまおうが）

性別：男

誕生日：11月20日

血液型：O型

容姿：黒髪、赤眼

身長：173cm

体重：62kg

部活：帰宅部

口癖：「完全に〜」

イメージCV：宮野真守

2-A所属。学級委員長。至って真面目で温厚。キレるとものすごく怖い。たまに毒舌を吐き、腹黒と噂されている。（真相不明）
明日美とは恋人同士。才雅、界坐、風樹の友人。騒動にはあまり関わらない。そのためか、影が薄いと言われる。
明日美以外の人間をまったく信じる事が出来ない。本人にとってはトラウマであり、コンプレックスでもある。
何故か剣レブリカを持っている。しかもそれで戦う。

名前：小田井明日美（おだいあすみ）

性別：女

誕生日：9月1日

血液型：O型

容姿：茶髪、茶眼。眼鏡

身長：162cm

体重：??kg

部活：帰宅部

口癖：なし

胸ランク：巨

イメージCV：新谷良子

2-A所属。しっかり者だがたまにドジをする。

学年トップクラスの秀才。図書委員。王牙の恋人。意外にも小動物（特にビーバー）が好き。

江里香、灯伊奈、羽音の友達。灯伊奈からしばしば睨まれる。理由は最早言うまい。

最近、腐女子＋M化して来たらしい。（本人否定）

こなたに新たなる歩く萌え要素（眼鏡＋巨乳＋どじっ娘）として目を付けられている。

名前：霞章奈（かすみしょうな）

性別：女

誕生日：6月27日

血液型：B型

容姿：翡翠色のクセのある髪をショートカットにしている大きな深緑の垂れ目。見かけは男の子っぽい

身長：145cm

体重：??kg

部活：帰宅部

口癖：「なんてね」
胸ランク：大

イメージCV：広橋涼

2-E所属。スカートを短くしていて、いつも頭に赤いハチマキをしている。

男の子っぽい見かけの才雅のクラスメイトで、才雅に授業中面白がってお菓子をくれる。

おおらかな性格で男女問わず明るく接する。常に余裕の態度をとっている。人を（主に男）からかうのが好きでからかった後に「なんてね」と舌を出す。一人称は「ボク」で女らしさがほぼ皆無である。

軽く天然で勉強は平均レベルでスポーツは万能。胸が大きいのが悩み。口喧嘩は負け無し。好きな物はバナナとソーセイジ。才雅（と江里香）をからかって楽しんでいる。が、実は……。

名前：北条流音（ほつじょうるいん）

性別：女

誕生日：1月17日

血液型：A型

容姿：薄緑色の瞳とセミロングヘア

身長：154cm

体重：???kg

部活：帰宅部

口癖：なし

イメージCV：堀江由衣

北条羽音の2つ下の妹。髪の毛の長さ以外は羽音そっくり。姉よりはしっかりしているが、やはり何処か抜けている。愛称は「るーちゃん」。

羽音と風樹に懐いている。姉や風樹をバカにされると本気で怒る。無卵磨や久遠とも仲が良い。

風樹をめぐって五角関係にある。流音は多少ブラコン気味でもある。

名前：赤来・メルア・無卵磨（せきらい・メルア・むうま）

性別：女

誕生日：2月23日

血液型：A B型

容姿：クリーム色の長髪に黄金色の眼、左目に眼帯をしている

身長：134cm

体重：??kg

部活：帰宅部

口癖：「むう……」

胸ランク：無

イメージCV：川澄綾子

16歳。陵桜学園に通っているはやと達のクラスメイト。

髪は長く、大きな三つ編みにして垂らしている。ハムスターの耳のようなくせ毛がある。左目を失明していて眼帯をしている。日本人とイタリア人のハーフ。

性格は冷静で少し子供っぽい。困ったり怒ったりすると「むう……」と小さく呟く。本格的に怒ると涙目で相手の指を噛む。何故かいつもピコピコハンマーを携帯している

羽音達と仲がいい。好物はアーモンドとチーズで、羽音に餌付けされている。

風樹をめぐって五角関係になる。無卵磨は風樹を「下僕」にしたが

っている。

風樹に対してのみツンデレ。

名前：穴戸久遠（ししどくおん）

性別：女

誕生日：12月6日

血液型：A型

容姿：黄緑色の長い髪に、茶色の目。髪は青いリボンで縛っており、時折、オレンジ色のスカーフを頭に巻いている。

身長：165cm

体重：??kg

口癖：なし

胸ランク：中

イメージCV：井上喜久子

23歳（外見18歳に見える）。一人称は私。右利き。

喫茶店『アヴァンティ』を営む女性。重度のシヨタコン。

見た目は美人で、見た目と同じく口調もそれ相応。性格はおっとりしており、誰に対しても優しく接する。その結果、老若男女問わず、常連がいる。また、不良たちの間では、「アヴァンティ」に入る際には、ちゃんと服装を整えて入れ、という暗黙の了解がなされているらしい。

また、『アヴァンティ』は表向きは喫茶店ではあるが、一般的な食事もできるレストランでもある。

風樹をめぐって五角関係になる。久遠は「シヨタ萌え」であり、風樹を「ふー君」と呼んでいる。

第15話「まずは話し合い」

（はやと視点）

今思った。桜籐祭、つまり学園祭とは何だろうか。

「祭」と入ってるのだから学園全体でワイワイはしゃぐ物だろうか。だとすれば、人ゴミが嫌いな俺にとっては面白い物ではないだろう。

「ってな訳で俺はお役立ち度0なので屋上」

「ちよつと待てや！」

正論を言ったはずが何故かあきに止められた。

「確かにお前は役に立たない」

はつきり言ってるじゃねえよ。

「だがお前は勘違いしている。学園祭、それは結束なのだ！」

結束、ねえ……。

「クラスの誰かが欠ければ、それは完成しない！例えお前であつても！」

「ほう」

「参加する事に意義があるという奴がいるが、それだけじゃない！

皆で団結して1つの事を全力でやる事こそ意義があるんだ！」

イイハナシダナー。

「じゃあお前がクラス委員になってくれるんだな」

「だが断る！」

オイふざけんなテメエ。

「結束なんだろ？お互い出来ない事をやろうぜ？」

「お前はやらないだけだろうが！」

「お前だって一緒だろ？」

「人間って譲り合いが大事だと思うんだ」

「話変わってるぞ。それに俺が既にお前に譲っている」

「そして俺はお前に盥回しに」

「すんなバカ」

これじゃあ埒が明かない。

現在俺達のクラスでは、桜籐祭についての話し合いの真っ最中だった。

まずはクラス委員を男女2人ずつ出すというのだが……。

「あき、お前が適任だ」

「決まる瞬間まで寝てた奴が何言ってるんだ！」

そう、こんな面倒な役をやりたがる奴などいない。

そこで、黒井先生が寝ていた俺に目を着け、勝手に決定しようとした。

だが直前で目覚めた俺は勿論拒否。代わりにあきを勧めた結果、今

のような状況に。

「ああ、ところで女子は誰がやるんだ？相手次第じゃお前の役得じやないか？」

「む……」

普段からイベントがどうのこうの言ってる奴だ。このチャンスを逃すはずは……。

「むにやむにや……」

…ん？明らかに俺のではない寝息が。

「先生、つかさが寝てます」

「じゃ、女子の方は柙に決定な」

「ふああ……ふえ？」

オイオイオイ！？何でアイツまで寝てるんだよ！？

普段俺に寝るなって言ってるんだろ！

「つかさかあ……ここは保護者のはやとが適任じゃないか？」

勝手に保護者にするな。

だがコイツ等の組み合わせじゃ不安なものも確か。
だが面倒だ……。

「ここで委員になれば、クラスの出し物はサボれるぞ？」

「どっちにしろ仕事すんじゃないか？」

「当日にや仕事はほぼ無しだって聞いたぜ？実行委員じゃないから

普段の仕事も少ないぜ?」

む……。そう考えると一種の回避策であると考えられるな。

「……仕方無い、俺の負けだ」

こうして、黒板に俺とつかさの名前が書かれた。

これでこの後の会議に参加しなくてもいいんだな?

「ほな、クラス委員2名。司会進行よろしゅうな」

何……だと……?

俺は慌ててあきの顔を睨んだ。

「計画通り」

よし、アイツ後で殺す。

渋々、俺は未だに状況が把握出来ない寝呆け娘を連れて黒板の前に立つ。

「で、出し物は何がいいんだ?」

決めるべき事項はクラス委員だけではない。
クラスでやる出し物もだ。

シーン……。

アレか、静寂という名の暴力って奴か。

「ハイ！」

しかし、ここで手を挙げる猛者が1人。さつき席に戻った学級委員のみゆきだ。

「流石みゆきだ。何がしたい？」

きつと楽しい出し物を用意してくれるんだろうな。

「桐箆笥の歴史と作り方なんてどうでしょう？」

一瞬、教室内の時が止まった。
き、桐箆笥……？ネタか何かなのか？

「？」

いや、ガチだ。

あの無垢な笑顔は間違いなく桐箆笥でウケると思ってやがる！

「……………」

俺は苦笑いしながら黒板に項目を書く。

一文字一文字を書く程、周囲に緊張が走る。

そして、俺はトドメの一言を放った。

「他に案が無いなら、これになるけど？」

今、教室内の空気が変わる……！

「じゃ、多数決の結果演劇で決定な」

黒板には演劇と桐箆笥の歴史と作り方の2つしか書かれておらず、圧倒的多数によって演劇に決定した。

「残念です……」

いや、アンタはよく頑張ったよ。

やる気に欠けていたこのクラスを、案1つで纏めたんだからな。

「んで、演目は？」

演劇といえばまず演目だろ。

ま、俺は何もしないがな！

「じゃあナウ カ！」

「消失だろ！」

「デイ ニーの何か！」

「おいやめろ、消されるぞ」

やはり割れるか……。

こりゃ多数決取っても無駄だな。

「つかさ、何かいい案あるか？」

ここまで横に突っ立ってるだけのつかさに話を振ってみた。

「えーと……昔話は？桃太郎とか？」

しかし効果はないようだ……。
仕方ない、最終手段だ。

バンツ！！

「注目しろオラア！！」

黒板を打つ叩き、ガヤガヤと騒ぐ連中を黙らせる。

「今から紙配るからやりたい演目書け。回収後、箱に入れて混ぜて、つかさが1枚引くからそれに決定な。異論は認めない」

要するに抽選である。

つかさに引かせる理由は、一番不正をしそうに無いからだ。

「え？えっ！？」

やっと事情が飲み込めたつかさは戸惑っている。

「肩の力を抜け。別にお前に責任がある訳じゃないが、少しぐらい働け」

「あ、う、うん……」

緊張を解く為、一応耳打ちしておく。

すると、つかさは何故か顔を赤くして頷いた。

紙を回収し終わり、箱にプチこんで振った後に抽選タイムだ。

「つかさ」

「え〜と、ひ、引きます!」

注目を集めているからか、余計に緊張しているような……。まあ、いつもは目立たないからな。

「……………」

つかさは腕をゴソゴソと動かし、中から1枚の紙を引いた。うん、不正は無かった。

「へえ、これは……………」

紙に記入してある題名を黒板に書き写していく。ま、大抵の人間は内容を知らないだろうな。つてかこれ書いた奴、表出る。

「あれ?俺がネタで書いた奴じゃん」

声の主は前の席に座った、よく見知った奴だった。

「風樹エ……………」

「な、何だよ」

「お前、主役決定」

「ちょ!?!」

ネタで書いた奴の運命だ、諦める。

「異義は?」

「無し!!」

「M A T T E !」

早速黒板に「主役：シヨタ野郎」と書き込む。

「上等だコラ、表出る」

シヨタの反論が聞こえたが無視無視。

その後もトントン拍子に役が決まっていった。

ヒロイン、悲劇の青年、敵のボス、英語話すトンファー使い……。

「実際の映画は視聴覚室を借り次第見る！それからサボった奴は桐箆筥に詰めるので覚悟しておくよーに！」

これにて本日の話し合いは終了した。

昼休み。

いつものメンバーで談笑する。

「あき」

「ん？」

「このキムチお前にやるよ」

「おっ、マジか！サンキュー！」

小さなタッパーに詰めたキムチを頬張るあき。

実はそれ、賞味期限が3ヶ月以上前なんだよな。

さっきの恨みはこれでチャラにしてやるぜ、ケケケ。

「そういえば、やなぎんとかがみんなの所は何するの？」

こなたが話を振る。ま、劇だろうな。

「私等はただの喫茶店よ」

何……だと……？

「えー、メイド喫茶じゃないのー？」

「アンタじゃないんだから」

喫茶店とはまた無難な。

「ちよつとしたゲームもあるしな」

「どんなの？」

ゲーム？

「チェス大会だ。俺に勝てれば食事がタダになる」

「それは楽しそうですね」

「僕も参加してみようかな」

勝ち目の無い戦いを挑め、と。

ってか、どう見てもやなぎがやりたいだけですな。本当にありがとうございしました。

「お前等もどうだ？」

「」「お断わりします」「」

俺とあきとこなたは口を揃えて断った。

こんなん王牙に腕相撲挑めって言うてるよつなもんだろ。

「そういうアンタ等は何よ？」

「劇だ」

「実は私達がクラス委員になっちゃって……」

つかさ、余計な事は言わなくていい。

「どうせ寝ている間に押し付けられたんだろ」

ギクッ！

「はぁ………凶星みたいね」

「俺は違う！ギリで起きた！」

「そもそも授業中に寝るな！」

「いやあゝ、私も危なかったよゝ」

そついやこなたもウトウトしてたよな。つかさを盾にしたけど。

「で、演目は………」

キーンコーン

おっと、チャイムが鳴ったか。

「じゃ、詳しい話はまた後で」

かがみとやなぎは帰っていった。

「う………は、腹が………」

さーて、屋上で寝るか。

「あ、はやと君ダメだよ！」

チツ。

結局、あきはトイレから帰る事は無かった。

第15話「まずは話し合い」（後書き）

どうも、銀です。

第15話、御覧頂きありがとうございます。

今回から桜籐祭編です！

今回は演目と役決めて終わりました。

しかし何をやるのかはまだ秘密です（笑）

分かる人なら、役を見ただけで何やるか分かると思います。

今回は練習風景です。ついではやとの出番が大幅に減ります。

はやと「オイ」

あき「感想待ってるぜ！」

第16話「練習しましょう」

（あき視点）

「ふあ……」

「大きな欠伸だね」

隣に座るこなたからツッコミを受ける。

劇の練習が始まってから、朝早く登校する羽目になった。

だからといって、徹夜でネットゲやギャルゲに勤しむ生活をやめる気は無いがな！

「いやあ、眠くてな」

「はやと君みたく屋上で寝てくれば？」

先日、見事にクラス委員に当選したはやと君は、今はやる事が無くなったので絶賛昼寝中だ。

「あれ？はやと君は？」

相方のつかさは小道具等の内職をしているというのに……。

「フツ、俺のようなイケメン男優がいなくなったら、皆困るだろ？」

前髪を掻き上げ、格好良く決める。

「キヤー……！」

フツ、黄色い声援が聞こえるぜ。

「みちる君、今のもう一回やって!」

「え?う、うん……俺の演技に、酔いしれな」

「キヤー!格好良い!」

黄色い声援は我らが王子、みちるの物でした。
何気にファンの中にみゆきさんが入ってるし。

「……黙ってればあき君だって……」

「ん?」

今こなたが何か言ったような……?

「私も眠くてさ」

人の事言えねーじゃん!

「てつきり俺の格好良さに見惚れてたのかと」

「吐きそうだからトイレ行っていい?」

「酷っ!?!」

今はダンスのシーンの練習中だ。
ゆったりとしたオーケストラに添い、仮面を付けた主演とヒロインが踊る。

主演は……言い出しっぺの原田風樹。

と来りゃあヒロインは北条羽音ちゃんだ。

「
」
「……………」

北条ちゃんは楽しそうだが、風樹はリズムに乗れてない。

「きゃっ!?!」

「ぬおっ!?!」

ドシャツ!

ついには風樹がドレスの裾を踏んで、2人共転けてしまった。
やれやれ、レディの扱い方がなつてないな。

「風樹!ちゃんと踊れ!」

プン、と怒っているのはもう1人のヒロイン役の赤来・メルア・
無卵磨ちゃん。

イギリス人のハーフラしいが、眼帯の理由は不明。2本のアホ毛が
ハムスターを連想させるロリっ娘だ!

「何1人でブツブツ言ってるの?」

こなたに突っ込まれてしまった。

いかんいかん、声に出していたか。

視線を主演達に戻すと、シヨタがロリに散々殴られていた。ピコハ
ンで。

「むう!羽音が怪我したらどうするつもり!?!」

「俺の方がダメーシ深刻だ!お前の所為で!」

「まあまあ2人共、ケンカはダメだよ」

偉い人はこう言いました。「羽音ちゃんマジ天使」と。

「羽音ちゃんマジ天使」

お前は偉くないからな、こなた。

次はトンファー男が3人と戦うシーン。

ここは俺の出番もあるが、今回は立って見てるだけ。

「さて、やりますか」

登場したのは三原才雅。

正直この役がピッタリ過ぎるのは気の所為じゃないだろうに。

因みにこのトンファー男、敵である。

「頑張ろうね、才雅君！」

「おう！」

一方、才雅の彼女の上城江里香ちゃんは大企業社長の秘書役。これも敵だが、戦わない役である。

「オイ、戦うフリだからな！本気で蹴るなよ！」

「All right！」

雑魚Aの心配を余所に、指をバキバキ鳴らす才雅。殴る気満々ですね、分かります。

雑魚の皆様ご苦労さんです。

「頑張ろう！」

「まだ練習だけだね」

隣で張り切るみちると、呑気なこなた。

俺達の役はチームを組んでいる。

途中で俺とこなたが死ぬがな。やれやれ。

練習が始まり、敵のボスの呼び掛けで才雅がやってくる。

俺達が見てる中、才雅は華麗な身のこなしで相手を圧倒した。

「ぐえっ!?!」

「げふっ!?!」

途中蹴りとかマジで入ってたけど。

最後に逃げた奴の首を折って終わるのだが……。

「大人しくしてれば、楽に済む」

「嫌だ!死にたくない!」

雑魚Aが本気で折られると思いき暴れていた。

そりゃあここでのびてる連中を見ればそう思うわな。

「はい、痛くなーい痛くなーい」

「ちょ、おまつ!?!」

折る気満々かい。

結局、折られる前に彼女が止めに入り、説教を食らう才雅であった。

「はやと視点」

あー、こんなにゆったりした感じは久々だ。

去年までは文化祭なんて関わらず、こつこつと屋上で空を眺めていたってのに。

つかさと会ってから俺の日常変わったなあ、とつくづく思う。

「ま、悪い気はしてないが」

「一訳で、お休みー。」

「バンッ！」

「はやと君！」

「どわあっ!?!」

これから寝ようとした時に、屋上のドアが勢い良く開き、聞き慣れた声で呼ばれて飛び起きる。

「やっぱりいたよー！」

「チッ、もう気付いたか」

細々とした作業に夢中になって気付かないと思ってたが、まさかこんなに早いとは。

「戻って小道具作らなきゃダメだよー！」

「自分不器用ですから」

「不器用な人はあんなにダーツ上手く無いよー！」

つかさの説得を軽く流すが、通じない。

「いいかつかさ、ドイツ上手い人はこうやって屋上で昼寝をしないとけないんだ」

「どうして？」

「それは……太陽光をエネルギーにしているからだ！」

バツと腕を太陽に突き出す。

勿論嘘だ。

「そ、そうだったの!？」

「ああ。ドイツだけじゃねえ！野球選手やパン工場の女の投球コントロールにも、太陽エネルギーは使われているんだ！」

つかさは本気で信じていた。

当然のごとく嘘です。

「知らなかったよ」

適当な嘘にここまで騙される奴もいないな。

さて、トドメだ。

「ほら、よく言うだろ……寝る子は育つって」

「!?!」

まるで名探偵が謎を全て解いたかのような表情を浮かべるつかさ。念の為に言っておくが、ここまでの話全てが出鱈目だ。

「だから寝かせ」

「あれ?でも私、ドイツ上手くないよ?」

……しまったあ!?

大きな矛盾点が目の前にいた!?

そうですね、つかさんもよく寝てらっしゃるもんね。しかも自覚してるし。

「はやと君……?」

視線が痛い。

さっきまで適当な嘘を純粹な心で信じていたはずの少女の刺すような視線が痛い。

「すみませんでした。白風はやと、全力を持って内職に就かせて頂きます」

こうして、俺は近年稀に見る綺麗な土下座で謝り、教室へ連行されていったのだった。はあ……。

（あき視点）

練習開始から2週間。

はやとが浮かない顔で小道具を作っている事を含め、順調に進んでいた。

……役者以外は。

「んっ!」

俺は自室の椅子に座ったまま背を伸ばした。

ここ数日、台本と睨めっこだ。

「長い台詞は何とかなるんだが……」

役者の仕事は台詞を覚えるだけじゃない。
シーンに合った動作や表情を作らなければならない。

「死に顔かぁ……」

俺の役は怪物に食われて死ぬ。

しかし、問題はそこだけじゃない。

「ある女を好いてて、素直になれず捻くれた態度を取るって……」

俺自身がツンデレをやるとはなぁ。しかも相手が……。

「こなた……どう考えてもミスマッチだな」

アイツの性格と役のキャラが合ってねぇし。

挙げ句俺を子供扱いかよ！

「……ま、何とかなるか」

散々言ったが、演技力には自信がある。

この映画も何度も見てるし、余裕余裕！

念の為、もう一度重要シーンを確認する。

「えーと……人間の集落で一悶着、敵のアジトに呼ばれる、才雅と
戦闘、アジトに侵入したが見つかり化け物と戦う、キス、食われる
……！？」

うおーい！？原作に無かった展開があったぞ！？

誰だキスシーン入れた奴！

「つ、つまり俺とこなたが……？」

ハツハツハ、またご冗談を……。

「オイ、どういことだコラ？」

翌日、脚本担当に問い詰めた。

「確かに俺は女の子好きだよ？そりゃあもう、風呂に入ってる女子がいたら覗きたいくらい」

「そりゃあただの変態だ」

小道具係から突っ込まれたが無視した。

「だがキスシーンを勝手にブチ込むたぁいい度胸してんじゃねえか！原作レイプも大概にしるや！」

ガクガク、と首根っ子を掴んで揺らす。
吐きそうな顔をしているが気にしない。

「おはよ〜。あれ？あき君、どしたの？」

そこに、こなたが現れる。

こなただって、キスシーンの事を知ったら怒るだろ。

「こなた！これ見てみる！コイツ勝手にキスシーンを……」

「ああ、それ？私が入れてもらうよう頼んだんだけど」

…はい？

「こなたが入れたって……？」

「おまつ、何でだよ！」

「だって、その方が盛り上がるかなって」

「いや、まあそりゃ……。」

「何であき君はキスシーンを必死に止めたがってるのかなあ？」

「そ、それは……」

「あれ……？」

「何でこんな必死になってんだ？」

「いつもなら、女の子とキス出来るなんて役得逃す訳無いのに。」

「そ、そういうこなたこそ！俺とキスなんていいのか？」

「うん」

「女の子の大事なファースト……！？」

「ちょー！？あつさり許可しちゃったよこの娘！？」

「……や、やっぱなし！」

「そ、そうだよな！」

「今更照れたか！」

「ま、まあフリだけでいいよな！」

「そだね！フリだけで！」

「あははははは……はあ。」

この時、まだ誰も気付かなかった。
こんな些細な事が切っ掛けで、あんな騒動が起きるなんて。

第16話「練習しましょう」（後書き）

どうも、銀です。

第16話御覧頂きありがとうございます。

今回はあきを中心に文化祭の練習光景と、加速する恋模様でした！
一方、主人公は内職をしていました（笑）

はやと「赤い靴出来たぞー」

つかさ「すごいー！」

こんなやりとりが行われていたとか。

今回はちょっとしたケンカが起きます。

第17話「騒ぎの前の静けさ」

（あき視点）

「はいカット！あき、台詞違つぞ！」

あれからというものの、妙に落ち着かない。

キスシーン騒動の所為で周囲から有らぬ噂を作られ、こなたとも目を合わせづらくなった。

大体、こんなの俺のキャラに合わないだろ！俺はもつと堂々とバカやってればいいんだ！

「わ、わりいな！」

「どうした？もう3回もミスってんじゃねえか」

才雅が珍しく心配して来た。

……相当ヤバいかも。

「そんなにか！？じゃあ、そろそろ……」

「いい加減本気出せ。お前の所為で練習止まってんだぞ？」

ぐ……ふざけて言ってるとはいえ、今のは心に刺さった……。

「…変な噂はあまり気にすんな」

「！」

才雅……。

「その時が来たら盛大に呪ってやるからよ」
「字が違えよバカヤロー」

そもそもお前は既にリア充だろ。
リア充が呪ってどうすんだよ。

〈才雅視点〉

今、クラス内で妙な噂が流れている。
あきとこなたが出来ているのではないかという噂だ。
理由はキスシーンがどうたらこうたら。
全く、連中も好きだねえ。

「さーいがつ！」

不意に後ろから誰かが抱き付いてきた。
この背中に当たる2つの感触は……ノーブラか!?

「なーに悩んでんの?」

ひょこつと顔を出して来たのはやはり章奈だった。

「んーや、別に」

「例の噂?」

気付いていたか。まあ同じクラスだしな。

「章奈はあの2人どう思う?」

「あき君とこなたちゃん?んー……お似合いだと思っつよ!」

そうか？……そうだな。趣味も同じだし、いいカップルになりそう
だ。

「けど今のままじゃダメかな」

「何でだ？」

「片や自分の気持ちに素直に向き合えてないから」

何だそりゃ？

「女の勘、なんてね」

章奈は舌をペロツと出してはぐらかす。
またいつものパターンか。

「ボク達もキスシーン入れる？」

「お、お前は役者じゃねえだろうが！」

俺の背中に胸を強く押し当ててくる。
くっ、ダメだ！この感触に屈しそうになる！

「なんだったら、濡れ場もOKだよ？」

ちよっ！？それは流石に公演できないだろ！

「お願いします！」

……男というのは、欲望に正直なものさ。

「なんてね それより、後ろをどうにかしないとね」
「へ？」

章奈はあっさり背中から離れ、行ってしまった。
後ろを振り返ると……

「才雅君？」

俺の彼女が凄まじいオーラを放ちながら立ってました。
ああ……死んだな。

「……才雅のバーカ」

後ろでは、章奈がそんな事を呟いていた。

（はやと視点）

「仮面舞踏会の背景完成だオラァ！」

あれから、俺はサボる事なく小道具、そして背景係に扱き使われていた。

俺の手際の良さに目を付けたのか、サボらせないように見張りを付けている。

「わー、はやと君すごい！」

コイツだ。

本来相方であるはずのつかさだが、本人は全く役に立たない。そこそこ器用ではあるが、俺の方が3倍以上も作業が速い。なのに、すぐ傍で作業をしているので抜け出そうとすればすぐバレる。

「次どれだ！持って来い！」

だから俺が殆ど引き受け、さっさと仕事を終わらせようとしていたのだ。

いい加減勘弁してもらいたいものだ。

「次はアリーナの背景よろしくね〜」

背景担当が真っ白な背景の用紙を持ってくる。

……あれ？俺、クラス委員だよな？

小道具係でも背景係でもないよな？

「手伝いであるはずの俺が仕事してんのに、何でお前ら担当の奴がサボってんだよー!!」

あまりの作業速度で忘れていたが、俺達が全部引き受ける義理はない。

「えっ……あっ！そうだね！」

つかさH……。

「チツ、気付かれたか」

やっぱり全部俺にやらせる気だったのか。

「はいはい、今からクラス委員長様は休憩時間に入るんで」

「えっ！？は、はやと君痛いよ〜！」

これ以上好き放題されてたまるか。

俺はつかさの頭を掴み、教室を後にした。

「久々の屋上だーーーーー！！」

ドアを勢い良く開け、解放感に浸る。

広がる空、浮かぶ雲、吹くそよ風。

仕事のことなんかさっぱり忘れられる。

「いたた……本当に空が好きなんだね」

隣でつかさが呟く。

おっと、頭掴んだままだったな。

「大丈夫か？」

「うん」

頭を擦りながらも微笑むつかさ。

そんなに強く掴んだ覚えはないんだけどな。

それより、コイツの笑顔を見てると無性に頭を撫でたくなる。

「あ！あれ、あき君じゃないかな？」

つかさが指差す先には、目立つ赤毛。
確かにあきだな。

「オイ、何してんだ？サボりか？」

反応が無いので、顔を覗き込む。
寝てんじやねえかと思ったが、違った。

「え？ああ、お2人さんも来たのか。デートか？」

「ち、ちが」

「違えよバカ」

へラへラ笑いながら聞くあきに、俺ははっきりと断る。
ん？何でつかさは落ち込んでんだ？

「鈍感だなあ」

うつせえ。そんな事よりも気になったのはあきだった。

さっき一瞬だが、覗き込んだ時の表情は明らかに何か悩んでいた。

「俺はお前がどうしたか聞いてんだがな」

「俺か？何だ、俺の事が」

「突き落とすぞ」

有らぬ疑惑をまた作ろうとしてんじやねえよ。

「……別に何でもねえよ。ただの気分転換だ」

背を伸ばし、あきはこの場を去ろうとした。まるで俺から逃げるかのように。

「何が怖いんだ？」

放った言葉にあきがピタッと止まる。

「お前は今、何を怖がってる？」

「俺が怖がってる……？」

あきは俺を睨んだ。

いつものふざけた態度からは想像も出来ないくらいに。いつぞやのメイド喫茶での騒動を思い出すな。

「お前が何に悩んでるかは知らねえが、その悩みに対して怖がってる」

「ふざけんなよ」

あきが俺に掴みかかってきた。

オロオロするつかさを尻目に、俺達は睨み合う。

こんなに短気な奴だったっけ？

「じゃあ何で向き合わないんだ？」

「！？」

「お前は今、俺から逃げた。それは、お前が持つ悩みから逃げてるって事だ」

バキィッ！

黙れと言わんばかりに思いつき殴られた。
いってえ……バカは腕力だけはあるな。

「お前に何が分かるんだよ……」

「お前みたいに逃げてる奴を1人知ってる」

ソイツは今までずっと逃げてきた。

自分の問題からも、その相手からも、現実からも。

「お前はまだ向き合える位置にいる。そこから逃げ続けて後悔するかどうか、後はテメエ次第だ」

あきにゆっくりと歩み寄る。

「けど、テメエには頼れる奴もいる。ソイツ等も頼っていいんじゃないか？」

「……………」

そして、一発ブン殴った。

「一発は一発だ。行くぞ、つかさ」

「えっ！？ま、待ってよはやと君！」

つたく、嫌な物思い出しちまったじゃねえか……。

屋上から戻った俺は、堂々と机で寝る事にした。
座ったまま寝ると体痛いんだよな！。

「チツ、口切っちゃまったじゃねえか」

口の中に鉄の味が広がる。うん、マズイ。

「大丈夫？はやと君」

心配そうにこちらを見るつかさ。

……はいはい、分かったから泣きそうな目で見つめてくんなよ。

「あー、メチャクチャ痛え」

「ええっ！？保健室行った方が……」

「それよりプリンが食いてえな。プリン食ったら治る、うん」

「ぶ、プリンだね！分かった！」

……え？マジ？冗談のつもりで言ったんですが。

グシャッ！

「ぐえっ！？」

突如、後頭部に衝撃を受けて倒れる。

「私の妹をパシリに使うなんていい度胸してるじゃない？は・や・
と・君？」

ええ、大体分かってましたよ？

こついう事したら貴方が来るって事ぐらい。

「死んだらどうする！」

「ピンピンしてるじゃない」

命がけのポケをあつさり返されてしまった。
こういうのはあきの役目だろうがよお……。

「で、妹君を大切になさってるかがみ様は何のご用で？」
「別に？通り掛かっただけよ」

ああ、そうかい。

「それより、アンタが殴り合いなんて珍しいじゃない。相手は？」
「あき」

「へえ……え？あき？」

そりゃ驚くわな。俺はともかく、あきは仲間を大事にする奴だし。

「何したのよ？」

「話してやるつもりは無いね。そうだな……コーヒーゼリーでも」
「腕と足、好きな方を選びなさい」

バキバキ指を鳴らす姿が勇ましいです、かがみさん。

「お待たせ〜！あれ、お姉ちゃん？」

そこに丁度プリンを買ってきたつかさが帰ってきた。
つてか、マジで買いに行ってたんだな。いい子だなあ……。

「じゃあ遠慮無く」

ガシッ！

「金払え」

……渋谷プリン代をつかさに渡す。
今の腕の速さはなかったわ。

（あき視点）

何なんだ畜生！

はやとに殴られた跡を拭い、俺は教室に戻った。
幸い口は切れてなかったが、それよりアイツの言葉が気になってい
た。

「俺が逃げてる？俺が怖がってる？」

全部凶星だった。

俺は何かを悩み、怖れていた。
だが、それが何なのか分からない。
分からない物を相手にしていても仕方無い、だから逃げていた。

「ほら、あき君。 出番だよ？」

こなたに呼ばれるまで、今が劇の練習時間だという事に気付かなか
った。

「あ、ああ悪い！」

いつものように軽く返事する。

俺はこれでいいんだ。

何かに悩むなんて柄じゃない。

皆とバカやって、楽しく過ごせばいいんだ。

「決めるぜ！」

（はやと視点）

「オイオイ……」

俺とつかさが戻ってきた時には、既に事件は起きていた。

「しっかりしてよあき君！皆迷惑してるんだよ！」
「うるせえな！分かってる！」

言い争っているのはあきとこなただった。

「どっしたんだこれ？」

俺は近くにいた才雅（何故かボロボロ）に聞いた。
今来たばかりだから現状が分かんねえ。

「それがな……」

才雅の話を3行で纏めた。

あきがミス連発

ついにこなたが業を煮やす
大喧嘩に発展

だそつだ。

「ねえ、ひよつとしてやる気無いの？」

「そんな事ねえよ！」

「もう、やってらんないよ！」

こなたが教室を出て行く。

アイツも何だかんだで劇を楽しんでたからなあ……。

「……チツ」

舌打ちしながらあきも教室を出て行く。

まだ答えも出せてないみたいだしな。

「あーあ」

「こなちゃんもあき君も、大丈夫かな……？」

泣きそうになるつかさ。

そりゃ仲の良い2人があんだだけ声張り上げてケンカしてりゃあびびるよな。

離婚直前の夫婦の子供かお前は。

「じゃあねえ、2人が出ないシーンの練習するぞ！」

すっかり静まり返ったクラスを才雅が纏めていく。

今は俺達だけでやれる事を行った方がいいな。

練習が続行される中、俺は密かにメールを送っていた。
あきと腐れ縁のアイツなら、何とかしてくれんだろ。

第17話「騒ぎの前の静けさ」（後書き）

どうも、銀です。

第17話御覧頂きありがとうございます。

今回は文化祭前に起こったあきとこなたのケンカ話でした！
主人公もちゃんと活躍出来たよ！やったねはやと君！

代わりにみつちーとみゆきさんが空気に……ゴメンよ。

え、やなぎ？彼は元々空気ですから（笑）

次回はケンカの決着です！無事に文化祭を迎えられるのか！？

第18話「ケンカ両成敗」

（あき視点）

何なんだよ畜生！

何で上手くないんだよ！

前は完璧だった所まであやふやになっていく。

覚えた台詞も、ある1シーンが頭を占める所為で出て来なくなる。

「クソッ！」

自分自身にムカつき、壁を蹴る。

俺が全部悪いってのは分かってるんだ。

こなたが怒るのも無理はない。

「……………」

このままじゃ、クビになるだろうな。

そうすれば違う誰かが代わりにを務める。

勿論こなたとのキスシーンも……。

「がああああああ！！！」

更にムカついたので壁を蹴りまくった。

そんなの、想像するだけで嫌だ！

「うるせえぞ」

誰かからの呼び掛けに振り向く。
俺のよく聞き慣れた声だ。

「荒れてんな」

「今虫の居所が悪いんだ」

腐れ縁だろうと、容赦無く睨み付ける。

そんな俺を見て、やなぎは溜息を吐いた。

くはやと視点

あきとこなたを抜いての練習は上手く行っていた。
特にラストシーンはアイツ等死んでるからな。

今は風樹とみちるが盛大に殴り合うシーンをやっていた。

「大丈夫かな？」

隣でつかさが未だに心配そうな顔をしていた。
普段からコミカルな2人がケンカなんて、誰も思いつかねえしな。

「平気だろ。助っ人を呼んどいたし」
「助っ人？」

俺は説得に向かない。
だから、あきの事をよく知るやなぎに助けを仰いだ。

こなたの方は……平気だろ。

「俺達に出来るのは、アイツ等が帰ってくるまで練習を重ねる事だ」
「……うん！」

頭を撫でてやると、つかさは大きく頷く。

「じゃ、俺は寝る」
「……ふええ!？」

だって俺練習関係ねえし。
じゃ、お休み。

「白風!戻ったなら小道具手伝え!」
「だって、はやと君」

……もし翼があつたら、逃げられるのになあ。

くあき視点

「で、何の用だ？」

ここでやなぎが現れるなんて、都合がよすぎる。
多分はやとの差し金だろう。

けど今はどうだっていい。

「別に。珍しくお前が頭抱えてるから、様子見にな」

「そうか。ならさっさと失せる」

互いに睨みあう。

やなぎは昔から頭脳タイプだ。

一対一で殴り合ったら間違いない俺が勝つ。

そんな事も分からずに喧嘩を売りに来る奴じゃない。

「どうした？言ってみろよ」

「お前にも関係ねえ」

「どうせこなたと揉めたんだろ？」

知ってんじゃないかねえかよ。

「バカには単刀直入に言った方がいいか」

「な、何だよ！？」

今だけ、バカ呼ばわりされる事に腹が立った。

「お前、こなたの事好きだろ？」

「……は？」

思わず聞き返してしまった。

好きって、まさか恋愛関係の方か？

「まさか、そんな」

「そんな事無いってか？じゃあ何で無駄に意識してんだ？」

何でそこまで知ってたんだよ！？」

「はあ……お前はバカだから分かりやすいんだよ」
「んだとコラ！？」

思いつきり壁をブン殴る。

さっきから言いたい放題言いやがって！

「お前に俺の何が分かるってんだよ！」

「腐れ縁だからな」

さっきからやなぎは微動だにしていない。

俺の事を見透かしたような眼で見やがる。

「何だよ……腐れ縁だったら何なんだよ！」

「お前も分かっている筈だ」

「黙れっ！！」

さっきのはやとといい、やたらとムカつく。

「じゃあ逆に聞くが、お前がこなたを嫌う理由があるか？」

「ねえよ！アイツは俺の、俺達のダチだろ！」

けど、俺がこなたを嫌いじゃなかったら好きって事にはならねえ。

「なら俺がこなたに告白する、と言ったら？」

何、だと……？

やなぎがこなたに告白……？

「そんなの、俺は……」

俺は言葉を失った。

やなぎは確かに髪長くて、もやしだが頭は良いし、顔も悪くは無い。もし、こなたとやなぎが付き合う事になったら……。

「俺は……」

止めない。

そう言うはずだった。

別に俺に止める理由なんて無い。

俺はこなたの親兄弟でも、ましてや恋人でも無いからな。

バキィッ！！

気が付いたら、俺はやなぎをブン殴っていた。

「はあっ、はあっ……んなモン駄目に決まってるだろうが……！」

起き上ったやなぎは殴られた頬を擦り、不敵な笑みを浮かべた。

「それが答えだ」

そうか……。

俺にはずっと無縁なモンだと思っていた。

小さい時から親父に無理矢理男臭いスポーツをいくつもやらされて、反動が何かでアニメやマンガ、ゲームにハマり、二次元の美少女達に囲まれて。

やなぎとつるんだり、女の子ナンパしたりして中学を過ごして。

まともに誰かに恋愛感情なんて、持たなかった。

「格好悪いな、俺」

「知ってる。元からだろ……っって」

随分痛そうにしている。

かなり本気で殴ったからな。

「だが私は謝らない」

「人の顔面殴っておいて、言う事はそれか」

扇子で脳天を殴られた。

案外硬いんだな、それ……いいセンスだ。

「オラ、やる事やってこいバカ」

「いでっ！？分かった、分かったからケツ蹴んな！」

やなぎに何度もケツを蹴られながら、俺が出た方向と反対側、こなたが行った方へ走って行った。

……持つべき物は腐れ縁の親友、か。

「盛大に玉砕して来い！」

「玉砕って失敗してんじゃねえか！」

（はやと視点）

「やなぎ！？どうしたの！？」

殴られた跡を付けたやなぎが現れた。

さっきバカの怒鳴り声と殴った音が聞こえたので、そろそろ来るだろうとは思ってたけどな。

「大丈夫ですか？保健室行った方が……」

「平気だ」

心配するみちるとみゆきを制止するやなぎ。

おー、また派手にやられたな。

「何だ？スパイか？」

「違う。わざわざスパイの必要も無いだろ」

「だろうな」

「そこは否定しろよ」

俺は最初から勝負してねえし。

何処のクラスが勝とうが知らんがな。

「バカはどうした？」
「焚き付けた」

そついや教室の外を全速力で走る音がしたっけ。

「そうか。ご苦労さん」
「全くだ」

互いに苦笑する。バカな知り合いを持つと苦労するな。
みちるとみゆきは何の事が分からずに？マークを浮かべていたが。
「あき視点」

校内を全力疾走してこなたを探すが、何処にもいない。
帰ったか？と思っただが、鞆が置いてある筈だからそれは無い。

「チツ、外か！」

即靴を履き換え、俺は校舎裏に向かった。

俺、こなたを見つけたら告白するんだ……。

何て死亡フラグを脳内に浮かべていると、本当にいた。
呑気に座りながらコロネ食ってやがる。

すぐに駆け寄ろうと思っただが、独り言を呟いてるらしいので様子を見る事にした。

俺も走り疲れて、息整えたいし。

「うーん、どうやって皆の所に戻るつか……」「アンタ達！団長様が御戻りよ！」「」

SOS団じゃねえんだし、それで戻るのはちょっとなあ……。

「うーん、イマイチ受け悪いかなあ」

「だろうな」

「あ、やっぱり？でもあき君が悪いん……!!」

俺に気付き、目を点にする。

「オイ、チヨコ垂れてんぞ」

「へっ!？」

こなたは普段小さい方からコロネを食べる。

だから油断していると下からチヨコがよく垂れるのだ。

ペロペロとチヨコを舐め取ると、頬を染めながら俺を睨む。

へえ、そんな表情も出来んだ。

「で、何か用？」

「いいや、振り切ってきただけだ」

某真っ赤な刑事ライダー風に格好付ける。

「ふーん。ま、いいや」

軽くスルーされた……だと……!？

「ここできつさと仲直りして、練習戻ろう?」

いつものコミカルな感じで手を差し出すあなた。
ま、俺もあなたもシリアスすぎるのは嫌いだしな。

だが、俺はまだその手を取らない。

「……………あき君？」

「単刀直入に言う。あなた、お前俺の事好きか？」

「え……………？」

俺はあなたをジッと見つめる。

予想外だったらしく、あなたは頬を染めた。

「好きか嫌いか、俺にはそれ^{バカ}で充分だろ？」

「……………うん。そだね」

しかし、俺がいつも通りの様子だと分かり、あなたもすぐに元の調子に戻る。

「好きだよ」

「よし」

次の瞬間、俺はあなたの手を掴んで俺の元に引っ張り、強引にキスをした。

「っ！?!?!?!」

「……………ぷはっ、これで劇に集中できるぜ」

キスシーンに無駄な意識を持たなくて済む。

「さ、戻ろ」

「天誅っ！！」

「うごふっ！？」

満足気にしていた俺は、顔を真っ赤にしたこなたに腹を殴り飛ばされた。

その後、俺達は騒動を起こしたって事で、黒井先生からこつてり搾られたのであった。
ケンカ両成敗って奴だ。

そして、あっという間に桜藤祭前日。

「カット！お疲れさん！」

リハーサルも完璧にこなし、本番を待つだけとなった。

「あー、やっと仕事から解放されたぜ」

堂々と背を伸ばすはやと。

知らないのか？クラス委員は当日見回りの仕事があるんだぜ？

「みちるさん、頑張りましょう！」

「うん！」

休憩時間はこの2人で回るんだろうな。

みゆきさんは無敵の要塞を攻略する事が出来るのだろうか？

「あき君、乙！」

「乙！って、そりやまだ早いんじゃないか？」

本番は明日なんだし。俺達の戦いはこれからだ！

「明日はドジないでよ〜？」

「任しとけて。あ、そうだ。休憩時間空いてるか？」

「え？うん」

「じゃあ、劇終わり次第校舎裏に来てくれよ。強制だからな」

「ちょ！？」

言いたい事だけ伝え、俺は着替えに行く。

本当の勝負は明日だから、な。

第18話「ケンカ両成敗」(後書き)

どうも、銀です。

第18話御覧頂きありがとうございます。

今回はケンカの收拾とあきが自覚する話でした！空気がまさかの活躍！（笑）

ここで漸くあきとやなぎの腐れ縁設定が活かされた気がします。なんだかんと言って、あの2人は名コンビだと思ってます。

あきが自分の気持ちに正直になりましたけど、告白は後回しです。先にキスしちゃいました。

今回は桜藤祭前半です。色んなキャラの視点で見に行きます。

第19話「開幕」

（はやと視点）

天気は快晴。降水確率0%。

絶好の祭日和って所だ。

「よお、はやと。晴れてよかった……ぐえ！？」

馴々しく話し掛けてきた赤毛野郎の首根っ子を掴む。

「よくもハメてくれたよなあ？あ？」

「な、ナンノコトヤラ……」

とぼけやがった。

俺はクラス委員には桜藤祭中の仕事が無いと思っていた。最初にあきが言った通りに。

だが、実際は交替で校内見回りという、犬みたいな仕事が続いていたのだ。

「いいじゃねえか、つかさと2人きりで回れるんだし」

「もう1回キムチ食わずぞコラ」

「そ、それだけはやめろ！」

地獄のキムチの味は身に染みてるようだな。

「ったく……」

「どうせ屋上も鍵かかってんだろ？」

そう、桜藤祭中は小さい子が近寄らないよう鍵がかけられている。ここで下手な真似すれば、屋上は永久に鍵付きになる恐れがある。

「する事もねえしな」

元々つかさとも回る予定だったし、気楽にやるか。

「さて……全員準備はいいかあ!？」

「「「「おっ!」「」「」」

クラスの皆さんは随分元気のいい事で。

桜藤祭開始まで、あと30分。

〜あき視点〜

今日は勝負の日だ。

へマをしないように前の晩に台詞を復唱し、即寝た。それに、もうキスなんか緊張しない。よし、バッチリだろ!

「あき君」

「おう、こなた!どうした？」

相方のこなたも体調はよさそうだ。

「ごめん、キスシーン無しになった」
「……は？」

ちよ、ええええ！？

解決したとはいえ、今まで悩んでたシーンが突然消えるって！

「なーんて、嘘だよ」

「………」

俺はジト目でこなたを睨んだ。

コイツは本当に俺とキスする気があんのか？

「……あれ、怒った？」

「そりゃあもう、今キスされなきゃ暴れるってくらい」

チュッ

気付いた時には、こなたが俺の頬にキスをしていた。

「最初の時のお返しだよ」

「は、はは………」

「じゃ、頑張ろう！」

「ああ………」

頑張るしかねえだろうがああああああ！！

「わ、どうしたの！？急に腕立てなんかして」

「みっちー、今日は頑張るぜ！」

「う、うん！」

〈章奈視点〉

ふっふ。何処のクラスもやる気に満ち溢れてるね。

桜藤祭といえは、出し物だけじゃあない。色々な個人の特別な日でもある。

各いうボクも、ちゃんとプランは練っていた。

「やけに機嫌がいいな」

衣裳に身を包んだ才雅が話し掛けてきた。黒のタンクトップにズボンとラフな姿だ。

「べっつに」

ボクは外方を向く。

まだまだ内緒にしとかなきゃね。

「ふーん……」

「才雅君、章奈ちゃん！」

すると、今度は江里香ちゃんが現れた。

江里香ちゃんは水色と黒を基調としたミニスカで、キャンペーンガールのような衣裳だ。

「どうかな？変な所、無い？」

「いや、メチャクチャ似合ってるぞ！」

「本当？才雅君も格好良いよ」

いきなり目の前でイチャつく2人。
ちよつとムツとしちゃうな。
でも、ボクにもまだ逆転のチャンスはあるんだから！

「才雅、休憩時間は一緒に回る！」

「え？あ、ああ……」

頷くけど、才雅は江里香ちゃんが気になる様子。

「あ、私はクラスの仕事を任されてるから、いいよ」

江里香ちゃんは衣裳担当でもあるからね。

ちよつと悪い気もするけど……ボクは引く気は無い！

「じゃ、後でね！」

「おう！」

第1段階クリア。後は……

〈無卵磨視点〉

「緊張するね」

私と羽音は女子更衣室で着替えていた。
質素で汚い衣裳だが、後でドレスに着替えるから何とも思わない。

「むう」

「うん、むーちゃん可愛いよ〜」

羽音も十分可愛い。どんな衣裳でも天使のような微笑みは変わらない。

「さ、ふー君も待つてるから行こっ!」

更衣室の外で風樹を待たせている。別に待たせることに罪悪感なんてないけど。

「お待たせ〜」

「遅えよ」

腕を組んで壁に寄り掛かっていた風樹の衣裳も、それなりに汚らしい。

戦争中だから仕方無いけど。

「ごめんね〜」

「むう、何か言うことは?」

「は?」

むう、これだから鈍感は……。

「可愛いの一言も出ないの?」

「んなこと言っても、衣裳が衣裳だからな」

む、それはまあそうだけど……。

「じゃあ、似合ってるぞ。ハムスターがドブネズミに」

グシャッ！グシャッ！グシャッ！

「……っ！？」

失礼だったので、風樹の足を何度でも踏ん付けておいた。声にならない悲鳴をあげる風樹。

「フン！行こ、羽音」

「ふえ！？で、でも……」

羽音は優しいから、足を抱えたアホの心配をしていた。

「テメエ……！劇に出れなくなったらどうする！」

「それだけ元気なら心配ない」

わざわざ爪を避けて踏んだからね。

証拠に普通に歩いてるし。

「チツ」

「羽音、行こ」

「う、うん……」

はあ、風樹は本当に鈍感だ……。

くやなぎ視点

桜藤祭が始まるまであと10分。

ウチの喫茶店の準備は既に整っていた。

俺も前半担当だし、お茶を入れる位なら出来るので厨房に立ってるんだが……。

「やなぎん、お茶マダー？」

「私アップルティーね〜」

「何でお前等がここにいるんだ!？」

他クラスであるはずの、あきとこなたが当然のように席に座っていた。

「お前等、劇はどうした!？」

「だって、俺達桜藤祭始まってからも時間あるし〜」

暇なら自分のクラスで過ごせよ。

「ほら、そろそろ開店するからアンタ達も帰んなさい!」

「冷たいこと言わないでよ、かがみくん」

かがみが追い出そうとしても、動こうとしない。寧ろ怠けている。

「こっとなったら実力行使か……」

「きゃー、かがみん怖いー」

棒読みでかがみをますます挑発する。

コイツ等……。

仕方なく、俺は奥からあるものを持ってきた。

「よし、じゃあ一勝負するか？俺に勝ったら茶の1つでもご馳走してやる」

2人のいるテーブルに、パンツとチェス盤を叩きつける。
その瞬間、2人の顔から血の気が引いたように青くなった。

「じゃ、そういうことで！」

「お仕事頑張っただけ！」

「ったく……」

あき達は逃げるように退散していった。

……そこまでビビられると、少しシヨックだな。

「でも、仲が良さそうじゃなかったじゃないか」

「余計に煩くなっただけよ」

それは言えてるな。

口では素っ気なく言ってるが、かがみが心配していたのを俺は知っていた。

さ、喧しいのがいなくなったし、仕事に戻るか。

くはやと視点

『ただいまより、陵桜学園 桜藤祭を始めます』

アナウンスが入り、校門から親やら保護者やらが入っていくのが見える。

……俺には関係無い話だな。

一応、俺を保護してくれた立場の海崎さんは、今日も働いていて来ない。俺も頼まなかったしな。

可愛い女の子の写真を撮ってきてくれ、という頼みはスルーしておいた。

「はやと君？」

隣をてくてく歩いていたらつかさが、こちらの顔色を伺う。

「大丈夫？不機嫌そうだけど……」

「お前が心配する程度のことじゃねえよ」

ポン、とりボン頭に手を乗せる。

そう、お前には関係無いんだ……。

などと考えてると、前方から歩いてくる4人組が視界に入った。見た所、父親と3姉妹のようだ。

「つかさ〜！」

ん？つかさの知り合いか？

そっぴや父親とカーキ色の髪の女はつかさ、藍色のロングと赤紫のシヨートはかがみに、それぞれ目元が似てるな。

そして、瞳の色は父親を除き全員同じだ。

「あ、皆〜！」

やっぱりな。

予想通りつかさの家族だった。

しかしかがみ以外に3人も姉がいるなんて、聞いてねえぞ。

「つかさが男の子と一緒になんて珍しいじゃん」

「デートか〜。羨ましいぞ！」

「ち、違っよ〜！」

姉2人に絡まれ、つかさは顔を赤くしながら反論した。

さて、この場合俺はどうするべきか。

「えっと、クラスメートのはやと君」

「白風はやとツス」

つかさに紹介され、とりあえず頭を下げた。

「はやと君、私の家族で右からお父さん、お母さん、いのりお姉ちゃん、まつりお姉ちゃん」

……！？

今、聞き間違えたか？

右から2番目の女性が「お母さん」と呼ばれた気が……。

「母の柊みきです」

聞き間違いじゃなかった！

「若いですね……つかさの姉かと思いました」

「あらそう？嬉しいわ」

うふふ、と笑うみきさん。マジ洒落にならん。
で、真正正銘の2人の姉に視線を移す。

「姉のいのりです」

「同じくまつり！よろしく！」

「ねえねえ、つかさとはどこまでいったの？」

「知り合いにいい男とかいない？」

「えーと……」

ああ……美人だけど、かなり残念な感じがする。
しかもかなり面倒臭い性格をしていそうだ。

「こら、はやと君困ってるじゃない」

「「うつ……」」

みきさんの一声で、姉2人は下がった。
最後に、つかさの父親が挨拶をする。

「つかさの父の柀ただおです。かがみとも友達なのかな？」

「はい」

「そうか。これからもつかさやかがみと、仲良くしてやって欲しい」

「そりゃ、勿論」

ただおさんは見るからに押し弱い、優しそうな男性だった。つか
さは性格も父親似だな。

けど、親としての芯も通っている。

父親、か。

クラス委員の仕事があると適当なことを言い、俺達は柀家と別れた。
こういう時に逃げて繋がるから、クラス委員の肩書きも悪くないな。

「つかさ」

「え、何？」

「お前にとって、家族は大事か？」

俺の中でずっとモヤモヤしたものが残っていた。

家族はあんなに温かいものだったか。

家族はあんなに幸せそうなものだったか。

「うん、すごく大事だよ！」

「そっか……悪いな。変なこと聞いて」

……嫌なモンを思い出した。

仕方ない、何か食って忘れましょう。

〈章奈視点〉

そろそろ劇が始まる頃だ。

ボクは小道具係だったので、本番中に特にやる事はない。
そう、全ては計画通り。

「じゃ、才雅！終わったらすぐに教室に来てねっ！」

「へいへい。さ、行くか」

「うん！」

才雅と江里香ちゃんはホールへ向かった。

2人を見送り、ボクは早足である場所へ行く。

「こんにちは」

「あ、来た来た！」

「待ってたよ」

ある場所とは、手芸部だった。

今日の為に、予め手芸部の友人達に頼んでおいたものがあった。

「アレは出来てる？」

「勿論！」

「さ、早く着替えて着替えて！」

プランはいよいよ最終段階を迎えた。

〈あき視点〉

劇開始まで、残り時間もあと僅か。
客席は満員で一先ず安心した。
ウチのクラスメートの保護者が約半数だろうがな。

その中で、いかにも怪しいオーラを纏った青髪の男性がいた。
うん、多分こなたの親父さんだろうな。

「お前、親父さんにキスシーンのことは言っているのか？」
「ううん、言ったら反対されるしね」

そりゃそうだろ。
つてことは……あれ？俺、後で殺されるんじゃない？

「頑張れ」

顔を青くする俺に、ポンと肩を叩いてこなたが一言。
いや、当事者お前だろ！？

「でもあき君、お父さんに似てる所あるから平気だよ」
そうか？いや、同族嫌悪という言葉もあるし……そもそも、溺愛する娘のこととなると別問題じゃ？

「じゃあやめる?」
「それはない」

この後、男の勝負もかかってることだし。父親が怖くてキスが出来るか!

『まもなく、2・Eの劇「パラダイス・ロスト」を始めます』

アナウンスが入り、場のざわつきも収まる。

今更緊張しても遅すぎる。俺はこなたと頷き合った。

さあ、行こうぜ。俺達の舞台の開幕だ!

第19話「開幕」(後書き)

どうも、銀です。

第19話御覧頂きありがとうございます。

今回は桜藤祭、前半でした！桜藤祭は主にあき×こなた、才雅×章奈、風樹×無卯磨を軸にやっていきます！

また、はやとが柊家の面々と顔合わせもしました。これについて最初、実は桜藤祭準備期間中に何人かで柊家に泊まり準備を進める予定でした。

その際に顔を合わせるはずでしたが……このイベント自体作者が忘れてしまったまま話を進めてしまいました(汗)。

今後の展開の為に、はやとだけでも合わないといけないので、今回急遽入れました。

あき達の劇の内容ですが、今回ラストにタイトルが出たのもう分かると思います(笑)。

次回は桜藤祭後編です！やっとここまで来ました……。

第20話「閉幕」

（あき視点）

閉まった幕の外から聞こえる、割れるような拍手の音。

「よっしやああああー!!」

俺達の劇は大成功に終わった。

途中、フーツて威嚇する声や、暴走しかけたシヨタコン、溺愛する娘がキスして怒りに燃えるおっさんとかいたけど。

俺はいつか殺される気がしたぜ……。

「お疲れ、あき君」

俺の心配を余所に、こなたはタオルを持ってきてくれた。

「おう、お疲れこなた」

「それよりあき君、キスした時舌入れなかった？」

ぶっ!?! やっぱバレてた!?!

校舎裏、リハーサル、そして本番と、俺達は3回キスした。だが3回目となると、何かしたくなるのが青少年の悲しき宿命。ほんの出来心で、にゅるっといってしまったのだ。

「いや、ちゃんと歯ア磨いてうがいもしたぜ!?!リップクリームも塗ったし!」

出来心だったが、いざ突っ込まれると正直恥ずかしい。

「サイテー」

グサツ！

青少年のガラスのハートをあっさりと傷付けたよ、この子は……。

「……なんてね。で、用があつたんじゃないの？」

「そうだ、校舎裏に来てくれ」

見つかりと面倒臭いので、騒ぐ皆の目を盗み、俺とこなたは校舎裏へ向かった。

（無卵磨視点）

劇が終わり、ここからは各自で自由時間を過ごす。

「むーちゃん、お疲れ〜！」

「むう！」

「ふああ〜……」

羽音が頭を撫でてくれた。

一方、風樹は大きく欠伸をかいている。劇が終わっても相変わらずだ、この男は。

「お兄ちゃん！お姉ちゃん！」

そこへ、女の子が1人やってきた。

見た目は羽音そっくりで、違つのは身長と髪の毛の長さくらい。

「あ、るーちゃん!」

「よお、流音」

「すつごく良かったよ!」

羽音と風樹はこの女の子を知っているみたい。

この子が、羽音の妹の……。

「むーちゃん、こつちが私の妹のるーちゃんだよ」

「あ、初めまして!北条流音です!」

「むう、赤来・メルア・無卵磨」

流音は礼儀正しく、羽音よりはしっかりした性格みだった。
おまけに羽音と同じくらい可愛い。

「腹減つたし、飯にしようぜ」

空気を読まず、風樹が情けない声で言う。

そつえば、流音は風樹より背が小さい。

風樹がシヨタであることには変わらんないけど。

「私もお腹空いちゃった」

羽音が可愛らしく言う。

むう、ご飯食べに行くべき。

「中にお店あるみたいだし、行こっ!」

私達は流音のパンフレットを見ながら、とりあえず回ることにした。

（才雅視点）

はあ、終わった終わった。

風樹に負けたのは納得出来ねえが、助っ人参戦の界坐をボコせた分マシだな。

界坐は自分の出番が終わると、若干イラつきながら自分のクラスに帰った。役の確認もせずに助っ人受けるからだな。ざまあ。

さて、これから飯……の前に、章奈と約束があったな。

「章奈ー、終わった……って、誰もいねえな」

またハメられたか？と思ったが、いつもの「なんてね」が無かったので待つことにした。

「才雅」

すると、章奈がすぐに教室に入ってきた。

だが、さっきまでの章奈とは明らかに違った。

「どうかな？ボ……私、似合ってる？」

一人称まで変えた章奈は、ミスコンにでも出るのかってぐらい女らしくなっていた。

バンドナを外した代わりに派手すぎない化粧。
服装は制服じゃなく、お嬢様みたいな服。

「あ、ああ……」

俺はただ呆然としていた。

あの章奈がここまで変わるなんて……。

章奈は普段の行動から女と見られていなかったが、元はかなりいい。
普段胸を押しつけられているからよく分か……ゴホンッ！

とにかく、予想外すぎて何を喋っていいのか分からなかった。

「ひょっとして、動揺してる？」

「！？」

ぐ……流石に鋭い。

「だったら、嬉しいな」

あ、敢えて言っておく。ヤバい可愛い。

もし江里香がいなかったら間違いなく章奈になびいていた。
最低だ、俺……！

「さ、行っっ！」

「へっ！？」

心の中で葛藤する俺を、章奈が手を引っ張って連れていく。
まさかこのまま回るつもりか！？

「私と一緒にじゃ、嫌？」

「喜んでお供させて頂きます」

ああ、この辺は普段の章奈で少し安心した。
江里香、今日だけは情けない俺を許してくれ……。

（あき視点）

いよいよ、俺個人の戦いだ。
最も、今は勝利は目前だがな。

「で、用事って何？」

あくまでコミカルに通そうとすることなた。
だが、心なしが頬が赤く見える。こつち見ようとしてないし。

「こなた。前にここで聞いたこと、覚えてるか？」

キスする覚悟を決める為、俺が聞いたこと。

「……………うん」

「あれをもう一度、ハッキリ聞かせてほしい」

あの時は好きか嫌いか、それだけだった。

けど、今はそれだけじゃダメだ。

恋愛感情があるか、無いか。

「こなた……………」

「……………うん」

……ヤッベエ！今になって緊張してきた！
こなたは俺をじっと見ている。
今までに見たことない、真剣な表情がすごく綺麗に思えた。
……もうロリコンでいいや。

初めて会った時から、気の合う友達のような感覚だった。
共通の趣味、似たようなノリのよさ。
ふざけてはやなぎやかがみに、よく突っ込まれた。

やっぱり、こなたが働いてるメイド喫茶に初めて行った辺りからか？
こなたの対応に微妙な変化を感じていた。けど、それはふざけの範疇だと思っていた。布巾で殴られたしな。

俺が確信したのは、例のキスシーン事件辺りからかな。
いやもしかしたら、それより前か？夏休み辺りから何となく気になり始めていたような……。
ま、この際いつから好きだったなんて、どうでもいいか。

「俺のこと、好きか？」
「大好きだよ」

笑顔でそう言ってくれるこなた。

「俺もこなたが好きだ。俺と付き合ってくれ」
「うん……お願いします」

俺達は目を瞑り、どちらからともなくキスをした。

こうして、晴れて俺達は恋人同士になった。

（無卵磨視点）

私達は今、風樹の知り合いのクラスの喫茶店でお昼を食べていた。

「チェックメイト」

「……もう、勘弁してください……」

奥の方ではチェスの勝負をしていた。

店側に勝てば無料らしいけど……さっきから連戦連勝している。

むう、ルールは分かんないけど、対戦相手の様子からえげつない勝ち方をしているのが分かる。

「お兄ちゃん、すつごく格好良かった！」

「仮面舞踏会の所なんて見とれちゃった〜！」

「本当、似合ってたよ〜」

「あ、ああ……」

両隣、そして何故か後ろからの称賛に苦笑する風樹。

ここに着いた時に、喫茶店「アヴァンティ」のマスター、穴戸久遠さんとばったり会った。

どうやらあき達に誘われたらしい。

「可愛かったよ〜！」と抱きついたまま席につき、現在に至る。

……風樹がデレデレしててムカつくから、後で殴るところ。

「はい、あーん」

睨み付けてると、風樹が久遠さんからクロワッサンを食べさせて貰

っている。

「あ、ズルいです！私も、はいお兄ちゃん！」

負けじと左隣から流音が自分のサンドイッチを差し出す。
むう、好敵手多すぎ……。

昼食を食べ終え、私達は適当に回ってみることにした。
喫茶店を出る時、周囲の男子の風樹を見る視線がガラガラしていた。
完璧に敵視されたな。いい気味だ。

「……お2人は、お兄ちゃんをどう思ってるんですか？」

「！」

「え？」

人気の少ない所に来ると突然、流音が口を開いた。

「んー、大好きだよ」

「!?!」

しかし、久遠さんは動じずに風樹に後ろから抱き付く。

「……私とお姉ちゃんが好きでもですか？」

「うん。好きになっちゃったんだから、しょうがないかな」

むう、大人だ……。

より一層強く抱き締めると、今度は流音が風樹の右腕に抱き付く。

「あ、ズルいよー！」

更に羽音が左腕に抱き付く。
むう、私は……。

「ちょ、お前等なあ!？」

当の風樹は顔を真っ赤にしている。

……負けたくない!

「……むう!」

私は前から風樹に抱き付いた。

これで風樹は4人の女性に囲まれた状態だ。

「負けません!」

「ふー君、早く選んでね」

「むう!ハーレム死ぬ!」

「痛っ!?!オイ無卵磨!足蹴んな!」

「あれ?ふー君顔真っ赤だよ?」

この風樹を軸にしたハーレム関係は、後々長く続くことになる、むう……。

〈才雅視点〉

桜藤祭にも終わりが近付いてきた。

俺は妙に女らしくなった章奈に引っ張られ、劇を見たり、飯を食ったり、適当なミニゲームで遊んだりした。

終始腕に抱き付いて引っ張るから胸の感触が……いや、周囲の視点が気になった。

知り合いに出くわさなかったのは幸이었다ぜ。

「んー、そろそろかな」

「へっ、オイ!?!」

そう言つて、章奈は急に教室へ足を向けた。

教室内にはまだ誰もいなかった。ま、皆遊んでるんだろうな。

「才雅」

教室で再び2人きり。しかも章奈はまるで今日は俺とデートでもする気だったかのようにコースを正確に決めていたようだった。まさか……な。

「今日の私、どうだった？」

「……すごく綺麗だった」

何だか、怖くて目を合わせるところか「どうしたんだ？」とすら聞けない。

俺はこんなに憶病だったか？

「うん……やっぱり似合わないよね」

「……………」

目を合わせず言ったのがマズかったらしく、逆の意味に捉えられてしまった。

「んなことはねえ。ただ、少し無理してんだろ？」

無理矢理女らしくしようと、一人称を「私」にしたりな。

「だって、才雅がボ……私を女として見てくれないんだもん……」
「……は？」

やっぱりか。

けど、俺が女として見てないってのは誤解だ。

そりゃ、普段の章奈は羞恥心がないんじゃないかって思うくらいア
クティブだ。

出るところは出てる分余計に……ゲフンゲフン！
とにかく、誤解を解かなきゃな。

「誤解だ！普段のお前も女として見てました！」

「……胸押しつけられてドキドキした？」

「しました！するに決まってるんだろ！」

「……才雅のスケベ」

ぐっ！？コイツ……！！

「なら、遠慮なく告白出来るね」

へ……！！？

「好きだよ、才雅」

さっきまでのしゅんとした態度と変わり、艶美な表情で俺を見つめ
る。

そして、俺の口に自分の唇を重ねてきた。

「……！！？」

「ん……ぶはっ 初めてのキス、あげちゃった」

「し、章奈……？」

「今回は、本気だよ」

章奈が俺を好いているのは、薄々気付いていた。……気付いたのは今日だけ。

それでも、デカすぎる不意打ちに俺はひたすら狼狽えるしかなかった。

そんな俺にお構いなく、章奈は体を触ってくる。

「クスッ、興奮してきた？」

「お、俺には江里香が……」

「知ってる。でも、ボクは才雅が好きなの」

章奈が俺のベルトに手を掛けようとした……その瞬間、教室のドアが勢い良く開いた。

「ダメエエエエエエ!!」

犯人は江里香だった。

突然の介入に俺と、章奈でさえ目を点にする。

「江里香ちゃん、ひよつとして……」

「全部見てた！才雅君は後でお仕置き！」

ちよー！？そりゃ、俺も悪いけど!？

よく見ると、江里香はパニくっていた。
泣きそうな顔で頬を膨らませ、章奈を睨んでいる。

「才雅君には私がいるもん！」

「うん、ゴメンね。でも、好きになっちゃった」

なっちゃったってお前なあ……。

「あーあ、略奪失敗か。じゃ、こつからは真っ向勝負しかないね」

「だ、ダメ！」

「でも才雅は流されそうになってたよ？」

「才雅君！」

余計にパニくる江里香に、何故か余裕の章奈。

俺は溜息を吐きながら、まずは江里香を落ち着けることにした。

「江里香、落ち着け。章奈も場を掻き乱すな。俺だって頭追い付かねえんだから……」

「だって才雅君が！」

江里香の頭を撫でると、ポカポカ叩きながらボロボロ泣きだしてしまふ。

江里香視点で見りゃ、彼氏の浮気現場を目撃したモンだから仕方無いよな。

「……ゴメンな、江里香。俺はお前を捨てたりしないから」

「うっ……」

江里香をあやしめると、今度は章奈がこっちを睨んでいた。今日で、章奈の色々な面を知った。江里香がいなかったら、間違いなく惚れる程だ。けど、江里香も俺にとってかけがえのない存在。俺は……。

「江里香、章奈！」

「何？」

「悪い、暫く考えさせてくれ！」

多分、俺は2人共好きになっちまった。勿論、いつか選ぶ時が来る。けど、今ここで簡単に決めていい話じゃない。

「んー、じゃあ卒業までにボクが完璧に才雅を落とせばいいんだね！」

「むっ！させないもん！」

はあ、まさかこんなことになるなんて……。とりあえず、江里香にどうやってひたすら詫びを入れるか、から考えるか。

（はやと視点）

長い1日が漸く終わった。

周囲の雰囲気を見るに、内外問わずカップルがあちこちで成立したらしい。

中には二股、四股までしてる奴もいるが。

「楽しかったね」

クラス委員の仕事から漸く解放された俺とつかさは、残業もなく早く帰れた。
途中あきが彼女自慢してウザかったり、みちるは相変わらず鈍感でみゆきが攻略失敗に落ち込んでたりしたが。

「まあな」

結局、俺はつかさの家族　特に父親　を気にしていた。

別に他人の家族なんか、俺には関係無いのに。

「はやと……？」

背後から声をかけられる。

俺は、この声に聞き覚えがあった。

とてつもなく嫌な、背筋が凍るような感覚がした。

「やっと会えた」

嫌だ。振り向きたくない。顔を合わせたくない。

「はやと君？」

つかさが隣で心配そうな声で尋ねる。

俺はゆっくりと振り返った。

「何で……何でアンタがここにいるんだよ……！」

会いたくなかった。

予想通りの人間がそこにいた。

俺の父親が。

第20話「閉幕」(後書き)

どうも、銀です。

第20話御覧頂きありがとうございます。

今回は桜藤祭、後半でした！これにて桜藤祭編、終了です。

それと同時に新展開突入！ここからはやとの話が加速していきます。

今回現れたはやとの父親は、はやとにとってラスボス的存在です。

今回ははやとがひたすらキレまくりです。そして、つかさは……。

第21話「回ってしまった歯車」

（はやと視点）

あの日から、俺の周りにある歯車は止まっていた。

嫌な過去なんて忘れ、今を楽しく生きたい。

もし翼があったら、ここから逃げ出し、遠くへ行きたかった。

だが、俺に翼はない。奇跡なんか起きるはずがない。

最悪の形で、歯車は動きだしてしまった。

「何で……何でアンタがここにいるんだよ!!」

桜藤祭の帰りに出くわした金色の瞳に、俺とそっくりの空色の髪の毛。

いや、俺がそっくりなのか。

男の名前は、白風やすふみ。

俺の父親……だった奴。

「今日、文化祭だったろ？もしかしたら会えるかって思ったんだ」

そう言いながら、桜藤祭のチラシを見せる。

広報部め、手当たり次第にチラシ配りやがったな。

「2年ぶりだな、はやと」

俺の名を馴々しく呼ぶな！

アイツの行動の一つ一つが俺を苛立たせる。

「はやく君？」

隣ではつかさが不安そうに俺を見つめていた。

「その子は？彼女か？」

ニツコリ笑いながら話すアイツ。

つかさは顔を真っ赤にしたが、俺は完っ壁にブチ切れた。

「ふえ！？ちが」

「どうでもいいんだよ！！今更どの面下げて「会えると思った」だ！？父親面してんじゃねーよ！！」

アイツを睨みながら俺は吐き捨てるように怒鳴った。

つかさはすっかり怯えてしまったようだが、今の俺には気にしてる余裕はない。

「はやく……」

「こっち来んな！！」

近寄るアイツに、俺はまた吠える。

「テメーは仕事だけしてりゃいいだろ！！俺の前に二度と出て来んな！！」

それだけ言い放ち、つかさを連れてその場を後にした。

クソッ！クソッ！クソッ！

タイミングが悪すぎた！

つかさの家族と会って、思い出しまったこの時に、最悪のタイミングでアイツが現れた！

「クソがあー！」

アイツから離れ、俺は壁をブン殴っていた。

「はやと君……？」

つかさが泣きそうな声で俺に呼び掛ける。

ああ……つかさの存在を忘れていた。

「……悪いな、驚かせて」

「う、ううん！」

少しだけ落ち着き、つかさに謝ると首を振った。

「でも……はやと君、ちょっと怖かった……」

はあ……本当に悪いことしたな。

全く関係無いつかさの前でキレてしまった。

けど、アイツだけは……許せない。

「あの人、誰だったの？」

そりゃ気になるよな。

ずっと言いたくなかったが、会ってしまったモンは仕方無い。

「アイツは白風やすふみ。俺の親父に当たる奴だ」
「はやと君のお父さん……？」

首を傾げるつかさ。ちよつと分かりにくかったか。

「……俺は認めたくないが、正真正銘の父親だ」
「でも、はやと君……」

いくらつかさでも、これ以上は語りたくない。

「話せるのはそれだけだ。じゃあな」

腑に落ちないつかさの頭を撫で、俺は家路に着いた。

家で寝ていても、アイツの面を思い出してしまう。

何で今なんだ……！

俺は身を起こし、夕飯の支度をすることにした。
どうせ雑草の天ぷらだけだな。

ピンポン

鍋を用意していると、家のチャイムが鳴る。

「あ？また新聞の勧誘か？」

海崎さんは普段チャイムを鳴らさない。

ドアを叩くか、合鍵で勝手に入ってくる。
勿論、明日の飯の金すら危うい俺は新聞なんか取らない。
さっさと追い返しちまおう。

「はいはい、ウチは新聞はいらね……!?!」

レンズを覗き込むと、明らかに新聞勧誘の人間じゃないことが分かった。

「はやと?いるか?」

「わああああああ!!?!」

アイツがいた。

何でここが分かった!?!住所教えてねえぞ!
海崎さんにも口止めしてあるし!

……まさか、尾行しやがったのか?

「オイ、どうした?」

「うるせえ!!テメー何でここが分かったんだ!?!」

悲鳴で俺がいることが分かったらしい。
何がどうした?だ。誰の所為だと思ってやがる。

「はやとの後を追ったんだ。久々に走ったぞ」

よく見ると汗かいていやがる。ウゼエ。

「何ですか？」

そこへ海崎さん登場。

よかった、バイトから帰ってきてたか。

「ここの大家ですか。白風はやとの父親です」

「ああ、アンタが…… 大家の海崎隆也です」

自己紹介してないで、さっさと追い出せ！

「実は、はやとを連れて帰ろうと思ひまして」

は？連れて帰る？

今更何言つてんだ？この中年。

「はあ……けど、はやとは望んでないみたいで」

「望む訳ねえだろうが！！」

海崎さんの台詞を遮り、ドアも開けずに叫ぶ。

「はやと！俺がわ」

「何も言わずとつと帰れ！！テメーの面なんか見たくねえんだよ
！！！」

有無を言わず、俺は叫び続けた。

結局、アイツは観念して帰っていった。

「……また、来るからな」

二度と来るな。

その後、俺は海崎さんにまたアイツが来たら塩撒いて追い出すように強く言った。

「つかさ視点」

次の日。

昨日のはやと君が気になって、電話をかけたんだけど……。

「出ない……」

夏休みの始めの時に同じことがあったような……。また充電を忘れてるのかな？

「どっしょ……」

そっだ！やなぎ君やあき君なら、はやと君とお父さんについて知ってるかも！

「えーと、あき君の番号は」

慣れない手つきで携帯を操作して、あき君に電話をかける。

P r r r……

「おう、つかさ！珍しいな！」

出た！

「もしもしあき君？あのね、聞きたいことがあるの！」

「聞きたいこと？勉強ならお姉ちゃんに聞きなさい」

はう、違つよ〜！

「そうじゃなくて、はやと君のことなの！」

「はやと？本人に聞けよ〜。それとも、そっちも告白イベントか？」

「ふえ！？」

こゝ、告白！？途端に顔が赤くなつちゃう。

そついえば、電話からこなちゃんの声が聞こえた。今一緒にいるのかな？

「違つてば〜！はやと君、電話に出なくて……お父さんのことで怒つてたの」

私は昨日あったことをあき君（とこなちゃん）に話した。

「ふーん……そんなことが」

「うん。それで心配だから電話したんだけど……」

「まーた充電してねえのか」

呆れたような口調で話すあき君。

「俺も去年からの付き合いだからな……よく分かんねえや」

そつか……。

考えてみれば、私ははやと君のことあまり知らないんだ。

「ん〜、そついやアイツ、「奇跡」以外にもNGワードがあるんよ」

はやと君は「奇跡」が嫌い。普段から言っているから知ってるけど、

他にもあるんだ。

「まず「父親」。多分親父に因縁があるんだろう」

昨日の怒り方を思い出す。

はやと君、お父さんのことすつごく嫌ってた。

だから私のお父さんを気にしてたんだ……。

「んで、「母親」。こっちはそうでもないけど……寂しそうにするんだよなあ」

はやと君、お母さんも嫌いなのかな？

「俺が知ってるのはこれぐらいだ。悪いな、あまり力になれなくて」

「ううん、ありがとう」

「つかさ〜！頑張れ〜！」

あ、こなちゃんの声だ。やっぱりデートだったんだ。

やなぎ君とみちる君にも電話してみたけど、答えはあき君と同じだった。

家族と仲が悪いみたい……でも、どうして？

ますます心配になった私は、思い切ってはやと君の家に行ってみた。はやと君はいつも助けてくれたんだもん。恩返ししなきゃ。

「あれ？つかさちゃんじゃん」

アパートの前で海崎さんと会った。

でも何で塩を持ってるんだろう？

「こんにちは。あの、はやと君は……?」

「家に籠もってる。ちゅーか、時々床殴ってうるさいねん」

ふえ!?! はやと君、引きこもりになっちゃった!?!

「悪いけど、中見てきてくれない?これ合鍵な」

海崎さんから鍵を受け取って、私は階段を上がる。

でも何で塩を持ってたんだろう?

ピンポーン

「はやとく」

「うわあああああ!?!」

ひゃっ!?!

チャイムを鳴らしたら、中からはやと君の悲鳴が聞こえた。
だ、大丈夫かな!?!

「はやと君!」

ガチャッ

鍵を開けて、中に入るとはやと君は居間にいた。
何故か毛布に包まって。

「はやと君?」

「え……つかさ……何で……?」

怯えるように震えて、はやと君はこちらを見た。
昨日と比べてゲツソリしている。

「大丈夫？何があったの？」

「ああ……平気だ」

「どう見ても平気そうじゃないよー！」

私を見て安心したみたいで、はやと君は横になった。

「……昨日、家にアイツが来たんだ」

「アイツ？……はやと君のお父さん？」

はやと君は小さく頷いた。

会いたくないから、はやと君は引きこもってたんだ。

「はやと君」

私は決めた。はやと君をほっとけないもん。

「ウチに泊まっていけない？」

〈はやと視点〉

いきなり現れたつかさは、自分の家に泊まっていけと訳の分からないことを言い出した。

いや、俺はまず何でお前がいるのかすら分からないんだが。

「え、えつと……」

自分が言ったことに今更顔を赤くする。

「ここじゃなくてウチならお父さん、来ないかなって」

なるほどな。そう考えると、確かにいい案だ。

「どうかな？ダメならいいんだよ！無理しなくて……」

一度言っちまった手前、引くに引けなくなったみたいだ。
「つか、無理してんのお前だろ。」

「……頼むわ」

だが、断る理由が思い付かない程、俺は弱っていた。

とりあえず風呂に入り、さっぱりしたところで必要なだけの荷物を
持ち、柵家へ。

「お泊り……だと……！？」

外では海崎さんが変な顔をしていた。

何を想像したか分かるから余計にウゼエ。

「そんなんじゃないよ。一時的な避難だ」

「あはは……」

言い出しっぺのつかさは苦笑するのみ。
すると、海崎さんはつかさに何かを耳打ちした。

「はやとのこと、頼む」

「は、はい！」

俺には聞こえなかったが、つかさは顔を赤くしていた。

「……………」

「いだっ!？」

なんかムカつくから海崎さんを蹴っておいた。

「行くぞつかさ」

「え、あ、うん！」

こうして、アイツの尾行に気を使いながら、俺はつかさの家に世話になるのだった。

第21話「回ってしまった歯車」(後書き)

どうも、銀です。

第21話御覧頂きありがとうございます。

今回は神経質になるはやととお泊りイベント突入でした！

終始叫びっぱなしであれほどマジ切れするはやとは珍しいです。

そしてつかさの爆弾発言！つかさの方ははやとを意識し始めてますが、はやとは……鈍感です(笑)。

今回は柊家inはやと、そしてはやとの過去です。

第22話「そんな訳」

（はやと視点）

結局、アイツの尾行はないまま柊家についた。それもそうか。アイツは仕事があるだろうし。

「世話になる」

家に入る前に、つかさに頭を下げた。

ただおさんがいるとはいえ、余所の男を家にあげ、尚且つ一晩泊めてくれるってんだからな。

「う、ううん、気にしないで！私が言い出したことだし」

そう言うつかさの顔は微妙に赤かった。

やっぱり恥ずかしいんだな。

「お邪魔します」

神社に来たのは2度目だ。確か……かがみに無理矢理ダイエットに付き合わされた時だな。

しかし、中に入るのは初めてだ。

「いらっしやい、はやと君」

すぐにみきさんが出迎えてくれた。

多分、風呂に入ってる間につかさか連絡入れておいたんだな。

「……いいんですか？」

「ええ。どうぞ」

笑顔で家に出迎えてくれるみきさん。

……正直、つかさ達の母親だって未だに信じられない。

「ごめんね」

「何が？」

廊下を歩いてる間に、小声でつかさに話し掛けられる。

「お母さんにはやと君の事情、話しちゃった」

何だ、そんなことが。

「それで泊めてくれるんなら構わねえよ」

寧ろ、つかさとみきさんには感謝してるぐらいだった。
俺なんかを心配してくれてさ……。

「ここがはやと君の部屋ね」

みきさんが用意してくれた部屋は、人1人が使うには十分すぎる広さだった。

「不便があつたら何でも言つてね」

「はい……ありがとうございます」

みきさんがいなくなると、俺は荷物を降ろし周りを見回す。

「はやと君？」

「いや、何すりゃいいかなって」

人様の家で昼寝やダーツなんてするほど、俺は非常識じゃない。

「……………じゃ」

「来たな、少年！」

つかさが口を開きかけると、ドアから姉3人が現れた

「おやおや、お邪魔だったかな？」

「はやと！アンタつかさに何もしてないでしょうね！？」

あー、うるせえ。

しんみりしてた空気をぶっ壊しやがって。

「何かって何だよ」

「そりゃ……………」

「……………ひょっとして、進展なし？」

何を期待してたんだよ。

「そ、そんなんじゃないよー！」

「何だ、つまんないの〜」

「男の子を家にあげといてね〜」

「つかさに手を出したら……………」

つまんなそうに不貞腐れるいのりさんとまつりさん。

そして威嚇するように指を鳴らす凶暴な方。

「そこまで！はやと君を困らせないの！」

みきさん、もうちょい早く止めて欲しかったです。
つてか、アンタも聞き耳立ててたろ。

この後、何故かつかさとかがみとで勉強会に突入してしまった。
勿論、授業をサボっていた俺が勉強なんか分かるはずがない。

「分からん」

「んー……」

でも、何故か授業に出てるつかさも分かってなかった。

「全く、アンタ等は……」

出来の悪い生徒2人に、かがみ先生は溜息を吐いた。
数十分後……。

「分かんないよ」

「出来たぞ」

つかさは相変わらずだが、俺は人並みに出来るようになっていた。

「はやと、飲み込み早いじゃない」

「まーなー」

俺はあくまでやる気0だ。

飲み込み早いのは事実だが、俺は実は家で復習は何だかんだでやって
いたのだ。

進級出来なきゃ終わりだしな。

「いいか、ここはな」

「ふえ……」

気付けば、俺がつかさに教えていた。
難しいところは分かんねえけどな。

「だから、かがみが菓子を大量に食べると使われないエネルギーが
残るんだよ。これが質量保存の」

「何だと!？」

勉強会を終えると、姉2人も交えてゲーム大会に突入していた。
ここで1つ問題が。俺は当然ゲームなんて持ってない訳で。

「また私の勝ちね」

さっきから連敗していた。

まさかつかさにまで負けるなんてな……。

「で、でもはやと君、私に勝ったこともあるよ〜!」

「つまり、はやともゲームじゃつかさ並ってことね」

くっ、思わぬ弱点があったモンだ。

「皆、そろそろご飯よ〜」

丁度、みきさんの呼び掛けがあった。

もうこんな時間か。外もすっかり暗くなっている。

食卓にはただおさんが既に座っていた。

……そういや、ただおさんは俺をどう思ってたろうな。

娘が連れてきた男、しかも事情が父親絡み。

いい印象は受けないだろうな。

「やあ、はやと君」

それでも、ただおさんは笑顔で俺を迎え入れてくれた。

……なんだろうな、この感情は。

「さ、どうぞ」

「いただきます！」

いつも俺が食っている量の3倍近くの食べ物食卓に並んだ。

ここがレストランなら、タッパーの1つでも出すところだが……俺
だってそこまで無神経じゃない。

ここは柊家の味を存分に味わっておいた。

夕食後、俺はただおさんに呼ばれた。

2人で話したいそうだな。当然そうくるわな。

「なんでしよう?」

「ああ、楽にしていよ」

空気を読んで正座してたら、そう言われた。

どうやら怒っている訳じゃなさそうだな。

「話をつかさから聞いたよ」

「……はい」

俺とアイツとの問題。

この家の人間なら気にするであろうことだ。

「話したくないなら、無理に話さなくていいんだ」

「……………」

ただおさんはあくまで優しく言う。

「けど、つかさは誰より君を心配している。それだけは分かって欲しい」

「はい。つかさには、とても感謝してます」

こういうところ、やっぱり父親なんだな。

それに、芯が通っているところがつかさに似てる。

…………これも逆だな。つかさが似ているんだ。

「それと、つかさとの関係だけど……………」

それが本心でしょうに。一般的な父親なら気にする。

「何にもありません。今でもつかさとは友達です」

「そうかい？」

イマイチ腑に落ちないというか、残念というような、微妙な表情をするただおさん。

話はそれだけだと言われ、最後に

「今後も困ったら、ウチを頼っていいんだよ」

と言われて、俺は部屋に戻った。

……本当に優しいよな。

風呂を最後に貰い、上の姉2人に散々弄られた後、俺は1人暗い部屋で夜空を眺めていた。

今日は初めてだらけだな。

他人の、それも女子の家に泊まったのも。

勉強会やゲーム大会なんてことをしたのも。

大人数で夕食を囲ったのも。

誰かの父親と2人で話し合ったのも。

コンコン

思い返していると、ドアをノックする音が聞こえた。
こんな時間に誰だ？

「はやと君、起きてた？」

ドアを開けると、つかさがいた。

「いや、寝付けなくてな」

「えへへ、私も」

仲間がいて、安心したのかふにや〜っと笑う。

「……入れよ」

「うん、お邪魔します」

本当はお前ん家なんだけどな。

とはいえ、つかさを招き入れたところのことなんて何も無い。

「……家族ってこんなモンなんだな」

「え？」

「暖かくて、優しい……いい居場所だ」

俺に足りなかったもの。俺が知らなかったもの。

「はやと君」

つかさは真剣な眼差しで見つめてくる。
まるでただおさんみたいに。

「よかつたら聞かせて？はやと君のこと」

そう言われると、断れなくなるだろうが。

「……いいぜ、聞かせてやるよ。なっさけない男の話にな」

俺は軽く目を閉じ、語りだした。

俺は白風家の長男として生まれた。

父親が白風やすふみ。母親は白風みどり。

ごく普通の家庭だった……ある1点を除いて。

母さんは俺が幼い時から病気だった。

俺を生んだ後ですぐ癌にかかったんだ。元々体力もあまりなかったらしい。

だから家にいることは殆どなく、入院生活を強いられていた。

で、俺は小学校の時から、放課後になると真つ先に病院に向かうのが日課になっていた。

母さんの世話をし、暇な時間は母さんと一緒だった。

逆に父親、アイツは仕事が忙しく、中々会いに来なかった。

それどころか家にも遅くにしか帰らず、実質1人暮らしだった。

金はあったから飯には困らなかったけど。

だから、俺はアイツが昔から嫌いだった。

「はやと、お父さんをあまり責めちゃダメよ。あの人は私達の為に頑張ってくれているの」

けど、母さんはいつもこう言っていた。

この言いつけを守っていたから、俺は今までアイツに文句を言わなかった。

母さんは病気なのに綺麗だった。

俺の前ではいつも元気で、空を見るのが好きだから窓に近いベッドに寝ていた。

「もし翼があつたら、はやとはどうしたい？」

俺が折り鶴を折っていると、母さんが聞いてきた。

「翼があつたら……？お母さんは？」

「そうね……大空を自由に飛びたいわ。お母さん、ずっとベッドの上だからね」

母さんは優しく笑う。寝たきりで足が思うように動かせない母さんのせめてもの願いだったんだ。

「じゃあ、俺にもし翼があったら、母さんを連れて飛びたい！」
「ふふっ、ありがとう」

母さんは俺の頭を撫でてくれた。

それ以来、これは母さんの口癖だった。

母さんは自分に翼が生えた時の想像を生き甲斐にしていた。子供みたいにな。

それと、母さんは「奇跡」も好きだった。

「奇跡？」

「うん。ドラマとかでよく「奇跡が起こった！」とかいうでしょ？」
「ん〜……」

俺はあまりドラマ見なかったから、首を傾げた。

「とにかく！そういう奇跡が起これば、私もきつと治るの！」

「ホントに!?!」

ドラマなんかでよくやる「奇跡」。

母さんも俺も、こんな奇跡が起こって病気が治るってずっと信じていた。

中学に入っても、この生活は変わらなかった。

「はやと、学校は？」

気付けば、俺は学校より母さんを優先していた。

「……………今日は休みなんだ」

「本当？」

役に立つと思えない授業なんかより、日に日に弱っていく母さんの方が大事だったんだ。

「ねえ、はやと。高校に進学して」

ある日、母さんは俺に言った。

「え？」

「お母さん、はやとが一緒にいてくれるのは嬉しいの。でも、その所為ではやとが将来困っちゃうのは嫌」

「母さん……」

「お願い。次は、高校進学の知らせを持って来て」

母さんは昔より弱く、それでも優しく微笑んで俺の頬を撫でる。

「……うん。きつと持って、驚かせてやる！」

「頑張つてね！」

それ以来、俺は病院通いをやめて勉強に集中することにした。

時々看護婦に花を渡すよう頼んだりしたけど、決して母さんには会わなかった。

約束を守るために。

けど、それは間違いだった。

3月。

お前も知っている通り、俺は陵桜学園に合格した。

昔の成績を知っていた周りの先公はかなりびっくりしてたけどな。

これでやっと母さんに会える。そう思っていたんだ。

「白風君」

報告を済ますと、教頭が俺を呼んだ。
何事だと思ったら、教頭の顔色が悪い。

「お母さんの容態が悪くなったって連絡が」

気付いたら、俺は病院に走っていた。
合格の証明書を握りしめて。

「母さん!」

俺は母さんの病室に入る。

母さんは昔と変わらずに空を眺めていた。

「はやと、どうしたの?」

けど、すっかり弱弱しくなっていた。
たった1年、会わなかっただけでこんなに変わってしまったのか?

「母さんの容態が悪くなったって……」

「ああ……大丈夫。明日手術なの」

「明日!」

初耳だった。今まで受験しか目に入っていなかった俺が憎く思えた。

「……そうだ!母さん、俺、受かったよ!陵桜だよ!」

俺は握りしめて、すっかり皺だらけになった証明書を見せた。

「まあ……すごいじゃない。おめでとう」

「だから母さんも大丈夫だよな！」

「ええ、はやとに勇気を貰ったもの。奇跡がきつと起こるわ」

母さんの笑顔はやっぱり昔と変わらない。

久々に頭を撫でられ、俺は落ち着きを取り戻した。

母さんの容態の悪化の所為で面会時間が短くなり、俺はすぐに病室を出ることになった。

そして、医者から最悪の事実を聞いた。

「手術の成功確率は限りなく低いです」

「え……？」

何でだよ。母さんは大丈夫だって言ったじゃないか。

母さんは今まで頑張って生きてきたんだぞ？こんなところで終わりでなんて、あんまりだ。

「ですが、お母様は自ら進んで手術を受けることを決めました。あなたが必ず帰ってくるからと言って」

母さんはずっと俺を待ってたんじゃないのか？

なのに、俺は受験勉強に追われて……。

「我々も最善を尽くします」

医者の最後の言葉を聞き流し、俺は帰った。

家には相変わらず誰もいない。

「……………」

俺は書置きを残し、眠った。

父さんへ

明日母さんの手術があります。出来れば来てくださいますか？

翌日、手術の日。

俺と、事前に連絡を受けていた祖父と祖母は病室で母さんと一緒にいた。

「大丈夫よ、はやと」

母さんはさっきからそれしか言わない。

何で俺の心配ばっかしてんだよ。自分の心配しろよ。

「そろそろ時間です」

看護師達が母さんを手術室へ運び出した。

「大丈夫」

それだけ言い残し、母さんは手術室に消えた。

「手術中」のランプが付き、俺と祖母は椅子に座って待った。

途中、コーヒーを買ったりしながら、俺達はずっと手術室の前で待っていた。

その間、アイツはずっと来なかった。

「奇跡が起これば……」

時間が経つにつれ、俺はそれしか呟けなくなっていた。母さんの
と言えないじゃないか。

そして、ランプが消える。

「母さん!？」

ドアから出てきたのは、医者だった。

「残念ですが……」

それ以上は、ショックで何も聞けなくなった。

母さんの変わり果てた姿に、俺は吐きそうになった。

「……っ!?!」

もうあの笑顔を見せてくれない。

あの細い手で撫でてくれない。

何故だ？俺は約束を果たしたぞ？

奇跡が起こるんじゃないのか!?!?

「みどり……」

後ろで間抜けな声が聞こえた。

「テメエ……」

母さんは約束を破った。

なら、俺も1つくらい破っていいはずだ。

「今更どの面下げてきやがったんだ!? ああ!？」

「はやと……」

俺は今頃ノコノコやってきたアイツの胸倉を掴んだ。

「何やってたんだよ! アンタは!」

「す、済まない……道が混んで」

「言い訳なんて聞きたくない!」

今までだってそうだ。母さんはずっとアンタを信じていたんだ。

なのに、アンタは母さんが死ぬ直前でさえ姿を見せなかった。

「クソッ! クソがクソがクソがクソがクソがクソがああああああ
ああああ!」

母さんの葬式。

初めて見る親戚とか、母さんの昔の知り合いとかが集まったが、俺にはどうでもよかった。

胸に空いた虚無感に埋まるモンじゃない。

献花の時、母さんの顔をよく見る。

安らかな寝顔だ。苦痛に歪んでいないだけ、まだマシなのか。

葬式、そして通夜を終え、俺は母さんと別れた。

「はやと……」

家でアイツが俺を呼ぶ。どうでもいい。

「俺は出ていく。アンタなんか、もう父親でもない」

母さんがいない今、この家は完璧に俺1人になってしまおう。
大事な時にもいない男なんて、父親でも夫でもない。

「はやと！」

俺はアイツを無視し、事前に用意した荷物を持って家を出た。
けど、行く宛てなんか何処もなかった。

家を出て数日後、俺は今住んでいるアパートの前で遂に倒れた。

「……んっ……？」

気が付くと、見知らぬ天井が目に入る。

「ここは……？」

「あ？気が付いたか」

体を起こすと、知らない男がいた。

「ここは俺ン家だ。ちゅーか、何で家の前で行き倒れてたんだ？」

「行き倒れ……ってことは、ここはアパートか？」

「おう！ここは「夢見荘」！んで、俺が大家の海崎隆也だ！」

なんか胡散臭いな。だが、アパートなら丁度いい。

「頼みがある。俺をここに住まわしてくれ」

「は？」

俺はこれまでの経緯を海崎さんに全部話した。

「金は無いけど、働いて稼いで返す！生活費も自分で何とかする！だから、ここに住まわしてください！」

「んー、そりゃ部屋も空いてるけど……テレビねえぞ？」

「見ない！」

「扇風機も炬燵もねえぞ？」

「夏は全裸で過ごすし、冬は毛布に包まって過ごす！」

「洗濯機……」

「手洗いしてやる！」

「……いや、共用でいいか」

海崎さんは溜息を吐いて、俺にある紙を渡した。

「ここに名前を書け。判子は……指印でいいか」

ガリッ！

「血印じゃなくていいっての！朱肉あるし！」

「……って……早く言えよ！」

こうして、俺は新たな住処と少し奇妙な恩人を手に入れた。

「……何で俺を住まわしてくれたんだ？」

「んー、少年の夢を壊したくなかったから、か？」

「キメエ」

「テメー、追い出すぞコラア！」

「……………これで全部だ。情けないだろ。母親の死に未だに向き合えず、勝手に父親を憎んでいるんだ」

自分の問題に向き合えず、ずっと逃げてきた。

空を見上げるのだって、天に昇った母さんに無意識に会いたがっているから。

「……………」

オイ、ひよつとして寝てるんじゃないか？

「ぐすつ、はやと君、そんなことが……………」

いや、泣いていた。

「何でお前が泣くんだよ」

「ゴメンね……………」

「謝んなくてもいいっての」

とりあえず、頭を撫でてあやした。

全く……………でも、少し気が楽になっていた。

溜め込んだものを吐き出したから、かもな。

「でも、はやと君はお父さんとどうしたいの？」

「っ！？」

何で急に確信突くかね、この娘は。

「……………話し合うのが怖いんだよ」

「ん〜、じゃあ海崎さんと一緒なら?」

「これ以上迷惑かけらんねえよ」

「えっと……………」

つかさは今度は困ってしまった。

「お前が一緒ならいいけどな」

「ふえ?う、うん!いいよ!」

「……………え?」

何気なく言った言葉なんだけど……………。

けど、つかさと一緒なら大丈夫な気がする。

「ああ、分かったよ」

流石に眠いので、つかさを部屋に返した。

「はやと君」

去り際に、つかさが振り向いて言った。

「頑張つてね!」

その瞬間、つかさの姿が母さんと被って見えた。

…………… 今度の選択は、間違いじゃないと信じたい。

第22話「そんな訳」（後書き）

どうも、銀です。

第22話御覧頂きありがとうございます。

今回は柊家に世話になるはやとと、はやとの過去話でした！
長いこと引つ張りでしたが、これではやとの謎は全て明かされました。

母親が今のはやとを構成する上で大きく影響してたんですね。しかも歪んだ形で。

はやとが家出した時期は3月下旬。あき達が事情を知らないのも無理ありません。

因みにはやとは携帯を持っていますが、その金は海崎さんが出しています。勿論、後で全額返す約束ですが（笑）。

次回ははやとvs親父です。果たして、仲直り出来るのか！？

第23話「踏み出す一歩」

（はやと視点）

朝は珍しくはつきりと目が覚めた。

時間は6時半。

今日は月曜だが、桜藤祭の振り替え休日だ。体を起こした所で、俺はつかさの家に泊まっていたことを思い出した。

「……………あー、そうか」

そして、昨晚のこととも思い出す。

つかさに俺の過去を話し、父親と話し合うことを約束してしまった。何であんな約束を……………。

後悔していると、昨日去り際に言われたつかさの一言を思い返す。

『頑張つてね』

「……………」

ま、しちまつたモンは仕方ねえな。

俺は布団を畳んで着替えると、歯を磨きに洗面所へ向かった。

「あ、はやと」

洗面所には先客がいた。

こんな休日にかがみも早起きなこった。

「珍しいじゃない、アンタがこんな時間に起きるなんて」
「まあな」

自分でもそう思うよ、本当。

「じゃあね」

「あ、そうだ」

顔を洗い終えたかがみが立ち去ろうとすると、俺はふと呼び止めた。

「今日、俺の事情を話してやる」

「え？」

つかさに話しちまったし、これ以上黙ってる理由もない。

「いいの？」

「ああ。そろそろ一歩踏み出す時かもしれないしな」

敢えて、つかさに話したことは黙っておいた。

夜中につかさと2人部屋の中にいたなんて、この姉が知ったら殺される。

「ふーん、分かったわ」

頷いて、かがみは部屋に帰っていった。

そして朝食の後、俺は柊家に全てを話した。

いのりさんだけは、仕事があるからいなかったけど。

母さんのこと、アイツのこと、俺のこと。

「……以上です」

俺の情けない話を、皆黙って聞いていた。

「そうか……大変だったね」

最初に口を開いたのは、ただおさんだった。

「今までよく頑張ったわね」

「何ていうか、意外だったわ」

「うん、すごいよ」

みきさんも、かがみも、まつりさんも俺を責めなかった。自分勝手な理由でキレて、この家にも迷惑をかけたのに。

「それで、これからどうするんだい？」

ただおさんの問い掛けに、俺は真剣に答える。

「一度……話し合ってから決めます」

一瞬躊躇ったが、つかさを見ると笑顔で頷いてくれたから、はっきりと言えた。

「うん、それがいい」

「ありがとうございます」

最後に俺は、頭を下げて礼を言った。この家族には世話になりっぱなしだ。

荷物は置いていくよう言われた。
取りに来た際に報告が出来るし、また喧嘩になっても戻ってこれる
ように、とのことだ。

俺とつかさは俺の実家に向かった。

あの日以来の家……正直また気分が悪くなる。

「大丈夫？はやと君」

隣でつかさが心配してくれた。

何でコイツはこんなにも優しいんだろうな。
俺なんか協力しても、徳なんてないのに。

「ああ、ありがとう」

でも、悪くない。

普段は頼りないけど、不思議と今は心強い。

「着いた」

目の前にある、あの日のままの家。
標識には「白風」の文字。

「ここがはやと君の……」

俺は合鍵を使い、家の中に入った。
予想通り、家には誰もいない。
アイツは仕事があるからな。

「はやと君……？」

つかさの心配そうな声を背に、俺は家にあがる。

「お、お邪魔します！」

後からつかさも入ってきた。

中もあの時のままだった。

まさか俺の部屋までそっくりそのままだったなんてな。

埃を被った勉強机の上に、皺だらけの合格証明書。

「……………」

何も言わないまま、俺は居間へ向かう。

居間もあの時と同じだった。

ちよっと物の位置が変わっていたり、汚くなっていたけど。

だが一番変わっていたのは、あの時にはなかったものがあることだった。

「母さん……………」

母さんの仏壇。

周りは綺麗に掃除してあって、飾ってある花は新しいものだ。アイツが用意したんだろうか。

「ただいま、母さん」

俺は焼香を揚げ、手を合わせた。

「この人がはやと君のお母さん……」

つかさも隣で合掌してくれた。

特にすることがなくなってしまった俺達は、つかさの思い付きで掃除をすることにした。

特に俺の部屋は手を付けられていなかったから、かなり汚かった。

「はやと君、掃除機どこ？」

「クローゼットの中だ、多分な」

「あつたよ〜！」

2年前に出ていった家なのに、何処に何かがあるかまで覚えているなんてな。

我ながら恐ろしい。

「あ、これ……」

つかさはクローゼットから更に何か持ってきたらしい。

「何だ……！？」

それは俺のアルバムだった。

「ねえ、見てもいい？」

「ダメに決まってるだろ〜！」

顔を真っ赤にしながらアルバムを取り上げようとする。

しかし、つかさは既に開いていた。

「わあ〜、はやと君可愛い〜」

「見るなああああ!!」

もし翼があつたら、逃げ出したい……。

結局、アルバムを全部見られてしまった。

「いつそ殺せ……」

「だ、ダメだよ〜」

心折れた俺を慰めるつかさ。

いや、お前の所為なんだけどな。

「でも、赤ちゃんの時はやと君可愛かったよ〜」

全然嬉しくねえよ。

つかさは再び引き出しの漁っていた。まだ探す気が。

「もうアルバムはねえぞ」

「ふえ？何で？」

俺のアルバムは赤ん坊の頃だけだった。

「話したろ。母さんが入院してたって」

「あ……」

俺の写真を撮る人間がいなかった。

アイツは仕事ばかりだったしな。

「ゴメンね……」
「気にすんな」

しゅんとするつかさの頭を撫で……ないでペチンと叩いた。

「ひゃ!?!」

「ほら、掃除すんだろ?」

「う、うん!」

昼飯は冷蔵庫に材料だけならあったので、つかさに頼んで作ってもらった。

「悪いな、つかさ」

「ううん、私料理大好きだし」

つかさの料理してる姿を見るのは2回目だ。前は風邪引いてたからあまり覚えてないが。

「く」

鼻歌なんて歌いながら料理している。

『女の子に料理を作ってもらう姿が何とも言えない!』

……成程、才雅が前に言っていたことも分からなくない。

「出来たよ」

料理中のつかさを見ながら片付けをしてると、完成品を運んできた。

「焼きそばか」

「うん。ちよっと簡単なのになっちゃったけど」

「いやいや、充分だろ。野菜もちゃんと入ってるし。」

「頂きます」

まずは一口。つかさが無言で感想を待っていた。

「……美味しい」

「本当？よかった」

焼きそばってこんなに美味しいものだっけ？

夏祭りに食った海崎さんの奴より千倍は美味かった。

「ご馳走様！」

すぐに平らげてしまった。

流石に洗い物は俺が引き受け、終わり次第家の片付けを続けた。

日も暮れ時。

結局、俺達は1日中家の掃除に追われていた。

あの野郎……仏壇以外も掃除しろっての。

「お疲れ様」

つかさがお茶を持ってきてくれた。

コイツも大分家を把握してきたらしい。人の家なのに。

「サンキユ」

「お父さん、帰ってきたらびっくりしちゃうね〜」

そりゃ勝手にあがりこんで掃除したら誰だって驚くな。

「さて、帰るか」

「え？」

アイツがいないのに話し合いもクソもない。
仕事から帰ってくるのも夜中だろっし。

「俺達がここに居たって仕方ないだろ？」

「うん……」

残念そうな顔をするつかさ。気持ちは分からなくもない。

「悪いな。無駄に時間とらせて」

「うっん、約束だもん」

つかさの頭を撫で、帰り支度をする。

「……アルバムは置いていけ」

「はっ！？」

柊家への帰り道。

「……つかさ、ここにいろ」

「ふえ？」

俺は不意につかさを路地に隠す。

「あ……はやく」

予感的中だ。俺の目の前には、アイツがいた。

「よお」

拳を強く握り締める。

本当は今すぐにでも殴り飛ばしたい。

この場から逃げ出したい。

けど、すぐ傍にはつかさがある。

だから、逃げない。

「話をしに来た」

アイツは酷く驚いていた。

昨日まで頑なに拒んでいた息子が、話をしようなんて言い出した所為だ。

「……ああ」

アイツは力なく笑った。

「あの日、何で来なかった？」

俺は避けていたことを聞いた。

あの時は言い訳だと片づけていたことを。

「アンタは俺達なんてどうでもよかったのか？」
「違う！」

アイツは俺の言葉を強く否定した。

「俺は、俺はみどりの病気を治してやりたかった！言い訳だと言われるかもしれないが、それでもみどりを愛していた！」

アイツの叫び声なんて初めて聞いた。
今までは俺ばかりが叫んでいたから。

「お前もだ！はやと！」

俺は軽くシヨックを受けた。

アイツが、俺を愛していた？

「みどりを治してやる為には金が必要だった……だが、間に合わなかったんだ。あの日だって、いつも俺は……」

ああ、そうか。

母さんの言っていたことは間違ってたなかったんだ。
全部母さんの為だった。間に合わなかっただけなんだ。

「すまない……お前にも寂しい思いをさせた」

アイツは涙を流しながら頭を下げる。

この人も、ずっと頑張ってきたんだ。

空回りして、間に合わなくて、それでも足掻いていた。

そして、勝手にいなくなつた俺なんかを探していたのか。

「……頭をあげなよ」

俺は静かに呟く。

「俺も謝らなきゃな、父さん」

「！」

俺は気付けば微笑んでいた。

母さんの言っていたこと、父さんの本当のこと、全部分かったからかな。

「勝手にキレて、いなくなつて。母さんとの約束も破つたし。ゴメ

ン」

「はやと……」

「でも、まだ帰れない」

「え……？」

近付いてきた父さんの動きが止まる。

「気持ちに整理が着かないんだ。俺はこのままあのアパートで暮らしたい」

俺の我儘だけど、まだ父さんも自分も許せない。

暫くは気持ちと向き合つて、決着を着けたい。

「はやと……ああ。俺も散々お前を待たせたからな」

「ありがとう」

「たまには帰ってこいよ？」

「分かつてる」

最後にこれだけ会話を交わして、涙を拭いながら父さんは俺とすれ違つて家路に就く。

ここから、今までと違つて関係が始まるんだ。

ふと気付くと、路地から泣き声が。

「ぐすつ、よかつたよぉ〜！」

「何でお前が泣いてんだよ」

部外者のつかさが泣いていた。

いや、マジで何で？

「だつて……はやと君が泣かないんだもん……」

俺の代わりに泣く奴があるかよ。

「でも、よかつたね……誰も悪くなくて」

「誰も？」

「はやと君も、はやと君のお父さんも」

……相変わらず俺の心配までしてくれるのか。

涙を流しながら、つかさはいつものように優しく微笑む。

「あれ？はやとく」

「つかさ」

ギョツ！

俺の涙はあの時に枯れた……はずだった。

俺は本当に久しぶりに泣きながら、つかさに抱き付いていた。

「は、はやと君!？」

顔を真っ赤にして慌てふためくつかさ。

「悪い……暫く、このままにさせてくれ」

そう言うと、つかさは黙って抱き返してくれた。

何でお前はこんなにも優しいんだろう。

けど、そんなつかさと出会えたから、俺は今日まで楽しく毎日を過ごすことが出来た。

つかさがいてくれたから、今日も父さんと分かりあえた。俺の傍にはいつもつかさがいてくれたんだよな。

気付けば、俺はつかさが好きになっていた。

散々泣いて落ち着くと、お互いに目が腫れていたの、俺達は近くの公園のトイレで顔を洗ってから帰った。

「「ただいま」」

「お帰りなさい。はやと君、どうだった？」

早々にみきさんが出迎えてくれて、成果を聞いてきた。

「仲直りは出来ました」

「本当!？」

「え、何々?成功?」

物陰からかがみとまつりさんが出てくる。
隠れて聞いてやがったか。

「こらこら、質問攻めにしたらはやと君が可哀想でしょ」
「ちえ〜」

子供かアンタ等は。

「そろそろ夕食にするから、手洗ってきてね」
「はい」

報告ついでに俺も夕食を頂くことになった。

「あれ？2人共、更に仲良くなってるない？」

まつりさんがそんなことを口にする。

「何ですって！？はやと！つかさに何もしてないでしょうね！？」
「イデデ！？してねえよ！」

妹の貞操に敏感な、凶暴な姉が反応して俺の耳を引っ張った。

素直に「妹さんに抱き付きました」なんて言ったら殺されかねないので、勿論嘘を吐いた。

みきさんの美味い夕食を頂いた後、帰ってきたいのりさんも含め、俺は本日の経過報告をした。

「これがその時のアルバムだね」
「置いてけって言っただろ！？」

途中アホの子による恥晒し大会が行われたが。

「……………以上です」

話し終わると、今朝同様に沈黙する。

「仲直り出来て良かったじゃないか」

「ええ、良かったわ」

ただおさんとみきさんは一安心といった様子だ。

赤の他人をここまで心配してくれるなんて、本当にいい人達だ。

「で、つかさとの」

「ありませんって」

いのりさんまでそっち方面に話を持っていくこととする。

アンタ等、俺達より自分達の心配をしろよ。

それから、流石にお世話になりすぎだと思い、当初の予定通り帰ることにした。

みきさんには引き止められたけどな。

「息子が出来たみたいで楽しかったわ」

「……………」

「心臓に悪いこと言わないでください。かがみも睨むな」

……………つかさに惚れたのは事実だけだな。

「つかさ」

家の前で2人きりになり、つかさに話し掛ける。

「もしお前に会えたことが奇跡だってんなら……」

母さんの言葉を思い出す。

「ほんの少しだけ、信じてみてもいいかもな」

「うんっ！」

つかさは嬉しそうに頷いた。

翌朝、学校にて。

「おっす」

「おはようっ」

何事もなかったかのように登校した。

「はやと、お泊りはどうだった？」

「あ？」

「つかさから聞いたよ？」

……はずだったのだが、何故か事情を知っていたオタカツプルに絡まれる。

「つかさ……」

「ご、ごめんねっ！」

口の軽さが自分の首も絞めてるってことを教えてやらなきゃな。

「別に。楽しかったけど？」

「それだけ？」

「進展なし？」

「何が」

「……はあ〜」「」

意味あり気な溜息がムカつく。

キーンコーン

「お前等席付けー」

こうして、再び日常が始まる。

「はやと、屋上は行かないの？」

みちるが珍しそうに聞いてきた。

「……今日はいいかな」

教室の窓から見上げる空では、母さんが微笑んでいるように感じた。

第23話「踏み出す一歩」(後書き)

どうも、銀です。

第23話御覧頂きありがとうございます。

今回ではやとの過去編は終了です！桜藤祭編と連続だったから長かった！やっぱ話に一区切りです。

さてさて、はやとがやっとなつかさへの恋心を自覚しました。告白はまた大分先ですけど。

そしてこれから出番が減ります(笑)。

次回は付き合い始めたあきとこなたの話です。

第24話「正直なあなた」

（はやと視点）

桜藤祭が終わり、また日常が帰ってきた。
黒井先生の授業、眠る徹夜組、鉄拳制裁。

で、俺と風樹は屋上でシエスタを楽しんでいる。

「平和だな……」

「ああ……」

こうして、コイツと昼寝をするのも久々だ。
そう思っているのも束の間。

「はやと君!」

「ふー君!」

バンッ!とドアを開け、連れ戻し部隊がやってきた。

「授業サボっちゃダメだってば〜!」

頬を膨らまして怒るつかさと羽音。

ぶっちゃけ怖くもなんともない……が、俺達はどうもコイツ等に弱いらしく。

「ヘーヘー、分かりましたよ!」

観念して起き、屋根から降りた。

桜藤祭後の一件以来、どうも俺が変わったと言われている。そこそこに優しくなったとか、笑うようになったとか、つかさに逆らえなくなってるとか。

皆の予想は大体合っていた。

つかさのおかげでちよっとは角も取れ、俺はつかさが好きになっていた。

……目の前には巨大な壁が立ちはだかっているが。

あきでさえ、こなたと付き合えたんだ。俺にもチャンスは……

「はやと！また屋上！？」

出たよ、過保護が。

「つかさの手を患わせる真似はやめなさいよ！」

「呼びに来なきゃいいだろ」

「ダメだよ」

両側から責められて、耳を塞ぎたくなる。

「むう！羽音に呼びに来させるな！」

「来なきゃいいだろ」

「だってふー君すぐ逃げるんだもん！」

風樹に助け船を頼もうとしたが、あっちもあっちで大変らしい。もし翼があつたら、楽に逃げられるのになあ……。

〈あき視点〉

今の俺は、正に幸せの絶頂だった。

一月前までは「爆発しろ」と言う側が、まさか言われる側になるな

んてな。

「で、具体的にどうなんだ」

やなぎが尋ねてくる。

「そうか、聞きたいか！俺とこなたのイチャイチャぶりを！」

「いや、やっぱり別にいい」

話を振ってきたくせに冷たいな。

「まず登下校！」

「勝手に話すのかよ」

やなぎんのツツコミを軽くスルーし、俺は話し始めた。

「勿論一緒！通学路で手を繋いだり！」

「いや、家違う方だし」

「昼！こなた手作りの愛妻弁当を」

「「愛妻」じゃないし、そもそも私弁当作らないよ」

「放課後！人気のない教室でキャツキャウフフの」

「さっさと帰るじゃん」

「……その後はラブラブデート！」

「ゲマズやメイトだけどね」

……こなたさん。貴方は本当に俺の彼女さんでしょうか？

「以前と何一つ変わらないじゃないか」

「そーなんだよねー」

現実に打ち拉がれる俺を前に、こなたはアツサリと言い放つ。

「大体あつきー、ウチにすら来てないじゃん」

「ぐはっ!？」

トドメの一言貰いましたー!

そう、俺は泉家にまだ行っていない。理由はあの父親だ。

ノコノコ出向いて「娘さんとお付き合いさせてもらってます」なんて言ってみる？

二度とお天道様を拝めなくなる。

「要するにヘタれているのか」

「どうしようもないよね」

凹んでいる俺に容赦ない言葉を投げ付ける2人。

あーもう!分かりましたよ!

「行きやいいんでしょ!今日の帰りにこなたン家に寄ってくから!」

「…………え?マジ?」

勢いで言うと、何故かこなたが狼狽えた。

「えっと…………急だから、その…………」

何だ?いきなり萎らしくなったな。

「部屋が汚いとかなら気にしないぜ?寧ろ下着とか持ちか」

次の瞬間、強烈なアツパーを食らった。

あの動き…………世界を狙える!

この後土下座し、「良いというまで家に入るな」ということで許してもらった。

「へっくし！」

で、外で待たされること30分。

流石には入れてくれてもいいんじゃないスかねえ!?

もう肌寒くなる季節。他人の家の前で30分も待たされる高校生……。

「洒落になんねえ……」

その時、ガチャリと泉家の堅い扉が開かれた。

「もういいよ」

そこには、すっかり普段着に着替えたこなたの姿が!

「遅くなかったか!？」

「ごめんごめん、あき君のこと忘れてたよ」

……段々と貴方の恋人であることに自信がなくなります。

家に入ると、普通に片付いていた。

「親父さんは？」

ここで最大の障害物について尋ねてみた。

「買い物だと思っよ」

イエス！これはもしかやチャンス！

「あ、変な真似したら社会的に殺すから」

俺の嬉々としたふいんき（何故かry）を察したのか、こなたは振り向きもせずに恐ろしいことを言い放った。
こなたの部屋に入ると、正座して待つように言われた。

「予想はしていたが、なあ……」

俺はこなたの部屋のクオリティに驚いていた。
勿論、俺の部屋だって負けぢゃない。

フィギュア、PCゲー、ラノベ、ポスターetc。

正直、女の子の部屋ぢゃない。
けど、それ以外は汚れた感じが一切ない。
恐らく、待たされていた30分の間、必死に掃除したのだろう。

「……素直ぢゃないな」

そこが可愛いんだけどな。

「お待たせ。何か触ってないよね？」

「ごんだけ信用ないんだ、俺は」

言われた通り正座で待ってたぞ！

それから、こなたの淹れてくれたコーヒーを飲みながら今期のアニメや新発売のグッズの話で盛り上がり、ゲームでの対戦に熱中していると時間はあっという間に過ぎていった。

「カモン！真紅眼の闇竜！」

「じゃあ超融合で」

「Noooooo!?!」

「ただいまー」

すると、親父さんが帰宅してきた。

あれ、やばくね？

「こなたー、お友達が来てるのかー？」

親父さんはこちらに近付いてくる。
つてか、靴が明らかに男物だから気付いてる可能性大。

アレ、ヤバクネ？

しかも、桜藤祭の劇で顔が割れてる挙げ句、キスシーンまで披露している。

ウン、ヤバイネ！

「おかえりー。うん、ちょっと待っててー」

こなたはいつもの調子で声をかける。

すると、親父さんは戻っていった。
流石に娘の部屋に入っては来ないか。ヒヤヒヤしたぜ。

「じゃ、挨拶に行こうか」

ええええええええええ！？

危機を乗り越えたかと思いきや、死の宣告！？

「だって、そういう話だったじゃん」

チクショー！すっかり忘れてた！

「で、でも心の準備が……」

「今から彼氏紹介するからー」

こなたああああああ！？

下で盛大にずっこけるような物音がした。

……遺言でも考えておこう。

楽しいはずの彼女のお宅訪問。

「え、えー……こなたとお付き合いをさせて頂いてます、天城あき
です」

それが、一瞬で修羅場に。

俺は親父さんの部屋（書斎？）で正座していた。

痛い。親父さんの視線が痛い。

「君は確か、劇でこなたと……」

「はい……」

「うん、キスしたよ」

何でこなたはあっけらかんとしてるの！？緊張しろよ！

「あれはやっぱり本当に……い、いつからなんだ？」

親父さんの肩が震える。

うわぁ、めっちゃ動揺してるよ……。

「こ、告白したのは劇のすぐ後で」

「じゃあキスした責任を取るつもりで付き合ったのかい？」

「それは違います！」

親父さんの言葉に、俺はすぐに反応した。

告白は後出しだったけど、それは絶対に違った。

キスしたから付き合う、なんてバカみたいな真似を、俺もこなたもしない。

俺はキスシーンを意識して、バカみたいに失敗を続けた。

それは、それより前からこなたを意識してたからであって。

「あき君……」

気が付くと、こなたが顔を赤くしてこっちを見ていた。

親父さんも目を見開いている。

「……もしかして、今の口に出てた？」

こなたはコクリと頷いた。

うわあああああ！？

めっちゃ恥ずかしっ！？

「お、お茶淹れてくるね！」

そう言つて、こなたは部屋を出た。

ちよ、逃げるな！親父さんと2人にするなああああ！

「……………」

この沈黙が怖い！さっきと比べて目付きが悪くなってるし！

「天城君……だっけ？」

「……はい」

「君の趣味は？」

「……ゲームとか、アニメです」

ジツとこつちを見ている。

こなたがああだから、通じると思ったが……ここはマトモなのを答えるべきだったか！

「そうか、君も……」

「……………」

再び沈黙が続く。こんな空気、もう耐えられない！

クソッ、何か話題を……！

キヨロキヨロ部屋を見回すと、親父さんの後ろにある本棚に知っている本があった。

「えっと……そ、そうじろうさんも読むんすか？その本」

純文学っぽい本で、俺はあまり読まないんだけど、俺の親父に勧められて読んだことがあった。

「ああ、これ？これは俺が書いたんだ」

な、ええええええええ！？

親父さん、小説家だったの！？

「でも、天城君ぐらいの子が読むなんて珍しいね」

「はあ、親父に勧められて……」

今だけアホ親父に感謝するぜ！

そして、俺は親父さんに他の著書を勧められたり、サブカル的な話題で盛り上がってしまった。

この件で、親父さんは俺とほぼ同類だということが分かった。

「いつのまにか仲良くなったみたいだね」

すると、こなたがお茶を持って戻ってきた。

お茶淹れるにとしては長すぎませんかあ！？

「……コホン。でもあき君、こなたはそう簡単に渡せないぞ！」

すぐに父親らしい感じに戻った親父さん。
でも、いくらかトゲは取れたっばい。

「俺も諦めませんよ」

不適な笑みで答える俺。

こうして、挨拶は一応無事に済んだ。
ついでに新しいヲタ仲間も増えた。

「いや〜、一時はどうなることかと」

「それ、俺の台詞だから！」

いきなり仕組んだのもこなただろうが！
部屋に戻り、一息吐くこなたに突っ込む。

「…………でも、あき君が私を大」

「こりゃ、お仕置きの1つでもいれなきゃな」

「……………」

手をワキワキさせながら考えを巡らせていると、こなたにジト目で
睨まれた。

「な、何だよ？」

「はあ〜……………」

何で飽きられてるの！？おーい！？

結局えっちいことは出来ませんでした。トホホ…………。

「って訳で、こなたの家でイチヤイチャしてきたんよ」
「どの辺がだよ」

翌日、早速やなぎん達に俺の武勇伝を聞かせてやった。

「親父さんに真摯に向き合い、愛を語ったじゃん」
「胡散臭い」

はやと、お前にだけは言われたくない。

「でも、彼女がいるって楽しいんでしょ？いいな」
「いやいや、みっちーはより取り見取りでしょうが。」

「更に、今日はこなたからお弁当をもらがべっ!？」

大声でお弁当自慢をしようとしたら、何処かから筆入れが飛んできた。

「あき君、そういうのは大声で言わないようにね」
「イテテ……すみません」

こなた、恐るべし。
とりあえず怖かったので、謝っておいた。

「だが、愛妻弁当があれば、俺は復活出来る!」

俺は勢い良く弁当箱の蓋を開けた。
そこには、こなたお手製のご飯が……

「菓子パンだな」

「菓子パンだね」

「菓子パンだ」

声を揃える3人。ま、まつさか。

しかし、どう見ても袋に入ったアンパンが弁当箱に納まっていた。

な、何だこの手の込んだ手抜きはああああ！？

「てへっ」

てへっ、じゃねええええ！

翌日から、愛妻弁当は消滅したのであった。

堂々としたラブラブ生活にや、まだまだ遠いか……。

第24話「正直なあなた」(後書き)

どうも、銀です。

第24話御覧頂きありがとうございます。

今回はあきとこなたの話でした。

こなたのあきへの態度は、そうじろつへのそれと近くしています。
もっとキツいかも(笑)

そうそう、「すた だす」。

あと9話で終わります(爆)。

次回はやなぎんとかがみんの話です。

第25話「火花散る」

（やなぎ視点）

アイツと俺は小学校時代からの腐れ縁だった。

最初は喧しい奴だと思っていた。

バカで、バリバリのアウトドア派。明るくクラスの中心的存在。俺とは本当に正反対だ。

俺は所謂ガリ勉タイプ。読書とボードゲームが趣味で、勉強は学年トップ3には入る。

けど、運動音痴で病弱。風邪を引いて休むことはよくあった。

「やなぎ、お友達よく？」

「うっす！」

「いや、友達じゃないから」

風邪がよくなる頃になると、何故かアイツが押し掛けて来た。

「もやしはやっぱダメだ、うん」

「大きなお世話だ」

「よし、走るぞ」

俺の貧弱さをからかっては強引に外へ連れ出し、俺に運動をさせた。当然俺は嫌がったけど、気付けば不思議と風邪を引くことは少なくなっていた。

「ってことがあってさ！やなぎんは本当体力ないよな」

「頭の中まで筋肉のお前に言われたくない」

教室でもよく俺に絡み、漫才のようなやりとりをした。正反对だった俺達は、いつの間にかセット扱いされていた。中学に進んでも、俺達の関係は変わらなかった。

「2人は親友なん？」

「いや、腐れ縁」

一緒にいるけど、親友になった覚えはない。

「帰りに本屋寄ってくぞ」

「まあ、やなぎんつたらえっちい本買うのに付き合えって？」

「違う！！読んでる小説の新刊が出たから買うんだよ！」

親友と呼ぶにはあまりに雑な付き合いだ。

「やなぎくん、ゲームしようぜ」

「おまつ、学校に何持ってきてんだよ」

「P P」

「正直に答えんな！」

そう、「腐れ縁」なら深くは干渉しないだろう。

俺達の間接関係を現わすのに相応しい言葉だった。

「陵桜行けば親父がPC買ってくれるんだとさ！」

「無理だな」

「フツ、俺の本気を見せる時だ！やなぎ！」

「な、何だよ……」

「勉強教えて！」

「死ね」

この「腐れ縁」がまさか高校まで続くとは思わなかったけどな。

「ふーん、昔から仲良かったんだ」

「そんなんじゃない」

そして現在。

俺はかがみに、俺とあきの関係について話していた。

「けど、本当は親友だって思ってるんじゃないの？」

「まさか」

あんなのと親友扱いされたら困る。

「やなぎんは俺がいないとダメだからね」

「ちよつと待て、いつからそこにいた」

いきなり横に現れたあきに、容赦なく突っ込む。

音もなく入って来たぞ、コイツ。

「説明しよう。アッキーはやなぎん分が不足すると、足音もなく近付くことが出来るのだ」

「迷惑だからやめろ」

「うわーん、やなぎんが冷たいよ」

「はいはいワロスワロス」

あきはこれまたいつの間にかいた、こなたに泣き付く。

しかし、こなたはそれをスルー。

「茶番はいいとして」

「自分で言うな」

あっさり復活したあきに、今度はかがみが突っ込んだ。

「やなぎんは俺とつるむまで、病弱だったからな」
「悪かったな」

こんな体力バカに付きまとわれたら、健康にもなる。

「ま、俺の話はそれくらいにして……今はお2人が気になるなあ」
「な、何だよ」

あきとこなたは俺とかがみを交互に見る。

「最近仲良くない？」

「よく一緒に本屋に寄るし」

確かに、俺とかがみには読書という共通の趣味があった。

この前も、かがみからラノベを勧められ読んでいたところだ。

「アレはこなたがあきと帰るっていうから、やなぎと行っただけよ」
「俺も新刊が欲しかったしな」
「本当かな？」

反論する俺達に、こなたはまだニヤニヤした視線を送る。

「自分達がくつついたからって、余所にまで飛び火させるな」

「羨ましいなら羨ましいって、言ってもいいのだよ。素直になりたまえ」

「殺したい」

仕方なく、素直に自分の気持ちを言つと、あきはずつこけた。

最近、このバカカップルの調子の乗り方がエスカレートしている気がする。

俺とかがみで説教をかまし、その時は終わった。

〈はやと視点〉

桜藤祭が終わり、ホツとするのも束の間。

「じゃあ体育祭の出場科目の話し合いをするで」

この学園の体育祭は何故か桜藤祭が終わって、すぐにやるらしい。ふざけた話だ。

因みに、科目は全員リレーに学年対抗リレー、パン食い競争、障害物競走、二人三脚……等々、走ってばかりだ。

「はい」

まず、手を挙げたのはみゆきだった。

みゆきはおっとりしてるけど、運動神経いいからな。何でも出来るだろ

「障害物競走に立候補します」

障害物か……意外なチョイスだな。

まあ、ただ走るより遊び心があるけどな。

「ほな、障害物は高良でええか？」

「やったことないので楽しみです」

このまま、障害物競走はみゆきに決まるかと思いきや……。

「みゆきさんは身体の凹凸激しいから障害物はダメだよ。いろいろくぐるし」

という、こなたのセクハラめいた一言に、教室内に笑いが溢れた。一部の男子は興奮してるし。

当のみゆきは顔を真っ赤にしていた。可哀想に。

結局、この発言の所為でみゆきは学年対抗リレーの選手になった。じゃあ障害物は誰がやるか？

「面白そうだし、僕がやろうかな」

もう1人の完璧超人、みちるだ。

みちるも白い肌と裏腹に体育は得意な方だ。大丈夫だろう。

「じゃあ、檜山で決定な」

「ゴメンね、役目を奪っちゃって」

「い、いえ……」

あーあ、まだ顔赤くしちゃってるよ。

ま、みゆきの仇はみちるが取ってくれるぞ。

その後も着々と話し合いは進んでいった。

パン食い競走は才雅と無卯磨。単に食い意地が張ってるだけだが、男子の対抗リレーは風樹。足速いからな、アイツ。

大玉転がしには霞章奈。一部男子が……いや、言及はやめよう。そして、二人三脚は……。

「俺と！」

「私！」

ヲタカップルだ。

確かにコイツ等の息はピッタリだ。いい意味でも、悪い意味でも。ただ、1つ問題があった。

「お前等の身長差じゃ、無理じゃね？」

「……!?」

固まる2人。いや気付けよ。

あきは一般的な高校男子の身長だ。

しかし、こなたは小学生と言っても過言ではない。そんな2人が肩を並べて走れるか？

「ふっ……大丈夫だ。俺達の愛の力で！」

「あ、あき君……」

格好付けるあきと、感動するこなた。

もう好きにしてくれ。

こうして、体育祭の話し合いは無事に終わった。

ん、俺？

個人種目なんて面倒なモン出ませんが、何か？

放課後。

やなぎ、かがみと合流し、いつも通りの帰り道。

「体育祭に向けて、髪切ろうかなー。思い切ってショートとか」

「えー？お姉ちゃん髪切るの！？せつかく今まで維持してきたのに」

ふと、かがみが言い出した言葉につかさがショックを受ける。

いや、そこまでショックか？

「いや……何気なく言ったただけだけど」

「今の意味深な反応、絶対男がらみだ！」

「何でもそっち方面に結び付けるなっ！つかさも余計なこと言うなっ！」

こなたが目を輝かせて食い付くが、まあ世の中そんなに上手くは進まないってことだ。

「でもかがみが髪切ると……うーむ」

ふむ、試しにツインテールがなくなったかがみを想像してみた。

『あこよ』

……ダメだ。特徴がなさすぎる。

「やめておけ、かがみ」

「あかん、あかんて……印象めっちゃ薄っ。元が元だけに」

「シヨックデカいわぁ……」

「つまらない顔で悪かったな。だからしないっつの」

俺達に止められ、かがみは呆れ顔で返した。

とりあえず、かがみの個性を守ることには成功したな。

「そっぴやみゆきさんは対抗リレーなんだぜ」

「へえ。ま、分かるけど」

あきが自慢そうに語る。

みゆきなら安心した勝負運びが出来そうだしな。

「最初は障害物競走になるはずだったんだけどね」

こなたはみゆきの経緯を話した。

アレは……嫌な事件だったな。

「……って言ったらリレーになったよ。みゆきさん速いし」

「お前それ中年オヤジのセクハラかよ……最悪だ。可哀想に」

こなたの話を聞いたかがみが同情していた。

「で、他のメンバーは？」

やなぎが尋ねる。そっぴやクラスが違うから、コイツ等とは争うことになるんだよな。

ま、俺にはどうでもいいことだけだ。

「みちるが障害物競走、こなたが100m走と、あきと一緒に二人

三脚だ。俺とつかさは全員リレーのみ」

と、説明してやると、やなぎとかがみが固まる。
どうかしたのか？

「実は、俺とかがみも二人三脚に出るんだ」

「……ハア!？」

俺達はかなり驚いていた。

だって、もやしだぜ？

全員リレーですら足を引つ張りかねないやなぎが、何でかがみの足を文字通り引つ張るような真似を!？

「はやと君、声に出てるよ!」

おっと、いけねえ。

つかさに突っ込まれるなんて……。それぐらい驚いたってことか。

「よし、帰って祝杯あげようぜ!」

「お前等なあ!」

あきはもう勝った気でいるし。

俺達の態度に、やなぎがついにキレた。

「はいはい。で、何でもやし君が二人三脚に?」

「お前、後で殴るわ」

あきの嘗めた態度に怒りを覚えつつ、やなぎは経緯を話し始めた。

〈やなぎ視点〉

あきは後で殴るとして、俺が個人種目　それも二人三脚に出るなんて、誰も想像しなかっただろう。

なら、何故そんなことになってしまったのか。

……回想開始……

俺達のクラスもまた、他のクラス同様に体育祭の出場選手を決めていた。

「次は二人三脚だ。誰かやらないか？」

桜庭先生の呼び掛けに騒つくクラス。

二人三脚はコンビネーションが重要。仲のいい二人組がやるべきだと考えていた。

そもそも、俺も進んで個人種目をやる程、身のほど知らずじゃない。悔しいが、自身の体力のなさは痛い程理解している。

しかし、ある男子生徒の一言が俺に地獄行きを宣告した。

「そっいや、柊と冬神って最近仲良いよな？」

「なっ!？」

視線が俺とかがみに集中する。

「だよなー。お前等適任だよ」

「バカ言うな。かがみは既にパン食い競走に出るって決まっただろ」

何故パン食い競走なのかは、かがみの名誉の為にスルーしておく。

「1人何種目でも良いぞ」

しかし、俺の発言を覆したのは桜庭先生だった。
確実に面倒臭がっているな、あの教師。

「だ、だが俺は……」

自分で自分のことをもやしとは言いたくない。
が、体力がないのも事実。このままではかがみの足を引っ張ってしまふ。

「かがみも何か言ってくれ！」

俺はかがみに助けを仰ぐ。

だが、かがみは顔を赤くしたまま固まっていた。

そして、最後に放たれた一言が俺の運命を決め付けた。

「自信が無いのか？へタレ」

その台詞を聞いた瞬間、俺の中の何かがキレた。

「上等だ！やってやるよ！」

「おおおお！」

沸き上がるクラス。

桜庭先生はやれやれ、といった風に黒板に俺とかがみの名前を書いた。

……回想終了……

「お前なあ……」

「うるさい！冷静に考えてもバカなことをしたさ！」

その後、かがみに土下座で謝ったさ！

けど、今更引き返せない。

……相手があきだと知って、余計にな。

「俺に勝てるかな？もやし君」

「調子に乗るな、脳筋」

互いに火花を散らす俺達。

「かがみんも大変だね〜」

「まったく、男は分からないわ……」

「といいつつ、やなぎんと走ることは万更でもないかがみんであった」

「う、うっさい！」

こなたとのやり取りに、かがみは再び顔を赤くする。

理由は俺には分からないけど。

腐れ縁同士の対決に、俺は後戻りを許されなくなった。

第25話「火花散る」(後書き)

どうも、銀です。

第25話御覧頂きありがとうございます。

今回は体育祭の話でした。

やなぎとかがみの話でしたが、どう膨らませようか悩んでいた所、体育祭というイベントをすっかり忘れていました(笑)

次回はやなぎが訓練する話です。

第26話「縮まる距離」

（やなぎ視点）

体育祭にて、あきと対決することになった俺は、まずは人並みに体力を手に入れようとトレーニングを積むことにした。

「まずはジョギングをしよう」

走れなければ元も子もない。

俺は、家の周り500mを3周は走ることにした。

そして、30分後。

「も、もう無理……」

ゆっくりペースで走っていたはずの俺は体力切れで地に伏していた。お、おかしい……。こんなに早くダウンするなんて……。

「ペース配分を間違えたか？それとも、最初から距離を長くしすぎたか……」

（ （ ）

休憩しながらプランを練り直していると、携帯が鳴りだした。

あきの奴が茶化しにかけてきたものだと思ったが、ディスプレイに出ていた名前にそんな考えは吹き飛んだ。

「かがみ？」

二人三脚の相方からの電話に疑問符を浮かべつつ、電話に出る。中止にでもなったか？他のペアが出るとか。

「もしもし？」

「あ、やなぎ？調子はどう？」

「別に悪くはないが」

何でかがみは俺の調子を聞いたんだ？

「じゃあさ、どうせなら一緒に練習しない？二人三脚なんだし、呼吸を合わせる必要もあるでしょ？」

俺はトレーニングを始めたことを誰にも言っていない。どうやら、かがみには俺の行動が読めていたようだ。

「そうだな……」

かがみの誘いは常識的に考えても、悪いものではなかった。しかし、ある決定的な欠点を抱えていたが。

「俺はお前について行けそうもないぞ？」

たった今息が上がっていたばかりだ。呼吸を合わせて走るなんて言ったら、ただ足を引っ張るだけではないか。

「いいわよ。私が合わせるから」

「それではかがみの練習にならない」

「そんなことないわよ。だって二人三脚だし、足の速さよりリズムを合わせて走る方が重要よ」

む、確かに個々の足の速さより2人のコンビネーションを重要視した方がいいかもしれない。

相手はあのヲタクカップルだ。普段はふざけているが、いざという時の息の合いようは恐ろしさすら感じる。

「……分かった。今からそっちへ向かう」

「うん、待ってる」

電話を切ると置いてあった荷物を持ち、そのまま鷹宮神社へ向かう。

……何では知らないが、心は妙に高揚していた。

神社には、ジャージ姿のかがみと私服姿のつかさが待っていた。そこまではいい。

「何でお前までいるんだ」

「知るかよバーロー」

何故かはやとまで木に寄りかかりながら見学していた。

正直、やりづらい。

「はやとは雑用に呼んだのよ」

「本当は嫌だけど、ここん家には世話になったからな。断れねえんだよ」

はやとは若干眠そうな表情をしながら、近くに立てかけてあった箒を手にする。

はやとが本気で断れないのだとしたら、深い事情があるようなので、
敢えて聞かなかった。恐らく、以前つかさが電話で聞いてきた父親
関係のことだとは思うが。

「さつき言った通り、まず落ち葉の掃き掃除。終わったら境内の雑
巾掛けお願いね」

「大掃除かよチクショー！」

「つかさははやとをしっかり見張っていること。すぐサボるから
「分かった。頑張ってるね」

かがみの指示を受け、はやとは箒を巧みに扱い落ち葉を集めて行っ
た。

つかさはそれを眺めながら、のんびりと俺達に手を振った。

この光景を見ると、はやとは本当に変わったと思う。

心の中の枷が外れたというか、何というか。

最近では屋上で昼寝をする回数も減ってきている。

つかさが与えた影響が、アイツにとってそれほど大きかったんだろ
う。

ま、これ以上他人の詮索をしても仕方がない。俺は俺のやるべきこ
とをしよう。

軽くストレッチをした後、お互いの片足を縄で括り付ける。

「じゃあ、1で右足ね」

「分かった」

かがみは普段はツイントールにしている髪を1つに纏めていた。

……俺の髪も纏めあげるべきだな。

「「セーのっ！」」

ピターン！

俺達は合図と同時に「右足」を出そうとし、盛大に転けた。

「イタタ……右足だつてば！」

「だから右足を……待て。どっちの右足かは決めてないぞ」

二人三脚は、基本出す足は内側か外側になる。

しかし、かがみの右足は外で俺のは内だ。同時に出すことは出来ない。

「そ、そうね。迂闊だったわ……」

「じゃあ外側からでいいんだな」

「ええ。気を取り直して」

互いにリズムを合わせ、俺達はゆっくりと走りだした。

始めはゆっくりとしたペースで走ることにした。

いきなりスピードを上げてもしリズムを合わせづらいし、まずは慣れる方が大切だ。

「はっ、はっ……」

しかし冷静に考えると、女子と肩を組んで走っている訳で、結構緊張をしていたりする。

かがみの髪、シャンプーの匂いが……って！邪念を捨てる！あきと同レベルに落ちたくない！

雑念を振り払い、かがみと合わせて走ることに集中する。だが、ふと周囲を見ると……。

「あらまあ、二人三脚だなんて仲のいいわね〜」

「若いわね〜。おまけにパールツクなんて」

近所のおばさんからの注目を浴びることとなった。

いや、パールツクじゃないから。学校のジャージだから。髪型は同じだけどただ結んでるだけだから。

「……………」

かがみも気付いたのか、顔を赤くして俯いている。

俺達は無意識の内にペースを上げ、住宅街を突っ切っていった。

その所為か、人気の少ない道に出た時には、俺の息はかなり上がっていた。

「やなぎって、本当に体力ないのね」

かがみの何気ない一言が胸を抉る。

「う……………スマン」

「ま、パートナーだしね。少し休憩にしましょ」

縄は結び直すのが面倒なのでそのままにし、俺達は近くのベンチに腰掛けた。

「かがみ」

「何？」

俺は疑問に思っていたことを聞いてみた。

「何で俺との二人三脚を断らなかつたんだ？」

かがみは他の種目にも出るし、例え二人三脚に出るとしても日下部とか、もつと足の速い人間もいる。

しかし、かがみははつきりとは断らなかつた。

「べ、別に深い意味はないわよ」

かがみはこちらを見ずに答える。

「そうか」

「そうよ！たまにはやなぎと走るのもいいと思ったの！」

かがみの顔が耳まで赤くなっている。素直になれない証拠だ。あまり困らせるのも可哀想なので、ここは問い詰めなかつた。

「でも、こうしているとダイエットに付き合つた時を思い出すな」

俺達を巻き込んだマラソンで、俺と組んでいたかがみは足を挫いた。そんなかがみを少ない体力で運んで、倒れたんだっけな。

「あ、あの時は……」ごめん」

「気にするな。いい運動になったのは確かだしな」

苦笑しながら言うが、実際はかなりキツかった。もやしと呼ばれるのも納得してしまったし……。

すると、今度はかがみが俺に質問をしてきた。

「やなぎはあきのこと、どう思ってるの？」

「！」

あきか……。

「腐れ縁だが、何でだ？」

「だって、やなぎがあんなにムキになるなんて珍しいじゃない」

……そうだな。あき相手に本気になるなんて、らしくなかったか。

「端から見ると、まるで好敵手みたいな」

「好敵手？ 違う違う」

そこは否定した。

俺とアイツが好敵手なもんか。

「釣り合わないんだ。アイツと俺じゃ、違いすぎる」

俺は初めて自分の内を曝け出した。

「あきもここまで扱いが酷いと可哀想になるわね」

苦笑しながらかがみが言う。

ふむ、どうやら勘違いしているな。

「いや、あきが下なんじゃない。俺がアイツに敵わないんだ」

「えっ!?!」

本当のことを言うと、かがみは酷く驚いていた。

「意外だったか?」

「当り前よ! 普段の扱いから見ても、そんな風に見えないし」

だよな。ま、それはアイツがバカやってるだけだから仕方ない。

「俺は昔病弱で学校休みがちだったって話したろ?」

「ええ、あきが押し掛けて、おかげで丈夫になったって」

「……半分は違うんだ。本当は俺がアイツの後を追って行ったんだ」

遠くを見るように、俺は語り出す。

俺はずっとアイツの背中を追っていた。

いつも強引に俺の前に現れて、明るく気楽に騒いでいられる。

俺は、そんなあきが羨ましかった。

そんなあきの強さを妬ましく思っていた。

「勿論、体力的な面でもな。運動神経もいいし、成績は悪くとも興味のあることへの頭の回転は早い」

「ああ」

かがみは普段のあきの、アニメやゲームへの異常な記憶力を思い返していた。

親と賭けをしたとはいえ、実際に陵桜に入ったし。

だから、アイツにはどうやっても勝てないと思っていた。

そんな風にコンプレックスを抱いている俺なんかが、あきの親友を語れる訳がない。

好敵手としても、釣り合いが取れない。

「じゃあ、「腐れ縁」だったら気軽な付き合いが出来るだろ？だから俺達はずっと腐れ縁で通してきた……今まではな」

けど、今回はそうもいかない。

かがみには悪いが、俺は今回の二人三脚は降りるつもりだった。あきが出ると聞くまでは。

「初めて、俺はあきに勝てるかもしれないんだ。あきと同じラインに立ってるんだ。そう思って、ついムキになったんだ」

俺はそう呟き、自嘲的に笑う。

勝てる訳ないのに。あきは俺とは違うのに。

こんな情けない話に巻き込まれて、かがみも俺を見下すに違いない。

「さてと、じゃあ行きましょ」

しかし、話を聞き終わったかがみは、すくつと立ち上がる。

「ほら、アイツに勝つんでしょ？」

俺を見て、かがみは微笑む。

それは嘲笑なんかじゃない。俺が勝てると信じている眼だ。

「いいのか？」

「この前は私が助けられたんだから、今度は私が協力する番よ」

「けど、何とも思わないのか？」

「負けられない理由があるなら、それでいいでしょ？私もこなたに負けたらなんて言われるか分からないし」

「……勝てるのか？」

「2人なら、ね」

笑いながら手を差し伸べてくれる姿が、とても綺麗に感じた。

2人なら、か……そうだな。啖呵を切った以上どうにかしないと。それにかがみが支えてくれるなら、大丈夫な気がしてきた。

「よろしく頼む、かがみ」

「こちらこそ。やなぎもしっかりやんなさいよ！」

かがみが差し出す手を取り、俺は立ち上がる。

「「せーのっ！」」

俺達はまた走り出した。今度はしっかりと、段々スピードを上げて。

これは余談だが、神社に帰ると……。

「ほっ、ほっ」

「はやと君すごい〜」

掌に箒を乗せて遊んでいるはやとと、それを見て楽しんでいるつかさがいだ。

「何してんのよ、アンタ等はっ!!」

境内にかがみの怒鳴り声が響いたのは、俺達が神社に戻ってすぐ後だった。

第26話「縮まる距離」(後書き)

どうも、銀です。

第26話御覧頂きありがとうございます。

今回は訓練と、やなぎが抱えるあきへの心情の話でした。

やなぎがあきを腐れ縁と呼ぶ理由ですが、半分が今回の通りコンプレックスからです。もう半分は恥ずかしさから来ています(笑)

次回はいよいよ体育祭にて対決です。

第27話「腐れ縁と新たな感情」

（はやと視点）

体育祭はあつという間に訪れた。

折角でてる坊主を逆さ吊りにしたつての外は晴れ。あー、だりい。

「いいじゃねえか。女子の体育着姿が拝めるんだし」

と言いながら、変態大家がカメラのレンズを磨いている。

きつと、桜藤祭りじゃ俺が写真を撮ってこなかったから今回は付いてくるつもりだよつだ。

「弁当だけ置いてバイトにでも行ったらどうです？」

「何言つてんだ？ちゅーか、おめーの分ねえから！」

割と本気で言つたら、使い古されたネタで返された。

つて、俺の分ないのかよ。

じゃあ、俺は残酷な真実でも投げ掛けますかね。

「ウチの学校、ブルマじゃないツスよ」

海崎さんの動きがピタツと止まる。

カメラをゆっくりと置くと、おもむろに携帯を取り出した。

「あ、もしもし店長スか？海崎です。今日のシフトですが、予定が空いたので」

分かり易すぎるな、アంత。

ま、これで付いてきたら通報してるけど。

「よし、頑張つてこい！」

「女子の写真は撮りませんから」

「チツ」

まだ狙つてたか。

軽く落ち込む海崎さんを放置し、俺は学校に向かった。

教室に着くと、全員闘志を燃やしていた。

はいはい、皆さん元気でございますね！。

「はやと君、おはよ〜」

つかさが挨拶してきた。

コイツはいつもの気の抜けた感じだ。安心した。

「今日は頑張ろうね〜」

ニコニコと言うが、俺達の出番は精々全員リレーのみだ。

「おっ」

だが、不思議と力がみなぎる。頑張らなきゃいけないような気になる。

「クソッ、何でウチの高校はブルマじゃないんだ」

俺の朝のほんわかタイムを台無しにしたのは、あきの一言だった。
お前は海崎さんか。

「あき君、頑張ってたね」

「任せろつかさ！俺達に勝てる奴なんかいない！」

つかさ、バカを付け上がらせるな。

そして、体育祭が始まった。

校長の話のスルーし、準備体操をした後、所定の席へ移動する。
ここから2年の全員リレーまでは見物客も同然だ。

「あき」

自分のクラスへと戻る途中、やなぎがあきに声を掛けた。

「何だ？勝負はやめにしようってか？」

「いや……今日は負けない」

あきは軽い調子で返すが、やなぎの眼は真剣だ。

俺は知っていた。やなぎが今日までどれほど特訓していたのか。
二人三脚が、今日の一番の見物になりそうだ。

先に1年の競技が終わり、次はみちるの出番である障害物競争だ。

「みちるさん、頑張ってください！」

みゆき含む女子からの黄色い声援に、笑顔で手を振り返すみちる。何処の王子だ、お前は。

周囲の男子は嫉妬の炎を燃やしているし。

「では、位置に着いて」

審判の掛け声で、走者が位置に着く。

みちるは内側か。こりゃ貰ったな。

「よーい！」

パン！

ピストルの音に素早く反応し、みちるは走り出した。

爽やかな笑顔とは裏腹に、他の走者をぐんぐん抜いていく。

最初の障害物は平均台。しかし、みちるは軽々と渡りクリア。

「みちるさーん！」

華々しい活躍に、女子の声も激しさを増す。正直言ってるせえ。

次は網潜りだ。これも余裕だろ、と思っていた。

「わわっ!?!」

みちるは網に引っ掛かっていた。オイオイ……。

「ふええ、取れないよお……」

網はみちるの男子とは思えない白い肌に絡まり、みちるは涙目になりながら外そうと悶える。

どう見ても網にかかった女子です、本当に（ry

しかし、その姿が扇情的だった為に走っていた男子が前かがみに……ってオイ。

その隙に何とか網を潜り切り、ラストの借り物の札へ一直線に走る。

「……！」

みちるは札をめくると、すぐにこちら側を見た。

「みゆき！」

「は、はい!？」

突然呼ばれたみゆきは狼狽える。

が、すぐに手を伸ばすみちるの方へ、頬を染めながら走っていった。

障害物競争の結果は、圧勝だった。

周囲のみちるを見る目も、嫉妬から異様な物へと変わっていたが。

「いや、いいものが見れた！」

あきは携帯を眺めながら満足そうに言った。カメラ機能で撮ったな、アイツ。

「みゆき、ありがとう」

「いえ……」

屈託のない笑顔を見せるみちるとは対照的に、みゆきは少し落ち込んでいた。

実は、札に書いてあったのは「眼鏡」だった。

予想とは違っていて残念だったんだろう。どんな予想かは、敢えて追求はしない。

「次は俺の出番か」

「むう」

肩を回しながら門に向かう才雅と、後に続く無卯磨。いかにもやる気十分だ。

「才雅君、頑張つて〜!」

「むーちゃんファイト〜!」

江里香と羽音からの応援を受け、士気もどんどん上がっている。

まあ、パン食い競走なんだけどな。

しかし、相手には更なる強敵食いしん坊がいた。

「余裕余裕」

パンを啜えながら意気揚揚と戻ってきた才雅。

「むう……」

そして、元気なさそうにパンを頬張る無卯磨。

そう、無卵磨は負けたのだ。決してナッツパンじゃなかったから落ち込んでる訳じゃない。

「じゃあねえよ、相手がかがみじゃ」

俺はそう言っただけで慰めた。

かがみのあの気迫じゃ負けるのも無理はない。

「つか、パン食うのにどんだけ一生懸命になってんだよ。」

「この借りは全員リレーで返そうぜ」

才雅も無卵磨を慰める。そういや、この組み合わせは珍しいな。

「むう……」

「って言っても、仇なら取ってくれそうなの奴がいるけどな」
「！」

俺の視線の先には、ストレッチ中の風樹の姿があった。
次は代表リレーだ。風樹とみゆきなら心配はない。

「風樹……」

「いいから黙って見ておけ、無卵磨」

格好付けながら、風樹は入場門へ行った。

んなことするからどんどんフラグが立つんだらうが。

肝心の相手は、界坐や陸上部の連中ばかり。

「つか、13クラスの対抗リレーって……」。

「風樹、手加減はなしだ。理解出来たか？」

「お前こそ、俺の勝ち確定だ。覚えておけ」

最初の走者が位置につき、ピストルが鳴り響いた。アンカーである風樹と界坐にバトンが回る頃には、順位はほぼ互角だった。何故か他のクラスには負けていたが、因みに1位はD組、つまりかがみ達のクラスだ。

「先に行く」

先にバトンを受け取ったのは界坐だった。

「一瞬だけな」

数秒遅れて風樹もバトンを取り、走り出す。そこからは怒涛の展開だった。

まず、界坐をあっさり抜かし、前を走っていた人間を颯爽と追い越した。

「ふー君すごい！」

「むう……」

羽音と無卯馬も風樹の活躍に見入っている。結果、逆転トップでゴールしたのであった。

「流石、風樹だ……」

「速さで俺に勝つにゃ1億年早いぜ、覚えておけ」

悔しそうに息を切らす界坐に捨て台詞を吐き、風樹が戻ってきた。

「ふー君お疲れ様〜！」

「むう……褒めてやってもいい」

「へいへい」

二者二様の対応に軽く返事をし、席に戻る風樹。格好付けすぎだ。

「次は女子だよ」

こなたの呼び掛けに場を見ると、既に女子の対抗リレーが始まっていた。

確か、アンカーはみゆきだったな。

「頑張れ〜！」

いよいよみゆきの出番が来た。

いつもとは違いキリツとした表情で走り、前走者を次々と抜いていく。

「おおおっ！」

あきがまたもや形態を構える。

そしてラストスパート。トップの奴と、ほぼ同時にゴールした……かに見えた。

「おっしやー！」

あきが叫ぶ。うるさい。

ゴールテープを切ったのはみゆきの豊満な胸だった。つまりバスト差で勝ったんだな。

「流石みゆきさん」

「G」

なるほど、あきもこなたも最初からこの展開が読めてたってことか。最低だな。

昼休憩になった。

2年の全員リレーと二人三脚は午後の部だ。

さて、昼飯をどうするか……。

「はやと君、お昼ご飯は？」

丁度、つかさが昼飯の話題を振ってきた。

……まさか、つかさが弁当を作ってくれたなんて虫のいい話、ある訳がない。

「まだ未調達だ」

「あ、だったら一緒に食べない？」

俺は奇跡なんて信じない！

都合のよすぎる話なんてありはしないんだ！最近が上手くいきすぎてただけなんだ！

「お前も買いに行くのか？」

「ううん、お母さんが作ってくれたの。それで、はやと君の分も作ったって。皆はやと君を心配してたよ？」

……ああ、何だ重箱か。ならありうる話だ。

しかし、またもや柊家の世話になる訳には……。

「ダメ？」

つかさは子犬のような表情で、心配そうにこちらを見る。

「お世話になります」

俺はつかさに連れられて柵家のいるシートに来ていた。

「いらっしゃい、はやと君」

「どうせ昼ご飯用意してなかったんでしょ？」

みきさんはにこやかに迎えてくれたつてのに、この食いしん坊は。

「パン食い競走じゃ大活躍だったな」

「くっ……」

明らかに皮肉を込めて言い返した。

「さ、沢山食べて頑張ってくれたまえ」

まつりさんが弁当を勧めてくれた。ありがたいけど、多分アンタ何もしてないだろ。

みきさんの美味しい昼飯を食い、俺のなけなしのやる気も上がってきた。ただ、複雑だろうな。娘2人が違うクラスだから、どっちも応援しないといけない。

「はやと君、さっきの卵焼きなんだけどね」

自分の席へ戻る途中、つかさが聞いてくる。

ああ、卵焼きな。重箱の中身で一番美味いと思った品だ。

「あれ、私が作ったんだけど、どうだった？」

何……だと……？

「メチヤクチャ美味かった」

「そう？よかった」

クソッ！もうちょっと味わって食べばよかった！

「全員リレー、頑張ろうね！」

つかさは屈託のない、満面の笑みで言った。

……悪いながみ。俺にも負けられない理由が出来たようだ。

くやなぎ視点

午後の部は先に二人三脚をやり、全員リレーはラストになる。俺にとって重要なのは勿論前者だが。

「かがみ」

足を紐で結びながら、俺はふとかがみに呼び掛けていた。

「何よ」

「ありがとう、俺と走ってくれて」

正直、かがみがいなかったら、あきと戦うということすら考えなかった。

礼を言っつて顔を上げると、かがみは照れながら外方を向いていた。

「ば、バカね。そういうのは、勝つてから言いなさい」

「そうだな」

苦笑しつつ、俺は立ち上がる。

「行くっ」

「ええ」

しっかりとリズムを合わせて、俺達は入場した。

今日までしっかりと練習したんだ。お互いのペースに狂いはなく、もう転びはしない。

スタートラインには、既にあきとこなたが待っていた。

他のクラスのペアもいたけど、悪いが眼中にない。

「逃げなかったのは褒めてやる」

あきが余裕そうに話しかけてきた。どうでもいいけど、お前等予想通りバランス悪いな。

「まさかとは思うが……俺が負ける戦いを挑むとでも？」

こちらも余裕を持って対応した。

あきは一瞬目を見開くが、すぐに笑顔に変わる。

「精々頑張れ、もやし君」

「かがみ、悪いけど勝ち譲らないよ？」
「上等よ！」

こなたもやる気満々のようだ。
審判が銃を構える。練習通りだ、練習通り走れば……！

パン！

銃声と共に、一斉に走り出す。

他の走者達は声で呼吸を合わせる必要があるため、どうしても普通に走るより遅くなってしまふ。転んでしまふ者もちらほらいた。これが二人三脚の醍醐味であるから、仕方のないことなのだろう。

だが、俺達は違った。

練習を重ねた結果、俺とかがみは声を出さずとも呼吸を合わせられるようになっていたのだ。

最終的に、足の遅い俺のペースにかがみが合わせるといふ情けない形になってしまったが、これで普通の走者と差を作れる。そう、普通なら。

「ほいほいほい！」

「！？」

あき達はバランスの悪さすら凌駕し、圧倒的なコンビネーションで先頭を走っていた。

「はっはっは！ 幼女と肌を合わせながら二人三脚をするという妄想をしていた俺に隙はなかった！」

「変態かつ！」

競争が終わったなら、警察が病院を呼んだ方がよさそうだ。
しかし、このままではまたあきの背中を追いかけて終わってしまう
……そんなのは嫌だ！

「かがみ！ペースアップだ！」

「でも！」

「俺は気にするな！」

負けたくない！ここまでかがみが協力してくれたんだ！絶対に諦め
たくない！
勝つ為なら、俺はどうなってもよかった。どんどんペースが上がり、
かがみに俺が無理矢理付いていく。

「……………」

「あき君？」

あき達のペースが、一瞬だけ落ちたような気がした。
抜かすなら今しかない！

「かがみ！」

「分かってる！」

俺達は外側からあき達を抜かし、ゴールまで一直線に走った。
そして、ゴールテープを切るのと同時に倒れこんだ。

「か、勝った……やなぎつ！？」

「はあ……はあ……」

無理矢理走った為、俺は虫の息になっていた。
息苦しい……けど、確かに掴んだ勝利を感じていた。

「やなぎ……」

ゴールし、紐を解いたあきがこちらへ向かってくる。
何だ……？負け惜しみでも言うつもりか？

「……俺の負けだ。やっぱりすげえわ、お前」

太陽のような笑顔で手を差し伸べる。

ああ、そうだ。いつだってお前はそんな笑顔で俺を引っ張り回していたんだ。

正直吐きそうな位気持ち悪かったが、俺はあきの手を取り立ち上がる。

「当然、だ……お前には負けたくないからな」

「よく言うぜ、無茶しやがって」

無茶、か……。

もう俺はお前の背中を追うだけの貧弱な男じゃない。
お前と同じラインに立てるんだ……。

「ほら、しっかりしなさい」

かがみに支えられ、自分のクラスへ戻っていく。

腐れ縁の、友人に認められたのもかがみのおかげだった。
……あきと並ぶんだったら、俺もすることをしなきゃな。

「かがみ」

「何よ」
「好きだ」

顔を真つ赤にしたかがみに落とされるのは、数秒後のことだった。

（はやと視点）

全員リレーには、どうやらやなぎは出ないらしい。出る気力も残ってないようだ。

そついや、かがみがさつきから顔を赤くしてるけど、何かあったのか？

全員リレーは、アンカーを除き1人辺りの走る距離が短い。その間にどれだけ速く走れるか、だ。

因みにウチのクラスのアンカーはじゃんけんで負けた才雅だ。同じくアンカーだった界坐と火花を散らしている。

「H A H A H A H A 覚悟するがよい！これからが本当の勝負！ランニングデュエル、アクセラレーション！」

あきは二人三脚の時と違い、まるで機械のようなフォームでガシヨンガシヨン言いながら走っていた。つてか、ランニングデュエルつて？

「ああ！」

いや、こなたに聞いてないから。

バトンはあきからみゆきに渡った。みゆきは対抗リレーと同様、安定した走りで他クラスとの差を広げていく。

「みちるさん！」

「うん、任せて！」

みちるはバトンを受け取ると、爽やかな笑顔で流麗に走っていく。ついでに、女子の注目も集めていた。

「つかささん！」

「う、うん！」

さて、問題のつかさだ。バトンを受け取れたのはいいが、間違いくらい遅い。

差は広がっているから、何もなければそのまま俺に……。

ドチャッ！

あ、転けた。

お約束って奴か……まったく。

「ふええ……」

泣きそうになるつかさ。立ち上がるうとしている間に抜かされていつてしまう。

「つかさ、走れ！」

「！」

柄にもなく、叫んでしまう。

つかさの応援が響いていたのもあるが、さっきのやなぎの諦めない姿勢が火を付けたのかもな。

「後は俺に任せて、こっちまで走れ！」
「うん！」

泣きそうなのを堪えて、つかさは何とか走り出す。さて、と。

「もし翼があつたら、簡単に逆転出来るかもな」

つかさからのバトンをしつかり受け取り、俺は全速力で走った。

つかさにああ言った以上、抜かさない訳にはいかない。

俺は1人、また1人とあつという間に抜かし、再びトップで次の走者にバトンを渡した。悪いな、足には自信があるんだ。
これで、役目は果たしたぜ。

くやなぎ視点

まずは全員リレーと体育祭の結果から言おう。

負けたよ。あき達のクラスが優勝だ。

はやとじゃないけど、はっきり言って俺にはどうでもいいことだ。

目的は達成したからな。

クラスの皆から称賛を受けたりしたが、俺にはあきの言葉で十分満足していた。

ついにアイツと並べるようになったんだから……。

「いや、俺1回もお前の上だっと思って思ったことはないぜ？」

閉会式が終わった後の会話で、あきはそう言った。

「俺も別にお前に勝てるなんて思ったことないし」
「嘘吐け」

二人三脚じゃ楽勝ムードを漂わせていた癖に。

「いや、これはマジ。体力勝負なら勝てるけど、頭を使ったらまず無理だね。ほら、俺って体力バカじゃん？どんな手を使ってもやなぎには勝てないと思ってた訳よ」

……つまり、俺達はお互いを勝てない相手だと認識していたことになる。

「ま、その体力勝負で負けたんじゃしょうがねえよ」

「……そうだな。俺もお前の背中を見るのもう御免だ」
「ならば見るがいい！」

バシイン！

「ギャー!?!」

背を向けて見せてきたので、思いつきり叩いておいた。

「あき君！踊ろう！」

「いってて……おう！じゃあな！」

あきは背中をさすりながら、恋人と一緒にキャンプファイヤーへ向かった。

体育祭後のイベントとして、キャンプファイヤーが行われていたのだ。

火を囲みながら、恋人達は踊る。

「やなぎ」

すると、今度はかがみが隣にやってきた。若干頬を赤く染めている。モジモジしながら話す。何かあったのだろうか？

「その、さっきの何だけど……」

「さっき……！あ、ああ……」

思い出した。意識が朦朧としていたから幻かと思ったが、俺はかがみに告白していたんだ。

だが、告白自体は嘘ではない。かがみがいたからこそ、俺は最後まで諦めず走り切れた。

感謝してるし、好きになってしまっていた。

「私、がさっただけどいいの？」

「ああ、かがみだからいい」

「あまり可愛くないし……」

「そんなことはない」

「……………」

黙り切ると、かがみは突然顔を突き出してきた。

「んっ！」

「え……？」

これは……キスしろ、でいいのか？

「早くして！恥ずかしいんだから！」
「あ、ああ」

俺はゆっくりと顔を近付ける。

炎が照らす影が、1つになった。

数分経ち、唇を離すとかがみは耳まで真っ赤にし、潤んだ瞳で俺を見ていた。

「バカ……私も、やなぎが好きだからね」

その時のかがみの表情は、一生忘れられない位可愛いと思った。

「もう一回、いいか？」

「うん、お願い」

再び唇を重ねる。甘い甘い時間を、炎はずっと照らしていた。

第27話「腐れ縁と新たな感情」（後書き）

どうも、銀です。

第27話御覧頂きありがとうございます。

今回は体育祭、やなぎんの戦いでした。

漸くコンプレックスを振り払い、更にかがみという恋人までゲット。
もやし爆死しろ！

あと、尺の都合で章奈の大玉転がしはカットしちゃいました。見た
い方は是非（殴

今回は独り身には辛いXデーの話！終りまで残り6話です！

第28話「クリスマス」

（はやと視点）

体育祭が終わると、俺達はすぐにテスト勉強に追われる羽目になった。

この学校は俺達を殺す気か？

「だー、終わったー」

最後のテストが終わり、俺は気怠そうに机に突っ伏した。数日は気を張りっ放しだったからな。

「お疲れ様〜」

同じくテストを終えたつかさ達が寄ってくる。

流石に分からない部分が多かったので、俺達は何度か勉強会を開いていた。

ほぼみちるとみゆき、やなぎ、かがみに教わっていたんだけど。

おかげで、テストを無事に乗り切ることが出来た。

「さて、後は冬休みを待つのみ！」

あきが喧しく言うが、それには賛成だ。

去年の冬休みは、家でゴロゴロしながら除夜の鐘を聞いて過ごさずだった。

クリスマス？正月？何それ美味しいの？

「去年までは世にはびこるリア充を冷やかしながら、爆発しろと書き綴っていた……」

何をしていたんだ、お前は。

「だが今年は違う！俺の隣には可愛い彼女がいる！クリスマスデートをするリア充に俺はなつたんだ！」

じゃあ爆発しろよ。

「こなた、クリスマスには何処に行きたい？」

「あ、ゴメン。バイトだ」

ざまあ。

あきを指差して、ぷくくつと笑う俺。

「チクシヨオオオ！メイド喫茶行ってやるううう！」

「待つてるよ〜」

商魂逞しいな、こなた。相手が彼氏であっても。

「相変わらず騒々しいな」

そこへ、別のクラスからもう1人のリア充が現れた。体育祭明けに、既にやなぎとかがみが付き合っているって聞いた時はかなり驚いた。

「聞いてくれよやなぎん」

「断る」

「ぐはっ！」

泣き継るあきを一刀両断するやなぎ。

「どうせお前等、クリスマスデートするんだろ！バーカバーカ！」
「放つとけ！」

顔を赤くするかがみ。煽られるとまだまだ恥ずかしいらしい。
「つたく、俺達からリア充が2組も出来るなんてな。」

「クリスマスは久々にみゆきとみなみと過ごしたいな」
「はい。みなみちゃんも喜ぶと思います」

みちるはみゆきといい感じではある。
あの要塞を攻略するにはまだまだかかりそうだけど。
となると、残されるのは俺達だけか……。

「？」

チラッとつかさを見ると、頭に疑問符を浮かべている。
人の気も知らないで……。

とはいえ、この手の話は俺に似合わない。
何も言わず、去年通り過ごしますとも。

それから、あつという間にクリスマス。
昼間からバイト……のはずが、今日に限ってシフトもない。
完璧に暇になっていた。

「はあ………」

毛布に包まり、溜息を吐く。

海崎さんはバイトだし、ウチにはテレビなんてものもない。

自転車もないから遠くにも行けないし、そもそも寒いから行く気すら起きない。

まあ、手詰まりって奴だ。

「……………」

一瞬、本当に一瞬だけ家に帰ってみようかと考えてしまった。

父さんがいるとも限らないし、確か暖房もまともな食事もあるだろう。

「……………却下だ」

俺は小さく呟いた。

ここで寒いし暇だから帰って来ましたが、なんて言ったら出て行った意味がない。

「買い物にでも行くか」

クリスマスだし、スーパーは混んでいるだろう。

人混みは嫌いだが、仕方なく財布とチラシを持ちスーパーへ向かうとした。

P r r r ……

俺の携帯が珍しく鳴った。

以前つかさに言われてから、一応充電はしてたしな。

「もしもし？」

「あ、はやと君？よかった、今度は繋がったよ〜」
掛けてきた相手はつかさだった。

「どうした？何か用か？」

つかさには暖かい家族がいる。クリスマスが暇だなんてことはないはずだ。

「うん、今晚クリスマスパーティーしないかなって」

クリスマスパーティー？んなもん家族だけでやりゃいいじゃねえか。

「誰と？」

「えっと、こなちゃん達はデートだし、ゆきちゃんも向こうで祝うって言ってたから……」

必然的に俺とやなぎだけになる。

だが、やなぎもかみも2人で過ごしたいだろう。

「余ってんの俺だけだぞ？」

「う、うん……」

電話の向こうで困っているようだった。オイオイ……。

「でも、はやと君寂しそうだったし……」

「ぼつちで悪かったな」

「はっつー！ごめんね！そんなつもりじゃ……！」

「分かってるよ」

つかさがそんなことを言う奴じゃないことは承知済みだ。本当に俺を心配してるんだろ。だから、俺は敢えて断った。

「俺の世話なんて焼いてないで、家族と楽しく過ごせよ」

「でも……」

「俺は俺で何とかする。じゃあな」

一方的に電話を切り、俺はスーパーへ向かった。

勿論、つかさには感謝している。誘われた時はかなり嬉しかった。けど、ここで誘いに乗ったらまたあの家族に甘えてしまう。

俺は部外者なんだ。何かある度にあの家族を頼ったらダメなんだ。外は曇っていて、一段と寒かった。

〈あき視点〉

去年までは魔のXデー。それが、今年からは彼女と過ごすラブライブデー……になるはずだった。

「お帰りなさいませっ」

なのに、俺は今彼女のバイト先のメイド喫茶に来ていた。

いや、これはこれで目の保養になるよ？

けど、何か違う気がする。

「あき君、元気がないよ？」

従業員であるメイドちゃんに話しかけられる。

俺もすっかりこの常連となり、顔を覚えられていた。

初めて来た時の騒動で、俺のファンになった娘もいるようだ。悪くない。

「泉さんを独占出来ないのが寂しいとか？」

凶星を突かれる。流星はベテランのメイド！

「そんなんよ。もう寂しくて浮気しちやいそう！」
「ほう？」

横から指をパキポキ鳴らす音が。
ギギギツと首を向けると、小さなメイドさんが修羅のオーラを纏ってました、ハイ。

「冗談だって！大人しく待ってますから！」
「本当に？」

疑わしい視線で俺と、メイドちゃんを見る。
……はは〜ん。

「本当だって。だからオムライスプリーズ」
「はいはい。分かりました〜」

とてととと、厨房に戻るこなた。
やれやれ、こなたも嫉妬深いね〜。

「泉さん、裏ではそわそわしてるんですよ〜」
早く上がりたいんだと思います、とメイドちゃん。
素直じゃねえよな、アイツも。

やっとこなたが上がる頃には、既に外は真っ暗になっていた。

「ごめんね、あき君」

「んーや、一応一緒にはいたからいいさ」

俺達は手を繋いで歩く。端から見たら兄妹かもな。

「さて、何処に行きますか」

「んー……ウチ！」

えー、そうじろつさんいるからイチャイチャ出来ねーじゃん！

「じゃあ、あき君の家？」

俺の家も両親がいる。

こんな日に彼女なんて連れて帰ってきたら大騒ぎするに決まってる。

脳筋親父には「まだ早い！」って殴られるかもな。

「ラブホ、なんてどうだ？」

「却下」

ですよー！。

ノープランだけど、こんなやり取りをしているのが一番楽しかったりする。

「アキバをブラブラしますか」

「だね」

俺達には豪華な食事やしんみりムードなんて似合いつこない。
ファミレスで飯を食ったり、電気街でフィギュアを眺めたりしてい
る方がいい。

「行くうぜ」

「うん」

俺達は一風変わったクリスマスデートを最高に楽しんだのであった。

くやなぎ視点く

俺には付き合って日の浅い恋人がいた。

気が強く、真面目だけど何処か抜けた所のある可愛い彼女だ。

「お待たせ！」

紫色のツインテールを揺らし、こちらに駆けてくる。

俺は駅前でかがみと待ち合わせをしていた。

俺がかがみの家に行ってもよかつたんだが、姉妹がつかさ以外にも
いるらしく、からかわれるから嫌だとのこと。

かがみがしっかりした性格になったのも頷ける気がする。

「ああ」

「……へ、変な所とかない？」

モジモジし出すかがみを、俺は眺めた。

黒のコートに赤いマフラー。別におかしな所はない。

「ああ、可愛い」

「っ！」

素直な感想を述べると、かがみは更に顔を真っ赤にした。

「あ、あ、ありがとう……」

付き合っても、恥ずかしがり屋なところは健在のようだ。

俺は俺で、2人きりである時は恥ずかしく感じなくなっていた。勿論からかわれたら恥ずかしくなるが……多分、自信が付いたおかげだろう。

「じゃ、行こうか」

「う、うん」

手を差し伸べると、かがみは俺の予想に反して腕を組んできた。前言撤回、俺もまだまだ恥ずかしいようだ。

初々しいカップルは、顔を真っ赤にしたまま街中へ繰り出した。

〈みちる視点〉

今日はクリスマス。

僕は久々にみなみの家に行った。

みゆきと岩崎みなみ、そして僕は小学校の幼馴染みだ。転校が決まった時、みなみは泣いてくれたっけ。

庭には、大きなシベリアンハスキーが横たわっていた。

「チエリー！」

名前を呼ぶと、ピクツと反応する。
僕が最後に見た時はあんなに小さかったのに、かなり立派に育ったんだね。

僕のことを覚えているといいけど。

「チエリー、久しぶりだね」

手を出すと、チエリーは僕の匂いを嗅ぐ。

そして、僕に擦り寄ってきた。覚えててくれたんだ！

「あははっ、久しぶりだね！」

チエリーとじゃれていると、家から薄緑色の髪の女性が出て来た。

「チエリー、誰か来て……！」

彼女は僕を見て驚いていた。

あの時から大きくなったのは彼女も同じだった。

「みちる、さん……」

あ、あれ？昔は僕をお兄ちゃんって呼んでたと思っただけ……？
とにかく、彼女は僕の名前を呼んだ。

「ただいま、みなみ」

僕は微笑んで、みなみにそう言った。

みゆきとゆかりさん（みゆきのお母さん）は既に岩崎家に来ていた。

「あらあら、大きくなったわね」
「でも可愛さは変わらないわ」

ほのかさん（みなみのお母さん）とゆかりさんにそう言われ、思わず嬉しくなる。

でも可愛さはあまりいらなかなあ。

「彼女とかいるの？」

「あはは、いませんよ」

ゆかりさんは相変わらず若々しい。勿論ほのかさんもだけど、ゆかりさんは性格も……失礼かな。

「あら、じゃあみゆきなんてどう？」

「お、お母さん！」

ゆかりさんに勝手に勧められ、慌てるみゆき。
みゆきなら引く手数多だし、僕よりいい人を見つけられるだろうな。

「わ、私みちるさんのフルート聞きたいです！」

みゆきが急に話題を変える。

そういえば、まだみゆきの前で演奏してなかったっけ。

「じゃあ、みなみとデュエットしようか」

「！？」

今度は僕がみなみに振ってみる。

みなみは予想してなかったらしく、かなり驚いていた。口数が少ないのも、変わらないなあ。

その後は、僕とみなみの演奏会をしたり、プレゼントを交換したり、まるで子供に戻ったかのように楽しんだ。

〈はやと視点〉

俺は今、猛烈に困っていた。

スーパーに来たのはいい。

人も沢山いる。それも問題はない。

けど、そこでみきさんと遭遇するのは予想外だった。

「あら、はやと君もお買物？」

「ええ、まあ……」

相変わらず若々しい笑顔で尋ねてくる。

余計なことを言われる前にさっさとこの場から

「そういえば、つかさから電話は掛からなかった？今夜ウチでパーティーするから誘うって言ってたけど」

言われちゃった……。

ニコニコと、俺の返事を待っているみきさん。

一体なんて言っただ断りやいいんだ!?

「……来ました」

「あら、じゃあ待ってるわね」

勝手に行くことにされた!?

ここで断んなきゃ、本当に行くことに……!!

「いや、あのっ」

「遠慮しなくていいのよ?」

俺の言葉を遮って、みきさんは言った。

「はやと君はもう家族も同然なんだから」

……ダメだ。

俺はこの家族に勝てそうもない。
居心地が良すぎるんだ。

「……はい。料理、楽しみにしてます」

「うん。じゃ、後でね」

嬉しそうにみきさんは会計に向かっていった。

買った物を冷蔵庫にぶち込むと、恥ずかしながら俺は柊家に向かった。

「はやと君!いらっしやい!」

とびきりの笑顔で迎えるつかさ。

「ああ、悪いな。また世話になる」

罰の悪そうに俺はあがるうとする。

「悪いだなんて、思っただけだよ？はやと君は大切なお友達だもん」
そんな俺の心を、コイツは更に溶かそうとする。
そんなに俺の弱みをみたいのかって位に。

「…………お邪魔します」
「どうぞ〜」

もう、余計なことを考えるのはやめにしよう。
つかさの人の良すぎる笑顔を見ていたら、強がる自分がバカらしく
思えてきた。

「お、いらっしやい」
「今年はかがみがないから物足りなくて…………おのれ、抜け駆けし
おって」

かがみはやなぎと出掛けたんだろう。
この人達はいつ相手を見つけるんだろうか。

「さ、座って座って」
みきさんに言われ、遠慮がちに座る。
やっぱり、ここはいつも暖かい。

「揃ったところで、乾杯でもしましょうか」
そっぴや、神社の家でクリスマスなんてやっていいのだろうか？
ふと、ただおさんと目が合う。
ただおさんは俺の考えていることを察したのか、苦笑しながら首を
横に振った。

……この際野暮な話は抜きでいいか。

みきさんが注いでくれたコーラを持つ。

もし許されるなら、来年もまたこうして集まれますように。

「メリークリスマス！」

第28話「クリスマス」(後書き)

どうも、銀です。

第28話御覧頂きありがとうございます。

今回はそれぞれのクリスマスでした。

はやともみちるも、フラグは立ってるのにバキボキ折っているので、クリスマスまでにリア充になれませんでした。来年はどうでしょう？あと、みなみがちょっとだけ登場しました。後輩組では1番好きなキャラだったりします。

次回は年明けのお話！明ける前に書きたいです(笑)

第29話「年末年始」

（はやと視点）

12月31日、大晦日。

一年の終わりの日も、俺にはあまり関係なかった。だって、テレビもラジオも炬燵もねえし。因みに、携帯の……ワンセグだっけ？は使ったことがない。

「寒い……」

ガタガタと震えながら、俺は布団に包まっていた。

部屋は密室だが、暖房もない為冷たい空気のままだ。

去年はこれで乗り切った。

「……………」

しかし限界が近いので、お湯を沸かす。

風呂に入るか、暖かい茶を飲むかすればまだなんとか耐えられる。

「……………去年は何ともなかったんだけどな」

去年は生活費を稼ぐのに、バイトをしまくって忙しかったし、日に当たって少し眠れば寒さなんて感じなかった。

だが、今年は何をしても寒い。

理由ならとづくに分かっていた。つかさや、柊家の暖かさを知ってしまったからだ。

心の中でどうしても求めてしまう。

「はあ……」

風呂に浸かりながら、弱い心を振り払おうとする。クリスマスだって、結局は世話になってしまった。だからって、自分から頼ろうとするのは愚の骨頂。都合良く泊まらないか？なんて誘いもある訳ないんだし、甘えた考えは捨てるべきだ。

風呂から上がると、携帯の着信が鳴る。

タオルを投げ捨て、俺はすぐに携帯を取った。

「もしもし？」

「あ、はやと？珍しく出たな」

だが、相手は俺の期待していた人物とは違った。

……何を期待してたんだ、俺は。バカか？

「用件を40秒以内で言うか、俺にカイロ詰め合せを寄越せ」

「うおっ、何キレてんだよ!？」

「別に。何の用だよ？」

イライラしながら、俺はあきの話を聞くことにした。

「今日さ、深夜に鷹宮神社に初詣に行かないかって話になってさ」
「ほう」

鷹宮神社、つまりはつかさの家の神社だ。

地元民じゃないみちるとみゆきは来れないらしいが、あき、こなた、やなぎと面子は揃っている。

「で、お前は来るよな？」

「何で？」

「えっ？」

俺は正直、神頼みなんて真似したくはない。

ましてや、叶わない願いに賽銭を出すなんて惜しすぎる。

「いや、だって見たくないのか？」

「何を？」

獅子舞でもやるうってか？

俺の気を惹かせるようなものなんて、そうないぞ。

「つかさの巫女姿」

「……………」

ぐあああああ！？かなり迷ってしまった！けど、けど……………！

「……………行く」

「そこなきやな！じゃ、23時に現地集合で！」

一方的に電話を切られると、俺は床に膝と手を付いた。

ここまで、つかさが俺の中で大きなウェイトを占めていたとは……………。

23時。俺は重い足取りで鷹宮神社に足を運んでいた。

「来た来た！何浮かない顔してんだ！」

「寒いんだよ！」

この場でカイロを持つてる奴は爆ぜろ！
とはいえ、俺もコートに手袋、マフラー着用なんだけどな。

「まあまあ、巫女目当て同士。仲良くやろっぜ？」

「お前と一緒にするな」

やなぎと声を八もらせて突っ込む。
さて、3人がいるのは問題ない。

「……このおっさん誰？」

俺はこなたの隣にいる、いかにも怪しいおっさんを指差す。

「ウチのお父さん」

「娘が世話になってますー」

こなたよ、父親を連れてきたのか。
あきと似たような雰囲気から、何が目当てなのかはすぐ分かった。
こなたの親父だしな。

「じゃ、行こうか」

「おう！」

こなたは親父の目の前であきと手を繋いで先に行ってしまった。
オイ、お前の父親が嫉妬に歪んだ表情になってるぞ。

石段を登ると、参拝客で溢れていた。
普段は閑古鳥が鳴いてるっつのに。

「ありがとうございますー」

いのりさんとまつりさんも、巫女服を着てお守りやらの販売をやっていた。忙しいんだろうな。

「おーい」

こなたが手を振ってどこかへ行く。
つかさ達を見つけたんだろうか。

「かがみー、つかさー、あけおめー」

「お」

やっぱりいた。

かがみはツインテのリボンまで紅白にしていた。
ふーん、まあ似合ってたんじゃないか？

「あ、はやと君！」

俺を呼ぶ声がして、振り向く。

「あけましておめでとう」

そこには、いつものリボンをかがみと同様に紅白にした、巫女服姿のつかさが立っていた。

「ああ……ってまだ早くないか？」

年明けにはまだ数十分早い。

思っていた以上に、俺は冷静でいられた。多分、ある程度予想通りだったからだろう。勿論、似合っはいたが。

「おや、はやと君は思う所なしか」

あきが不思議がる。余計な御世話だ、ほっとけ。

「けど、よく来たわね。寒いし、面倒がると思ったけど」「いやまあそうだけど」

かがみの問いかけにこなたが答える。

「1年の計は元旦にあるから初詣に行つて1年の英気を養おつて」「へえ、殊勝じゃない」

そんなご立派な理由じゃないと思うぞ。

「お父さんが。私はこたつでぬくぬくしてたかった」「どもー」

「あ、あけましておめでとつございます」

ほらな。

かがみも急に何か引つ掛かったらしく、微妙な表情になった。

「因みに俺は」

「もついいから」

あきの答えも概ねこなたの親父と同じだろう。

「ちゃんと初詣に来たのはやなぎとはやとだけか」
「いやあ、それはどうか」

急にこちらに話を振られ、遠目で見ていた俺達は固まる。

「アイツ等もあ見えて巫女服目当てかもしれないぞ」

「お前と一緒にするなつての！」

再び、俺とやなぎは強くあきに突っ込んだ。

くっ、何故だか知らんがムキになってしまった……ああ、そうだよ！
！凶星だよ！

軽く会話していると、間もなくカウントダウンが始まるとの知らせが入った。

「今年も色々あったなあ」

そうだな。去年と比べ、3倍は内容が濃かった気がしていた。

つかさ達と出会い、同じクラスになった。

あの頃はまさか2組もカップルが出来るなんて想像もしてなかったな。

そして、俺がつかさに惚れるなんて全く思っていなかった。

夏休みは祭に合宿……ああ、看病もしてもらったっけ。

初めてだらけの出来事を俺に体験させたのもつかさだった。
一緒に花火を見たり、泳ぎを教えたり……。

桜藤祭……の後は、今年最大の出来事があった。

父さんとの約1年ぶりの再会と、一端仲直り。

それと、柊家に最初に世話になったのもあの時だ。

あれからずっと、みきさんには息子扱いされている。いのりさんやまつりさんにもつかさの彼氏扱いだし、正直心臓に悪い。んで、つかさへの想いに気付いたのもこの時か。結局年内に告白はしなかった。こんな俺じゃあ、告白自体が無理な話だ。

自分とも、母さんとも、父さんとも向き合わないとな。

なんだかんだで、1年間俺の隣にはつかさがいてくれた。つかさだけじゃない。皆が俺に楽しい毎日をくれたんだ。俺の高校生活も、捨てたもんじゃなかった。

「10!」

カウントダウンが始まった。

「9!8!7!6!」

来年もまた、皆と一緒にいたい。

「5!4!3!」

許されるのなら、つかさに想いを伝えたい。

「2!」

俺なんかが、いいのかな?母さん。

「1!」

気付けば、俺はつかさの頭に手を置いていた。

「ハッピーニューイヤー!!」

さて、帰るか。

「はやと君!？」

帰ろうとする俺を、つかさが呼び止めた。
何だよ。寒いんだよ。新年迎えたんだから帰らせる。

「お参りしてかないの!？」

お参りい?だから賽銭にやる金はないっての。
第一、俺は神頼みしない主義だ。

「見事に雰囲気ブチ壊しだね」

「はやとエ……」

あきとこなたが俺に冷たい視線を送る。

「15円ぐらいケチんな」

「今日ぐらい神頼みしなさいよ」

やなぎとかがみも俺を引き留めようとする。

「はやと君……」

とどめに、つかさが心配そうな表情で俺を見つめてきた。

「……へいへい、分かりましたよ」

俺はポケットから15円取り出し、参列客の一番後ろに並んだ。人混みは嫌いだったの……。

「はやと君も素直じゃないねー」

こなたが呆れ顔で言った。何がだよ。

「最初からやる気満々だったんだろ？ そうなんだろ？ そうなんだろって？」

今度はあきが鬱陶しく俺に聞いてきた。

「じゃなきゃ、ポケットに丁度15円が出て来るはずないしな」

チツ、バレてやがったか。

「今年もおみくじとかやってかない？」

「そうだね。折角だし」

適当なお参りを済ました後、つかさの勧めでおみくじをやることになった。

「はい、はやと君」

いや、俺は金がないんだっての。

と、断ろうとしたらつかさが笑顔で箱を差し出してきた。

コイツ、まさか狙ってやってるんじゃないやねえだろっな？

「ったく……」

渋々財布から100円を出し、俺はおみくじを引いた。

「!?!」

先に引いたあなたは凶を引いていた。

一方、あなたの親父は大吉だった。

「新年早々最先いいですねっ」

「本当、いいものも見れたし。今年はいいい年になりそうだね」

つかさが笑顔で相槌を打つと、おっさんは更に気を良くする。

次に、つかさはあなたにもフォローをした。

「大丈夫だよ。今が最低なら後は運氣上昇していくだけだもん。いいことあるよー」

「うん、何て言うかものは言い様だよね……」

流石は神社の家の娘、それなりのフォローの仕方は身に付けているようだ。

因みに、俺は中吉だった。

巫女つかさからのありがたい言葉は

「今年1年安定した運氣でいられそうだね」

だった。安定してるならまあいいかな。

それから甘酒を飲んで体を温めたり、司祭姿のただおさんを見てきたりしながら時間は過ぎて行った。

すぐに帰る予定だった俺も、すっかり長居してしまった。

こなたは父親からお年玉を貰うとかで先に帰った。
あきとやなぎも、家族との新年の挨拶があると言い、いつの間にか俺だけが残っていた。

「アンタは帰らないの？」

参拝客もかなり減った頃。かがみがボーっとしていた俺に話しかけた。

別に俺にはお年玉を貰う相手も、新年の挨拶をすぐにするべき相手もないしな。

「いや、帰って寝る」

手をヒラヒラと振りながら帰路に着こうとすると、今度はつかさがやってきた。

「はやと君、今年もよろしくね！」

今年も、か……。

「ああ。そのつもりだ」

最後につかさの巫女姿を脳裏に焼き付けて、俺は帰った。

途中、ふと俺はある家の前に立ち止まる。
標識には「白風」の文字。

「……あけましておめでとつ。父さん、母さん」

俺は小さく呟く。すると、何処からか、女性の声が出た。

『今年も頑張つてね』

聞き覚えのあった声で、応援されたような気がした。幻聴でも、悪い気はしない。俺はフツと微笑みながらアパートに向かった。

第29話「年末年始」(後書き)

どうも、銀です。

第29話御覧頂きありがとうございます。

今回は年明けの話でした。

神頼みが嫌いな主人公の所為で、内容を練るのに苦労しました(笑)
はやとの中では、つかさの存在がかなり大きなものとなってきてい
ます。次の年では結ばれるのでしょうか？

！
次回はかなり飛んでバレンタイン！いきなり告白チャンス到来です

第30話「バレンタイン・デー」

（はやと視点）

冬休みはあっという間に終わった。

元旦からたった数日で始業式。まったく、もう少し休みが欲しかったのに……。

「休みがあってもやることないんでしょ？」

なんて愚痴っていたら、かがみに突っ込まれた。それを言われちゃお終いだ。

「はやとは気楽だねー。俺なんて年賀状書いたり、大掃除したりで忙しかったのに」

あきが口を挟むが、お前今言ったことのほとんどやってないだろ。

「悪かったな。ウチはお前の部屋と違って大掃除する程散らかる物なんてないし、大して汚れてもなくて」

年賀状だって、葉書を買う金すらない。精々、適当に年賀メールを送った程度だ。

「お前、よくそんなに年越せたなあ……」

皮肉で返したはずが、何故か同情された。別に飯に困りさえしなればよかったし、気にしてないけど。

正月らしいことをしたと言えば、海崎さんに大掃除手伝わされて、

駄賃代わりに雑煮食ったぐらいか。

「でも、アンタ確かつかさからお汁粉のお裾分け貰ってたわよね？」
「バツ！それを言うなよ！」

実は、つかさやみきさんから心配されて色々貰ったりしていたのだ。何度か断ったんだけど、説得力の欠片もないと押し通されてしまった。世話焼きめ……。

「結局、はやと君もお正月を楽しんだって訳だね」

「休みが欲しかったのも、つかさのお汁粉をもっと食べたかったからじゃねえの？」

「うるせええええ！」

ニヤニヤするヲタカップルを追いかける俺。
こうして、新年最初の学校は騒々しく始まったのだった。

時は過ぎ、もう2月。

気付けばあの時期に近付いていた。

「よし、豆撒きするか」

「何でだよ」

久々の屋上、ふと言ってみた言葉に風樹が突っ込む。
いや、2月といったら節分だろ。

「人に豆をぶつけていい日なんだろう？ストレス解消にいいじゃないか」

「お前は日本の文化を何だと思ってるんだ」

風樹は気念そつに身体を起こす。

「大体、節分もう終わってるぞ」

「!?!」

しまった、今日はもう10日か……。

豆撒きし損なつたじゃねえか!せめて海崎さんにでも投げしておくべきだった!

「つたく……違うだろ」

「ん?まだ何かあつたか?」

俺の記憶の中には、2月のイベントなんてもうないはずだった。

「バレンタインがあるっての」

風樹が溜息を吐きながら言った。

ああ、バレンタインね。俺にはどうせ関係ないからいいや。

「はいはい、モテモテの風樹君はいいですねー。いっぺん死ねやコ
ラ」

「急に態度変えんな!」

満更でもなさそうな態度がまたムカつく。

でも、こういう奴に限ってホワイトデーに搾りとられるんだよな。

「1ヶ月後を楽しみにするんだな」

「くっ……」

それだけ言つと、風樹はガツクリと頂垂れた。いい気味だ。

「つかさ視点」

もうすぐバレンタイン。

街を歩いていると、バレンタインフェアをやっているお店が目立つようになった。

「心がホットになる時期になつたねー」

「1年経つの早いわよねー」

こなちゃんとお姉ちゃんが話すように、今年もあとちよつと。早いなあ。

えつと、今年はお姉ちゃん達にお父さんとお母さん、こなちゃん、ゆきちゃん、あき君、やなぎ君、みちる君。それに、はやと君も。

「かがみんな今年はある相手がいてよかつたねー」

「アンタもでしょ」

こなちゃんもお姉ちゃんにも、気持ちを伝えられる相手がいる。

ゆきちゃんもみちる君に本命をあげると思う。

私は……。

「つかさはどうするの？」

「ふえ？」

丁度どうしようか考えていた所に、こなちゃんが訪ねてきた。

「わ、私は皆にあげるよー」

「つかさのチョコ、楽しみにしてるね」

お姉ちゃんが楽しみそうに言った。でも、お姉ちゃんまた体重を気にしてなかったっけ？

「あれ？はやと君に本命は渡さないの？」

「ふえ！？」

こなちゃんの言葉に、私は顔を真っ赤にして驚いた。
は、はやと君に本命……？

「あ、アンタ根拠もなく変な冗談言うのやめなさいよ！」

お姉ちゃんが私を庇う様にこなちゃんを怒った。

お姉ちゃんは冗談だって言うけど、私は……。

夜、私は部屋で1人考えていた。

私は本当にはやと君が好きなのか。

私のはやと君に本命を渡していいのか。

「はやと君……」

今までのことを思い浮かべる。

はやと君と出会ってもうすぐ1年……はやと君はずっと私を助けてくれた。

最初の印象は不思議な雰囲気を持った、クールな人だった。面倒臭がり、空が大好きな変わった人。

一緒にいる内に明らかになった、はやと君の本当の姿。強がっているけど寂しがりで、困った人を放っておけない優しい人。

でも家族の問題を抱えて、ずっと苦しんできた。今は解決して、肩

の荷が降りたように笑う様になった。

「私のチヨコ、受け取ってくれるかな？」

きつと今の私の顔は真っ赤になっているだろうな。

はやと君のことを考えるだけで胸が熱くなる。

私、本当にはやと君が好きなんだ……。

「よし、頑張って作ろう！」

私は決心した。はやと君に想いを伝えよう、と。

チヨコのデザインを決めて、キッチンに向かう。

材料は既に買い揃えてある。皆寝てるから、起こさないようになるべく音を立てないように作り始めた。

〈はやと視点〉

海崎さんの妙な浮かれようで、今日がバレンタインだとすぐに気付いた。

「バイト先の女の子から何個貰えるかね？」

朝から触るのも気持ち悪いので、無視してさっさと学校へ向かった。

学校でもすっかりバレンタインムード全開だった。

カップルはチヨコ渡し合いながらイチャ付き、モテない非リア充は恨み言を呟いている。

この異様な空気に俺は

「うわぁ……」

という一言と共にドン引きしていた。

外でこれだ。教室ではもつと酷いんじゃないか？

恐る恐る教室に入ろうとすると、丁度ロリハム娘に追いかけられているシヨタが廊下に出て来た。

「はやと！助けてくれ！」

「むう！羽音からのチヨコ寄越せ！」

ピコハンを振り回す無卵馬。しかし、もう片方の手にはしっかりと包みが握られている。

素直に渡せばいいものを。

「やれやれ」

呆れつつも、俺は風樹に足を引っ掛けて転ばせた。

「ごぶつ！？はやとテメー！？」

「爆発しろ。以上」

無卵馬に取り押さえられた風樹を気にもせず、俺は教室に入った。

教室内は思った以上に普通だった。

いつも通り談笑するクラスメート達。だよなあ、バレンタイン1つで皆が騒ぎすぎなんだよ。

「あ、はやと君おはよ〜」

こなたが俺に気付いて挨拶をした。

その瞬間、つかさがビクウツ！と反応した。な、何だ？何かあったのか？

「はやと君、その、お、おは」

必要以上にどもりながら、つかさは俺に目も合わせずに話し掛けて来た。明らかに異常な態度だ。

「ほら、渡しちまえよ」

状況をイマイチ理解出来ていない俺を余所に、あきがつかさの背中を押す。

渡すって、バレンタインのチョコをか？

「ほう、えと……」

つかさはかなり緊張した様子だ。

仮にチョコだとしても、義理だろ？何そんなに緊張してんだ？

「は、はやと君！こ」

キーンコーン

つかさの声を遮るかの様にチャイムが鳴る。

やべっ、ホームルーム始まんじゃん！

「つかさ、また後でな」

「あ……っん」

言いそびれて、しゅんと落ち込みながらつかさは席に戻った。

今日のつかさは偉い感情的だな。

くやなぎ視点く

「はっはっは！見たまえやなぎん！」

休み時間、あきがハート型の何かを見せびらかしに現れた。

今日はバレンタインだ。チョコを買ったことを自慢したいんだろうが……。

「この凝ったチョコを！いや、俺も罪な男だね」

「それ、つかさからの義理チョコだろ？」

俺も先程つかさから受け取ったばかりだ。

しかし、知らない人間が見たら本命と見間違っ程の出来栄だ。

「ちえ、ちよつとは乗ってくれてもいいじゃん！」

冷たくあしらうと膨れるあき。まったく面倒臭い奴だ。

「それより本命は買ったのか？」

俺が尋ねると、あきは急に黙りこくった。

まさかまだ買ってないのか？

「お前……つかさの義理チョコを自慢する前にすることがあるだろ」「うるさいうるさいうるさい！」

お前の方がうるさい。

「ああいうのは女子から渡してくるもんだ！男は黙って待ってればいいんだよ！」

「じゃあ教室で大人しく待機でもしてろ」

言い訳にしか聞こえないセリフを吐き、あきは帰って行った。

だが、俺もあきのことを言えなかった。

まだかがみからチョコを貰ってないからな。

「はあ……」

当の本人であるかがみは包みらしいものは持っているが、俺を見る度に顔を逸らして渡そうとしない。

「かがみ、ちょっと」

「え！？あ、うん……」

見ていられなくなった俺は、2人きりになれるようにかがみを連れ出した。

やっと2人になると、かがみは漸く俺に包みを渡そうとした。

「これ……うう」

「？」

顔を真っ赤にし、しどろもどろとしている。

「や、やっぱりあげない！」

かがみは持っていた手を引っ込めてしまった。
ここまで来たっていうのに。

「かがみは俺が嫌いになったのか？」

「そ、そんなことないわよ！ただ……やっぱりつかさのと違って下手だし……」

どうやら、つかさのと自分のチョコの出来を気にしているようだ。

「俺はつかさのより、かがみが作ったチョコが食べたい。恋人が気持ちを入れて作ってくれたチョコをな」

「！」

別に気にする必要はない。本命チョコと義理を比べる必要なんてないのだから。

俺が言い切ると、かがみはやっと包みを渡した。

「笑わないでよ？」

包みの中のチョコは星型がいくつか入っており、多少歪んでいるものもある。

俺はその内の一つを口の中へ運んだ。

「……どう？」

チョコをよく味わう俺を、心配そうに見つめるかがみ。

「すっげえ美味いよ。ありがとう」

「本当！？よかった」

素直な感想を言うと、かがみは本当に嬉しそうに笑った。バレンタイン、皆が浮かれる理由が分かる気がした。

〈みゆき視点〉

先程から私の胸はドキドキしていました。
何故なら、あるお相手にバレンタインのチョコを渡したかったからです。

「みちるさん……」

私の視線の先、みちるさんはまたクラスの女子からチョコを貰っているようでした。
もう5人目。私のチョコなんて受け取って貰えるでしょうか？

「みゆきさん、渡さないの？」

「!？」

気付かぬ内に、背後から泉さんが話し掛けて来ました。
突然でしたので、お恥ずかしながら驚いてしまいました。

「みちる君もモテモテだからねー。競争率高いし、早めに渡した方がいいんじゃない？」

泉さんの仰ることはご尤もなのですが……。

「その、心の準備が……」

「恋に奥手なみゆきさん萌え」

は、はぁ……泉さんと出会ってもうすぐ2年になりますが、やはり「萌え」の意味が分かりません。

「でも、みゆきさんのチョコなら貰ってくれると思うけどな。……
寧ろ私が欲しいくらい」

「？」

「ああ、気にしないで」

泉さんの最後の言葉は聞き取れませんでした。が、勇気を貰った気が
しました。

「で、では行ってきます！」

「頑張つてねー。さて、後は……」

私はチョコの入った紙袋を握りしめ、みちるさんの所へ向かいまし
た。

「みちるさん！」

「みゆき、どうしたの？」

顔を傾げるみちるさん。はう、やはり恥ずかしいです……。

「こ、これをどうぞ！バレンタインのチョコです！」

噛みながらも、何とかみちるさんにチョコを渡せました。

「これを僕に？わあ、ありがとう！」

みちるさんは優しい笑顔で紙袋を受け取ってくれました。
よ、よかったです……。。

「みゆきは昔からお菓子作り得意だったもんね。楽しみだなあ」

みちるさんはそう言いますが、実は私の腕はみちるさんに負けています。
母もみちるさん手作りのスコーンが好物で……正直に申しますと、みちるさんはズルいと思います。

「えと、それでお話が……」

「来月のお返しも張り切らないとね！」

私の話を遮り、無垢な笑顔を見せるみちるさん。

「でも、友達からこんなにチョコ貰えるなんて本当に嬉しいなあ」

「……ふえ？」

ひよつとして、全部義理チョコだと思ってるませんか？

「あの、みちるさん？バレンタインのチョコというのは」

「友達から友好の印にチョコを送る日でしょ？それくらい知ってるよ」

やはり、間違ってる認識しているようです。

道理でみちるさんにチョコを渡した方々が、少し残念そうにしていると思いました。

この日、私はみちるさんに告白しそびれてしまいました。

みちるさんはいつ、私の気持ちに気付いてくれるのでしょうか……？

〈あき視点〉

今日は待ちに待ったバレンタイン！

今年からは彼女から本命チョコを貰え、イチャ付くことが出来るぜ！

「あき君」

おっ、早速こなたが話し掛けてきた。

「はい、これ」

キターーーー！

wktkしながら、こなたの差し出したものを見た。

「……つて、チロ チョコ!？」

「いやあ、作る暇がなくてね」

おまつ!?! 人生初の彼女から貰うバレンタインチョコがチロ つて!?!

お兄さん悲しくて泣くぞ!?!

「それより、アレをどうするかね」

シヨックを受ける俺をスルーし、こなたはある一角を指差す。

「うう……」

「?」

そこには、紙袋を持ったまま直立姿勢のつかさと、困惑しているはやとがいた。

初々しくていいんだけど、アレは何とかせにゃな……。

「はーやとー!」

「うおっ、何だよ」

チロ を一口で食べると、ポンスとはやとの肩を叩く。

「屋上」

「は？お、おい！？」

俺は親指で上を差し、はやとを屋上に連れて行った。

「つかさ、私達も行くのか」

「え……あ、うん！」

つかさはこなたが連れてくるし、大丈夫だろう。

チヨコの受け渡しと告白！

このイベントの舞台に相応しいのは屋上！
邪魔も入らないし、お好きにどうぞ！

「は、はう……」

急に2人だけの空間を作られ、つかさはかなりテンパってるみたいだ。いいね、恋する女の子してんね。

「何なんだ？」

一方、ダメダメなはやと君は状況を一切理解していなかった。ありゃ、バレンタインは自分に関係ないって思い込んでるな。

「焦れったいなあー」

俺の下にいたこなたが呟く。

これじゃあ休み時間終わっちゃうぜ？

「何だ？用件があるなら聞くぞ？」

「あ、あのねっ！」

つかさはもう顔から火が出るんじゃないかってくらい真っ赤だ。
可愛いなあ。はやと、もげろ。

「っ、これ！どうぞ！」

kkkr!

つかさが遂に紙袋をはやとに渡した！

「俺に？」

はやとは紙袋の中を確認する。

中身は、ハートマークの包み。リボンまで付いて、相当凝っている。
ここまで来りゃ、告白したも当然！

「受け取ってくれる？」

「勿論」

おっしやあああああ！

長かったが、やっとはやととつかさが結ば

「しっかしよく出来た義理子ヨコだよな。凝り過ぎだろ」

……へ？

「これ、男子が貰ったら本命と勘違いするかもな」

冗談混じりに笑うはやとに、つかさは疎か俺とこなたもポカンとする。

……あ！思い出した！

さっき俺がつかさに貰った義理チョコをはやとに見せびらかしてたんだ！

あまりにも凝ってたから、今度は本命を義理だと思つてやがる！

「美味しいのは歓迎だけど、あまりやりすぎて誤解されないようにな」

「あ、うん……」

想いが伝わらず、しゅんとなるつかさを残し、上機嫌ではやとは教室に戻る。

ならば、我等のやることは1つだろう。

「この鈍感野郎がー！！」

「じぶうつー!?」

こなたと顔を見合わせて頷くと、俺達は鈍感野郎の背中に蹴りを入れた。

結局、チョコは渡せたもののつかさの告白は失敗に終わった。

「まったく、はやとはしょうがねえな」

不完全燃焼に終わりムカムカしていると、こなたが足を止める。
何だ？忘れものか？

「あき君、これ」

こなたが手に持っていたのは、ラッピングされた四角い箱。これはまさか……！

「いや、ほら皆がいる前だと渡しにくいじゃん？」

照れながらも、ちゃんとチョコを用意する。こなたはそういう奴だよな。

「ありがとな、こなた。愛してる」

そう言い、俺は彼女の赤く染まった頬にキスをした。
俺達だけの甘い時間は、もう少し続く。

くはやと視点

バカ2人に蹴られた跡がまだ痛い。
つたく、俺が何したってんだ……。

屋上にいきなり連れて行かれたかと思えば、つかさに義理チョコを貰った。

つかさはかなり緊張した感じだったが、義理チョコだろ？もっと軽い感じで渡せばいいのに。

ま、つかさの手作りのチョコだ。不味い訳がない。

「しかし、本当に凝ってるよなー」

ハート型の包みをまじまじと見つめ、中を開ける。
チョコには「はやと君へ」と書かれ、翼の形のデコレーションが
されていた。

ここまでされると、食うのが惜しくなるぐらいだ。

「……これが、本命ならもっといいんだけどな」

誰にも聞こえないよう、ボソツと呟く。

まああき達の持ってた義理チョコも似たような感じだったし、
これも義理だろ。

「さて、ホワイトデーどうすっかな……」

聞いた話だと3倍返しとか。これの3倍とかどうしろってんだよ。

「ま、気長に考えるか」

まずは財布と相談だな。

お楽しみは後に取って置き、俺は少しだけ足取りを軽くして教室に
帰った。

第30話「バレンタイン・デー」（後書き）

どうも、銀です。

第30話御覧頂きありがとうございます。

今回はバレンタインデーの話でした。

はやともみちるもフラグを見事にぶっ壊しました（笑）

特に、つかさのチョコは原作でこなたが「男子にあげると勘違いされる」と言う話を逆手に取った形にしました。アレを義理として認知したからこそ、本命を本命らしく認識出来なかったのです。

みゆきは……もう頑張れとしか。

今回はホワイトデー……の前にボス戦に突入します。

第31話「期末テストという名のボス」

（はやと視点）

学生生活のボス、それがテストだ。

特に学期末はラスボス並に強敵だ。落としたら後がないからな。

丁度勉強のシーズンに入ると、皆カリカリしだす。

バレンタインの直後じゃ、浮かれてた奴は特に勉強に身が入らないだろうに。」

「かがみ様、お願いです！俺に是非テスト勉強を教えてください！」

で、浮かれまくった一例が現在かがみに土下座をしているのであった。

「アンタねえ……」

「やなぎんも教えて！」

「おまけ扱いする奴に教える気はない」

弁当を頬張りながら、やなぎは冷たく突き放す。

まあ、何もしなかった奴が悪いんだしな……

「はう……」

と、思っていると隣に座っているつかさが冷や汗をかいていた。ブルータス、お前もか。

対照的に、こなたは余裕そうにコロナを食っていた。

「何だ？こなた、珍しく勉強していたのか？」

「ううん」

あっさり否定しやがった。

威張って言えることじゃないだろう。その余裕はどこから来るんだ。

「私はいつもヤマを張ってるからね」

だから自慢気に言っただけなの。たまに俺もやるけど。

「そういえば、アンタの従姉妹こい陵桜受けたんでしょ？どうだったの？」

へえ、そりゃ初耳だ。

「あー、受かったって。今日家に挨拶来るよ」

コロナを食いながら表情を変えずに答えるこなた。

受かったんならめでたいな。俺達の後輩になるってことか。

「実家からここまで遠いから、来月からウチに来るんだよ。もともと妹みたいなものだし、交流あったからあまり変わんないけどね」

「へえ、そうなんだ」

こなたの家にねえ……。

一瞬、変態野郎の眼が輝いた気がしたが、気の所為にしておこう。

「でもアンタと比べると、どっちが妹だか分かんないんじゃない？」

「アンタ小さいし」

ひひひ、と笑いながらからかうかのみ。
でも、確かに普通ならこなたの方が年下に見えそつだよな。

「いやだから妹みたいなものなんだつて。色んな意味で」

「はあ!？」

「つまりこなたより小さいと!？」

「一体どんな家計なんだ……。」

「でもここすんなり合格つて、従姉妹さん頭いいんだねー」

「陵桜はレベル高い方だし、俺もかなり勉強したからな。
すんなりつてことは真面目な奴なんだな。」

「受験かー。私達も来年受験なのよねー」

「そつだねー」

「ゲーッ」

「呑気に話す柊姉妹と、嫌そうな表情のあき。」

「俺は受験……するの?」

「正直、大学に行くビジョンが見えない。」

「受験の前に期末どうすつかない」

「ああ、そんな話をしてたつつか?」

「じゃあ、皆でまた勉強会をやるつよ!」

提案したのは、さっきまで苦笑しながらやりとりを見ていたみちるだった。

勉強会といや、前回の期末テストでもやって点数稼いだっけな。

「みつちー先生の意見に賛成！」

先に賛成したのはバカの代名詞、天城あき。
お前もう教えてもらおう気満々だろ。

「私も賛成です。皆さんで分からない所を補えば、高得点を狙えます」

次にみゆきが賛成する。

「つてか、アンタ等完璧超人を補える人間がいてたまるか。」

「わ、私も」

「私も賛成！みゆきさんなら教えるの上手そうだし」

つかさとこなたも賛成する。

「ま、俺も拒否る理由もないし、悪いことだとも思わない。」

「俺もだ。多数決で既に決まりだが、お前等も来るよな？」

念の為、やなぎとかがみにも聞いておく。

「誰も行かないなんて行ってないでしょ！」

「俺もだ。あきに教えるのは勘弁だな」

ここで断るような奴等じゃないってのは知ってるけど。

こうして、いつものメンバーによる対学期末用勉強会が開かれることとなった。

で、日曜日。

肝心の場所だが、みちるの家になった。

「さあ、上がって」

みちるが笑顔で迎え入れる。

しかし、デカイ。二世帯住宅以上の広さに、庭まで付いている。

父親は仕事で帰らず、みちるはここに母親と2人暮らしも同然で生活しているらしい。

因みに、今日は買い物に出していないらしい。

「執事とかメイドさんとかいねえの？」

あきがまた余計なことを聞き出す。一応、ここは日本だぞ？いる訳ねえだろ。

「大掃除の時は日雇いの家政婦さんが何人かいたけど、いつもはいないよ」

確かに、このデカイ家を2人で掃除するのは無理だ。

つか、親父は帰って来ないのか。

「大晦日に帰ってきて、年越し後も数日家にいたけど、また仕事で飛んで行っちゃったんだ」

苦笑しながら話すみちる。

職柄、帰ってこれないのは仕方ないんだとさ。
忙しいんだろうけど、俺はあまりいい印象を持ってない。仕事で子供を放る父親には特にな。

「お茶を淹れてくるから、皆勉強の準備をしておいて」
「あ、私も手伝います」

みちるとみゆきがキッチンへと消えていく。
連れてこられた居間は、ウチの3倍近くの広さを持っていた。
ソファーや大画面のテレビ等もある。
そっぴや、床が暖かい。これが床暖房って奴か……。

「はやと君、どうしたの？」
「いや、ちよつと現実って奴にボディーパーブロー食らった気分になっただけだ……」

みちるとみゆきが紅茶を持ってくると、早速勉強会が始まった。

「まずは英語だな」

やなぎが英語の教科書とノートを開く。
ノートには単語や英文がびっしりと書いてあり、見るのも嫌になるぐらいに埋まっていた。

「みっちー、ゲームとかねえの？」
「え？一応あるけど、ソフトはあまり持ってないよ？」

一方あきは既に遊ぶ気満々だった。
いや、勉強しに来た訳だから。みちるも素直に答えなくていいから。

「教えて欲しいって言った奴は誰だ？」
「イデデッ！すみませんでした！」

早速やなぎに耳を引っ張られるあき。ざまあ。

「かがみー、ここはどうやるのー？」

「ここはこれがそこに掛かって……」

こなたはかがみに聞きながら真面目にやっていた。

「かがみー、この意味はー？」

「これはあれの形容詞だから……」

真面目に……と思ったら、どうやらかがみに答えを聞くだけで、自分は何もしていなかったようだ。

「かがみー、ここは」

「少しは自分で考えてやれ！」

遂に拒否られた。ま、当然だな。

現在、時刻18時。

昼間からぶつ通しで勉強していたので、流石に全員グロッキー状態になっていた。

「1943年ポツダム宣言1945年カイロ宣言くあwse drift
gyふじこ1p……」

あきなんて詰め込みすぎて頭から煙出てるぞ。
しかもポツダムとカイロ逆だし。

「きよ、今日はこの辺にしておこうか」

みちるも疲れたのか、苦笑いしながらノートを閉じた。

勉強会の様子を振り返ると、予想通りやなぎやみゆきは教えるのが殆どで、こなたや俺なんか教わりながら問題をこなしていった。途中つかさが居眠りをしたり、あきが暴走してこなたのチョップで気絶させたりと小さなハプニングはあったが。

「アンタ達、これで赤点取ったらタダじゃ済まないからね……」

「「気を付けます……」」

これだけ苦勞して教えたんだしな。赤点取ったら腕の一本は持つてかれそうだ。

「つかさ、大丈夫か？」

「頭が痛いよお……」

さつきから反応のないつかさに声をかける。

つかさも詰め込んだらしく、頭が働かなそうだ。

「ただいま。あらまあ、お友達？」

その時、藍色の髪と瞳のふんわりとした雰囲気的女性が現れた。もしかして、みちるの……母親か？

一瞬姉かと思っただが、若すぎる母親の例なら既に知ってるし。

「あ、お帰りなさい。母さん」

「か、母さん!？」

予想的中だ。あき達はかなり驚いていたが。

「お久しぶりです」

「あらまあ、みゆきちゃん？大きくなつたわね」

唯一、みゆきは顔見知りだったようで懐かしそうに挨拶をした。そっぴやみちるとみゆきは幼馴染だったっけ？

「改めまして、みちるの母の檜山しずくです。よろしくね」

いかにもみちるそっくりの緩い性格をしている。おまけにスタイルのいい美人とくれば……。

「いやあ、みちる君とはいつも仲良くして貰ってます！はっはっは！」

あきが黙っていない。

これ見よがしにみちるの肩を叩き、いかにも仲良さそうにする。友人の母親に色目使ってんじゃねーよ。

「ハイハイ、引っ込んでようね」

「イダダッ！？スンマセンした、こなたさん！」

恋人に耳を引っ張られ、速効退場した。

「うふふ、面白い子達が友達で安心したわ」

そんなやり取りを、にこやかに見ているしずくさんであった。

しずくさんとの挨拶を済ませ、俺達は帰路に付いた。みちるの家は俺達の街から6駅分は遠い。みゆきだけは逆方面なので、駅で別れた。東京に住んでる奴は大変だな。

「今回は学期末だけど、センターの時期には……」

電車の中であきはガタガタと震えていた。今日の勉強漬けがかなり効いたみたいだな。

「普段から勉強しないからだ」

「私達だって毎回は教えないわよ」

「えーっ!？」

呆れるやなぎとかがみにあきはショックを受ける。そりゃ、2人はあきの家庭教師でもないし。

「今度は金を取ったらどうだ？」

「いいかもな」

「ちょ!？はやと余計なことを言うな!」

俺の提案に、すっかりその気になったやなぎ。フィギュアを買う金をちよつとは勉強に次ぎ込め。

「けど、はやと君も払うことになるんじゃない?」

こなたの言う通り、俺は勉強は出来ない側の人間だ。サボり魔だしな。

「俺は……分からなくなったら聞くからいいんだ」

「よくねえよ」

苦しい言い訳をかがみに突っ込まれた。いいだろ？ケチケチすんな。言い合う俺の隣では、疲れ果てたつかさが電車に体を揺られながらすやすや眠っていた。

どこまでも平和な奴だ、まったく。

テスト当日。あれだけ勉強したんだし、不安は一切なかった。

「くっ、ここを乗り切っても春休みの補修と闘うことに……！」

教室では既に赤点取った後の心配をしているバカがいた。つーか、赤点取ったらかがみに殺されるぞ。

「はやと君は大丈夫なの？」

つかさが眠そつな顔をして尋ねてきた。テスト中に居眠りしそうだが、平気か？

「俺は早い内から復習はしてたし、問題ねえよ」

バレンタインなんて関係ないと分かっていた俺は、浮かれることなくテスト対策を面倒ながらやっておいたのだ。

ま、留年なんてしたくもねえし、補修も面倒だからな。

「そっかー。頑張ろうね！」

だからお前は俺より自分の心配をしろつての。

「お前等、テスト配るから座れー」

黒井先生がテスト用紙を持ってきた。もう時間か。さて、どこまで出来るか……。

後日、テスト返しにて。

「よ、よかった……」

あきは赤点スレスレだが補習抜きになった。つて、あれだけやってボーダーラインかよ。

「私も」

つかさも頑張つて点を上げたらしい。

何だかんだ言つても、つかさは平均並だから補習の心配もないけど。それでもかがみの普段の点数より下なのは黙っておいてやるか。

「こなたはどうだった？」

「おかげさまで」

余裕そうなこなたの用紙を見ると、80点台がズラリと並んでいた。コイツ……やれば出来るってタイプか！？
納得いかない気もするが。

「で、はやと君は？」

「俺？」

俺は隠すこともなく、テストを見せる。

点数はつかさ以上こなた以下。まあ、可も不可もなくって奴だ。因みにみちるとみゆきは、言うまでもなくトップクラス。なんか、ズルいよな。

「でもこれで、全員補習はなしだな！」

「お疲れ様〜」

春休みが自由になったことを喜ぶあきとつかさ。ま、授業はあと数日続くけどな。

「帰りにカラオケ寄っていこうぜ！」

もう遊ぶつもりか、とは突っ込まなかった。

俺も久々に遊びたいし。

2年次のボス戦は勝利に終わった。後は白い日を抜ければ……進級だ。

第31話「期末テストという名のボス」（後書き）

どうも、銀です。

第31話御覧頂きありがとうございます。

今回は期末テストの話でした。

本当ならもつと勉強描写を入れるつもりでしたが、予想以上に面白くなかったので、カットしました（笑）

因みに、今回の点数を順番で表すと

みゆき みちる>やなぎ>こなた>かがみ>>はやと>つかさ
平均点>>>あき>赤点

という感じになります。

今回はホワイトデー！リア充は3倍返し大変ですね（笑）

第32話「3倍返し」

（はやと視点）

俺は頭を抱えて悩んでいた。

来たる日、3月14日のホワイトデー。つかさに何を返すかを。

「つか、アレの3倍で……」

つかさがバレンタインに渡してきたチョコは、義理なのにやたらと凝った物だった。しかも手作り。

とりあえず、最初にホワイトデーには3倍返しとか言い出した奴、出て来い。

「タダでさえ返すのが金銭的に厳しいのに」

当然、何も返さないという選択肢はない。

義理とはいえ、好きな奴にチョコを貰ったんだ。返さなかったらかなり最低な奴になる。

「大体、何を返せばいい？」

ホワイトデーは一般的に飴やクッキーを贈るらしい。

どうせお菓子会社の販促の為だろうけど。

ただ、3倍を理由付けにブランドバッグ等をねだるクズ中中にはいるらしい。

やれやれ、バッグなんかじゃお菓子会社涙目だな。

無論、つかさはブランドだとかに興味もないし、それどころか贈り物をねだったりケチ付けたりしないだろう。つまりは何でもいいってことだ。

「その何でもいいが問題なんだよなあ……………」

何でもいいと、逆に具体的なイメージが付けられない。だから余計に何を贈るべきか悩むんだ。

「少年、かなり悩んでるな」

と、そこにあきとやなぎがやってくる。彼女がいる奴等は大変だな。

「俺達も悩んでてなー……………」

「どうしたものか」

3人いれば文殊の知恵とかいう諺は、どうやら嘘らしい。あき、やなぎ、俺は必死に考えたが、ろくな考えが浮かばない。

「そついや、全員手作りだったよな？」

「そうだが……………ちよつと待て。何でお前かがみのチョコが手作りだつて知ってるんだ？」

あきの言う通り、全員貰ったチョコは手作りだった。

「じゃあこの中で餡かクッキー作ったことある人ー」

言い出しっぺのあき含め、全員手を上げなかった。

家事レベル最低な俺達がクッキーなんて作ってみる？炭の塊を量産

することになるぞ。

「そこで助っ人ですよ！」

「助っ人？」

つかさにも習う気か？ 渡す相手に習っても仕方ないだろ。

「みっちー先生！ お願いがあるんだけどー！」

ああ、みちるか。

お菓子作りなら上手いって聞いたことがあったっけ。

俺達は希望の星、みちるに事情を話した。

「ホワイトデーにクッキーを？」

「ああ」

「頼む！ 俺達にクッキーの作り方を伝授してくれ！」

あきに頼みこまれ、押しの弱いみちるはちょっと引いていた。

まあ、元から断るつもりはなさそうだし。

「じゃあ、僕と一緒に作ろう」

「サンキューみちる！ 流星は俺達の王子！」

「お、王子？」

調子のいい奴め。

テンションが上がり、ウザくなったあきを押さえつける。

「あはは……材料とかは用意するから、今度の土曜にウチに来てね」

「了解」

みちるがいてくれて本当に助かったぜ。

「そついや、みっちーはホワイトデーどうすんだ？」

そつだ、肝心なことを聞き逃していた。

みちるは遠目から見ても分かるぐらい、クラスの女子からチョコを貰っていた。つかさの義理チョコも含むがな。

「全員に返すよ？そつだ、皆にも渡すね！」

天然で鈍感なお坊っちゃんはいいい笑顔で言った。

オイオイ、チョコを渡してない、しかも男相手に贈るのかよ。

それから、土曜日に勉強会以来の檜山家に向かう。

ぶっちゃけ以前来たときから日が大分浅い。

「上がったー」

が、2回程度じゃこの家のデカさには慣れなかった。

相変わらず俺のウチがこの家の1部屋以下だと思いき知らされる。

海崎産さんには悪いが、人間の格差って奴が胸に突き刺さるぜ……。

「ここだよ。道具は好きに使ってね」

キッチンはいくらも広く、4人が平気で入れるぐらいだ。

中央のテーブルには材料や生地を伸ばす棒、クッキーの型がズラリと並んでいた。

これ、面子が女子だったら可愛らしいお菓子作りの図になるんだろ

うが、生憎男だらけだ。

家庭科の授業みたく、エプロンを付けてバンダナで頭を覆う俺達。やなぎは髪が長いので、更に1つに纏めている。ポニーテールみたいな。

「うっし！やるぜ！」

「何を？」

やる気を出すあきだったが、手順がまるで分からない。

みちるのやり方を習ってやるしかなさそうだ。その為の助っ人だ。

「まずは生地を作ろうか」

みちるが用意したのはガラスのボウル。中にバターと砂糖を入れ、混ぜてクリーム状にする。

「おっしやー！」

バカがガチャガチャとクリームを掻き混ぜる。が、勢い余って飛び散っている。

「バカ！力任せに掻き混ぜていいモンじゃないだろ！」

そういうやなぎのバターは全然混ぜれてなかった。

コイツ等、料理向いてねーな。

次に卵黄と小麦粉を加え、素手で練る。

「ここは強すぎず、軽く練るのがポイントだよ」

「分かった！」

みちるのありがたいアドバイスを裏拳で弾き飛ばすかのように、あきは生地をグニグニと力任せに捏ねる。

「人の説明は聞け！」

やなぎにまた突っ込まれる。今回は軽く練るだけだから非力のもやしにも出来たようだ。

なんか、こなたもかがみも料理出来なきゃ苦労しそうだな。

「あとはラップで包んで冷蔵庫で冷やせば生地の出来上がりだよ」
手順が分かれば案外簡単だったな。

「うし、生地が出来るまでゲームだ！」

「お前なあ……」

俺が女だったとしても、アイツ等のクツキーは食いたくない。

暫く生地を冷やした後、棒で生地を伸ばす。

大体4、5mm位がいいらしい。

「何か幼稚園の粘土遊びを思い出すなー」

ここではあきの腕力が役に立つ。

一方、非力なもやしは全く生地を伸ばせていなかった。

「ぜえ、ぜえ……ぐううっ！」

そんなに力まんでも。お前はどれだけ貧弱なんだよ。

「生地を伸ばせたら、型を抜いて焼いて完成だよ」

型、ねえ……。みちるが用意した型はハートマークや星型等、色々なものがあつた。

中にはクリスマスツリーやサンタとかも。お前これクリスマス用だろ。

「俺は断然ハートマークだ！」

あきは喧しく型を抜いていく。

全部ハートかよ。こなたがウザがりそうだ。

「みちるはいいのか？」

そういえば、みちるは1人だけ途中で作り方を変えているような気がした。

「あ、僕のはスコーンにしたんだ。気にしないで」

へえ、生地1つで色々出来るもんだ。

「はやとはどんなのを贈るの？」

どうしようか考えていると、みちるが聞いてきた。

俺はつかさのように凝ったものは作れない。素人が手を出して失敗したら目も当てられないしな。

「型抜いて焼いて終わりだ」

「つまんねー」

あきがチヨコペンで字を書きながら横槍を入れてきた。つまんなく
て悪かったな。

でもまあ、字ぐらいなら何か書いてやるか。

各々デコレーションを済ませ、オーブンで焼き上がりを待つ。

檜山家のオーブンもまた本格的なデカイ奴だ。お前はパティシエに
でもなる気か。

「けど、3倍返しには程遠いな」

「つかさの3倍は俺達には無理だ」

だよなー、と苦笑する。素人が束になってもアイツの凝りすぎたチ
ヨコの3倍の出来は無理だ。

「でも、気持ち籠っていればきっと大丈夫だと思うよ」

みちるが笑顔で言う。

けど、お前の場合大体が本命を友達感覚で返されるからなあ……不
憫だ。

「その通り！ハートが大事ってね！」

あきも底抜けに明るく言う。こなたなら毒舌かまししながら嬉しそう
に食いそうだ。

「相手を思っ作れば気持ちは通じる、か……」

やなぎは何か思う節があるようだ。まあ、相手がかがみだしな。

俺は……本命ではないのが残念だが、つかさの優しい気持ちの籠ったチョコを食べた。

なら、それに相応しいクッキーを贈るのが友達だ。

「……つかさ、残念だな」

「ああ、可哀想に」

あきとやなぎが何かヒソヒソと話していた。話の中身までは分かんが。

そして、14日。

俺には上手く出来ただろうクッキーを持ち、登校する。

途中、海崎さんにホワイトデーの準備は出来ているか聞いたら

「放つとけ！アホ！」

と返された。多分バレンタイン貰えてないな、アレは。

教室ではバレンタインの時期より控え目だが、甘い雰囲気漂っていた。

「はい、どうぞ」

みちるが笑顔でスコーンを女子に配っている。

お手製の贈り物を受け取り、みゆき含めた女子達はかなり幸せそうだ。

但し、配っていたのはクラス全員だったが。そこまでサービスするか、普通。

「こーなた ほい、ホワイトデー！」

「何これ、クッキー？」

隅の方では、あきがこなたに例のアレを渡していた。

あきのクッキーは力を入れすぎた所為で硬くなっていたのだ。

おまけにハートマークのクッキーには「LOVE こなた」とチョコペンで書いてある。

「硬っ!?!」

「げ、やっぱり?」

案の定、クッキーという名の鉱物を食すのに苦労しているこなた。

まあ、アイツなりに一生懸命作ったから大目に見てやれ。

やなぎの奴が上手く行ったかも気になるが、俺にもやることはある。

「つかさ、来い」

「ふええ!?!」

クラスの連中に気付かれないように、つかさを連れて屋上に向かった。

屋上に誰もいないことを確認すると、つかさを解放する。

「ど、どうしたの?はやと君」

顔を赤くし、モジモジするつかさ。

「いや、ホワイトデーのお返しにな」

俺は持っていた小さな袋を渡した。

「中、見てもいい?」

「ああ」

そっと受け取ると、つかさは袋の中身を見た。

どうやらクッキーに書いてある文字に気付いたようだ。

「これって……」

俺にはつかさやみちるのように凝った物は作れない。

あきみたくストレートに好きだと表現することも、やなぎのように既に告白した相手に本命を贈ることも。

けど、普段の感謝を文字にすることぐらいは出来る。

星型のクッキーに書いてあるのは、ありがとうの五文字。

「ああそうだよ。俺に3倍返しなんて出来る訳ないだろ」

こんな陳腐な贈り物じゃあ、つかさもいらないか。

「ありがとう、はやと君!すごく嬉しいよ!」

それでも、つかさは笑って喜んでくれた。

「……言っとくが、味の保証はしないからな」

「きつと美味しいよ」

「食ってから言え」

急に気恥ずかしくなり、つかさから視線を逸らす。

義理のお返しだったのに、屋上には暫くほんわかした空気が流れて

いた。

ほんわかしすぎて、2人で授業に遅れたのは内緒だが。

第32話「3倍返し」（後書き）

どうも、銀です。

第32話御覧頂きありがとうございます。

今回はホワイトデーの話でした。

お菓子会社の陰謀に乗せられたはやと達でしたが、何とかお返し出来ました。

3倍返しというのは、実は友達間ではしなくてよかったです。はやとはそのことを知りませんでした（笑）

因みに、やなぎのクッキーはあきとは逆に柔らかかったです。

あ、次回は最終回です。

第33話「終わり始まり」

（はやと視点）

暗い。

俺はあの日から晴れない闇で覆われたようだった。

母さんが死んで、丁度2年。

俺は父さんと一緒に、墓参りに来ていた。

墓参りを最初に言い出したのは俺だ。母さんが死んで、すぐに家を出た俺は母さんが何処に眠っているのか分からなかったんだ。

「みどりが逝って、もう2年か……」

タバコを吸いながら、父さんは感慨に耽っていた。
この人との和解も、きちんと母さんに話した。

「……父さん、暫く席を外してくれ」

「……ああ」

俺が頼むと、父さんは何も言わずに去っていった。
俺自身のことも報告したかったんだ。

「俺、ちゃんと陵桜に行ってるよ」

サボったりしてるけど。母さんが知ったら怒るかな。

「友達も出来た。バカとかもやしとかチビツ子、凶暴な奴とかいるけど、皆悪い奴じゃない」

そして、大事な奴も出来た。まだ片思い中だけどな。

俺はアイツに出会ってからの1年を振り返ってみた。

父さんを恨んで勝手に家出をしてからも、俺は陵桜に通い続けた。それは、母さんとの約束だったからだ。もう1つの約束は破っちまっつたしな。

けど、勉強はする気がしなかった。

役に立つとは到底思えなかつたし、勉強なんてした所為で母さんと過ごせたはずの時間を潰したんだ。

気付けば、俺は屋上で空を眺めていた。

母さんが見ていた空。

母さんが飛びたいと願った空。

母さんが昇っていった空。

「もし翼があつたら……」

翼があれば、俺は母さんの元へ行けるだろうか？

何処までも自由に空を飛び、好きなことが出来るだろうか？

なら、俺には無理だ。

もう母さんには会えないし、前へ進むことも出来ない。俺は無力で何も出来ないただのガキだ。

俺は翼を失った。

闇に取り残され、ひたすら空を眺めることしか出来ない哀れな男。

「もし翼があつたら、俺は……」

けど、そんなのは夢だ。

いつしか、それは俺の口癖になっていた。

何も出来ない俺への戒め。そして、未練がましい俺の不自由な心の象徴。

このまま、哀れに俺の生は終わるのだろうか？

考えていると、ある日アイツに出会った。

黄色いリボンが印象的な紫髪の少女。

飛んで行った鳩の羽根を頭に乘せた、ちょっとポケツとした女子。

初対面の時は頭の羽根を取ってすれ違った。偶然、屋上にいただけの女子だったから。

けど、俺達はすぐに再会した。しかも同じクラスだった。

それからアイツと、アイツの友達と知り合って、仲良くなった。

「はやと君。いつか、飛べるといいね」

始めは妹みたいなモンだったんだ。

いつもボケボケしていて、お人好しで騙されやすいですってオーラを出している。

そんなアイツを俺は放って置けなかった。
本来の保護者役の姉は別のクラスだし、何かと気にかけていた所為でいつの間にかクラスじゃアイツの保護者扱いだ。

実際、体育で倒れた時は保健室へ連れて行ったり、人混みに飲まれた時は探してやった。

泳ぎを教えたことや、変な奴に絡まれた時に助けたこともある。

何だかんだでアイツも俺を頼りにしてたし、悪い気も別段しなかったんだ。

でも、いつしか立場が逆転していた。気付けば、アイツが俺を気にかけていたんだ。

屋上で授業をサボっている俺を連れ戻しに来たり、俺の食生活を気にしたり。

風邪を引いた時は押しかけて看病してくれたっけ。

そして、俺と父さんが再会した時も俺を支えてくれた。

俺の家にまた押し掛けてきた時は驚いたけど、来てくれなかったら俺はずっと父さんに脅え続けていただろう。

俺の情けない過去を真剣に聞いてくれたし、話し合いをしに行った時も傍にいてくれた。

普通、そこまでしないよな？そこがアイツのいい所だけだ。

持ちつ持たれつの関係が、いつの間にか俺達の日常になっていた。隣につかさがいることが当たり前になっていた。

それがとても幸せなんだって、振り返ってみて思うよ。

「俺はつかさが好きなんだ」

俺の暗い闇を優しい光で払ってくれたつかさが。

どこかで母親を求めていた俺の隙間を埋めてくれたつかさが。

俺の冷めた日常をガラリと変えてくれたつかさが。

俺を覆う闇が一気に晴れた。

周りには雲が浮いていて、まるで空の上みたいだ。

というか、俺も浮いている辺り本当に空の上なのかもしれない。

「はやく」

俺の目の前には白い衣服の女性。

翠色の長髪と優しそうな瞳。俺のよく知る人物だ。

「やあ、母さん」

母さんは笑顔で俺を見つめていた。

よく見ると、背中に白い羽根が生え頭に輪っかが付いている。まるで天使みたいな格好だ。

「願い、叶ったんだ」

「ええ。最高に気持ちがいいわ」

くるりと一回転してみせる母さん。
死んでいる人間に言うのも何だが、元気そうな姿を見たのは初めて
で安心した。

けど、俺には母さんに謝らなきゃいけないことがあった。

「……ごめん、約束破って。父さんは悪くなかったよ。母さんは全
部分かってたんだ」

「ええ。あの人は運が悪いけど、がむしゃらに頑張る人なの」

確かに運の悪さは筋金入りだな。

母さんは微笑みながら、俺の頭を撫でた。
今までしてくれたように。

「はやとにも辛い思いさせて、ごめんなさい」

「母さんも悪くない。俺が」

俺が悪い。そう言いかけた時、つかさの言葉を思い出した。

『でも、よかったね……誰も悪くなくて』

『誰も？』

『はやと君も、はやと君のお父さんも』

「……誰も悪くない。誰も、悪くないんだ」

「ありがとう、はやと」

頭を撫でていた手は、頬へと移る。

「これから辛いことがあっても、貴方なら大丈夫よ。自信を持って」
「うん」

段々と母さんの姿が消えていく。
待ってよ。まだ話すことがあるんだ！

「貴方の優しさは、もう私にじゃなくて別の誰かの為に使うものでしょ？」
「母さん……」

綺麗な光の粒になって、母さんは天へ昇っていく。

「頑張ってたね」
「……うん」

最期まで笑顔だった母さんを、俺も微笑んで見送った。

「……とく……ん……」

誰かの声がした。まるで誰かを呼んでいるようだ。

「……やと……」
「は……おき……」

しかも1人じゃない。男も女もいる。
何人も何かを呼んでいる。

「はやと君！起きて！」

ああ、俺か……。

じゃあ、行かないとな。

「ん……」

目を覚ますと、机の上だった。

「やっと起きたか」

かがみの呆れた声が聞こえてきた。

「しっかりしろよ」

「もう皆体育館に行っちゃまうぞ」

続いてやなぎとあきの声。

ああ、そうか。今日は終業式か。

体育館集合まで、俺は机に突っ伏して寝ていたんだっとな。

「ふああゝ、わりいな。先に行つてりゃよかったのに」

「いえ、そも行きませんよ」

「はやとなら、起こさないとずっと起きないかもしれなかったから」

みゆきとみちるが苦笑しながら話した。

言うようになったな、このお坊っちゃんも。

「はやと君の寝顔も写メ出来たしね」
「ちよつ、消せ！」

むふふ、と笑うこなたから携帯を取り上げようとしたが、逃げられてしまう。くっ、このチビすばしっこい！

「いいから、早く行かないと本当に遅刻になっちゃうわよ？」

「へーい」

「チツ」

かがみに叱られ、渋々体育館に向かった。

こなため……覚えてろよ。

「あはは……でも、よく寝てたね」

いつものほんわかした調子で、つかさが話しかけてきた。授業中居眠りしかけるお前に言われたくない。

「……夢を見たんだ。墓参りの夢」

つかさには打ち明けておいた。

この前の休みに、俺は父さんと墓参りに行ったこと。その時のことを夢に見たってな。

勿論、母さんの夢のことは伏せた。言えるか、恥ずかしい。

「そうなんだ。お父さんと仲良くなれてよかったね」

「ところがギッチョソ。そう上手くはいかないもんだ」

墓参りが終わると、俺はあっさりとアパートに帰った。

父さんとも多少なりと話せるようにこそなったが、やっぱり許せないんだ。

間に合わなかった父さんも、勝手に家を出た自分も。

「そっか……でも、時間をかけて仲良くなっていければいいと思うよ」

「ああ、サンキユ」

こんな時でも、つかさは優しく励ましてくれる。

結局、2年の内に告白できなかったな。3年でまた同じクラスになれるとも限らないし。

体育館では、列が出来つつあったが話はまだ始まっていなかった。いや、校長の話なんか微塵も興味が湧かないけど。

「じゃ、後でね」

「じゃあな」

別クラスのががみ、やなぎと別れ、自分のクラスの列に入る。さて、立ったまま寝るか。

「2年は色々あったな〜」

「あつたね〜」

あきが唐突に話した言葉に、こなたが相槌を打つ。

コイツ等が付き合い出したのもデカいニューズだったな、確か。体育祭後のやなぎとかがみの交際発覚もかなり驚いた。

「3年も同じクラスになれるといいな〜」

「そうだね」

とりあえず、リア充は爆発してる。

「3年こそは……」

後ろでみゆきが何か決心を固めている。まあ、頑張れ。

そうこうしている内に校長が登場。周囲が静かになる。じゃ、お休み。

こうして、俺の2年生の生活は終わりを迎えた。

この1年は俺にとってかなり重要だったと思う。

校舎を出ると、屯していた鳥達が一斉に羽撃く。

「あっ」

ヒラリと舞った羽根がつかさの頭に乗っかる。

「ほら、付いてたぞ」

「ありがとう」

それを取ってやると、つかさは嬉しそうに微笑んだ。

俺達の新しい日常の始まりはもうすぐだ。

俺は奇跡なんてもの信じない。

ドラマなんかでよくやる「奇跡」。俺はそれが嫌いだ。

奇跡なんてあんなに頻繁にあつてたまるか。

だから奇跡なんて安っぽいもの、俺は信じない。

けど、星屑のようにちっぽけな俺達が出会えたことが「奇跡」だとしたら。

それはそれでアリかもしれない。

すた だす 1st Season

完

第33話「終わりと始まり」（後書き）

どうも、銀です。

第33話、そして今まで「すた だす」を御覧頂きありがとうございました。

今回は今までのまとめとはやとの心情が主な内容でした。

はやとがつかさの面倒を見ていたように、つかさもはやとの欠けた心を埋めていた。そんな相互関係にあったことを改めて実感しました。

はやとの母親、みどりの姿はゲーム「陵桜学園 桜藤祭」のパッケージのあなたをイメージしました。

ゲームではあんなシーンありませんでしたが（笑）

まとめとしては、「1st Season」はあき×こなた、やなぎ×かがみの成立、はやとの過去と恋愛感情の自覚が主でした。

あき×こなたを最初にしたのは、やはり上記のゲームの影響です。こなたをくつつけるなら桜藤祭しかない！と思っていたので。あきへの態度は、そうじろうのそれと似た感じにしています。一見酷い扱いの中にデレが隠れている。最近の原作を見ると、真のツンデレはこなたではないかと。

因みに作者が1番好きなエピソードは、やはりはやとの過去編（第21話〜第23話）です。

取り乱すはやと、母性的なつかさ、暖かい柊家が書いて満足！

それでは、「すた だす 2nd Season」で再びお会いしましょう！

次回予告(前書き)

2nd Seasonの次回予告です!

次回予告

新しい季節。それは長い1年間の始まりでもあった。

「えっと、俺は何処のクラスだ……？」

新たな出会い。

「月丘、しわす」

「あまりいい印象はねえな」

「何だ、お前等も同じクラスか」

「冬神まで酷くね!？」

新入生達。

「湖畔つばめだ」

「俺の名は霧谷かえで!」

「石動さとる」

「東方院さだめです」

賑やかな雰囲気の中、動き出す恋情。

「告っちゃえよ」

「黙れ」

「……何考えてるの?」

「……」

そして、起こる問題。

「アイツが勝てないようじゃ、この体は俺のモンだな」

「みちるさんは、絶対負けません！」

「ゆたかから笑顔を奪うつてんなら、俺とみなみが黙っちゃいな
ぜ」

「……俺に近寄るな」

様々な人間関係が交錯する中、少年少女達は成長していく。

「つかさ。お前に会えて良かった」

すた だす 2nd Season

To be continue……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8947x/>

すた だす

2012年1月3日03時58分発行